

①

中世南ドイツ 麻織物貿易史の研究

岩井清治著

東京 白桃書房 神田

まえがき

本研究は、西南ドイツ地域とスイスとの国境に位置するボーデン・ゼー（ボーデン湖）周辺に発達した中世麻織物生産都市の貿易活動を中心課題としたものである。この地域では、気候・気象・地勢上の諸条件に恵まれて、すでに古代の時代より、麻織物の原材料となる亜麻・大麻の栽培が行なわれていた。そして、それらを素材とした麻布生産活動が時代とともに都市・農村を問わずに活発化し、この地域の経済発展に大きな影響を与えていた。この地域に広がるなだらかな丘陵・山岳地帯の多くは森と耕地であり、その森林地帯から発せられる豊富な水流がこの麻織物生産に数多くの利点を与えたのであった。

この西南ドイツが享受した自然条件は、これらの麻織物の生産に関わるものばかりではなかった。中世ヨーロッパ商業史の領域から見て、イタリアーアルプスーライン川流域ー北海という当時の商業通商にとって極めて重要なルートにこの西南ドイツ地域が密接に関わっていたのである。古代ー中世を通しての長いタイムスパンにおいてだけでなく、12世紀から14世紀において中世経済が急激に拡大・発展したいわゆる中世盛期の時代においてはなおさら、当時の一方の経済中心地であったイタリアからヨーロッパ四方に延びる通商上の重要ルートの一つに、この西南ドイツ地域が大きな貢献をなしていたのである。中世における陸上交通において、河川や湖、とりわけ湖の果たしている役割の大きさは、中部ヨーロッパと地中海イタリア地域とを壁のごとくに遮っていたアルプスの峠を越えるいくつかの重要通商路の行程を見るまでもなく、自明のことである。この西南ドイツ麻織物生産地帯の中心に位置するボーデン・ゼーのこの面での機能と役割は、この地域の商業発展にとって見過ごすことのできない重要な自然的条件の一つであった。中世以後麻織物都市としてヨーロッパ各地に名前を連ねるコンスタンツ、ラーフェンスブルク、ザンクト・ガレン、メミンゲン、イスニー、カウフボイルン、ロイトキルヒ、等々はいずれもそのよう

な地理的条件と、同時に当時の拡大する中世の時代的背景をそっくりその歴史に反映させて登場するのである。本研究はそのようにして登場するこの西南ドイツ麻織物中小都市に展開された商業活動、貿易活動の中世のヨーロッパ各地における取引市場での活動を通して明らかにしようとしたものである。

その貿易活動は、当然ながら生産された麻織物を重点的に扱う販売商業、輸出商業である。そしてそれらの業務を遂行する上で必然的にもいえるように中小都市のそれぞれに、いずれも大小の商事会社が発展してくるのである。巨大な資本を蓄積した、個人商人あるいは同族の商人が集合して結成される商企業である。それらは、規模の大小、営業範囲の大きさ、営業を行っていた期間の長短、出資者数の多少、等々から見て実に種々様々な、まさに商事会社の群生を見たとと言えるのである。その様相は当時のヨーロッパ各地の都市に一般的に見られたものとは明らかに区別できる、特別な発展であったといえるであろう。

この西南ドイツ麻織物経済圏の研究は、わが国においても、すでに半世紀以上も前に当時わが国の歴史学界を先導する立場にあった数多くの研究者、先学によって開始されたものである。そこでの蓄積された成果がその後の歴史研究の道に多大な貢献をなしてきたことは明白である。本研究もそれらの先駆的研究の業績に大きな恩恵を受けている。とくに本研究の基礎的・開拓的分野については、当初より活躍せられてきた松田智雄、大塚久雄、諸田実、川久保公夫、北村次一教授の方々、さらに多くの諸先学の研究に特別の示唆を受けている。また具体的な課題についてはドイツ留学中にフライブルク大学の経済史担当オッツ（Hugo Ott）教授に数々の御教示をいただいた。当時の文献収集の機会がなければこの研究はなかったといってよい。記して厚く感謝するしだいである。

本書の出版にあたって、厳しい方法論と熱情あふれる教育姿勢とによって小生に歴史研究への道を開いて下さった、今は亡き明治大学教授、田中豊喜博士に衷心より感謝を捧げる。また日頃恩義をうけている桜美林大学経済学部の諸先生方に特に御礼を申し上げたい。また、出版については白桃書房の大矢順一

郎社長に特別のご配慮をいただき、また、さまざまなご苦勞を照井規夫常務はじめ編集部の方々に負わせることになった。記して厚く感謝の意を表するしだいである。

平成5年3月18日

岩井清治

目 次

まえがき

第1章 南ドイツ麻織業の発展とヨーロッパ輸出市場	
—その初期の状態—	1
第1節 はじめに	1
第2節 ボーデン湖周辺麻織業の地理的分布	2
第3節 南ドイツ麻織業の初期のヨーロッパ輸出市場	7
1 ヨーロッパ北西地域	7
2 ヨーロッパ南西地域	12
3 ヨーロッパ東地域	17
4 ヨーロッパ南及び地中海地域	22
第4節 ボーデン湖周辺麻織業の輸出産業的性格	29
第2章 コンスタンツにおける麻織業の発展と商人・商事会社	
及び輸出市場	33
第1節 はじめに	33
第2節 ムントプラート商事会社の発展と貿易活動	35
1 ムントプラート家の系譜と社会的地位	35
2 ムントプラート家の商人及び商事会社の発展と衰退	44
3 ムントプラート家の商人及び商事会社の活動内容	53
4 ムントプラート商事会社とツンフト闘争	55
第3節 イムホルツ家商人の抬頭と貿易活動	58
1 イムホルツ家の系譜と社会的地位	58
2 イムホルツ家商人の商業活動と営業内容	59
第4節 エーインガー家商人の抬頭と貿易活動	63

1	エーインガー家商人に関する研究史	63
2	エーインガー家商人の系譜と社会的地位	66
3	エーインガー家商人の商業活動	74
4	エーインガー家出身商人の行方	84
第5節	コンスタンツ商業の衰退と周辺都市の商業発展	87
第3章 ザンクト・ガレンにおける麻織業の発展と商人・		
	商事会社及び輸出市場	89
第1節	はじめに	89
第2節	ザンクト・ガレン麻織物商業に関する研究史	90
第3節	ザンクト・ガレンの発達と麻織業の発展の状態	95
第4節	ザンクト・ガレン麻織業の輸出市場	101
第5節	ザンクト・ガレンにおける商事会社の貿易活動	114
1	ディースパッハ・ワット商事会社の設立と概要	114
2	ディースパッハ・ワット商事会社の貿易活動 ——スペイン市場の例——	116
第6節	ザンクト・ガレン商業の衰退と周辺都市の商業発展	123
第4章 ラーフェンスブルクにおける麻織業の発展と商人・		
	商事会社及び輸出市場	127
第1節	はじめに	127
第2節	ラーフェンスブルク麻織物商業に関する研究史	128
第3節	ラーフェンスブルクの発達と麻織業の発展	131
第4節	ラーフェンスブルクにおける商事会社の貿易活動	139
1	大ラーフェンスブルク商事会社の設立	139
2	大ラーフェンスブルク商事会社の貿易活動	142
①	イタリア地域	142
②	スペイン地域	153
③	ロース川流域地域	170

④ 低地地方地域	186
3 大ラーフェンスブルク商事会社の貿易活動にみられる地域格差	201
第5章 メミンゲンにおける麻織業の発展と商人・商事会社 及び輸出市場	205
第1節 はじめに	205
第2節 メミンゲン麻織物商業に関する研究史	206
第3節 メミンゲンの発達と麻織業の発展	210
第4節 フォーリン・ウェルザー商事会社の発展と経営者の血縁的 系譜	217
1 初代ハンス・フォーリンの時代	217
2 初代エアハート・フォーリンの時代	225
3 第2代ハンス・フォーリンの時代	229
4 コンラート・フォーリンの時代	239
5 コンラート・フォーリンの次世代	251
第5節 フォーリン・ウェルザー商事会社の貿易活動と輸出市場	260
1 イタリア・地中海地域	264
2 スペイン・ポルトガル、南フランス地域	273
3 東ヨーロッパ地域	281
4 ライン川中・下流地域	286
第6節 フォーリン・ウェルザー商事会社の社会経済史的背景	290
主要参考文献	297
あとがき	

図表目次

図 1-1	中世西南ドイツ麻織物及びファスチアン織物生産地域	3
図 2-1	コンスタンツにおけるムントブラート家系図	37
図 2-2	エーインガー家（コンスタンツ市）商人の系譜	86
図 5-1	フォーリン家系図	218
図 5-2	フォーリン・ウェルザー商事会社の活動地域	262
図 5-3	中世都市イスニーにおける麻織物輸出市場	263
図 5-4	プントナー峠越えのアルプス通商路	268
表 2-1	コンスタンツにおける納税表（1418年）	48
表 2-2	コンスタンツにおける納税表（1422年）	49
表 2-3	ムントブラート家の課税対象財産の推移	51
表 2-4	ウルリッヒ・イムホルツの課税対象財産の推移	61
表 3-1	ディースバッハ・ワット商事会社によるスペイン市場での取引 （1428—1445年）	119
表 4-1	ヴァレンシアへの1479年、1480年の輸入商品	155
表 4-2	ヴァレンシアからの1479年、1480年の輸出商品	156
表 4-3	1430年のドイツ人及びサプォイ人のサラゴッサでの取引額	159
表 4-4	1506年のサラゴッサにおける「会社」の商品売上メモ	161
表 4-5	(A) 1425年—1440年及び1443年、1467年—80年のドイツ人及び サプォイ人のバルセロナにおける取引額	163
	(B) 1443年、1467年—1480年の総取引額	164
表 4-6	バルセロナにおける1426年—1480年の「会社」の取引額	165
表 4-7	バルセロナへの「大ラーフェンスブルク商事会社」による麻布 の輸入量（1426年—1480年）	166
表 4-8	「大ラーフェンスブルク商事会社」によるリヨンの大市での 商品売上表（1477年—1480年）	178
表 4-9	リヨンの大市取引における「会社」の収支表（1477年—1480年）	181
表 4-10	商品仕入れのための支出額（ブリュージュ・バマスの大市、 1478年）	192
表 4-11	アントワープ・バマスの大市における「会社」の取引（1504年）	199

第1章 南ドイツ麻織業の発展と ヨーロッパ輸出市場 ——その初期の状態——

第1節 はじめに

中世ヨーロッパの主要な布生産地域であった低地地方、北フランス、イギリスなどに加えて、西南ドイツ・シュワーベン (Schwaben) 地方とスイスにひろがる、いわゆるボーデン (Bodensee) 湖周辺地域が麻を材料とする布の一大生産地であったことは、19世紀中期になされた、F.J. モネ (Mone) による指摘以来¹⁾、また我国においては松田智雄教授による開拓的研究とそれ以後の諸研究²⁾ によってしだいに明らかにされてきている。

このボーデン湖周辺麻織業発展の研究は、単なる中世ヨーロッパの織維業の発展という意味だけでなく、この産業がきわめて輸出志向の強い産業としての性格を多分に有している点に、さらにはドイツ的資本主義形成の前史としての、いわゆる「フッガー家の時代 (Zeitalter der Fugger)」を形成した「初期資本主義」³⁾ 時代の前史としての点に、その中心課題がおかれてきたようにおもわれる。

したがってここでは、この資本主義発展史上、特殊ドイツ的という命題に結びつくこの地域の麻織業の発展を、輸出産業としての性格の面から、すなわち、その初期の時代にどのようなヨーロッパ輸出市場を形成していたかの視点から求めてみようと思う。それは、「ドイツ商人の足跡のおよぶところにドイツ産麻布のもたらされないところはない」⁴⁾ とまで言われていたドイツ麻織業の発展に対して、16世紀にみられる世界史的市場構造の転換の影響は、何よりもこの輸出市場依存型産業の性格に対して直接的に及ぼされたと思われるからである。

注

- 1) Mone, F.J., Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 16. Jahrhundert, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, 4. Bd., 1853, S. 3-67, なお, St. Gallen については, 1673年の Melchior Locher によるものがあることが指摘されている。Häne, Johannes, Leinwandhandel und Leinwandindustrie im alten St. Gallen, in *Zwei Abhandlungen zur Kultur- und Wirtschaftsgeschichte der Stadt St. Gallen*, 1932. S. 5
- 2) 松田智雄論文「フッガー時代における南ドイツ」, 『社会経済史学』, 第10巻第11, 12号, 249頁以下, 同氏「南ドイツ農村麻織物業の類型的特質」, 同上誌, 第11巻第11, 12号, 156頁以下, および, 川久保公夫論文「近世初期のドイツ繊維産業」, 『社会経済史大系』Ⅳ, 近世前期Ⅰ, 弘文堂, 343頁以下, 同氏「ドイツ『初期資本主義』と麻, 綿織業の経済構造の特質」, 『経済学雑誌』, 第39巻5号, 同氏「中世ドイツ麻織物生産とその商品経済化過程」, 大阪市大『経済学年報』, 第9集, 同氏「手工業者としてのドイツ麻織匠の歴史」, 大阪市大『経済学年報』, 第11集所収, 等, および, 北村次一論文「西南ドイツ都市の手工業規則」, 『社会経済史大系』Ⅲ, 中世後期, 弘文堂, 221頁以下等参照。
- 3) 「ドイツ初期資本主義」については, 川久保公夫著『ドイツ初期資本主義の経済構造』法律文化社, 昭和35年, 北村次一著『初期資本主義の基本構造』ミネルヴァ書房, 昭和36年, 諸田実著『ドイツ初期資本主義研究』有斐閣, 昭和42年, 等に詳しく論証されている。
- 4) Hildebrand, Bruno, Vergangenheit und Gegenwart der deutschen Leinenindustrie, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 13. Bd., 1869, S. 222.

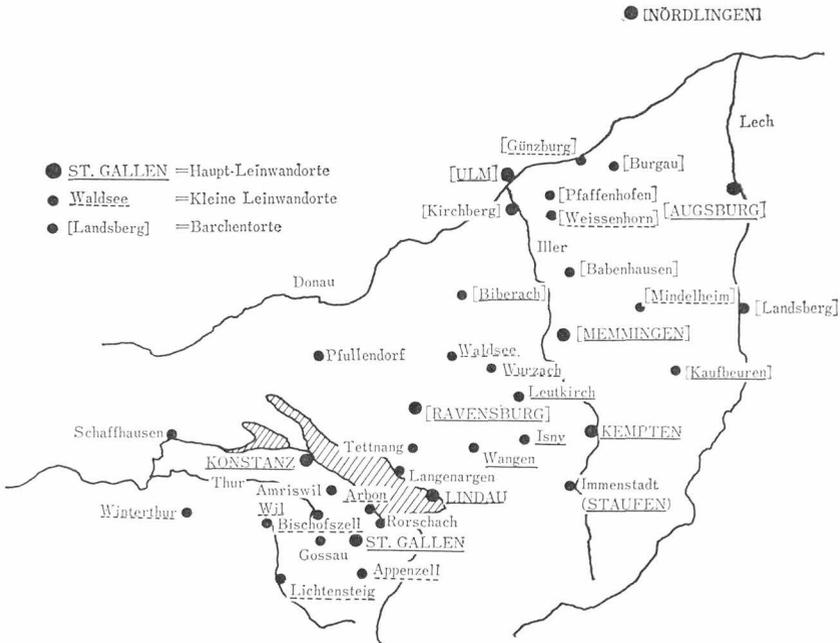
第2節 ボーデン湖周辺麻織業の地理的分布

ボーデン湖周辺地域の麻織業とその貿易の状態については, この地域を専門的に扱ったものとして, 上にあげた F. J. Mone の1853年の論文以後, 1896年の B. Hildebrand の論文¹⁾, 1884年, 1890年の W. Heyd の論文と著作²⁾, 1892年の E. Gothein による西南ドイツ, Schwarzwald 地方に関する大著³⁾, 1899年に発表された J. Häne のザンクト・ガレン (St. Gallen) 麻織業に関する論文⁴⁾, さらに20世紀に入ってから, A. Schulte の諸著作⁵⁾, スペイン・バルセロナにおける通商でこのボーデン湖麻織業に関する商品取引に触れている K. Häbler の論文⁶⁾, さらに, L. Wever の論文⁷⁾, H. Ammann の諸

論文⁹⁾、1950年の F. Wielandt によるコンスタンツ (Konstanz) に関する著作⁹⁾、1960年の H.C. Peyer による St. Gallen の麻織業に関する著作¹⁰⁾、さらにメミンゲンの麻織物貿易、商人、商事会社に関する A. Westermann¹¹⁾ や R. Eirich¹²⁾ による著作等々によって、研究がすすめられてきている。

これらの諸研究によって扱われており、ボーデン湖周辺地域として表現されている、麻織業地域は、その地理的範囲として、H. Ammann と H.C. Peyer によって詳細に説明されているように¹³⁾、現在の西南ドイツとスイス、オーストリアの三ヶ国国境に位置しているボーデン湖を中心として、北岸のドイツ・Schwaben 地方の諸都市と農村、南岸のスイスの Thur 川までの地域にほぼ含まれる諸都市と農村を含むものである (図 1-1 参照)。

図 1-1 中世西南ドイツ麻織物及びファスチアン織物生産地域



出典：Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz, in *Zeitschrift für Schweizerische Geschichte*, 23. Jg., 1943, S. 331.

左の図を参照しながら H. Ammann の示すところに従って詳述すると、その地理的概略は次の通りになる。まず、ボーデン湖南岸地域、スイス側の地域には、湖岸より、Konstanz, Amriswil, Arbon, Rorschach, ザンクト・ガレン (St. Gallen), Bischofszell, Gossau, Lichtensteig, Appenzell, などの大小都市を含み、さらに、Thur 川以南に Wil, Winterthur の2都市が加わる。次に、ボーデン湖北岸地域、すなわち、ドイツ・シュワーベン (Schwaben) 地方では、湖岸より Schaffhausen, Langenargen, Lindau, 内陸に入って Wangen, Tettngang, Isny, ラーフェンスブルク (Ravensburg), Pfullendorf, Leutkirch, Wurzach, Waldsee, Biberach, さらに Iller 川岸の都市 Immenstadt (Staufen), Kempten, メミンゲン (Memmingen), Kirchberg, Iller 川と Lech 川にはさまれた地域では、Kaufbeuren, Mindelheim, Babenhausen, Weissenhorn, Pfaffenhofen, Burgau, さらに、Lech 川岸の都市 Landsberg, アウクスブルク (Augsburg), この麻織業地域の北辺にあたる Donau 川岸地域では、ウルム (Ulm), Günzburg, それ以北のノルトリンゲン (Nördlingen) がこれに加わっている。

これらのおよそ40に近い大小都市が、それぞれ周辺の農村を含めて麻織業地域を形成していたのであったが、それぞれの都市の経済的規模を人口数を参考に想定すると次のようになる¹⁴⁾。この地域の最大の都市はアウクスブルクで、中世末、1500年頃までに人口は20,000人が認められ、当時のドイツの12大都市の1つであった。次いでウルムが人口1万2,000～1万5,000人を有し、麻織業のうちでも、麻と木綿の交織布であるファスチアン (Barchent) 生産の中心都市として発展した。次に、コンスタンツとメミンゲンがほぼ同規模で、人口約5,000人を有し、特に前者は、15世紀にこの生産地域一帯での主導性を失なうまで、この地域の麻織業の先進都市であった¹⁵⁾。コンスタンツのあとの時代に、それに並ぶ重要都市に発展したザンクト・ガレンは、シャッフハウゼン (Schaffhausen) とほぼ同規模で、約4,000人の人口を有していた。

これらの重要都市に加えて、Kempten, Ravensburg, Lindau, Kaufbeuren, Biberach が1,500年頃までに、人口約3,000人を有するまでに発展し、さらに、

Wangen, Pfullendorf, Leutkirch が人口3,000人以下の都市としてあげられている。さらに、1500年頃でも人口数は1,000人前後を数えるにすぎない小都市として、Wil, Lichtensteig, Waldsee, Mindelheim, Appenzellなどが加わっている。

以上のように、このボーデン湖周辺麻織業地域は、中世末期、1500年頃までに、人口数にして約70,000人を擁する、当時としてはドイツ全域から見て他に例を見ない、一大先進経済圏を形成するものとなっていたのであった¹⁶⁾。

注

- 1) Hildebrand, B., *Vergangenheit und Gegenwart der deutschen Leinenindustrie*, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 13. Bd., 1869, S. 215-251.
- 2) Heyd, Wilhelm, *Der Verkehr süddeutscher Städte mit Genua während des Mittelalters*, in *Forschungen zur Deutschen Geschichte*, 24. Bd., 1884, Göttingen, ders., *Die große Ravensburger Gesellschaft*, Stuttgart, 1890, Verlag der J. G. Cotta'schen Buchhandlung.
- 3) Gothein, E., *Wirtschaftsgeschichte des Schwarzwaldes und der angrenzenden Landschaften*, 1892, Leipzig.
- 4) Häne, Johannes, *Leinwandhandel und Leinwandindustrie im alten St. Gallen*, Erneuter Sonder-Abdruck eines 1889 in der Neuen Züricher Zeitung veröffentlichten Aufsatzes, in *Zwei Abhandlungen zur Kultur- und Wirtschaftsgeschichte der Stadt St. Gallen*, St. Gallen, 1932, S. 4-25.
- 5) Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*, Leipzig, 1900, ders., *Zur Geschichte der Ravensburger Gesellschaft*, in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, XI. Jg., 1902, Stuttgart, S. 36-42, ders., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Deutsche Verlags-Anstalt Stuttgart und Berlin, 1923.
- 6) Häbler, Konrad, *Das Zollbuch der deutschen in Barcelona (1425-1440) und der deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhunderts*, in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, X. Jg., 1901, S. 111-363, XI. Jg., S. 1-35, 352-417.
- 7) Weber, Lotte, *Die Anfänge des deutschen Leinengewerbes bis zum Ausgang des 14. Jahrhunderts*, in *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins*, 50. Bd., 1917, S. 177-247.

- 8) Ammann, Hektor, Zur Geschichte der wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Oberdeutschland und dem deutschen Nordosten im Mittelalter, in *Schlesische Geschichtsblätter*, 1927, Nr. 3, S. 49-57, ders., *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft, Ein Beitrag zur Handelsgeschichte des 15. Jahrhunderts*, St. Gallen, 1928, ders., St. Gallens Wirtschaftsstellung im Mittelalter, 1928, in *Sonderdruck aus der Gedächtnisschrift für Georg von Below "Aus Sozial- und Wirtschaftsgeschichte"* S. 131-168, ders., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz, in *Zeitschrift für Schweizerische Geschichte*, 1943, 23. Jg., S. 329-370, ders., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, in *Alemannisches Jahrbuch*, 1953, S. 251-313, ders., Wirtschaftsbeziehungen zwischen Oberdeutschland und Polen im Mittelalter, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 48. Bd., 1961, S. 433-443, ders., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, in *Hansische Geschichtsblätter*, 1954, 72. Jg., S. 1-61. なお H. Ammann によるこの地域麻織業のヨーロッパ市場分析は、すでに北村氏前掲論文において指摘されているように、ほぼヨーロッパ全域におよんでいる。本稿もこれらの H. Ammann の諸論文に多くを負っている。
- 9) Wielandt, Fridrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, 1950, Konstanz.
- 10) Peyer, Hans Conrad, *Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520*, 1960, St. Gallen.
- 11) 例えば、メミンゲンの歴史研究雑誌 *Memminger Geschichtsblätter* 等に発表されている30数点にのぼる論文のほとんどはメミンゲンの商業・商人に関するものであり、メミンゲン商業史の第1の研究である。詳細は後段第5章参照。
- 12) 上の A. ヴェスターマンの諸研究を集大成した研究者で、代表作は、1971年に発表された *Memmingens Wirtschaft und Patriziat von 1347 bis 1551*, Kommissionsverlag Anton H. Konrad Verlag, である。詳細は後段第5章参照。
- 13) Ammann, H. Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, in *Alemannisches Jahrbuch*, 1953, S. 253.
- 14) Ammann, H., a.a.O., S. 258ff.
- 15) Aubin, Hermann, *Das westfälische Leinengewerbe im Rahmen der deutschen und europäischen Leinwanderzeugung bis zum Ausbruch des Industriezeitalters*, Vortragsreihe der Gesellschaft für Westfälische Wirtschaftsgeschichte e. V., Dortmund 1964, Heft 11, S. 9, Wielandt, Fritz, *Leinwandgewerbe am Bodensee*, in *Das Bodeseebuch*, 1936, 23. Jg., S. 24.
- 16) Ammann, H., a.a.O., S. 258.

第3節 南ドイツ麻織業の初期のヨーロッパ輸出市場

1 ヨーロッパ北西地域

ヨーロッパ北西地域、つまり、ライン (Rhein) 川の中・下流地域、フランダース (Flanders)、ブラバント (Brabant)、オランダ、北フランス、イギリス等の地域とこのポーデン湖周辺麻織業との商品取引は、前者が中世を通しての先進的なヨーロッパの毛織物生産地域であったことから、前者による内陸ヨーロッパへの布輸出を一つの契機として発達した。この商品取引はライン川に沿う通商路を利用しそれを発達させたが、14世紀に、ライン川中域に位置するマイン (Main) 川沿岸都市・フランクフルト (Frankfurt) に大市取引が発達するにいたって、ポーデン湖地域産麻織製品は、Köln, Brügge, Antwerpen, イギリス等への輸出を一層増加するようになった¹⁾。

このポーデン湖周辺麻織業の商取引の初期のものとして、この方面で最初に注目されているものは、Augsburg と Konstanz の商人によるライン川中域都市ケルン (Köln) における商取引で、11世紀—12世紀に認められている²⁾。この商取引の年代は明らかではないが、年代の明らかな商取引の事実、同じライン川中域都市コブレンツ (Koblenz) の1104年の関税表 (Zolltarif) への Konstanz の商人の記録である³⁾。さらに、Augsburg の1156年の都市法に Köln までの商取引があったことが、Augsburg の史料集によって確認されている⁴⁾。13世紀頃のこの方面への取引についてはほとんど見出すことができないが、13世紀末期、1296年にライン川中域都市 Walkmühlen で Konstanz の商人による商取引のあったことが確認されている⁵⁾。

上に見た11世紀から13世紀にかけてのポーデン湖周辺麻織業とこの方面との商取引を理解するうえで注目しなければならないことは、その商取引の内容である。上に見た商取引は、いずれも、ポーデン湖周辺産麻織物の販売活動であったことは確かめられていない。逆に、この期にはすでに布生産の先進地であったヨーロッパ北西地域産布のライン川を遡上しての販売活動がひろく認めら

れている。すなわち、Ypern, Gent, Huy, Brüssel など諸都市産の布が12世紀にはライン川沿岸の農村に広く浸透しており⁶⁾、上に見た1104年の Koblenz の関税表にもライン川下流の Maas 地域の諸都市やフランダース地方との商取引があったことが認められている⁷⁾。さらに、フランダース地方やイギリスとケルンとの商取引も認められている⁸⁾。そればかりでなく、これら先進地域産の布は、この南ドイツをはるかに越えて、ドナウ川沿岸地方、すなわち、オーストリアのウィーン (Wien) や Tirol 地方にまで進出している。例えば、1208年の Wien で⁹⁾、さらにイタリアへの通商路上にあるイタリア国境に近い南 Tirol の都市ボーツェン (Bozen) の1237年と1242年の2つの公証人記録簿 (Notariatsregister) の中に、その取引の事実が示されている¹⁰⁾。

これらの先進地域産の毛織布のボーデン湖周辺麻織業地域への進出についても、上に見た諸地域と同じく、12世紀にはその事実が認められ、13世紀には一層多くの史料によってその販売や普及がみとめられている¹¹⁾。しかも重要なことは、このボーデン湖周辺地域の商人—すなわち Konstanz や Ulm, Augsburg 等の商人—がそれらの輸入毛織布を再販売した事実である。後にみるように、特にドナウ川流域や Tirol 地方ではその足跡が一層明瞭に印されてくるのである。

したがって、その事実から見て、どの程度このボーデン湖周辺地域自身が生産した麻織物商品がこのライン川下流地域において実際に販売されていたか、が問題となつてこよう。上に見たように、Koblenz の1104年の関税表にも、1156年の Köln の都市法による指摘においても取引の事実は示されていても、ボーデン湖周辺産麻布の販売の事実はみとめられていない。したがって、この11～12世紀には、Ulm が12世紀にすでに麻織物商品取引を活発化しており¹²⁾、また、Augsburg や Konstanz の商人の商取引の事実が認められてはいても、この方面への輸出の事実を11～12世紀にまでさかのぼらせることには、その可能性までを否定することはできないにしても、不可能といわなければならないであろう。

ボーデン湖周辺地域産麻布がこの方面への一般的な販売活動の一環として輸

出されるのは、14世紀に入ってからである。すなわち、その事実を明白に示すものは、このボーデン湖周辺都市商人によるフランクフルト大市での商取引の事実である。年代の古いものから見ると、1333年に Augsburg の商人が、この地域としては始めて登場し¹³⁾、次いで、1339年以後の Ulm の商人¹⁴⁾、1340年以後 Konstanz の商人¹⁵⁾、1347年には小都市 Waldsee の商人¹⁶⁾、1349年には Isny の商人がこの大市でその名をみとめられている¹⁷⁾。さらに、1350年には Biberach の商人¹⁸⁾、1353年には Ravensburg の商人が認められており¹⁹⁾、1371年には St. Gallen の商人が登場している²⁰⁾。さらに、14世紀末期には、1398年以後小都市 Wil の商人もしばしばこれらに加わっている²¹⁾。

このように年代の明らかになっている都市のほかにも、14世紀を通して、メミンゲンと Lindau の商人がこの大市に参加している²²⁾。

14世紀中には、フランクフルトよりもさらにライン川下流地域にこの地域産麻布の進出がみられる。すなわち、1326年には Augsburg の商人が、北フランスやブラバント、フランダースの Dorn=Tournay で商取引に従事していたことが明らかであり²³⁾、1359年以後コンスタンツの商人がイギリスで、明らかに Konstanz 産とわかる麻布を販売した事実があり、そのほか、低地地方、特に Brügge での取引も明らかである²⁴⁾。さらに、ウルムの商人も、14世紀末にはライン川下流地域に進出していたことが明らかである²⁵⁾。

15世紀に入ると、上にみた諸都市に加えて、Lichtensteig がこのフランクフルトの大市に名を連ね、1446年には、この南ドイツの麻織業地域とライン川下流、およびフランス地域への通商上の重要な中継都市であったスイスの都市バーゼル (Basel) にこの都市の商人とみられる Heinrich Brunman が麻織物製品の販売商人として登場している²⁶⁾。さらに、スイスの Thurgau 地方の都市 Bischofzell の商人が、1483年にこの大市に登場している²⁷⁾。また Arbon 産麻布 (Zwilch) が1476年に Basel の市場 (Kaufhaus) で St. Gallen 産の麻布として売却されている記録もあり²⁸⁾、1477年にはフランクフルトの大市で、やはり St. Gallen 産市としてライプツヒヒ (Leipzig) の商人に売却されている²⁹⁾。さらに、スイスの小都市 Winterthur 産の麻布 (Zwilch) 10パレン

(Ballen) がフランクフルトで、1408年に売却されている³⁰⁾。さらに、1440年頃には、Basel のライン川輸送登録簿に Winterthur 産麻布が示されており、1470年にもライン川沿岸都市のストラスブルク (Straßburg) からフランクフルトへの輸送の事実もみとめられている³¹⁾。又、1446年にはスイスの Wettingen の修道院がこの Winterthur 産麻布を購入している³²⁾。このほか、15世紀中には Kempten, Kaufbeuren, Leutkirch, Wangen, Waldsee, Mindelsheim などの商人がこのフランクフルトの大市に足跡を残しており³³⁾、結局、この生産地域のほとんどすべての都市の商人がこのフランクフルトの大市に輸出市場を求めていたことがわかるのである。

このフランクフルトの大市には、14世紀以来の発達にもなつて、上に見たヨーロッパの布生産先進地域であったフランダース地方の Gent, Brügge, Ypern, Tournai, Dendermonde や、ブラバント地方の Brüssel, Mecheln, Löwen, さらに Tienen, Aerschat, Herenthals, Sichein, Vilvoorde, Lier, Herzogenbusch, Antwerpen などからの商人が毛織物の販売のために集散しており³⁴⁾、したがって、この大市商品取引を通して、ヨーロッパ内陸間商業が成立し、さらに、ボーデン湖周辺地域圏外の南ドイツの中世商業都市レーゲンスブルク (Regensburg) やニュルンベルク (Nürnberg) の商人によるこの大市取引への参加が³⁵⁾、その貿易圏を、東方と北方に対して一層拡大していたのである。

注

- 1) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 259.
- 2) Ammann, H., a.a.O., S. 287. この指摘の原典は明らかにされていないが, Konstanz では10世紀にはすでに自己の需要をこえて市場販売のための生産が開始されていたことが明らかになっている。Wielandt, F., *Das Konstanzer Leinengewerbe*, I, 1950, S. 11.
- 3) Wislandt, F., a.a.O., S. 12, Ammann, H., a.a.O., S. 270. この関税表は Ammann によれば, 11世紀の商取引をも示す史料であることが指摘されている。Ammann, H., *Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter*, S. 25. および, 増田四郎論文「12世紀におけるフランドル地方の経済変革」, 『社会経済史学』, Vol. 17, 383, 397頁参照。

- 4) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 269.
- 5) Ammann, H., a.a.O., S. 269.
- 6) それについての1つの史料は, A. Schulteによって分析されている, アルプス越のスイス仲継都市 Comoに Lilleの商人が Ypern, Beauvais, Brügge産の布を1222年に持参していることである。Ammann, H., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, S. 7-8, 27.
- 7) Ammann, H., a.a.O., S. 25
- 8) Ammann, H., a.a.O., S. 25. さらにロンドンにおいては1157年に Kölnの商人がワインを販売している。増田四郎, 前掲論文, 399頁参照。
- 9) Ammann, H., a.a.O., S. 27.
- 10) Ammann, H., a.a.O., S. 30.
- 11) Ammann, H., a.a.O., S. 27, 30.
- 12) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 226.
- 13) Ammann, H., a.a.O., S. 269.
- 14) Ammann, H., a.a.O., S. 268.
- 15) Ammann, H., a.a.O., S. 270.
- 16) Ammann, H., a.a.O., S. 268.
- 17) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
- 18) Ammann, H., a.a.O., S. 266.
- 19) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
- 20) Ammann, H., a.a.O., S. 261.
- 21) Ammann, H., a.a.O., S. 262.
- 22) Ammann, H., a.a.O., S. 266-267.
- 23) Ammann, H., a.a.O., S. 269.
- 24) Ammann, H., a.a.O., S. 270.
- 25) Ammann, H., a.a.O., S. 268.
- 26) Ammann, H., a.a.O., S. 262.
- 27) Ammann, H., a.a.O., S. 263.
- 28) ebenda.
- 29) ebenda.
- 30) Ammann, H., a.a.O., S. 264.
- 31) ebenda.
- 32) ebenda.
- 33) Ammann, H., a.a.O., S. 266-268.
- 34) とくに Brabant 地方の布生産の発展はこの大市取引の発展と強く結びついてい

た。例えば、Brabant の都市 Lier 産布が14世紀にはこの大市に、15世紀にはジュネーヴの大市にももたらされていた。Ammann, H., *Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter*, S. 39-41, Wee, Hermann Van der, *Die Wirtschaft der Stadt Lier zu Beginn des 15. Jahrhunderts*, in *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte*, Wiesbaden, 1965, S. 157.

- 35) Ammann, H., a.a.O., S. 41. さらに15世紀に入れば、Konstanz 産麻布の Antwerpen での染色がみとめられる。Mone, F.J., *Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert*. in *Zeitschrift der Geschichte des Oberrheins*, 5. Bd. 1853, S. 66.

2 ヨーロッパ南西地域

ボーデン湖周辺麻織業地域からヨーロッパ北西地域への交易がライン川沿に発達したのに対して、対フランス、スペインへの交易は主として2つの通商路を利用していた。1つは、ボーデン湖からライン川を下り、Basel からそのままエルザス地方を横断してフランス中央部、とくにシャンパーニュ地方に至るものであり、他は、スイスを南下してローヌ川沿に地中海に出るか、その途中からスペインに向かうものであった¹⁾。Basel から直接フランス中央地域への道は、途中、Straßburg を経由する道も利用され、又、ローヌ川沿はスイスのジュネーヴ (Genf) からリヨン (Lyon), Avignon を経て地中海に出るか、Avignon から Aiguesmortes, Montpellier を経て, Perpignan, Barcelona に至るものであった。この他に、シャンパーニュの大市を経由して南下し、地中海地域に出る通商路も利用されていた。

ボーデン湖周辺麻織業のこの方面への輸出の開始は、フランス・シャンパーニュ地方の大市での商品取引から見る事ができる。この地方の各都市の大市取引は13世紀にはすでに一般的になっているが、この地方にみられる初期の記録としては、1211年の Provins でのドイツ商人の滞在の記録がある²⁾。さらに、1261年と1265年には Bar-Sur-Aube に1276年には Provins にバーゼル (Basel) の商人が宿舎を所有していること、さらに、1288年には Troyes にもその足跡が認められている³⁾。

これらの記録にみえるドイツ人がボーデン湖周辺地域からのドイツ人である

という確証はないが、1283年3月30日の Rudolt Von Habsburg なる人物のシャンパーニュ大市訪問に際して、イタリア商人に加わってコンスタンツの商人が登場していること⁴⁾、さらに、1289年3月16日には、コンスタツの商人の指導者達による協議会が開かれている事実⁵⁾、等によって、13世紀初頭のドイツ商人がボーデン湖周辺地域商人である可能性はかなり強いものとなっている。

麻布の販売については、Lagny などの都市にコンスタンツの商人が滞在し、麻布や金物製品を販売しているほか、13世紀中期には、シャンパーニュ大市の関税表から、ドイツ産麻布の輸入の事実が明らかになっている⁶⁾。

さらにこの期のボーデン湖周辺地域産麻布の進出を示す史料は、1237年に結ばれたイタリア・Genua とロヌス川沿都市 Arles との取引契約である⁷⁾。この事実によって、Arles を経由してボーデン湖周辺地域産麻布がイタリアに輸出されていたことが認められ、さらに上の例と同じく、1248年にはスイスの Basel の麻布がフランスの地中海沿都市 Marseille から San Spirito 号によってシリアの Akkon に輸出、売却されている⁸⁾。また、1252年には、Schaffhausen 産麻布がこのシャンパーニュの大市で、シリアからの注文によってこの大市地方産の麻布と共にフランスの地中海沿都市 Aiges Montes から Genua に向けて輸出される契約がなされたことも明らかになっている⁹⁾。

こうしたシャンパーニュ大市経由地中海地域への輸出の事実は、そのままボーデン湖周辺地域産麻布のシャンパーニュ大市への進出を示すのであるが、それを裏付ける史実としては、1250年にストラスブルクとこの大市地域間で生じた麻布強奪事件をあげることかできる¹⁰⁾。これによって、ドイツ商人による直接的な麻布輸出が認められ、しかも、1299年には Konstanz の商人も全く同じ様な強奪の被害にあっている¹¹⁾。

13世紀の後半期におけるボーデン湖周辺地域産麻布のシャンパーニュ大市への進出は、すでに上に見たものに加えて、この地域の都市法などによっても裏付けられてくる。まずコンスタンツについて見ると、1272年にコンスタンツ産麻布が Basel に見え¹²⁾、1289年にコンスタンツの市庁がシャンパーニュ大市での麻布販売条令を發布し、また、大市の開かれる Bar, Troyes, Provins,

Lagny には麻布専用の販売店舗が設置されていたことが明らかとなっている¹³⁾。

このほか、Augsburg の1276年の都市簿と1282年の Wertachbrüchsen の関税表とによって、Augsburg とシャンパーニュ大市取引との活発な販売活動が明らかである¹⁴⁾。

以上から、遅くも13世紀の中期にはほぼ確実に、その可能性からいえば13世紀初頭から、このボーデン湖周辺地域産麻布が当時ヨーロッパ第一の商品取引市場であったシャンパーニュの大市場に進出していたことが明らかとなる。そしてこの事実はまた、この大市商業を媒介として先進地域産、すなわち、低地地方および北フランス産毛織布の南ドイツへの輸入の事実を意味するものである¹⁵⁾。

フランス以西地域およびボーデン湖からスイスを南下しローヌ川沿通商路を利用した輸出市場については、上に見たシャンパーニュ大市への輸出よりも遅くなっている。例えば、1284年頃に Schaffhausen 産麻布がスペインの Katalonia や Aragonien への通商路上の第一の関税地であった Perpignan を通過しており、かなり定期的にスペインへの輸出がなされていたことがその関税表から指摘されているが¹⁶⁾、それ以前の販売活動を示すものは明らかでない。

14世紀に入ると、この地域産麻布のスペインへの輸出は一層明白になってくる。1331年には Aragonien にドイツ産麻布がすでに一般的に輸入されており¹⁷⁾、また、Saragossa の商品目録から、1331年、1354年、1362年、1374年、1380年にドイツ産麻布の輸入の事実が認められており¹⁸⁾、しかもこのドイツ産は明らかにボーデン湖産のものであることも確かめられている。さらに加えて、Saragossa に近い Cepila の教会のリストにも1331年にドイツ産麻布が見い出されている¹⁹⁾。また、1383年には Barcelona にはじめてコンスタンツの商人がその足跡を印しており²⁰⁾、またこれとほぼ同じ年代に Ravensburg の麻布がスペインのいずれかの地に輸出されている²¹⁾。スペインにはさらに、15世紀に入ってからであるが、St. Gallen 産麻布も輸出されている²²⁾。

このスペインへの通商路に属しているフランス南部の都市 Montpellier や

Avignon には、14世紀のボーデン湖周辺地域産麻布のスペインへの輸出を裏付ける記録がかなり多く残っている。Montpellier には、1363年に Schaffhausen 産の麻布がかなり多量に搬入されており²³⁾、Avignon には、当時ここがローマ法王居住地であったこととも関連して、ここにボーデン湖周辺地域産の麻布が多く見出し出されている。古いものからあげると、1314年に法王庁の財産目録にその名が示されており、1317年、1318年、1319年には法王庁がテーブル用クロスとしてドイツ産布を購入し、また1324年と1362年にはコンスタンツの商人と法王庁の官吏との間に麻布の売買取引があり、1342年、1369年、1371年にもコンスタンツの麻布が購入されている²⁴⁾。また1331年には、法王が、Avignon で死亡した聖職者の遺産を配分した際にドイツ産麻布が見出し出されており、1365年には法王庁がカール四世訪問に際してテーブル用にコンスタンツの麻布を購入した事実も記録に残されている²⁵⁾。さらに同じ年に、Konstanz の麻布が Avignon のユダヤ人に売却されていることも同じく明らかである²⁶⁾。

このほか、14世紀末には Im の商人がスイスのジュネーヴ (Genf) に登場し²⁷⁾、1383年にはスイスの都市 Freiburg (im Uechtland) にアウクスブルク (Augsburg) の商人の足跡がみとめられる²⁸⁾。また、Genf の関税表から、コンスタンツの麻布が1375年に輸入されていることも明らかである²⁹⁾。

15世紀に入ると、スイスの Genf の大市やフランス南部の都市 Lyon への輸出が一層活発化し、上に見た都市以外に、Wil, Appenzell, Isny, Kempten, Memmingen, Kaufbeuren, Biberach, Lindau, Leutkirch, Wangen, Mindelsheim などの中小都市の商人がこれらの取引に参加して麻布販売に活躍する³⁰⁾。

こうして見ると、ボーデン湖周辺地域から南フランス、スペイン方面への麻布輸出は、まずシャンパーニュ大市取引の発展とともに進行し、南フランス、地中海だけでなく遠くスペインへの進出をなす一方、スイスを南下してローヌ川沿いの地域にも輸出市場としての地域を開拓していたことがわかるのである。

注

- 1) これらの通商路については、梶山力論文「バーゼル市を中心とする欧州中世の商

- 業路』『社会経済史学』第9巻第3号，昭14年，41頁以下，および，Peyer，Hans Conrad，*Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520*，Bd. II，1960，S. 27-30，Ammann，H.，Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes，S. 255，参照。
- 2) ここでのドイツ商人は，倉庫，住居を設備した居住館を有していた。Wielandt，Friedrich，*Das Konstanzer Leinengewerbe*，I.，1950，S. 24.
 - 3) Wielandt，Friedrich，a.a.O.，S. 24，および，Ammann，H.，a.a.O.，S. 273.
 - 4) Wielandt，Friedrich，a.a.O.，S. 25.
 - 5) ebenda.
 - 6) Wielandt，Friedrich，a.a.O.，S. 25，および，Ammann，H.，a.a.O.，S. 287.
 - 7) Ammann，H.，a.a.O.，S. 276.
 - 8) Schulte，Aloys，*Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*，Bd. I，S. 116. さらに，これと同じ取引の一部と思われるものに，1248年マルセイユで，Limoges の商人によって購入された麻布取引がある。これもシャンパーニュ大市経由とみられる。Ammann，H.，a.a.O.，S. 286.
 - 9) Ammann，H.，a.a.O.，S. 286.
 - 10) Ammann，H.，a.a.O.，S. 287.
 - 11) Ammann，H.，a.a.O.，S. 270.
 - 12) ebenda.
 - 13) Ammann，H.，a.a.O.，S. 270，Wielandt，Friedrich，a.a.O.，S. 24，Mone，Franz Joseph，Zur Handelsgeschichte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert，S. 48-50，Häne，Johannes，Leinwandhandel und Leinwandindustrie im alten St. Gallen，in *Zwei Abhandlungen zur Kultur- und Wirtschaftsgeschichte der Stadt St. Gallen*，1932，S. 97，北村次一，前掲論文，224頁，Weber，Lotte，Die Anfänge des deutschen Leinengewerbes bis zum Ausgang des 14. Jahrhunderts，in *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins*，50. Bd.，1917，S. 206.
 - 14) Ammann，H.，a.a.O.，S. 269.
 - 15) Ammann，H.，Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter，S. 33，Lotte，W.，Die Anfänge des deutschen Leinengewerbes，S. 204.
 - 16) Ammann，H.，Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes，S. 274-276.
 - 17) Ammann，H.，a.a.O.，S. 274
 - 18) ebenda.
 - 19) ebenda.
 - 20) Ammann，H.，a.a.O.，S. 270.

- 21) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
- 22) Ammann, H., a.a.O., S. 261.
- 23) Ammann, H., a.a.O., S. 274.
- 24) ebenda.
- 25) ebenda.
- 26) Ammann, H., a.a.O., S. 274, および, Wielandt, Friedrich, a.a.O., S. 28
- 27) Ammann, H., a.a.O., S. 268.
- 28) Ammann, H., a.a.O., S. 269.
- 29) Ammann, H., a.a.O., S. 270. さらに, 14世紀のパリ (Paris) の関税表にドイツ産の麻布が登録されている。Ammann, H., St. Gallens Wirtschaftsstellung im Mittelalter, 1928, S. 140, ders., Der Verkehr über den Pass von Jougne nach dem Zollregister von 1462, in *Mamories et documents Publies Publies parla Sociéted historie et d' archéologie dc Genève* 1961, S.225.
- 30) Ammann, H., a.a.O., S. 262-268.

3 ヨーロッパ東地域

ボーデン湖周辺地域の麻織物輸出商人によるドナウ川流域, オーストリア・チロル地方への通商の事実は, 上に触れたように, ヨーロッパ先進地域の毛織物輸出の進行にともなうなされた。その最初の足跡として注目されているものは, オーストリアのドナウ川流域都市 Enns でのウルム (Ulm) の商人による取引であり, すでに12世紀中期に示されている¹⁾。さらに1191年には, この Enns で, 歳市での外国人商人の権利が新たに承認されており, この外国商人の中に, フランダース地方の Bächtold, Maastricht, さらにドイツの Aachen, Köln などの諸都市商人に加わって南ドイツの Regensburg や Ulm の商人が活躍していたこと²⁾, さらにこの外国商人の権利が12世紀初頭までさかのぼれるものであったという指摘もある³⁾。しかも, いずれの例も市販売が目的であった⁴⁾。さらに関税規則 (Mautordnung) から, この地に Aachen, Regensburg の商人とともに, 南ドイツ・シュワベン (Schwaben) 地方の商人が取引に従事していたことが明らかであり, 彼らが布 (Gewand) を販売していたことも明らかとなっている⁵⁾。Wien では1208年にフランダース人の名を持つ染色業者の活動も記録に残されている⁶⁾。

さらに、この当時の状態を示すものとして注目されているものは、当時の詩人、Franke Wolfram von Eschenbach の叙事詩である。これによって、H. Ammann の指摘に従えば、フランダース、イギリス産の布がすでに13世紀初頭にはハンガリーにまで達しているのである⁷⁾。さらに、Wien の13世紀初頭の関税規則 (Zollordnungen) などによって、布生産地として、Gent, Stampfart von Arras, Ypern, Tournai (Dorn), Huy, St. Quentin, Valenciennes, Louviers, Paris などの地名が確認されており、これらの販売商人として Regensburg や Schwaben 地方からの商人がこれに従事していた⁸⁾。さらに Wien では、1291年の記録によって、この都市の商人が Ypern と Gent に対して負債をもっていたこと⁹⁾、ドナウ川流域でも一層下流のハンガリーとの国境に近い都市 Hainburg では、13世紀の関税表によって、布の生産地として Gent, Eyper, Dorn の名が知られていた¹⁰⁾。

ドナウ流域から南下した、イタリアの都市ベニス (Venedig) への通商路に位置するオーストリア・南チロルの都市 Bozen には、1237年、1242年、1295年のそれぞれの年の公証人記録簿の存在が確認されている¹¹⁾。それらの史料の検討によって、1237年には、Augsburg からの商人の活動がみられ、そのうち1人は麻布を持参していたこと、さらに、Kaufbeuren や Kempten, Wangen など、ボーデン湖周辺都市からの商人の活動も明らかにされている¹²⁾。ただ、Augsburg 以多の小都市の商人は、高価な色染めの布を持参しており、それはフランダース産のものともみられているから、ボーデン湖周辺地域産の麻布の販売と、同時に、先進地域産毛織物の仲介取引もみとめられることになる。さらに、Schaffhausen の商人がこの Bozen の近くの都市 Trient に貸付債権を有していたことも示されている¹³⁾。また、Kempten の商人 Mozo, Wangen の商人 Werchmeister の名もあきらかとなっている。さらに、1242年の史料からも、Augsburg と Kaufbeuren からの商人が高価な布を持参したこと、さらに、Kaufbeuren の商人がイタリア産布を購入したことも明らかである¹⁴⁾。

以上によって、一応、13世紀前半にはボーデン湖周辺地域産麻布の輸出が、それまでの高級毛織物の仲継商品取引に加わってなされていたとみることがで

きるが、13世紀の後半に入るとその麻布輸出の傾向は一層明白になってくる。例えば、1295年の Bozen の上にみた史料から Konstanz と Augsburg から商人による布の販売が明らかであり¹⁵⁾、チロル地方の伯爵領主の会計帳簿(1288年から14世紀中期まで)によって、このチロル地方の粗織毛織布やイタリア産の布に加わって、そこで使用する布のほとんどが北西ヨーロッパ産の布によって占められていたことも明らかにされており¹⁶⁾、それらの布の生産地として、フランス・シャンパーニュ地方の Chalons や、Paris, St. Quentin, Ypern, Gent, Poperinge, Tournai, Douai, Arras, Huy, Maasricht, Aachen, Brüssel などの産地名が明らかで¹⁷⁾、それらは、フランスやフランダース、ブラバント地方、ライン中・下流地域にひろがっている当時の布生産地域ほぼ全域から輸入されていたことを物語っている。そして、これらの布は、Innsbruck や Hall (im Norde), Bozen, Meran, Sterzing (プレナー峠の南地域) などの諸都市にも輸入されており、それらの販売商人として、Konstanz (Ypern 産布を)、Kempten (Ypern, Gent, Poperinge 産布を)、Lindau (Ypern 産布を)、Augsburg (Ypern 産布を)、München (Brüssel 産布を)、Ulm (Ypern 産布を) などの商人が足跡を印している¹⁸⁾。

また、これらに加えて、1288年には Augsburg の商人が南北チロルの諸都市においてかなり頻繁に取引活動を行ない、1295年にはイタリア・Venedig に間近い都市 Pandua に登場していることも明らかである¹⁹⁾。

これらのほかに、13世紀末には、1295年 Kempten の商人がチロル地方に、1299年にも、Kempten の商人が南チロルの都市 Meran の市場に麻布を供給している事実があり、又、1299年には Lindau の商人が同じチロル地方にその足跡を印している²⁰⁾。

14世紀に入ると、1300年にメミンゲン (Memmingen) の商人がチロルに見え²¹⁾、1325年には Isny の商人も同じくこの地方に登場し²²⁾、1336年には St. Gallen の商人がこの地方の公爵 Johann von Kärnten-Tirol の通行許可簿に見い出されている²³⁾。またこの期には、先に見た Augsburg の商人が、1337年以後 Wien に、1345年以後ドナウ下流地域や南オーストリア地域にその活動

が確認されている²⁴⁾。さらに、1357年にはラーフェンスブルク (Ravensburg) の商人がチロル地方の Hall に、同じ時期に、Wien にもその足跡がみとめられている²⁵⁾。このほか、1365年には小都市ロイトキルヒ (Leutkirch) の商人がこのチロル地方に登場している²⁶⁾。

15世紀に入ると、1401～02年にザンクト・ガレン (St. Gallen) 産の麻布が、ドイツ南部のオーストリアとの国境都市 Passau の関税表によって、その輸出が確認されており²⁷⁾、さらに、Isny の商人はドナウ川流域都市 Linz, Wien などで足跡がみとめられている²⁸⁾。さらに、Kempten やメミンゲン、カウフボイレン (Kaufbeuren), Lindau などの商人もこの期に Wien に登場している²⁹⁾。

この南ドイツからヨーロッパ北東地域、ポーランド方面への麻布の輸出も、14世紀から15世紀になって、一層その活動の足跡が明らかとなっている。一般的には、14・15世紀に、南ドイツからワインや鉄製品などと共に麻布が輸出されたことが指摘されているが³⁰⁾、Isny の名が15世紀に Prag と Krakau で見い出されており³¹⁾、St. Gallen も同じ時期に Polen との間にかなり多量の麻布を輸出しており、Ulm も Augsburg と同じくこの取引に従事していたことが明らかである³²⁾。さらに、1346年には Krakau の商人がフランクフルトの大市に登場しており³³⁾、したがって、この南ドイツ麻織業地域からの直接輸出に加えて、このフランクフルトの大市を経由してこの方面に麻布が輸出されたことが当然予想される。さらにこのフランクフルトの大市取引だけでなく、当時の南ドイツでは第2の大市とされたノルトリンゲン (Nördlingen) の大市にも、Breslau からの商人が、15世紀に、その足跡を示している³⁴⁾。これらによって、この方面への麻布の輸出が一層明らかとなるのである。

以上のように、このヨーロッパの東地域への麻布の輸出は多分に先進地域産毛織布の販売活動を通して発展したものであったと思われる。そして通商路について見れば、上に見た南西地域がシャンパーニュの大市取引を経由して地中海地域に進出していたのと同じように、イタリア・ベニス (Venedig) への通商路上にあたるこの地域が比較的早くから活動を開始していたのであり、その

ことが、イタリア・地中海地域と南ドイツの麻織商品との取引を上記述べたローヌ川沿の地域とは違った方向から発展させることになったのである。

注

- 1) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 268.
- 2) Ammann, H., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, S. 27. 宮下孝吉論文「中世後期におけるオーストリア商業と都市の対外政策」, 『社会経済史学』13巻, 60~62頁参照。
- 3) Ammann, H., a.a.O., S. 27.
- 4) ebenda.
- 5) ebenda.
- 6) ebenda.
- 7) 彼の叙事詩の中に Gent 産の布 (Scharlach) がうたわれていることからの指摘である。Ammann, H., a.a.O., S. 27.
- 8) Ammann, H., a.a.O., S. 29. 1221年に Leopold VI が Wien に与えた都市法には, Schwaben, Regensburg, Passau などの商人に12カ月間の滞在許可を与えている。宮下孝吉, 前掲論文, 64頁参照。
- 9) Ammann, H., a.a.O., S. 29.
- 10) ebenda.
- 11) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 285, ders., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, S. 30. この Bozen の市場は1202年, はじめて史料に登場している。Bückling, Gerhard, *Die Bozener Märkte*, Leipzig, 1907, S. 3.
- 12) 中でも Augsburg の商人 Mori, Benediktbeuren などについては麻布販売商人としての活動が明らかである。Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 285, ders., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, S. 30. Bückling, Gerhard, a.a.O., S. 5-6.
- 13) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 285.
- 14) Ammann, H., a.a.O., S. 285.
- 15) ebenda.
- 16) Ammann, H., Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter, S. 30.
- 17) ebenda.
- 18) ebenda.
- 19) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 269.

- 20) Ammann, H., a.a.O., S. 267.
 21) Ammann, H., a.a.O., S. 266.
 22) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 23) Ammann, H., a.a.O., S. 261.
 24) Ammann, H., a.a.O., S. 269.
 25) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 26) Ammann, H., a.a.O., S. 267.
 27) Ammann, H., a.a.O., S. 261.
 28) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 29) Ammann, H., a.a.O., S. 266-7.
 30) Ammann, H., Wirtschaftsbeziehungen zwischen Oberdeutschland und Polen im Mittelalter, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 48. Bd., 1961, S. 434.
 31) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 265.
 32) Ammann, H., Wirtschaftsbeziehungen zwischen Oberdeutschland und Polen im Mittelalter, S. 436. さらに Leipzig の大市にもボーデン湖産麻布が15世紀にはみとめられる。Ammann, H., St. Gallens Wirtschaftsstellung im Mittelelter, 1928, S. 140.
 33) Ammann, H., a.a.O., S. 437, ders., Zur Geschichte der wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Oberdeutschland und dem deutschen Nordosten im Mittelalter, in *Schlesische Geschichtsblätter*, 1927, S. 51-52.
 34) Ammann, H., a.a.O., S. 52.

4 ヨーロッパ南及び地中海地域

ボーデン湖周辺地域からイタリア，地中海地域への通商路は，上に見たように，オーストリア・南チロルからブレナー（Brenner）峠を経由するベニス（Venedig）への道と，フランス・シャンパーニュ地方を経由して南下し，あるいはスイスを南下してローヌ川沿いに，地中海に出る道，さらにスイスを南下してそのままアルプスを越える道（Septimer 峠，St. Bernhardt 峠，St. Gotthard 峠）の3方法がその主たるものであった。

このボーデン湖周辺麻織物経済圏とイタリア市場との交易は，14世紀にこの麻織業地域に発達したファスチアン織業（Barchent）の中心地になる Ulm，

Augsburg などの諸都市による原料木綿の輸入をイタリア、中近東方面に依存することによって、一層発展するのであるが、それ以前にも、この地域が麻織物輸出市場としてかなりの比重を占めていたことが、地中海地域に見い出されている諸史料から明らかである。

初期の活動に関連したこの地域産麻布のイタリアにおける足跡としては、1128年の Genua の関税表から、この年に麻製品を持参したドイツ人が、フランス人、フランダース人などと共に名を連ねていることである³⁾。これによって、つまりそれより先にみられたコンスタンツ商人のイタリア旅行の事実とこのドイツ商人の関税表への登場によって、ボーデン湖周辺産麻布のこの地への輸出の可能性が考えられるのである。さらにこれを裏付けるものとして、1153年にイタリア都市 Lodi の商人がコンスタンツで、神聖ローマ帝国皇帝 Friedrich Barbarossa に、イタリアの都市ミラノ (Mailand) への干渉を提言し、ミラノへの侵入がコンスタスツ麻織業の発展には必要であることを主張した、という記録が残されている²⁾。これによって、すでに当時、Konstanz の麻布輸出市場としてイタリアの諸都市がかなり重要な地位を占めており、当時のイタリア諸都市間の政治にまで影響を与えていたことがうかがえる。

12世紀においては、さらに、1193年にアペニン山脈の Gavi の関税表に、Genua 人と Lombard 人によって持参されている „baldinelle” が³⁾、それを Ammann の指摘するようにドイツ産麻布とみとめることができるとすると、1161年に Geuua の商人によって Konstantinopel に売却された Mailand 人所有の “baldinelle” も⁴⁾、さらに、1151年、1156年にも Genua でそれらの取引がみとめられることになるのである⁵⁾。さらに、1191年には Genua から Rom に12反 (Stück) の “baldinelle” が輸出された事実もある⁶⁾。

以上から、明確な史実に欠けてはいても、ドイツ産麻布のイタリア諸都市への輸出、コンスタンツ商人の足跡などから、一応、12世紀前半期にはボーデン湖周辺産麻織物の地中海地域への輸出の開始を想定できるのである⁷⁾。

13世紀に入ると、その販売活動は、一層多くの記録、史料などの検討によって、その頻繁性が明らかになっている。13世紀初頭では、1200年にドイツの毛

織布 (Wolle) とその他の布を購入する目的でミラノ人がオットー 4 世からイノセント 3 世への使者として史料にあらわれており⁸⁾、さらに、ベルギーの歴史家 Rénee Doekaerd によって研究されたジェノア (Genua) の史料によっても⁹⁾、13世紀初頭以来 Genua とアルプス北側との通商の事実がみとめられている。それは1201年以来 Genua だけでなく、Ligurien, Korsika, さらに Bonitacio 港 (1247年) にまで伸長されている¹⁰⁾。さらにその1201年には Genua から Euta Bougie (in Algerien) への輸出もあり、それは1202, 1203, 1204, 1205年にも繰り返えされている¹¹⁾。さらにこれらに類する記録が、モロッコ (Marokko) の Centa に1201, 1206, 1211, 1212, 1213, 1215, 1216年のそれぞれにみとめられており、Algerien の Bougie においても、1201, 1205, 1227, 1253, 1254年にわたって同様の記録が存在している。また、Tunis でも1234年に、エジプトのアレクサンドリア (Alexandria) では1203, 1211, 1212年に通商の事実が認められている¹²⁾。さらに、Genua の商人の活動については、シチリア (Sizilien) の Mussina を主たる取引港にしてそこに輸出しており、そこでは1206, 1212, 1214, 1216年にそれぞれドイツ産の布取引が確認され、Syria にも、1202, 1203, 1212, 1216, 1247, 1252, 1253, 1258年にそれぞれドイツ産麻布の輸出の事実が確認されている¹³⁾。1253年の取引では指定港として Akkon の名もその記録に示されている¹⁴⁾。さらに、1241年には、Genua の関税取引契約の記録から、ドイツ産麻布がイタリア都市 Siena での取扱商品の中に見い出されている¹⁵⁾。

こうした13世紀初頭からのジェノア (Genua) の商人によるドイツ産麻布の販売活動を裏付けるものとして重要なものに、1204年の Genua の仲介取引記録 (Maklertarif) がある。これによって、H. Ammann の表現に従えば、すでに13世紀初頭には Genua においてはドイツ産麻布が“日用商品”として取引されていたのである¹⁶⁾。したがって、上にみたことと対照して、このドイツ産麻布輸出の開始を12世紀前半期、おそらく中期にまでさかのぼってみるのが可能となるのである。そこで次にこのドイツ産麻布とボーデン湖周辺麻織業地域との関連性が問題となるのであるが、それを結びつけるものとしては、1216年

の Genua におけるコンスタンツからの麻布の取扱いがあり¹⁷⁾、さらには、その前の1205年のコンスタンツ商人の Genua での登場がみとめられている¹⁸⁾。また、Lindau については1213年に“ein Bertoldus de Lindo”の記録があり、同じく1224年には Lindau の商人 (Ugo de Lindo) がドイツ産麻布を販売した事実も明らかになっている¹⁹⁾。さらに、コンスタンツ商人の Genua での登場の数年後には、St. Gallen, Schaffhausen, Basel, Freiburg (im Uechtland) の商人がドイツ産麻布を持参して販売活動に従事していたことが明らかであり²⁰⁾、1214年にはラーフェンスブルク (Ravensburg) の商人とおもわれる Fredericus や Guarconus de Ravesborge らの商人がこの地で絹を購入していることも明らかとなっている²¹⁾。

以上のほかに、13世紀の前半期には、すでに上に見たように、シャンパーニュ大市あるいは南フランス経由による地中海地域へのドイツ産麻布の進出も加わってくる。1237年にはジェノア人によるローヌ川沿都市 Arles とのドイツ産麻布の取引契約があったことは上に見た通りであり、1252年には、1,062反 (Stück) のドイツ産麻布がフランス南部の Aigues-Mortes 港経由でジェノアや Syria にまで輸出されているのである²²⁾。

上に見た12世紀末および13世紀初頭以後の地中海域とくにジェノアにひろく輸出されていたボーデン湖周辺地域産にほぼ間違いないと思われる麻布が、ここに見るように、シャンパーニュの大市を経由していたのか、アルプス越えの通商路を利用していたのかの問題については、速断は許されないように思われるが、アルプス越えの通商路上においても、すでに13世紀の初頭から麻布輸出のための通商が、その通商路上の都市などに存在する記録などによって、明らかとなっている。すなわち、スイスとイタリアのミラノ (Mailand) やジェノアに通じる通商路上に位置するイタリアの都市コモ (Como) の商人によって1210年と1252年にドイツ産の麻布が輸入されており、さらには1228年に Schaffhausen の商人が麻布を持参してこの Como に到着している事実が明らかとなっている²³⁾。そしてコモからイタリアへの取引については、1203～1237年にここからジェノアに麻布が輸出されたことがみとめられている²⁴⁾。このほか、

オーストリアの南チロルからブレナー (Brenner) 峠経由の通商路でも、すでに上に見たように、1237年には Schaffhausen の商人、Wilhelm と Burkhard がこの通商路上の都市 Bozen に見え、さらにアウクスブルクからの商人による麻布販売の事実もある。したがって、この期以前にこの通商路を利用した麻布輸出の可能性も他の通商路にけっして劣らないものなのである。

Genua と並んで重要な都市であったベニス (Venedig) について見ると、1228年にはすでにドイツ商人用商館 (Fondaco) の建設がなされていることから²⁵⁾、その取引が十分想像されるのであるが、13世紀前半期のドイツ産麻布の販売の事実は見い出されていない²⁶⁾。しかし、1213年に München の商人、1221年に Wien の商人が Venedig に足跡を印した事実は存在する²⁷⁾。

13世紀の後半に入ると、上に見た1252年のシャフハウゼン (Schaffhausen) の麻布が Aigues Mortes からジェノアに輸出されているほか、1255年～88年の記録によって²⁸⁾、ザンクト・ガレン (St. Gallen) の商人 Conradus Speisairus がジェノアの胡椒を314 lb. (リブラ) 購入し、それに対して11バレン (Ballen) のドイツ産麻布を担保として与えていたことが明らかになっている。さらに、1277年、1278年には同じザンクト・ガレンの商人 Saricus Maistrilli がドイツ産麻布5バレン (Ballen) をやはり担保として納入している。さらに、1279年～89年にはドイツからの商品が Bologna でフローレンスの商人の取引の中で確認されており、1295年にはローマの法王庁でドイツ産麻布が使用された事実も見い出されている²⁹⁾。

13世紀後半のアルプス越えの通商については、上にみた1228年に Schaffhausen の商人 Heinrich がコモ (Como) 湖の近くにある Sarico を経由して、しかも麻布を携帯してコモに向っていた記録があるほか³⁰⁾、この通商路上に位置するスイスの都市 Freiburg (im Uechtland) は St. Bernhard 峠経由でイタリアとの交易関係にあり、この都市産の麻布が、1253年にシリア (Syrien) に向けて輸出された麻布の中に確認されている³¹⁾。さらに、ジェノアにはこの都市産麻布が1250年以来知られており、この都市の商人 Wilhelm von Freiburg が1251年から1278年の間 Genua で活動し、Jacob von Freiburg は1250

年から1288年まで、Peter あるいは Peterchen という名の商人は1253年から1281年まで、そして彼の死後は息子の Anton が、取引活動に従事していたことが明らかである³²⁾。これらに加えて、この期には上に見たように Brenner 峠経由の通商路上の各地で Augsburg, Konstanz などの商人による麻布販売活動が頻繁になされていた。

ベニス (Venedig) でこの期の足跡は、1264年に Venedig の商人がペルシャ・Tauris でドイツ産布を持ちこんで滞在していた記録があり³³⁾、また1268年には麻布が重要商品として取扱われていたことが、当時の記録から明らかにされているが³⁴⁾、さらにもう一つの重要な史料として当時書きおろされたラテン語－ペルシャ語の辞典が注目されている。すなわち、この中に、北西ヨーロッパ産 (フランダース、北フランス産など) の布に加えてドイツ産麻布の項目が示されているからである。このことから当時のドイツ産麻布の輸出の度合が想定されるのである³⁵⁾。

14世紀に入ると、これら麻布の輸出の事実だけでなく、その数量もみることができ。すなわち、1361年には Augsburg の商人によって Venedig において1取引で25,000エレ (Ellen) 以上の麻布が売却されている³⁶⁾。

以上によって、ポーデン湖周辺麻織業地域からイタリア、地中海地域への麻布の輸出が、12世紀前半期にはすでにその開始を見、13世紀に入ると同時にその輸出がかなり増加していることを認めることができると思う。ただ、上に示されているものはこの地域のほとんど重要な都市だけなのであり、その他の中小都市はかなり遅くなってからでなければその活動が見い出されないのである。例えば、Wil の商人は15世紀になってようやく Venedig や Mailand や Como に登場し、Lichtenstein の商人は1400年にこの都市産の麻布をイタリアで売却する。Appenzell の麻布は1492年に Venedig にみえ、Winterthur 産の麻布 (Zwilch) は1485年に Venedig の買付によって南チロルの国境都市 Meran に登場する³⁷⁾。さらに、Kempten や Memmingen, Biberach などの諸中小都市もイタリアの都市にその足跡を印すのはようやく15世紀に入ってからなのである³⁸⁾。

注

- 1) その内容は11世紀にまでさかのぼれるものとされている。Ammann, H., *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes*, S. 283, Wielandt, F., *Das Konstanzer Leinengewerbe*, II., S. 12, Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 106-107.
- 2) Wielandt, F., a.a.O., S. 12.
- 3) Ammann, H., a.a.O., S. 283.
- 4) ebenda.
- 5) ebenda.
- 6) ebenda.
- 7) ドイツ産麻布の輸入には触れえないが、1184年にはドイツ語圏の“Almani”又は“Thodesci”からの人々の活動が明らかにみとめられている。又、1190年には Genua にドイツ人商人名として Burqurdus Tuectonicus が史料に見い出されており、ドイツ産の銅を販売し、代わりに絹、香料、果実類を購入した事実がみとめられている。Ammann, H., a.a.O., S. 282.
- 8) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 108.
- 9) Ammann, H., a.a.O., S. 277.
- 10) Ammann, H., a.a.O., S. 277, 288.
- 11) Ammann, H., a.a.O., S. 288.
- 12) Ammann, H., a.a.O., S. 277.
- 13) ebenda.
- 14) Ammann, H., a.a.O., S. 277-278.
- 15) Ammann, H., a.a.O., S. 284.
- 16) Ammann, H., a.a.O., S. 276. ders., *St. Gallens Wirtschaftsstellung im Mittelalter*, 1928, S. 136, Peyer, H. C., a.a.O., S. 3.
- 17) これは Marokko の Ceuta に輸出されている。Ammann, H., a.a.O., S. 278, および, Wielandt, F., a.a.O., S. 17.
- 18) Ammann, H., a.a.O., S. 278, および, Wielandt, F., a.a.O., S. 17.
- 19) Ammann, H., a.a.O., S. 278.
- 20) Wielandt, F., a.a.O., S. 17.
- 21) Ammann, H., a.a.O., S. 278.
- 22) ebenda.
- 23) Ammann, H., a.a.O., S. 284, および, Wielandt, F., a.a.O., S. 17.
- 24) Ammann, H., a.a.O., S. 278, および, Schulte, Aloys, a.a.O., S. 107.
- 25) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 108.

- 26) Ammann, H., a.a.O., S. 284.
 27) ebenda.
 28) Ammann, H., a.a.O., S. 278-279. Peyer によればそれは1262年 Genua においてである。Peyer, H. C., a.a.O., S. 4.
 29) Ammann, H., a.a.O., S. 284.
 30) Ammann, H., a.a.O., S. 280.
 31) Ammann, H., a.a.O., S. 278.
 32) Ammann, H., a.a.O., S. 279.
 33) Ammann, H., a.a.O., S. 284.
 34) ebenda.
 35) ebenda.
 36) Ammann, H., a.a.O., S. 285, さらに Ulm, Augsburg, Nürnberg などからの商人による麻布だけでなく, 金物製品などの輸出も活発化している。Kaltenstader, Wilhelm, *Handel und Schifffahrt im Mittelmeer während des Mittelalters, in Scripta Mercaturae*, 1971/2, S. 54. なお, この世紀末の Venedig と Ravensburg や Konstanz との間の商取引については Mone の研究によって詳細に知ることができる。Mone, F. J., *Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert*, S. 24-29.
 37) Ammann, H., a.a.O., S. 262-264.
 38) Ammann, H., a.a.O., S. 266.

第4節 ボーデン湖周辺麻織業の輸出産業的性格

ボーデン湖周辺麻織業が, そこに散在する都市と周辺の農村との分業によって, 地域的産業としての性格を表面化させてくるのは, この地域に散在する比較的大規模な都市がそれぞれ行った都市法による, 麻織業ギルドの認可やその存在の記録などから, 一応, 13世紀中期から14世紀にかけてであったととらえることができる¹⁾。中小都市が発達してこれに加わるのはおそらくそれより半世紀は遅いと思われる。例えば, この地域では大規模都市に数えられるコンスタントツの麻織業がその都市法に登場するのは1255年であり, アウクスブルクでは1276年の都市簿によってそれが確認されている²⁾。ウルムの織布工ギルトは1292年にはじめてその存在が知られている一方, 小都市ビベラッハ (Biberach)

においては1344年になってからである³⁾。

こうした麻織業の存在、さらには織布工ギルトの存在がはじめて確かめられる13世紀の中頃は、上に見たように、ヨーロッパの各地の市場においてこの地域からかなりの麻布の輸出の事実がすでにみとめられている時代であった。すなわち12世紀のライン川流域での商取引の事実を除いて考えても、13世紀の前半期には、フランス・Provènsでの商取引、南フランス経由地中海地域への麻布販売の事実、さらに後半期には、シャンパーニュ大都市取引に支店設備を有した販売活動の事実、さらには、13世紀前半にみられた Brenner 峠経由での販売活動、そして1200年以後ほとんど継続して示されているジェノア (Genua) 経由の麻布販売の事実などがそれである。

こうしてみると、このボーデン湖周辺地域がいかにその地の利によって麻織業の原料となる亜麻 (Flacks) や大麻 (Hanf) などの麻栽培に適し、その歴史が古代以来の伝統によって育てられたとする条件の良さに支えられていたとはいえ、都市を中心としてその織物業が成立してくると同時に、あるいはほとんどそれ以前の状態の時にさえ、その輸出販売活動が異常ともいえる特別な活動をなしていたと考えることができるのである。それらの輸出活動が、ライン川下流地域の布生産先進地域からの布の再販売活動を通して拡大されたものか、あるいはイタリア地域との一般的な交易の結果麻織物輸出にまで拡大されたものかの問題については、尚一層の考察を必要とするものである。以下、次章から、これら中世南ドイツの麻織物経済圏の発展をささえた中小都市の商人・商事会社の輸出活動の足跡を通して、その次の時代に展開するドイツ初期資本主義への移行の過程をさぐっていきたいと思う。

注

- 1) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 289.
- 2) Ammann, H., a.a.O., S. 289. 及び川久保公夫論文「手工業者としてのドイツ麻織匠の歴史」、『大阪市大経済学年報』第11集, 143-144頁参照。
- 3) Ammann, H., a.a.O., S. 289. Ulm に Leinweberzunft (麻織匠ツunft) がみえるのはそれより半世紀おそい1346年であり、Konstanz では13世紀にこの産業の存在が認められているにもかかわらず、14世紀においてもなお Leinweberzunft の

存在は否定されている。Weber, Lotte, Die Anfänge des deutschen Leinengewebes, S. 202, なおこの点については、川久保公夫, 前掲論文「手工業者としてのドイツ麻織匠の歴史」に詳細に論証されている。

第2章 コンスタンツにおける麻織業の発展と 商人・商事会社及び輸出市場

第1節 はじめに

中世末期から近世初期にかけての、いわゆる「ドイツ初期資本主義」は、「フッガー家の時代 (Die Zeitalter der Fugger)」に代表される、鉱山業およびそれに強く結びついた金融業とを基礎とするものであった。ところでこの鉱山業・金融業の発展以前の南ドイツは、フッガー家の初代ハンス (Hans) が麻織匠であった事実にも示されているように、南ドイツ一帯、とりわけボーデン湖 (Bodensee) を中心とする周辺地域に広範囲に発達した麻織業 (Leinen, Leinwand) および麻・木綿交織業 (ファスティアン織・Barchent) を生産的基礎とする一大経済圏を確立していた。したがって、「フッガー時代」あるいは「初期資本主義」の鉱山・金融業の前史として、農村の副業的生産に多くを依存するこの麻織物を中心とする繊維業に課題の視点をおくことは多くの先学の研究を引くまでもなく、そのまま認められるものであると思う。

この中世南ドイツ麻織業を発展させた第一の都市は、とくにその初期においては、ボーデン湖畔都市コンスタンツ (Konstanz) であった。前章においてすでに概観したように、コンスタンツはライン川による交通とイタリアへのアルプス越の通商路とを足場に、周辺の農村麻織生産の中心地として、また麻布・麻糸を周辺のドイツ・スイス・オーストリアの山岳地域から集荷し、それらをヨーロッパ各地に販売する商業都市であった。12~13世紀にみられる、いわばこの経済圏の初期にあたる商業活動は、H. アマンに代表される諸研究によ

って明らかなように¹⁾、この地域周辺で自ら生産された麻織物の販売よりも、むしろ布の生産にかんしては先進地域であったフランダース・ブラバント地域産の毛織物の販売活動としての性格を多分にもつものであったが、その当時からこのコンスタンツがその商業上の中心地なのであった。そしてこのコンスタンツを初期の本拠地として、麻織物生産と輸出とを基盤にした「フッガー時代」前史の商業資本の蓄積がみられたのである。コンスタンツの商人リュートフリート・ムントプラート (Lutfried Muntprat) を頂点とする門閥貴族商人の輩出によってそれを見ることができるのである。

ところでこの「フッガー時代」前史の南ドイツ商業資本は、必ずしもフッガー資本に見られるような商品取引から貨幣取引・鉱山経営への転化を示すものではなかった。ボーデン湖周辺地域に位置する都市ラーフェンスブルク (Ravensburg) に本店をおいた、周知の「大ラーフェンスブルク商事会社 (Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」にみられるように、かたくなに実物商品取引に固執し、貨幣取引には一切介入しない経営方針を貫いた商業資本も存在したのである²⁾。

本章では、「フッガー時代」の前史を形成するこうした商業資本を、その代表的中心都市コンスタンツを本拠とするムントプラート家、イムホフ (Imhof) 家等の商人の活動に求め、そこから「フッガー時代」への系譜の最初のステップをまず探ろうとしたものである。当然のことながら、「フッガー時代」前史の商業資本は、多くの指摘にもあるように、上の「大ラーフェンスブルク商事会社」に求められなければならないであろう。その意味から言えば、このコンスタンツの研究はその研究課題に対する序説にとどまることをおことわりしておかなければならない。

注

- 1) 拙稿、「南ドイツの麻織業とヨーロッパ輸出市場—その初期の状態—」『桜美林エコノミックス』第6号年所収。31-52頁。
- 2) 大塚久雄著『株式会社発生史論』第2部、中央公論社、昭22年、34頁、及び『大塚久雄著作集』第1巻、岩波書店、1969年、242頁参照。Schulte, Aloys, *Geschichte*

der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart Berlin, 1923, 1. Bd., S. 131ff.

第2節 ムントプラート商事会社の発展と貿易活動

1 ムントプラート家の系譜と社会的地位

南ドイツ麻織業にかんする研究では第1人者の地位にある A. シュルテ (Schulte) によって作成されたムントプラート家の系図は図2-1の通りである¹⁾。以下、A. シュルテによる家系の説明と「ボーデン湖年代誌 (Bodensee Chronik)」史料の記述²⁾とに従って、ムントプラート家の発展を追っていきたい。

コンスタンツの巨商ムントプラート家の商人がはじめて史料に確認されるのは、1354年のハインリッヒである³⁾。この史料はハインリッヒの死亡にかんする記録であるが、そこに表示されている“als Kawerze”の解釈によって、上にあげた「ボーデン湖年代誌」の著者は、キリスト教界の利子禁止に関係ない立場で富を蓄積できたイタリア北部地方出身の商人であると推測している⁴⁾。ハインリッヒの商業活動としては、貨幣貸付と商品販売に従事したと言うことだけは明らかであるが、そのほかの点については残念ながら不明である。

このいわば第1世代であるハインリッヒの次の代、すなわち彼の3人の息子、ヨハネス、リュートフリート I、コンラートの代になって、ムントプラート家の商業活動とそれに伴う富の蓄積が一層すすみ、さらには社会的名声もこの代にうちたてられることになった。3人ともコンスタンツの市参事会 (Rat) のメンバーの地位を獲得し、(ヨハネスは1375年から1417年まで、リュートフリート I は1377年以來、おそらく1404年の死 (推測) まで、コンラートは1380年から1396年まで、ただし1389年まではツンフトの代表として。彼の死亡時期については1413年に活動の記録が認められているがそれ以後不明)、コンスタンツの門閥貴族商人としての地位を社会的に樹立している。長男のヨハネスは比較的若年からコンスタンツ市の商品取引所建設の責任者に市から任命されていた⁵⁾、1377年以後はリュートフリート I と共に兄弟で門閥商人グループの

代表として活躍、コンラートは最初のうちはツンフトのメンバーの代表として記録にみとめられているが⁶⁾、上に見るように1389年以後やはり門閥貴族商人の代表メンバーとなった。この3人の息子のほかにハインリッヒには娘アンナがいたが、彼女はアルプレヒト・ブラーラー (Albrecht Blarer) と結婚している。このブラーラー家も次の世代にはコンスタンツの司教 (Bischof) を生み出す家系であり⁷⁾、おそらくすでにこの世代でも門閥貴族に属する家系であったと思われる。したがって、ハインリッヒを継いだ第2世代において、ムントプラート家はコンスタンツの代表的門閥貴族商人の地位を築いていたと言えるであろう。この社会的名声を高めるのにおそらく必要であった商業活動においても、下に見るように、この3兄弟の代にヨーロッパ各地との取引を行なう大商人としての活動を開始したのであった。

第2世代にあたる3人の息子のうち、リュートフリート I は同名の息子リュートフリート II に経営を譲り渡した。この、したがって第3世代にあたるリュートフリート II (1447年没)こそが、当時比較されるものがないと言われたほどの巨額の富の蓄積をなし、南ドイツ・シュワーベンだけでなくドイツ全域を含んでも1・2の富裕商人と言われ、フッガー前史におけるフッガーの地位をしめた⁸⁾、ムントプラート商事会社を代表する大商人なのであった。

リュートフリート II は、先に見たようにコンスタンツの司教アルプレヒト・ブラーラーを従兄弟にもち、ローゼンベルク (Rosenberg) 家の娘ブリーダ (Brida) を妻にし、神聖ローマ帝国の国王ループレヒト (1400~1410在位) と親交をかさね、自らはおそくも1416年から47年までの30年以上にもわたってコンスタンツの市参事会のメンバーをつとめたという経歴をもっている。その間に、1418年には副市長、1443年に市長、1444年には市判事 (Vogt) になった。さらに、国王ジギスムント (Sigismund 1411~37在位) とも親交をもっていた⁹⁾。

リュートフリート II が生存中やその死後に課税された納税額およびその対象とされた財産の額によって、この大商人の活動の一端を知ることができる¹⁰⁾。後段に詳細に見るように、1418年にリュートフリート II が課税対象とされた財

産の額は（弟ハンスの分も含めて）不動産7,500 プフント・ヘラー（Pfund Heller）、動産3万7,500 プフント・ヘラーで、それはコンスタンツ納税者中第一位の地位を占めるものであった。この額は、1422年には（弟のハンスの分も含めて）不動産9,000 プフント・ヘラー、動産5万3,000 プフント・ヘラーに増額している。この4年間にとくに動産ののびが顕著であったと言える。この増額は第2位の高額支払い者との差を一層大きくしていることをも意味する。いづれにしても、リュートフリートⅡとハンスの兄弟がコンスタンツの最大の富の所有者であったことは間違いない。しかもこの傾向はリュートフリートⅡが死ぬまでほぼ続いたものと思われる。例えば、彼の死後相続された財産を見ると、合計7万1,400 プフント・ヘラーであったが、うち動産は6万1,740 プフント・ヘラーを占めていた¹¹⁾。

リュートフリートⅡの兄弟は、上に見たハンス(Hans)とルートヴィッヒ(Ludwig)であったが、なかでもハンスとリュートフリートⅡの2人が父リュートフリートⅠの商才を受け継いだと思われる。ハンスは1416年から1423年までコンスタンツの市参事会のメンバーの地位にあり（実際は1422年9月26日没）、コンスタンツに並ぶ商業都市ラーフェンスブルクの巨商フンビス家の娘アガテ(Agathe)を妻にした¹²⁾。ルートヴィッヒは1436年によりやく市参事会のメンバーになり、おそらくそれから間もなく死亡したと推測されている。したがって、リュートフリートⅡは、結局ほとんど1人でこのムントブラート商事会社の活動を維持拡大したのであったと見る事ができる¹³⁾。

リュートフリートⅡの時代には、彼の広範囲な商業活動と資本蓄積を背景としたコンスタンツの巨商として、上に見た国王との親交だけでなく政界との血縁を通しての関係をも深くしている。例えば、リュートフリートⅡの娘ウルズラ(Ursula)は、コンスタンツ出身のプライザッハ(Breisach)市民であるマックスクヴァート(Maxquard)と結婚している。彼は1429年から3代の国王(シギスムント・アルプレヒトⅡ世、フリードリッヒⅢ世)に仕えた人物であった¹⁴⁾。さらに、同名の息子リュートフリートⅢを直接マキシミリアンⅠ世に仕えさせている。一方もう一人の息子のカロルス(Carolus)にはムントブラ

ート商社会社での直接の活動に従事させていた¹⁵⁾。

こうした政界との結びつきを強めると同時に、ムントプラートは他の巨商たちとの姻戚関係も活発におしすすめた。すでに第2世代のリュートフリートⅠの時に見られたプラーラー家との姻戚関係による結びつきに加えて、第3世代のリュートフリートⅡおよびルートヴィヒⅠとローゼンベルク家、ハンスⅡおよび第4世代のハンスⅢとその妹アンナなど3人とフンピス家との関係、さらに第3世代にはフンピスと並ぶ巨商、モテリ (Mötteli) 家との結婚による姻戚関係の結びつきがルドルフⅠや妹のワルブルガとの間で成立している¹⁶⁾。このように、世代を重ねるごとに他の巨商との血縁による結束を促進させていったのである。

リュートフリートⅡは、見てきたように、後世に残した財産によって、シュワーベン地方だけでなく当時のドイツ全域でも1・2を争う大商人としての評価をうけているが¹⁷⁾、彼の財産形成の基盤となったと思われるムントプラート商社会社は、彼の死の直前の決断によって、この南ドイツ麻織業経済圏最大の商社会社となった、ラーフェンスブルクに本拠をおく「大ラーフェンスブルク商社会社」に合併される。

リュートフリートⅡのあとムントプラート家で活躍した商人は、リュートフリートⅡの息子の時代、すなわち第4世代にあたるルドルフⅠであった。すでに見たように彼はモテリ家のエリザベートを妻にして血縁関係を強め、1458年から1461年および1471年から1477年までの間コンスタンツの市参事会のメンバーとなった。また、彼は大ラーフェンスブルク商社会社の出資社員であると同時に商人としても活躍し、1453年以前にスペインのバルセロナ (Barcelona) に足跡を印している¹⁸⁾。彼の兄弟ではリュートフリートⅢが1473年に同じバルセロナでの活動が記録されているが、市参事会のメンバーにはなっていない。しかし同じ弟のウルリッヒ (Ulrich) Ⅰは1461年から1494年まで市参事会のメンバーであったし、しかもコンスタンツの納税帳簿によれば1477年から1481年にかけての財産の増加がみとめられているので¹⁹⁾、かなりの活動をなした人物であると推測できる。ただし、後段に見るように彼のこの財産の増加は、不動産

の増加に比して動産の減少を特徴としており、商業活動から土地領主への転身を推測させる意味をもっている。

リュートフリートⅡの弟のハンスⅡには2人の息子があったが注目される人物はおそらくコンラートⅡで、1436年より1469年まで市参事会のメンバーを勤め、財産に関しては、先のウルリッヒⅠよりも動産の面で多くを所有していた²⁰⁾。これはしかし、A. シュルテの推測のように弟のハンスⅣの財産が彼に相続されたためであったとすれば²¹⁾この期のムントプラートを代表する人物とは認めがたいところである。むしろ、コンラートⅡに財産を譲り渡したハンスⅣの方が活躍したと言える。彼は、1457年から1487年まで市参事会メンバーであり、1477年および1481年にはコンスタンツの最富裕市民（最高額納税者）になった。1477年の納税帳簿では、不動産1万2,690プフント・ヘラー、動産1万2,574プフント・ヘラー、1481年にはそれぞれ1万3,504、1万2,668プフント・ヘラーであった²²⁾。彼は1487年にミュンスターで没したため、その財産が上のコンラートⅡに相続されたものと思われる。したがって、第4世代では、ハンスⅡの息子のハンスⅣとリュートフリートⅡの息子のルドルフの2人が商業活動の中心的存在であったと推測される。

第4世代ではもう1人、第2世代のコンラートⅠの孫にあたるコンラートⅢが大ラーフェンスブルク商事会社に入って活躍した。彼はバルセロナなどに駐在し、また1455年より1478年まで市参事会メンバーでもあった。課税対象とされた財産も他の同族メンバーにけっして劣らず、1477年には不動産6,700プフント・ヘラー、動産9,600プフント・ヘラーが計上されている²³⁾。

第5世代では、ルドルフⅠの息子のガルス (Gallus) が1481年から1495年にかけて市参事会のメンバーの地位にあり、1484年には不動産1万10プフント・ヘラー、動産9,630プフント・ヘラーの財産を所有しているにもかかわらず²⁴⁾、1496年にはこのコンスタンツの町をはなれてラーフェンスブルクに移住してしまっている。一方、ガルスの従兄弟のルーラント (Ruland) は、1493年から1532年まで市参事会メンバーであり、1498年にはコンスタンツで第2位の高額納税者となり、ついで1514年には第1位高額納税者となってムントプラート家

の再盛を示している²⁵⁾。しかも、1529年まで彼は大ラーフェンスブルク商會社の出資商人として活躍しており²⁶⁾、彼の動産の申告は、1494年1万8,000 プフント・ヘラー、1520年2万5,050 プフント・ヘラーを示し²⁷⁾、ムントプラート家のいわば末期の最大の商人としての名声を得る地位にあったと思われる。

ルーラントの弟のジョス (Jos) も会社の出資商人として活躍し、年代は不詳であるが、不動産6,100 プフント・ヘラー、動産1万7,850 プフント・ヘラーの課税された財産を所有していた²⁸⁾。市參事會メンバーには1494年および1495年に加わっているが、1495年には、原因は不詳であるが、コンスタンツの市民権を放棄してしまっている²⁹⁾。彼らのほかには、ウルリッヒⅡも会社の出資社員として、フランクフルトの大市やバルセロナで活躍しているが、注目すべき財産上の記録は残されていない。

この第5世代では、リュートフリートⅡの娘ウルズラの孫にあたるヤコブ (Jakob) が活躍した。彼は1494年にはコンスタンツでの最富裕市民としての財産を所有し、1489年から1492年まで市參事會のメンバーとなり、市長、司法判事 (Reichs-Vogt) にも任命され、1497年には、大ラーフェンスブルク商會社の「取締役9人会」にも選出されている³⁰⁾。課税対象とされた財産は、1484年に不動産1万714 プフント・ヘラー、動産8,240 プフント・ヘラー、1490年に不動産1万9,400 プフント・ヘラー、動産1万7,471 プフント・ヘラーであった³¹⁾。この6年間に不動産、動産とも増額していることが彼の活動を裏付けている。

以上のように、リュートフリートⅡによってほぼ頂点に達したムントプラート家の商業的発展はその後数人の注目すべき商人を輩出し、さらに一時的な再盛の時を迎えながら、ムントプラート同族企業としては、15世紀後半以後だいに衰退していったのである。そしてその衰退の過程で見逃がすことのできない傾向は、後章に見るように、資本が土地所有に轉換したことであった。A. シュルテによって確かめられているムントプラート家のこれ以後の歴史は、他の多くのこの時代の門閥貴族商人と同じように商人から土地領主への転身後、1653年にその子孫の系譜を絶えることになるのである³²⁾。

注

- 1) A. シュルテによって提示されているムントプラートの家系図は1900年版の *Geschichte des mittelalterlichen Handels u. Verkehrs* にも示されているが、(S. 609) ここに提示したものは、扱われている期間も説明も一層補充されている。
- 2) 「Die Leinweberei und Barchentweberei in Konstanz und die Export-Gesellschaft der Muntprats」, in *Bodensee Chronik*, 17. Jg., H. 3, 1928, S. 11-12.
- 3) Schulte, A., a.a.O., S. 190, ders., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*, Leipzig Verlag von Duncker & Humblot, 1990, 1. Bd., S. 611.
- 4) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S.11. および『大塚久雄著作集』I, 240頁参照。
- 5) Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 611.
- 6) Schulte, A., a.a.O., S. 611.
- 7) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S.11. リュートフリート I も、このアンナの嫁ぎ先の Blarer 家と同姓の女性と結婚しているが、おそらく居住地を異にする同族家系であると思われる。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 190.
- 8) Schulte, A., Wer war um 1430 der reichste Bürger in Schwaben und in der Schweiz? in; *Deutsche Geschichtsblätter*, Gotha, I. Bd., 1900, S. 209.
- 9) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*. S. 190, *Bodensee Chronik* 17. Jg., S. 11., Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 611.
- 10) Schulte, A., a.a.O., S. 609-610.
- 11) Schulte, A., a.a.O. S. 612.
- 12) ここにおいて、ムントプラート家ともう1つの巨商フンピスとの血縁関係の結びつきが明らかに認められる。さらに、もう1つの巨商ラーフェンスブルクのモテリ(Mötteli) 家との関係は、リュートフリート II が1411年にモテリ家のルドルフの後見によって一時ラーフェンスブルクの市民権を獲得していることなどからもうかがえる。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 20 ff.
- 13) 1422年にハンスが没した後もその財産は分割相続されずにそのまま1433年までリュートフリート II の経営のもとで継承されていた。Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 611.
- 14) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 11.
- 15) *Bodensee Chronik*, a.a.O., S. 12.
- 16) Schulte, A., a.a.O., S. 20, および S. 190-191.

- 17) 彼はシュワーベン地方だけでなくスイスをも含めた地域での第1の富裕商人であり、フッガー前史のヤコブ・フッガーの地位にある商人であったが、厳密な検討からすれば、1人だけリュートフリートⅡよりも富裕な商人が見い出されている。スイスの都市ベルンの巨商で同じく商事会社を運営していたルートヴィッヒ・ディースヴァッハ (Ludwig Diesbach) がその人であった。リュートフリートⅡの財産7万1,400プフント・ヘラーに対してディースヴァッハのそれは1448年5万9,500プフント・ペニヒで後者の財産の方が高く評価されているのである。 *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 12.
- 18) Schulte, A., a.a.O., S. 190.
- 19) Schulte, A., a.a.O., S. 191.
- 20) ウルリッヒの動産が1481年8,400プフント・ヘラーに対して、コンラートⅡのそれは1477年1万4,616プフント・ヘラー、1490年1万1,000プフント・ヘラーであった。Schulte, A., a.a.O., S. 191.
- 21) ebenda.
- 22) ebenda.
- 23) ebenda.
- 24) Schulte, A., a.a.O., S. 911-912.
- 25) ebenda.
- 26) 彼が受けとっていた「大ラーフェンスブルク商事会社」での役員報酬は、1514年10fl. (フローリン)、1517年20fl. (フローリン) であった。Schulte, A., a.a.O., S. 192.
- 27) ebenda.
- 28) ebenda.
- 29) ebenda.
- 30) Schulte, A., a.a.O., S. 193.
- 31) Schulte, A., a.a.O., S. 192.
- 32) Schulte, A., *Wer war um 1430 der reichste Bürger in Schwaben und in der Schweiz?* in: *Deutsche Geschichtsblätter*, Gotha, 1. Bd., 1900, S. 210. ちなみに、他の巨商の子孫の系譜は、モテリ家は1573年、ラーフェンスブルクのアンケンロイテ家は1578年に絶えている。Schulte, A., a.a.O., S. 221. こうした一連の土地貴族への転身は、後章でみるようにスイスのベルンやザンクト・ガレンを中心に活動したディースヴァッハ・ワット商事会社にかんする研究 (Diesbach・Watt・Gesellschaft) においてもみとめられているところである。Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, St. Gallen, 1958, S. 38.

2 ムントプラート家の商人及び商事会社の発展と衰退

ムントプラート商事会社の商業活動がヨーロッパ各地を販売市場とするようになり、この期の南ドイツ麻織商業の代表的存在に成長するのは、おそらく初代ハインリッヒの子供の世代、つまりヨハネス、リュートフリート I、コンラートの時代であると言える。ハインリッヒの活動について指摘されているのは、すでに見たように彼が貨幣取引、商品取引に従事したと言うことだけで、その他のことはほとんど不明である一方、第2世代にあたるこの3兄弟の時代には、コンスタンツ (Konstanz) の大商人としてヨーロッパ各地との取引に従事するようになっているだけでなく、とくにヨハネスとリュートフリート I の2人が、共同して商業活動に従事し、上に見たように、1377年以後はコンスタンツ門閥貴族商人を代表する市参事会のメンバーの地位を確保していたことなどが明らかであるからである¹⁾。

しかしそのことは、ムントプラート商人の活動の初期の発展、あるいは商事会社設立などが全くこの第2世代にいたってはじめて展開されたことを意味するものではない。「ムントプラート商事会社」と言う名称こそ見い出せないが、スペインのカタロニア地方の中心都市バルセロナ (Barcelona) では、すでに14世紀の初頭に、後の時代に「大ラーフェンスブルク商事会社」を共同して設立するにいたる巨商フンビス家やモテリ家の商人とともに、このムントプラート家の商人およびその使用人が商業活動に従事していたと言う事実が明らかにされている²⁾。14世紀初頭は、ムントプラート家の家系の歴史からみれば、第1世代のハインリッヒの時代であったことはまず間違いないところなのである。

スペインとの取引は、南ドイツとスペインとのほぼ中間地点に存在したシャンパーニュ大市 (Champagne-Messen) での取引やジュネーヴ (Genf)、リヨン (Lyon) での大市取引の延長として発展したものであったが、南ドイツ商人のパロセロナでの活動は、14世紀を通して非常に活発であった。1360年代にも南ドイツ商人の足跡がみとめられ、1390年代にも同じ南ドイツのニュルンベルクの商人や職人の活動と滞在とが確かめられている³⁾。したがって、南ドイツ商人の一般的な活動の中で、これ以後15世紀を通して、上に見た3大門閥商人

の抬頭が顕著になるのである。バルセロナでのフンピス家とモテリ家の商人の1394年における商業取引やムントプラート家の商人による1400年における商業取引の事実が指摘されているが⁴⁾、それらは、南ドイツとスペインとの通商が一層この期に発展していることを示している。上に見たように、この14世紀後半は、第1世代のハイナリッヒの1354年の没後、父の業をついだ3人の兄弟、とくにヨハネスとリュートフリート I を中心にして経営された時代に入っており、つづいてこれ以後15世紀に入ると、ムントプラート商事会社の商業活動は次のような史実によって一層明らかになってくる。

まず、1404年にヨハネスがイタリア・ベニス (Venedig) で為替手形を換金している。この為替手形はヨハン・シュラッター (Johann Slatter) とヨハネス・ムントプラートの支配人であるリュートフリート・ベトミンガー (Lütfrid Bettminger) の2人がブリュージュ (Brügge) で受取ったものであった⁵⁾。このベトミンガーはまたベニスで別の為替手形を今度は受取って (購入して) おり、これらによっても、ブリュージュとベニスと言う当時の二大商業圏を結ぶ活動にムントプラート家商人が従事していたことが明らかなのである。

第2世代のヨハネス、リュートフリート I、コンラートの時代は、ほぼ15世紀の10年代をさかいにして第3世代に引継がれていったように思われる。1404年にリュートフリート I は死に、ヨハネスも1417年に、コンラートもおそらく10年代のうちに没したと予測されている⁶⁾。ただすでに15世紀初頭のこの時代までにムントプラート家商人を中心とするムントプラート商事会社はヨーロッパ各地にその活動を展開し、これ以後15世紀前半期のうちに、「ムントプラート家」の最盛期を形成するにいたっているのである。

1408年に生じた出来事は、上の活動の一端を物語るものと言えよう。すなわちこの年に、リュートフリート II の船がスペインのカタロニア地方に向かって地中海を航行中、コルシカ人によって拿捕され、リュートフリート II が拘束されてしまったことである。これは当時のジェノア (Genua) とバルセロナとの対立のなかで生じたものであったが、この時に没収された船荷が、2パレンの麻布 (Leinwand)、2パレンのバルヘント (Barchent 麻綿交織布) であったこと、

さらにこの事件に対してコンスタンツがリュートフリートⅡの積放と船と船荷の返却を要求し、実際にそれを実現した⁷⁾ことで、このことから、のちの大商人となったリュートフリートⅡの史料への登場と、海路ジェノアとバルセロナ間の通商路を利用した南ドイツ麻織物のスペイン市場での販売活動の事実、さらには、ムントプラートのコンスタンツにおける社会的地位の高さなどがあらためて確かめられるのである。

同様の例が1417年と1418年にかけても生じている。同じスペインへの旅上で、リュートフリートⅡとヨハネスとがフランクフルト（アム・マイン）のパウル・フェッツブライ（Paul Fetzbrei）とともにコルシカ人に拿捕された事件で、このときにも国王シグスマント（Sigismund）の助力によってこれらの商人の積放と船荷の返還とを実現したのであったが、船荷はやはり南ドイツ産の麻織物なのであった⁸⁾。

こうした史実からムントプラート商事会社の経営組織についてみると、おそらくとも1404年にはイタリアのベニスに支店（Faktor）が存在しており⁹⁾、また、ジェノアには1418年頃に代理店（Gelieger）を所有していたことが明らかである¹⁰⁾。さらに、ローヌ川沿通商路の重要地点となったアビニオン（Avignon）と北西ヨーロッパ市場の中心地ブリュージュにはそれぞれ代理商（Vertreter）と代理店とが任命・設置されていた¹¹⁾。ブリュージュには、代理店（Gelieger）のほかにも活動的な使用人（Diener）として、上のヨハン・シュラッター、リュートフリート・ベトミンガーなどが活動していたし¹²⁾、ベニスでもヴェアリン・エンスリンガー（Werlin Aenslinger）という商人が商業活動に従事していた¹³⁾。さらにムントプラート商事会社にはフィリップ・ラーターという名の社員の存在も知られてはいるが、活動した都市名は明らかにされていない¹⁴⁾。いずれにしてもこのベトミンガーとラーターはコンスタンツの門閥貴族商人のメンバーに属しており¹⁵⁾、したがってただの使用人としてではなく、会社の出資社員（Teilhaber）として活動に参加していたことは疑いないといえる¹⁶⁾。こうした各地の販売網を通してなされた取引の支払いは、当時の代表的市場であったフランクフルトの大市やノルトリンゲン（Nördlingen）の大市で決済さ

れていた。したがってムントプラート商事会社においても、1410年頃には、「大ラーフェンスブルク商事会社」にみられるヨーロッパ各地を結ぶ一大決済システムをすでに構築していたことがみとめられるのである¹⁷⁾。

以上のようにムントプラート家の商業活動のヨーロッパ各地への拡大は、残念ながらその一端を説明するにすぎないのであるが、しかし商業活動の結果なされた商業資本の蓄積とその趨勢は、当時のコンスタンツの納税帳簿から知ることができる。今、1418年のものと1422年のものを掲げばそれぞれ表 2-1、表 2-2の通りである。

この2つの表から明らかのように、リュートフリートⅡとハンス・ムントプラートの課税対象財産額は、1418年、1422年の両年とも、他の高額納税者より極端にぬきんでいるものであった（4万5,000プフント・ヘラーと6万2,000プフント・ヘラー）。リュートフリートⅡとハンスとの割合は明らかでないが、この課税対象財産額、第2位の者の2.5倍（1418年）、3倍（1422年）は、ムントプラート家がコンスタンツに不動の地位を確立するにふさわしい財産的基盤を形成していたことを示している。このほかにもムントプラート家同族商人としては、第4位のハインリッヒ・ムントプラート、第20位のルートヴィッヒ・ムートプラート（いずれも1418年）が表に示されている。これらすべての動産の合計は、5万4,500プフント・ヘラーにも達し、その額はこの表に示されている高額納税者上位26人の動産の総合計の4分の1を占めるまでになっているのである。

この2つの表からムントプラート家企業の商業発展の趨勢を見れば、リュートフリートⅡ、ハンスの兄弟の課税対象財産は動産、不動産を問わずこの両年の期間に増加しているが、とくに動産の増加率が著しいことがみとめられるであろう。それだけ商業活動の発展と拡大とを裏付けるものとしてうけとめられるものである。この2人に対して、ハインリッヒⅡ（ヨハネスの息子）については、動産の課税対象額が半分近くに減少している。不動産が不変であることから考えれば、土地領主への転身も考えることはできないであろう。さらに、「1429年以後コンスタンツの納税記録から彼の名前が消えている」¹⁸⁾というシュ

表 2-1 コンスタンツにおける納税表 (1418年)

1418	Alle über 6500 Pf. Besitz (6500 プフント・ヘラー以上の課税財産所有者のみ)				Steuer 課税額 Pf. § hl.		
	liegend 不動産 Pf. hl.	fahre- nd 動産 Pf. hl.	Zusa- mmen 合計 Pf. hl.				
* Lúfr. Muntprat u.s. Brud.	7 500	37 500	45 000	102	—	—	
† Hans v. Schwarzach.....	7 600	10 900	18 500	40	—	—	
† Cunrat v. Hoff.....	8 000	10 400	18 400	24	—	—	
* Heinrich Muntprat.....	4 000	12 000	16 000	38	10	—	
die v. Heudorf(Landadel).....	3 700	9 800	13 500	45	—	—	
* Cunrat Stickel.....	1 000	12 000	13 000	34	10	—	
Heinr. Ehinger, Ammann.	6 700	5 500	12 200	24	—	—	
Ulr`u` Heinr. Grünenberg.	6 000	4 500	10 500	20	10	—	
* Peter Sonnentag.....	5 200	5 050	10 250	21	—	—	
◦ Stoffel Zipp.....	1 600	8 400	10 000	25	—	—	
◦ Ulrich Schatz, Vogt.....	2 700	7 300	10 000	23	—	—	
							177 350
* Jacob Schwarz.....	4 000	5 600	9 600	21	—	—	
Hürufs.....	2 700	6 500	9 200	25	—	—	
* Kirchherren.....	4 000	5 160	91600	19	12	—	
Berth. Ehinger.....	1 200	7 780	8 980	23	—	—	
† Drei Stofacker u.i. Mutter..	2 900	6 000	8 900	20	10	—	
* Anna u. Hans Cunr. Egli....	4 000	4 800	8 800	18	10	—	
† Mangolt.....	4 400	4 300	8 700	18	—	—	
† Jakob v. Ulm.....	6 300	2 200	8 500	12	6	—	
* Ludwig Muntprat.....	3 200	5 000	8 200	18	—	—	
† Heinr. Schilter.....	2 360	5 060	7 420	19	8	—	
† Heinrich v. Ulm.....	1 360	5 740	7 100	34	—	—	
† Balth. Engelli.	1 700	5 300	7 000	16	16	—	
* Felixin.....	2 750	4 200	6 950	15	—	—	
Walherin u. ihre Tochter.....	1 300	5 500	6 800	17	—	—	
Schultheifs.....	2 100	4 600	6 700	15	—	—	
							112 410
							289 760
							26 Parteien

出典 : Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 609.

表 2-2 コンスタンツにおける納税表 (1422年)

1422	Alle über 6500 Pf Besitz (6500 プラント・ヘラー以上の課税財産所有者のみ)						
	liegend 不動産 Pf. hl.	fahre- nd 動産 Pf. hl.	Zusa- mmen 合計 Pf. hl.	Steuer 課税額 Pf. β hl.			
* Lütfrid u. Hans Muntprat..	9 000	53 000	62 000	131 — —			
† Jo. v. Schwarzach.....	8 000	10 700	18 700	40 10 —			
* Stickel.....	1 000	17 000	18 000	48 — —			
† H. v. Ulm.....	13 400	2 700	16 100	26 — —			
◦ Schatz [Cunrat].....	4 600	9 400	14 000	32 — —			
† Brun v. Tettikofen.....	7 600	5 750	13 350	26 — —			
Heinrich Ehinger, Ammann..	7 600	5 500	13 100	25 10 —			
† Pfefferhartin.....	13 000	—	13 000	19 — —			
† Hürufs.....	3 130	8 200	11 330	27 — —			
Grünenberg.....	2 690	8 400	11 090	26 10 —			
* H. Muntprat.....	4 000	7 000	11 000	24 10 —			
◦ Zipp.....	3 000	8 000	11 000	29 7 6			
* P. Sunnentag.....	6 300	4 500	10 800	19 10 —			
† die v. Hoff.....	6 050	4 300	10 350	20 — —			
Grünenbergin.....	1 300	7 800	9 100	23 — —	233 820		
◦ Hans C. Stoffacher.....	3 200	5 700	8 900	20 — —			
† C. Mangolt.....	4 400	4 300	8 700	18 — —			
Reinbolt Stark.....	700	7 300	8 000	21 — —			
* Hans Cunrat Egli.....	3 000	5 000	8 000	18 — —			
† H. Schiltar.....	2 400	5 200	7 600	16 10 —			
† Schultheifs.....	2 750	4 800	7 550	17 — —			
◦ Stockrùmel.....	2 000	5 500	7 500	17 16 —			
† Ulr. Schilter.....	3 200	4 000	7 200	15 10 —			
* Cunr. Egli.....	2 000	5 000	7 000	16 — —			
* Felix.....	2 750	4 200	6 950	14 — —			
					86 500		
					320 320	25 Parteien	

出典：Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*. S. 610.

ルテの指摘をここで考慮に入れれば、商業活動からの引退を示しているとも考えられる。また、1422年の表からはルートヴィッヒの名も消えている。これらはいずれもムントプラート家全体の停滞ないし衰退を示すものとも見ることも出来るが、しかし、ムントプラート家企業のコンスタンツにおける地位は決して後退しているとは云えないであろう。1422年においても、この表に登場している動産額総合計の4分の1強は相変わらずムントプラート家の商人に属しているからである。

15世紀前半期における南ドイツの大商人、リュートフリートⅡの活動は、上に見たようにそのごく一端を見るだけしかできないが、課税され、あるいは相続された財産額によってその企業活動の大きさを見ることはできる。1422年以後にみられる数字では、1433年のリュートフリートⅡの課税財産、9万5,000プフント・ヘラー（うち動産7万9,000プフント・ヘラー）であるが、この額はすでに1431年には到達していたものであった¹⁹⁾。しかもさらにこの額は1447年まで一層の上昇の趨勢を示し、結局、1447年のムントプラート企業の課税対象財産は、13万2,464プフント・ヘラーにまで達したのである²⁰⁾。うち、リュートフリートⅡの死後、遺産として相続された財産は7万1,400プフント・ヘラー（うち動産6万1,740プフント・ヘラー）であった²¹⁾。

シュルテによって説明されているところに従えば、ムントプラート企業経営の趨勢は、1418年以後1431年まで、および33年から35年までが急激な発展期であり、1436年にかなりの後退を示しているとされているが²²⁾、いずれにしても、1447年までの15世紀の前半期のムントプラート商事会社の発展は、このリュートフリートⅡの活動にほとんどそのすべてを負っていると言うことができると思う。

このリュートフリートⅡによる財産の蓄積を含めて、15世紀全般のムントプラート家に関連する課税対象財産の推移は表2-3のように示される。これによれば、ムントプラート家の動産はリュートフリートⅡの没後もなおひき続き増加し、1452年から1457年にかけての最盛を形成している。そしてその後15世紀末期にかけての長期的衰退もこの表によって明らかであろう。すでに上に触れ

表 2-3 ムントプラート家の課税対象財産の推移

課税対象人数	年代	不動産	動 産	合 計	
3	1418	14 700	+ 54 500	= 69 200	
2 (3)	1422	13 000	+ 60 000	= 73 000	登録されていない財産1つ有
2 (3)	1427	20 000	+ 62 800	= 82 800	登録されていない財産1つ有
3	1431	21 100	+ 85 400	= 106 500	
4	1435	28 400	+ 108 300	= 136 700	
4	1440	23 402	+ 105 907	= 129 309	
2 (3)	1444	20 860	+ 111 604	= 132 464	登録されていない財産1つ有
2	1448	20 300	+ 114 764	= 135 064	
3	1452	27 404	+ 129 827	= 157 231	
6	1457	41 395	+ 128 154	= 169 549	
6 (7)	1462	31 728	+ 69 283	= 101 011	登録されていない財産1つ有
5 (7)	1467	32 674	+ 51 992	= 84 666	登録されていない財産2つ有
6	1472	33 809	+ 58 736	= 92 545	
7	1477	37 496	+ 69 494	= 106 990	
7	1482	44 873	+ 73 922	= 118 795	
6	1487	35 454	+ 48 250	= 83 704	
7	1492	43 950	+ 63 652	= 107 602	
3 (5)	1499	1 800	+ 29 000	= 30 800	土地への固定税額

出典：Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 615.

たように、リュートフリートⅡの死の直前になされた決断にもとずいて、「ムントプラート商事会社」はそれ以後「大ラーフェンスブルク商事会社」のコンスタンツ支店として吸収され、新たに活動を開始するのである²³⁾。

1447年以後、1448年、1452年、1457年の課税対象財産の額は、ムントプラート企業がリュートフリートⅡの死後もなんらの後退を見せず、むしろ活動の増大を示していることを物語っている。しかし、1457年以後は、1470-1480年をはじめおよび90年代のはじめにかけて一時的な上昇がみられるとはいえ、長期的には衰退している。このことは明らかに、「大ラーフェンスブルク商事会社」への吸収合併後、ムントプラート企業の商業活動はしだいに縮小したことを示すものである。

注

- 1) この兄弟が共同して財産を相続し、共同して商業活動に従事しているのは、後の第3世代ハンスの遺言においても指摘されているのであるが、財産の相続は男子のみに行ない、それによって財産の分散をさけようとした意図によるものと思われる。この2人の兄弟の共同活動に対しては、コンラートが当時まだツンフトのメンバーの地位にあったことに関係があるように思われる。Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 611.
- 2) Kellenbenz, Hermann, Die fremden Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel vom 15. Jahrhundert bis zum Ende des 16. Jahrhunderts, in: *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, Böhlau Verlag Köln, 1970, S. 272.
- 3) Kellenbenz, H., a.a.O., S. 272.
- 4) Ammann, Hektor, Deutsch-Spanische Wirtschaftsbeziehungen bis zum Ende des 15. Jahrhunderts, in: *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, S. 138.
- 5) この事実はシュルトハイヌ書簡集 (Schultheissisches Formelbuch) で確認されている。Schulte, A., a.a.O., S. 611.
- 6) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 190.
- 7) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 12 および, Schulte, A., a.a.O., S. 26, ders., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 543, および Mone, Franz Joseph, Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert, in: *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, II. Bd., 1853, S. 42.
- 8) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 23; ders., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 544.
- 9) しかもこのベニスとの取引は規則的におこなわれていた。*Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 12.
- 10) ebenda.
- 11) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 26, および *Bodensee Chronik* 17. Jg., S. 12.
- 12) ebenda.
- 13) ebenda.
- 14) ebenda.
- 15) ebenda.

- 16) ebenda.
- 17) Schulte, A., a.a.O., S. 26.
- 18) Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, S. 615.
- 19) Schulte, A., a.a.O., S. 612.
- 20) ebenda.
- 21) ebenda.
- 22) 1436年のムントプラート商事会社の不振はコンスタンツの巨商、ウルリッヒ・イムホルツ (Ulrich Imholz) の破産と結びついていた。Schulte, A., a.a.O., S. 612 および ders, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 38.
- 23) したがって「大ラーフェンスブルク商事会社」はこの1447年の時にはじめて3大 門閥商人、すなわちモテリ、フンピス、ムントプラートの合併による企業として成立するわけで、1380年の成立とは前2者だけによるものであったことを意味する。*Bodensee Chronik* 17. Jg., S. 12. および Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 39. したがって、「大ラーフェンスブルク商事会社」に合併する以前のムントプラート商事会社の形態は、ムントプラート家を中心とする同族会社であったものが、合併後は一層多くの出資社員をかかえる株式会社の「先駆会社形態」に組込まれることになったのである。大塚久雄著『株式会社発生史論』中央公論社、第2部、27頁及び『大塚久雄著作集』第1巻、1969年、241頁以下参照。

3 ムントプラート家の商人及び商事会社の活動内容

ムントプラート商事会社の活動の第一は、この地域のほとんどすべての商人と同じく、麻布 (Leinwand) と木綿・麻交織布 (Barchent・ファステアン織布) の販売であった。この販売活動はしかし、ボーデン湖畔および周辺農村地域からの仕上り布の集荷と、コンスタンツ (Konstanz) からヨーロッパ各地への販売だけを意味するものではなかった。このいわば地元の商業都市コンスタンツの市場での他の商人や一部の職人への布の販売もかなりの比重を占めていた¹⁾。したがってコンスタンツ周辺の農村で仕入れた麻布のコンスタンツでの販売や、そのヨーロッパ各地での販売の見返りに輸入される諸商品、例えば、サフラン (Safran)、あい (Indigo)、胡椒 (Pfeffer)、高級上質布 (Gewand) などの再販売も重要な営業項目であった²⁾。

これらの活動はそのまま「大ラーフェンスブルク商事会社」の活動に見ることができるとはならずであり、また、ヨーロッパ各地との商品売買活動の詳細については後章のイムホルツ (Imholz) 家の商人の活動の記録などからもみることができるとは、とくにもう一つ、ムントプラート企業の活動として注目されるものに、コンスタンツでの粗布の漂白 (bleichen) の営業がある³⁾。粗布のままの輸出が多い一方で、布の仕上げに関して、商業資本とツunftとの結びつきを示すものとして注目されるものである。

貨幣取引に対しては、後の「大ラーフェンスブルク商事会社」と同じく、ムントプラートは下にみる貸付をのぞいてはほとんど介入していないように思われる。ただ為替手形の換金などに関して、イムホルツから受けとった為替手形 4,692 (fl.) フローリンと 5,250 ドッカーテン (Dukaten) とを 1425 年から 26 年にかけてベニスで支払いをうける、というような事実がみられるだけで、これはすでに上にもみた受取り上の記録であって、商品販売と関係ない為替手形を購入し売却するといった専門的金融取引活動ではなかった⁴⁾。

商事会社としては麻布やファステアン布の商品売買活動をその中心としたものであったが、ムントプラート家の商人は、このほかに、多くの不動産の買入れや地代権買入れ (Rentenkäufen)、さらには貨幣貸付にも資本を投下するようになっている。例えば、地代請負については、15 世紀の前半期のものと思われるが、ブルカード・フォン・エラーバハス (Burkard von Ellerbachs) の地代、2,200 フローリンの領地財産 (Hauptgut) に対する 100 フローリンの地代権の買入れを行なっている⁵⁾。このほか土地財産に対する投資の増加は、前表 2-3 みるように、ムントプラート家全体として、不動産の長期的な上昇を裏づけるものであるといえる。とくに商業活動の最盛期を形成したリュートフリート II のあと、動産はほぼ半分に減少している一方で、不動産がほぼ 2 倍に上昇 (1492 年まで) している。このことは、動産の全財産中に占める割合の大きさがしだいに不動産に近づいていることを示しており、したがって商業活動から封建的土地領主への転身を物語っているものであるといえる。それを具体的に示す例としては、リュートフリート II の息子のハインリッヒ III がコンスタ

ンツの市民権を放棄して、ロミス (Lommis) なる土地の領主となり、ルートヴィッヒとともにシピーゲルベルク (Spiegelberg) と云う土地を所有したことなどがあげられるであろう⁶⁾。

注

- 1) 例えばコンスタンツでの一般商人への麻布の売却の例として、コンスタンツ商人イムホルツ (Imholz) への売却がみとめられる。1425-1427年にかけて、掛で1万5,036ライン・フローリン (rhein, fl.)、さらには同じく麻布を漂白匠に17プフント分を売却している。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft* 1380~1530, S. 26.
- 2) Schulte, A., a.a.O., S. 27.
- 3) ebenda.
- 4) ebenda. シュルテによってもムントプラート家の商人の貨幣取引への介入は否定的にみられているが、当時の商業資本の性質からいっても全面的に否定されているわけではない。Schulte, A., *Wer war um 1430 der reichste Bürger in Schwaben und in der schweiz?* in: *Deutsche Geschichtsblätter*, S. 210.
- 5) ebenda. この土地あるいは領主権への投資はリュートフリートⅡにおいても明らかである。例えば彼の動産の一部は司教や (1428年2,508ライン・フローリン貸付, 4.5%の利子受取り), 1445年のザンクト・ガレンの修道院などにも貸付けられていた事実がある。Schulte, A. a.a.O., S. 25.
- 6) Schulte, A., a.a.O., S. 191.

4 ムントプラート商事会社とツンフト闘争

ムントプラート商事会社については、のちにこれらの商事会社を合併して発展した「大ラーフェンスブルク商事会社」について知られているほどには会社形態、経営形態などについての史料は存在しない。会社形態として法人格を認められ、会社として成立した年代すら、残念ながらいまだ明らかにはされていない。おそらく初代のハインリッヒかその息子の第2世代であったと思われるが、このムントプラート家の商人にワッペン・紋章が与えられたのが14世紀末であったと推測されていることから考えれば¹⁾、おそらくその時までには個人商人としての活動から法人企業としての形態に発展し、その体裁をととのえていたものと思われる。

このムントプラート商事会社の発展は、上に見たようにリュートフリートⅡによって15世紀前半に最盛期をむかえたが、この15世紀前半は、ドイツ経済史において注目される「ツunft闘争」の時代にあっている。そして、このツunft闘争にみられる、手工業者と門閥商人との対立の中でも、リュートフリートⅡは自己の経済的地位と社会的地位とを基盤にして、この時代の指導的役割を果たしていたのである。

コンスタンツにおいても、麻織匠と麻織物商人との関係は、14世紀にはまだ圧倒的に門閥商人 (Geschlechter) による支配、利益が先行していた。例えば、麻織物市場においては原則的に商人だけが購買者として認められていたのであった³⁾、麻織匠の生産も限定されていた。コンスタンツに織匠ツunftが認可されたのは1343年であったが³⁾、しかしこの後もツunftの地位は門閥商人市政によって抑圧されていた。このことは、他の手工業ツunftの市参事会への代表者が4名であったのに対して麻織匠ツunftがその半数の2名であったことなどからも指摘されているが⁴⁾、商人ギルドがそのまま従来からの優位を保っていたのである。最も激しいとされている1429年に生じた闘争は、こうした門閥商人支配に対する製造手工業者からの反抗であった。以下「ボーデン湖年代誌 (Bodensee Chronik)」の記述に従えば次のようであった。

当初、この1429年の対立では、ツunft側に勝利がもたらされた。これによってコンスタンツの11人の門閥商人が1年半の間コンスタンツ市を追放されることとなった。リュートフリートⅡもすでに1427年にコンスタンツの市民権を放棄していたが、しかしコンスタンツ市参事会の門閥商人側に有利な処置によってそのまま市民としてコンスタンツに滞在していた。しかし、市参事会が麻織匠を保護し、門閥商人側に厳しい犠牲を強いる決定を行なったため、結局47名にのほろ大商人がコンスタンツの市民権を放棄して、受け入れてくれる近隣の都市に移住した。例えば1年間の市民権を彼らに与えたシャッフハウゼン (Schaffhausen) 市などへである。この時にはコンスタンツの司教 (Bischof) すらも移住した。リュートフリートⅡはしたがって、1429年にシャッフハウゼンの市民として移住し1432年からやはり近くの都市ユーバーリンゲン (Überlingen)

に5年間の市民権を得て移住した。こうしたツンフト側の勝利と門閥商人のコンスタンツからの追放は、国王シギスムント (Sigismund) の仲裁によって解決される。すなわち国王シギスムントがツンフトと門閥商人との双方からの要求を認め、両者にそれぞれ同じ権限を与えたからであった⁵⁾。

この説明から見れば結局、門閥商人の市政からの後退とツンフト側の利益の拡大は明白である。しかしながら、リュートフリートⅡは、5年にわたるユーパーリンゲンの滞在期間の途中から、すなわち1434年には再びコンスタンツの市参事会のメンバーにむかえられている⁶⁾。そしてしかも1447年の死までその地位に留まっているのである。したがって、ムントプラート商事会社の盛衰とツンフト闘争との関係を見るとき、少なくともこの闘争がムントプラート企業に直接的な影響を与えるものではなかったと言えるであろう。

「大ラーフェンスブルク商事会社」への合併後のムントプラート商人の活動は、今迄みてきた A. シュルテによる研究によってみれば、時折その消息をうかがうことができるが、ムントプラート商人としてその活動を再び誇れるときはなかったように思われる。上にみた納税表においても、15世紀末期からの財産形成にその再盛を予測することができるが、商業活動としてリュートフリートⅡに追随するものではけっしてなかったといえるのである。

注

- 1) Schulte A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 190.
- 2) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 12.
- 3) *ebenda*.
- 4) 北村次一「西南ドイツ都市の手工業規制」、『社会経済史大系』Ⅲ, 弘文堂, 所収, 226頁参照。
- 5) *Bodensee Chronik*, 17. Jg., S. 12.
- 6) Schulte, A., a.a.O., S. 190.

第3節 イムホルツ家商人の抬頭と貿易活動

1 イムホルツ家の系譜と社会的地位

先に見たムントプラート (Muntprat) 商事会社に比較して、イムホルツ (Imholz) 家商人の活動ははるかに少ししか知られていないようにおもわれる。しかしながら、ムントプラート家の商人がヨーロッパ各地との取引を拡大しているその中で、一層短い期間とはいえこの麻織物経済圏を舞台として活動し、やがてその商業活動の破綻から突然に没落していくという歴史は、ムントプラートとの対比の中でそれとは違った一定の価値づけが与えられるものと思う。

イムホルツ家の代表的商人として知られているのは、ウルリッヒ・イムホルツ (Ulrich Imholz) である。彼は、1418年以後1434年までコンスタンツの納税帳簿に記録されるほどの活動を示した商人であったが、出生その他についてはほとんど知られていない¹⁾。彼の弟のハンス・イムホルツ (Hans Imholz) についても、ウルリッヒと同じくコンスタンツの納税帳簿で確認されているが、ウルリッヒの活動に従事していたなど以上には知られていない²⁾。

そのほかには、ウルリッヒの義兄であるウルリッヒ・シュタインシュトラス (Ulrich Steinstraß) —彼は1424年から1439年の死まで市参事会のメンバーとその従兄弟のコンラート・ヴィンターベルク (Konrad Winterberg) とウルリッヒの3人で共同して一つの商事会社を経営していたことが知られているなどである³⁾。

ウルリッヒ自身は、コンスタンツの市参事会メンバーとしては1428年から1430年までその地位にあり、1428年にはまた別の重要な委員会のメンバーでもあった⁴⁾。そして1435年に倒産して彼はコンスタンツを一時逃亡するが、のち再び市民として同市にもどって居住し、結局1446年にコンスタンツの市民権を放棄したのち、いずれかに立ち去って消息を絶つのである⁵⁾。

こうしたウルリッヒの家系について不明の点が多いことは、そのままウルリッヒの商業活動、財産、社会的地位などについて先のムントプラート家の商人

にははるかに及ばなかったというだけでなく、活動もほとんどウルリッヒ (Ulrich) 一人一代に限定されたものであったことを意味している。この意味から言えば、イムホルツの研究は、その商業活動の内容に視点がおかれるべきで、商業資本の長期的趨勢といった視点からの問いかけに対しては十分な解答が与えられるものではほとんどないと言わなければならない。

注

- 1) F. Wielandt の研究によれば、ウルリッヒ・イムホルツはザンクト・ガレン (Sant Gallen) からコンスタンツに1415-18年の間に移住した。彼はザンクト・ガレンでは染色匠 (Färber) であり、コンスタンツでも最初は染色業を営み、のち前貸問屋業、商品取引に従事した。Wielandt, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, 1950, Verlag der Verlagsanstalt Merk & Co. Kom, -Ges, Konstanz, S. 30.
- 2) Maurer, A., Ulrich Imholz, Ein Beitrag zur Wirtschaftsgeschichte der Stadt Konstanz aus der Zeit nach dem Konzil, in: *Schriften des Vereins für Geschichte des Bodensees und seiner Umgebung*, Lindau, 44. Heft, 1915, S. 94.
- 3) ebenda.
- 4) ebenda.
- 5) ebenda.

2 イムホルツ家商人の商業活動と営業内容

ウルリッヒ・イムホルツの商業活動は、麻織業経済圏を形成したボーデン湖周辺都市、ラーフェンスブルク (Ravensburg), ビベラッハ (Biberach), メミンゲン (Memmingen), ウルム (Ulm), ノルトリンゲン (Nördlingen), リンダウ (Lindau), バーゼル (Basel), シャフハウゼン (Schaffhausen), ザンクト・ガレン (St. Gallen), などから、チューリッヒ (Zürich), フランクフルト (Frankfurt am Main) などにもまでおよび、さらにはウイーン (Wien) やベニス (Venedig) などとも取引を行っていた¹⁾。なかでも、A. マウラー (Maurer) の論文の巻末に示されている、彼の商取引に関する「アマン史料」(Ammann-Gerichtsbuche) からの研究によって、1423年から1433年頃までの商品購入、販売、さらには負債の状態などが明らかに示されているが、上に見たリュートフリート II・ムントプラートなどとの取引も明らかにされており²⁾,

しかもその割合が他の外国との取引に比べてはるかに大きいことから、海外商人としてよりもフランクフルトの大市やノルトリンゲンの大市を活動の場とする国内商人としての性格を強くしていたといえる⁴⁹。

ウルリッヒ・イムホルツが取扱った商品は、ムントプラート家商人とほとんど同じように、麻布 (Leinwand)、バルヘント (Barchent・ファステアン織布) のほかに布一般、さらには綿花、染料のあい、ワックス、ワイン、香料などであり、また銀も扱われていた⁴⁹。これらの諸商品のうちで最も重要な商品は、当然のことながら麻布 (Leinwand) で、その生産地としてはほとんどコンスタンツ産かあるいはその周辺のものだけが扱われていた。例えば、記録の中で、ウイリッヒが扱った麻布でコンスタンツ産以外のものは2点、すなわちやはりこの周辺都市の1つであるイスヌー (Isny) 産のものともう1つは同じくビベラッハ (Biberach) 産のものであった⁵⁰。

ウルリッヒの販売した布のおそらく大部分を占めたコンスタンツ産麻布の直接の供給者は、上に見たムントプラート商事会社が最大のものであった。つまり前節のムントプラート家商人及び商事会社の活動の状態をここからも知ることができるのであるが、そのムントプラート商事会社以外でもウルリッヒに麻布を供給した商人はいずれもほとんどこのコンスタンツの商人であった⁵⁰。

ウルリッヒ・イムホルツの商業活動の結果は、コンスタンツの納税帳簿によって次のように示されている (表2-4参照)。これによれば、動産額は1418年より1429～30年頃までは一定の水準を示して、営業の発展を物語っているが、それ以後急激な減少と停滞をむかえている。不動産額の動向は、動産とは対照的に1420年代後半にかなりの増加とその水準の維持を示しているが、1429～30年に動産と同じく急激な減少と停滞とを示している。動産と不動産との関係は、1420年代前半に動産の額が倍以上も多いが、後半に入ると、すなわち1426年には不動産が倍増し、逆に動産がかなりの減少を示している結果、不動産の地位がはるかに高くなっている。

1427年に示されている彼の財産の合計、1万2,250 プフント・ヘラーは、当時のコンスタンツでは上昇の早さから言ってリュートフリートⅡ・ムントプラ

表 2-4 ウルリッヒ・イムホルツの課税対象財産の推移

	ligendes Gut (不動産額)	Fahrhabe(動産額)	
1418年	2400	3000	5400 プフント・ヘラー
1420年	3100	6300	9400 プフント・ヘラー
1422年	3300	記入ナシ	
1425年	3100	6300	9400 プフント・ヘラー
1426年	6690	4400	11090 プフント・ヘラー
1427年	7850	4400	12250 プフント・ヘラー
1428年	5800	3600	9400 プフント・ヘラー
1429又は1430年	6690	3000	9990 プフント・ヘラー
1431年	500	800	1300 プフント・ヘラー
1432年	600	800	1400 プフント・ヘラー
1433年	600	800	1400 プフント・ヘラー
1434年	600	1000	1600 プフント・ヘラー

出典：Maurer, A., Ulrich Imholz, in: *Schriften des Vereins für Geschichte des Bodensees und seiner Umgebung*, 44. Heft, 1915, S. 100-101 より作成。

ートに次ぐものであった⁷⁾。しかし絶対額の比較からすれば、コンスタンツのこの年の高額納税者の第9位を占めているにすぎない⁸⁾。

ウルリッヒの商業活動の衰退は、1428年に生じた2,850 プフント・ヘラーにのぼる損失をきっかけに開始された⁹⁾。さらに1431年にも決定的な損失を被り、前表2-4に示されるように動産額は800 プフント・ヘラーに減少している。この1431年に彼はほぼ全財産にあたる8,390 プフント・ヘラーを失なったのであった¹⁰⁾。

ウルリッヒのこのような急激な商業活動の衰退の原因について、A. マウラーは次のような要因をあげている¹¹⁾。1つには当時の政治的混乱、すなわちツェンフト闘争による影響である。すでに上に見たように1429年にはコンスタンツから門閥商人の大部分が市民権を放棄して他の都市に移住しなければならなかった。加えて、1430年から31年にかけてのユダヤ人の追放、市民と市官吏との対立、市長解任、市条例の変更など、さらには国王シギスムントによる干渉などもウルリッヒの商業活動に否定的な影響を与えたものととらえられている。

このA. マウラーの分析による商業活動をめぐる社会的要因に加えて、ウル

リッヒの商業活動が多分に投機的であったことも見逃せない事実であろう¹²⁾。ムントプラート家商人による数代にわたる商業活動の拡大と比較して、ウルリッヒはほんの数年間の活動によってその財産を急激に増加させていたのであった。彼の急激な没落が彼の営業上の投機的性格と結びついていたことは A. シュルテの指摘によってもほとんど間違いないところなのである。

ウルリッヒは1435年に再び莫大な負債をかかえて、倒産する¹³⁾。この時の債権者のうちでも最大の被害をうけたものがムントプラート家のコンラートⅡとリュートフリートⅡであった。この2人の損失額は2万4,590 プフント・ヘラーにのぼっている¹⁴⁾。

この倒産後も、ウルリッヒは再びコンスタンツに居住し、小規模な商業取引に従事している。1436年の課税財産は344 プフント・ヘラー、1438年には不動産70、動産310 プフント・ヘラー、1442年にはそれぞれ450、575 プフント・ヘラー、1443年には同じく490、310 プフント・ヘラーが記録されている¹⁵⁾。

ウルリッヒ・イムホルツが、法人格を有した「商事会社」を設立してそれを通して商業活動を営んでいたものであったか否かは、残念ながら明らかでない。ムントプラートの場合もそうであったように、個人活動と会社設立が実質的にはほとんど変わらない当時においては、会社を設立していたとしても、当時一般的であった同族企業・家族経営以上に発展していたことは考えられないものである。A. マウラー、F. ヴィーラントの両著作、さらに A. シュルテの研究においても、「イムホルツ商事会社 (Imholzhandelsgesellschaft)」の表現をさがすことはできない。ただ、ヴィーラントの研究において、ムントプラート (Muntprat)、ヴィンターベルク (Winterberg)、ガイスペルク (Gaisberg) などと同列にこのイムホルツが“Handelsgesellschaft”の所有者として表示されているところがあることから¹⁶⁾、何らかの形で商事会社の経営に参加していたことだけは確かである。

注

- 1) 例えば、ウルリッヒはムントプラート商事会社から購入した麻布をベニスで販売している。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft*

- 1380~1530, S. 237 および Maurer, A., Ulrich Imholz, S. 98.
- 2) Maurer, A., a.a.O., S. 104ff.
 - 3) Wielandt, F., a.a.O., S. 31.
 - 4) Maurer, A., a.a.O., S. 97. および Wielandt, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, Verlag der Verlagsanstalt, Konstanz, 1950, S. 32. および, Maurer, A., a.a.O., S. 97.
 - 5) Maurer, A., a.a.O., S. 96-97.
 - 6) これらのコンスタンツ商人の名をあげれば, イタール・ウィンターベルクス・エアベン, パルトイーザー・エンゲリン, ウェルナー・エーインガー, コグラード・プルスター, ストッフエル・ツィップ, など, ほかに少量の商品を供給しているものとして, リンダウからの商人の名があげられている。Maurer, A., a.a.O., S. 96-97.
 - 7) Maurer, A., a.a.O., S. 101.
 - 8) Wielandt, F., a.a.O., S. 31.
 - 9) ebenda.
 - 10) ebenda.
 - 11) Maurer, A., a.a.O., S. 101-102.
 - 12) シュルテによって示されている, ムントプラートからウルリッヒ・イムホルツへの麻布販売にさいして, 「投機家」イムホルツへの売却として記入されていることは彼の営業上の投機者の性格を示すものであるといえる。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 26 および S. 38.
 - 13) Maurer, A., a.a.O., 103.
 - 14) Wielandt, F., a.a.O., S. 32.
 - 15) Maurer, A., a.a.O., S. 104.
 - 16) Wielandt, F., a.a.O., S. 29.

第4節 エーインガー家商人の抬頭と貿易活動

1 エーインガー家商人に関する研究史

「フッガー家の時代」以前のコンスタンツ (Konstanz) は, 中世中期以後, 南ドイツとくにボーデン湖畔周辺地域に発展した麻織業の中心都市として, 後にスイスのザンクト・ガレン (Sankt Gallen) にその地位を譲るまで麻織生産, 貿易の中枢であった。この麻織物経済圏に散在していた数多くの中小都市は, それぞれ独自の商人, 商事会社を擁して販売活動に従事していた。コンスタン

ツでもその例は多く見られた。前節でみた¹⁾、かの「大ラーフェンスブルク商事会社」の支柱となったムントプラート (Muntprat) 家をはじめイムホルツ (Imholz) 家の商人などの巨商が、この麻織物販売に従事し、巨富を蓄積していたことなどをその典型とすることができるであろう。

この節で取り上げたエーインガー (Ehinger) 家の商人もそうした貿易商人の群像のうちの1つでしかありえない。しかし、そこにみる貿易活動は、ヨーロッパ内部だけにとどまらずに、遠くスペインが支配した新大陸アメリカでの植民活動にもその足跡をあとづけることができる。南ドイツ経済圏が衰退にむかう転換の要因となった新大陸市場において、この後の時代の「フッガー家の時代 (Der Zeitalter der Fugger)」にその一翼をになった巨商ウェルザー (Welser) とエーインガーとの共同貿易活動の促進は、当時の南ドイツ商人が、この転換する歴史の表面からはるかに遠くにおかれていたわけではなかったことを証明するに充分であろう。しかしそれにもかかわらず、終局的に、この新大陸開拓の途上での挫折は、やはり、南ドイツ経済圏の営業活動に典型的に見られる企業活動上の特性とどうしても結びついてはなれないことをも示していると思われる。

すでに前章でみた中世南ドイツ麻織業経済圏とそれにともなう貿易発展の研究に関しての第1人者であると思われる A. シュルテ (Schulte) の初期の著作が世に出たのは、「フッガー家の時代 (Der Zeitalter der Fugger)」の著者、R. エーレンベルク (Ehrenberg) の初版の数年後の1900年であったが、それ以後、数多くの研究者によって、この経済圏を対象とした研究が試みられてきている。

コンスタンツのエーインガー商業資本についても、やはり、20世紀初頭から諸著作が世にでていいる。それらの中でもやはり総括的にエーインガーを扱ったものが、J. ミュラー (Müller) による1905年の *Die Ehinger von Konstanz* (in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, N.F., XX. Bd., Heidelberg, S. 19ff.) であろう。その2年前の1903年にはウェルザー企業研究の立場からみたエーインガー商業活動の研究が世に出されている。K. ヘブラー (Häbler)

による *Die überseeischen Unternehmungen der Welser und ihrer Gesellschafter*, Leipzig, Verlag von C.L. Hirschfeld. 1903 である。次には1910年にドイツ商人のアメリカ大陸進出を概説的にとりあげている E. ダエネル (Daenell) の *Zu den deutschen Handelsunternehmungen in Amerika im 16. Jahrhundert*, (in *Historische Vierteljahrschrift* XIII. Jg., Leipzig, 1910, S. 183ff.) が、エーインガーの活動にふれている。

次には、先に何回にもわたって取りあげた A. シュルテの初期の論文が集大成された大著、*Geschichte der Großen Revensburger Handelsgesellschaft 1380 ~1530*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1923, Bd. I によってエーインガーの活躍がまとめられている。この研究の中で、コンスタンツのエーインガー家出身のウルリッヒの活動の記録の中に同一人物の活動としては理解しがたい疑問点が明らかにされ、それが後の J. ミュラーの著作によるもう1人のウルリッヒの存在という解明を導き出すきっかけにもなっている。

A. シュルテによるこの大著のあと、1928年には、K.H. パンホースト (Panhorst) による2つの著作、*Das Verhältnis der Ehinger zu den Welsern in den ersten deutschen Unternehmungen in Amerika* (in *Vierteljahrschrift für Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, XX. Bd. 1928, S. 174ff.) と *Der erste deutsche Kolonisator in Amerika* (in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* XX. Bd., S. 408ff.) によって、先の J. Müller の著作に批判が加えられ、これが結局、ウルリッヒに関して、同性同名のもう1人のウルリッヒの存在を予想させるものとなったのである。そして、これらの批判に答えたのが、1929年に発表された J. ミュラーによる、*Der Anteil der Familien Ehinger-Güttingen von Kontanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welser* (in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 22. Bd., 1929, S. 373ff.) である。これによってミュラー (Müller) は、ウルムにおけるエーインガー家出身のウルリッヒなる人物の存在を新しく確かめたのであった。

その後は、このエーインガー家の商人の活動については、これらのテーマに

関する代表的研究者である E. シューファー (Ernst Schäfer) の著作にも取扱われていないように思われる。ようやく、1959年になって、中世都市史の研究の分野からコンスタンツのこの期のエーインガーなどの商業資本に触れた E. マッシュケ (Erich Maschke) による, *Verfassung und soziale Kräfte in der deutschen Stadt des späteren Mittelalters, vornehmlich in Oberdeutschland*, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* Bd. 46, 1959, S. 288ff. が出されている。そして1962年に, E. オッテ (Enrique Otte) による, *Die Welser in Santo Domingo (in Homenaje A. Johannes Vincke, vol. II, 1962, S. 476ff)* によって, エーインガー家のハインリッヒ, ゲオルク兄弟の活動が一層詳細に触れられるにいたっているのである。

2 エーインガー家商人の系譜と社会的地位

コンスタンツの巨商エーインガー家の初代もほかの名だたる南ドイツの大商人とほとんど同じく, コンスタンツ以外の地域から移住してきた人物であった。J. ミュラー (Johannes Müller) の説明によれば, コンラート・エーインガー・フォン・グュッテナン (Konrad Ehinger von Güttenan)²⁾ がその初代の人物である (図 2-2, 86頁参照)。この初代コンラートは, 1320年にスイスのツルガウ地方 (Thurgau) からコンスタンツに移住してきた人物であった。移住の理由は明らかでないが, その地での政治上の争乱が原因であったとみられている³⁾。

J. ミュラーが紹介しているエーインガーの初代の歴史に, J. Kindler von Knobloch による説明として, この家系がすでに13世紀の中期にはイーバーリンゲン (Überlingen) に居住していた貴族であり, その一人のハインリッヒ (Heinrich) は1281年に市長にも選出されているという指摘もある⁴⁾。いずれにしてもエーインガー家が14世紀初頭にこのコンスタンツに移住してきたものであったことは間違いのないところであろう。というのは, この初代コンラートの第1子のハインリッヒ (Heinrich) I がグュッティンゲン (Güttingen) の貴族の子女と結婚していること, しかも1307年にはすでにコンスタンツの都市

商人貴族 (Patrizier) として登録されていることなどが確認されているからである⁵⁾。父親のコンラートが1320年に移住し、それより13年も前に息子のハインリッヒが都市門閥商人貴族に登録されているという史実は、ありえないことはないにしても明らかにくい違いが予想される。それにつづく世代の歴史からみても、おそらく1307年の年号の記録の方に何らかの記載上の間違いが生じたかあるいは別の人物であったのいずれかであろう。

ハインリッヒ I の次の世代には第1子のゲプハート (Gebhard) と第2子のハンス (Hans) I とが活躍した。ゲプハートは後に市長になる息子をもつことになるのであるが⁶⁾、この第3世代にあたる兄弟のうち兄のゲプハートは1390年に官職につき1398年から1403年の没年までコンスタンツの高官 (Stadtmanwürde) となっている⁷⁾。弟のハンス I は1389年から1395年までスイスのツールガウ地方の都市エムバッハ (Embach) で、聖職についている⁸⁾。上のゲプハートは同じコンスタンツの官職についていたウルリッヒ・ハビッヒ (Ulrich Habich) の1人娘マリヤ・ハビッヒと結婚しているが、エーインガー家がコンスタンツの都市の高官の地位を獲得したのは、実はこの結婚による相続の結果であったともみられている⁹⁾。

4世代目になる、ゲプハートの息子の世代は、1368年に生まれたハインリッヒ (Heinrich) が1403年に父親ゲプハートの死にともなって受け継いだ都市高官の地位を1422年まで維持したばかりでなく、1425年には市長に選出されるまでになって、社会的地位を一層高め、それを定着させた時であった¹⁰⁾。このいわばハインリッヒ II の時代はコンスタンツでもいわゆるツunft 闘争が激化した時であった。1421年から開始された都市門閥商人貴族 (Patrizier・Geschlecht) とツunft 指導層 (Zunftler) との対立の中で、ハインリッヒ II は、しかし、ツunft 指導層側の1人として活躍した¹¹⁾。つまりこの対立の中で、ハインリッヒ II は商人側に立った自分の第2子コンラート (Konrad)¹²⁾ と相対立する立場におかれることになったのである。

つまり、ハインリッヒ II にはウルリッヒとコンラート II という2人の息子がいたが、この親子を、1429年の有名なコンスタンツのツunft 闘争が相互の対

立にまきこんだのである。兄のウルリッヒはハインリッヒⅡと同じくツンフト側についたが弟のコンラートⅡは商人貴族の側についていた。そしてこのツンフト闘争の結果、前節で述べたようにコンスタンツの商人貴族とそのグループ47名は（コンラートⅡも入る）、1429年11月9日に、コンスタンツの市民権を放棄させられ、近隣のシャフハウゼン（Schaffhausen）に追放されたのであった¹³⁾。

この4世代目にあたるハインリッヒⅡは、上に見たようにツンフトの利益を代表する側に加わっていたが、しかし、蓄財はかなりの額にのぼっている。例えば、1422年のハインリッヒⅡの課税対象財産として、不動産7,600 プラント・ヘラー、動産5,500 プラント・ヘラーの合計1万3,100 プラント・ヘラーがコンスタンツの納税帳簿に記録されている¹⁴⁾。しかも高額納税者の順位では上位第7位にランクされるものであった。このことから考えてもコンスタンツの有力富裕市民の1人であったことはまず間違いないところであろう。そして、上にみたようにハインリッヒⅡは、1425年にはコンスタンツの市長に選出され、しかも1430年には上級市長（Oberbürgermeister）にも選出されていることから考えて¹⁵⁾、ツンフト闘争における階層の利害対立が必ずしも商人貴族対ツンフト手工業生産者といったものだけではなかったことがわかるのである。ハインリッヒⅡは、後にユダヤ人からの収賄の疑いで退職させられているが¹⁶⁾、それ以前に、つまり1430年5月25日にエーインガー家は皇帝シグスムントから、すでに途絶えていたハビッヒ家の紋章を自己の紋章に並べて表示することを認可されており¹⁷⁾、これによってその地位を一層安定させたと考えられる。ハインリッヒⅡの没年は1438年で、ローマからの帰途、70歳の生命を閉じている¹⁸⁾。残された妻、エリザベート・ゾンターク（Elisabeth Sonntag）はおおよそ30年後の1470年に没している¹⁹⁾。

第5世代にあたる、ハインリッヒⅡの3人の息子の世代では、一番上のウルリッヒⅠが1422年から1431年までコンスタンツの高官職についている一方、次のコンラートⅡが上にみたように商人貴族側についてツンフト闘争を経験し、同時に、「エーインガー会社」を1人で引継いでいる²⁰⁾。3番目のウエルナー

(Werner) は30歳の若さで1437年に他界している。ウルリッヒ I はコンスタンツの高官職につづいて皇帝付の高官となり1431年には皇帝から貴族の称号を授与されているが²¹⁾、それ以後後継者が与えられず、結局、第6世代はコンラート II の息子によって引きつがれている。

第5世代となったコンラート II には5人の息子が確認されている。上からコンラート III、ハンス II、ハインリッヒ III、ルートヴィヒ (Ludwig)、ウルリッヒ II の5人である²²⁾。最も年長のコンラート III は、1420年から1484年までの生涯のうち2度の結婚を経験している。最初はアンナ (Anna Vogt von Wierant) とであり、2度目は63歳の時、つまりこの時には弟のハンス II、ハインリッヒ III、ウルリッヒ II の3人はすでに他界していた年であったが、エリザベート (Elisabeth Stücklin) を妻とした²³⁾。このエリザベートとの結婚ではじめて長男ヴォルフ (Wolf) と長女バーバラ (Barbara) が生れている²⁴⁾。したがってこの長男のヴォルフが第7世代の長子であるが、短命に終るため、結局ハインリッヒ III の息子によって次の世代が引き継がれていくところとなる。

もどって、コンラート III の兄弟について触れると、ハンス II (1436~1475年) については、ほとんど、知られていることがなく、結婚したかどうかさえ不明である²⁵⁾。次のハインリッヒ III は1438年4月24日に生れ、1455年6月29日に、つまり17歳のときに15歳のマーガレータ (Margaretha von Cappel) と結婚している。1473年にはコンスタンツ市の鋪道施設マイスター職としての地位につき1478年には、出納マイスター職についている²⁶⁾。その後このハインリッヒ III は1479年にコンスタンツの市参事会メンバーとなり、その年に没している²⁷⁾。ハインリッヒ III の弟のルートヴィヒ (1442~?) は家族との対立を押しきって、コンスタンツの市長ブラウラー (Ulrich Blaurer) の子女エリザベートと結婚し、シギスムントとハンス2人の兄弟と、さらに2人の娘を残している²⁸⁾。ルートヴィヒの弟の、したがってコンラート II の5番目の息子のウルリッヒ II (1450~1482年) については、1470年に法律の勉学を志ざし、のちに博士の資格を取得したが、結婚はせず、32歳の若さで没している²⁹⁾。このウルリッヒ II は父親のコンラート II から、他の3人の兄弟の結婚費用と同じ額であった

2,000 フローリン (fl.) の金額をうけとって法律の勉強に志ざしていたものであった³⁰⁾。1478年、コンラートⅡの死にもなつて、ハインリッヒⅢと弟のウルリッヒⅡとが遺産を分けあつたが、ハインリッヒⅢの1479年の死亡のあと、その息子のハンスⅢが結局第7世代としての引継ぎ手となつたのである。

上にみたように、コンラートⅢの長子ヴォルフは短命でおわつたため³¹⁾、ハインリッヒⅢの長子ハンスⅢがエーインガー家の商人の柱となつて活躍した。ハンスⅢは1456年5月20日に生れ、1482年マーガレータ (Margaretha Neithart) と結婚した。1489年、1491年、1495にはコンスタンツの都市参事会メンバーとなつており、その代表権は、精肉業ツunft (Metzgerzunft) と商人ツunft (Krämerzunft) から得ていた³²⁾。そしてさらに、1497年から1505年の没年までは、コンスタンツの小参事会のメンバーの地位にあり、今度はその代表権をコンスタンツの都市門閥商人貴族 (Patrizier・Geschlecht) から得ていた人物であつた³³⁾。

そして第8世代がこのハンスⅢの残した6人の息子によって引継がれていくことになる。ハンスⅢには1482年に結婚したマーガレータとの間に9人の子供があつた³⁴⁾。6人の息子と3人の娘である。そのほかにこのハンスⅢには、マーガレータとの結婚以前にセバスチャン (Sebastian) という息子がいたが、この人物はコンスタンツで聖職についていた。3人の娘のうち末のマーガレータは1524年にトーマス・ブラウラー (Thomas Blaurer) と結婚した。このトーマス・ブラウラーはのちにコンスタンツの市長に選出されている³⁵⁾。ハンスⅢの年長の息子ハインリッヒⅣは一度コンスタンツで聖職についた人物であつたが、その後、商人としてアウクスブルク (Augsburg) のウェルザー (Welser) 企業 (Anthoni Welser und Gesellschaft) の活動に参加し、この世代のエーインガー家の代表的大商人となつた³⁶⁾。このハインリッヒと並んで、ウェルザーの企業活動に参加した人物が末のゲオルク (Georg) で、そのほかにハインリッヒのすぐ下のウルリッヒⅢとハンスⅣの4人がエーインガー家の名をヨーロッパだけでなく、広くスペイン領新大陸アメリカにまで広めたのであつた³⁷⁾。

ハインリッヒⅣと並んで、ウェルザー企業の新大陸アメリカでの活動に加わったゲオルクはスペインと新大陸とを何回も往復する活動を示している³⁸⁾が、それ以前、スペインでも、1518年に皇帝カルロス1世に仕え、1526年までその地に滞在し、そののちに西インド諸島への活動に加わったのであった。そしてこのゲオルクは皇帝によって騎士身分にまでとりたてられているが、西インド諸島の旅の途中、殺されてしまっている³⁹⁾。一方、ハインリッヒⅣの次の弟のウルリッヒⅢは、上の2人の兄弟が新大陸にまで活動の範囲を積極的にひろげていったのに対して、むしろ消極的にこのコンスタンツに長く滞在し、この地を中心として活動を行っていた。1509年から1518年までは、コンスタンツの都市参事会のメンバーとなり、1514年から1521年まで、義姉、妹とともに総額年間4,000 プフントの課税財産が記録されている⁴⁰⁾。このことから考えて、かなり広い活動領域を持っていたと予想できる人物であった。このウルリッヒⅢはゲオルクと同じく時の皇帝カール5世により1525年にトレドにおいて帝国貴族の称号を授けられ⁴¹⁾、1528年の秋には、ウェルザー企業の代表としてスペインに滞在し、1529年3月から1530年11月までにコンスタンツとスペインとを数回も往復する活動を示している⁴²⁾。次のハンスⅣ(1487~1545年)は早くからメミンゲン(Memmingen)に移住し、1511年にその営業活動が正式に都市からうけいれられ⁴³⁾、翌年アンナ・マイヤー(Anna Mair)との結婚によって5年間の市民権を得、さらにハインリッヒⅣやゲオルクと同じくウェルザー企業(Handelshaus Bartholomäus Welser Gesellschaft)の支店経営(Faktor)に従事していた⁴⁴⁾。1520年代の中頃以降、このハンスⅣはメミンゲンのツフット・マイスターとして、さらには帝国議会へのメミンゲンの代表として、都市参事会を支配するまでの人物となった⁴⁵⁾。またこのハンスⅣは宗教改革では改革の先頭になって活動したため、1532年以後の5年間、主たる公的地位を免じられるという経験ももっている⁴⁶⁾。

次に、以上の4人の兄弟の子孫についてみると、ハインリッヒⅣは子供がなかったが、次のウルリッヒⅢには、1518年6月に、ハンス・ウルリッヒが生れている。この人物はウルリッヒⅢが正式な結婚以前に生んだ子供であった

が、医学を勉強し、博士の資格も取得したが、1542年にパリで未婚のままで他界した⁴⁷⁾。またウルリッヒⅢは1530年に結婚したウルズラ・モイティンゲン (Ursula Meitingen) との間には1人の息子と2人の娘をもっていた。息子カール (Karl) は1531年から1587年までの生涯をおくり、その生涯で2度の結婚をしたが、結局、1587年に注目すべき記録も残さずに没している⁴⁸⁾。次のメミンゲンに根をおろしたハンスⅣは、アンナとの結婚によって1人の息子と3人の娘を得た。その息子のハンス・ヤコブ (Hans Jakob) は1519年から1598年まで生きているが、結局この子孫は1624年にこのメミンゲンの地で絶えている⁴⁹⁾。ハンスⅣは、アンナの死 (1529年) ののち、1532年再度結婚しているが、その妻マーガレータ (Margarethe Besserer von Schirptlingen) との間には2人の娘が生れたが男子の後継者は残されていない⁵⁰⁾。

ミュラーの説明を中心に追ってきたエーインガー家それぞれの商人の歴史は、結局、カールとハンス・ヤコブの第9世代を最後に、みるべき活動もなく、その系譜をおえている。それは初代コンラートⅠの1320年のコンスタンツへの移住から数えて、およそ3世紀にわたる歴史であり、フッガー家前史の時代からすでに「フッガー家の時代」にまで十分その範囲がおよんでいることになるのである。

注

- 1) 拙稿「中世南ドイツ麻織都市における麻織物商人および商事会社—コンスタンツの場合—」『桜美林エコノミックス』第8号、1979年7月、155-178頁参照。
- 2) Müller, Johannes, Die Ehinger von Konstanz, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, N.F., XX. Bd., 1905, S. 19ff.
- 3) Müller. J., a.a.O., S. 19.
- 4) Müller. J., a.a.O., S. 20.
- 5) 1320年に移住してきたとする根拠をミュラーは、Bucellinの Conslanlia Rhenana Anhang S. 40 においているが、1307年の都市貴族としての登録は Ehinger Stammbuch から引いている。Müller, J., a.a.O., S. 19-20.
- 6) Maschke, Erich, Verfassung und Soziale Kräfte in den deutschen Städte des späteren Mittelalters, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 46, S. 341.
- 7) ebenda. および, Müller, J., a.a.O., S. 20.

- 8) ebenda.
- 9) ebenda.
- 10) ハイノリッヒはローマ法王 Johann XXIII が1414年10月27日に、また神聖ローマ皇帝 Sigismund が、1414年12月24日にコンスタンツ公会議に出席した際、他の高官3名とともに都市高官職として歓迎の儀式典に加わっている。Müller, J., a.a.O., S. 21.
- 11) ebenda. またマシュケの表現によれば、その中でもとくに卓越した人物であった。Maschke, E., a.a.O., S. 305.
- 12) マシュケによれば、この息子は、Konrad ただ1人だけになっている。Maschke, E., a.a.O., S. 305.
- 13) Müller, J., a.a.O., S. 22.
- 14) Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*. Leipzig Verlag von Duncker und Humblot. 1900, Bd, I., S. 609.
- 15) Müller, J., a.a. O., S. 22. および Maschke, E., a.a.O., S. 305.
- 16) Müller, J., a.a.O., S. 23.
- 17) ebenda.
- 18) しかし Schulte の示している史料には没年は1451年だとしているものもあるが、これはミュラーによって否定されている。Müller, J., a.a.O., S. 24.
- 19) ebenda.
- 20) Maschke, E., a.a.O., S. 341. および Müller, J., a.a.O., S. 25.
- 21) Müller, J., a.a.O., S. 25.
- 22) Müller, J., a.a.O., S. 26.
- 23) ebenda.
- 24) ebenda.
- 25) Müller, J., a.a.O., S. 27. Bucelin の指摘では、Geistlicher (聖職者) であったとされている。Müller, J., a.a.O., S. 26.
- 26) Müller, J., a.a.O., S. 27.
- 27) ebenda.
- 28) ebenda.
- 29) ebenda.
- 30) ebenda.
- 31) しかもルートヴィヒの長子シギスムントは、25歳で没し、弟のハンスは、聖職についていた。Müller, J., a.a.O., S. 27.
- 32) Müller, J., a.a.O., S. 28.

- 33) ebenda.
- 34) ebenda.
- 35) ebenda.
- 36) Müller, J., a.a.O., S. 29.
- 37) ハンスⅢにはさらに Gebhard と konrad の2人の息子がいたが、いずれも、幼少の時に他界している。Müller, J., a.a.O., S. 39.
- 38) Müller, J., a.a.O., S. 39.
- 39) ebenda.
- 40) Müller, J., a.a.O., S. 33.
- 41) このウルリッヒ・エーインガーについては、1929年に出た、Müller, J., による *Der Anteil der Familien Ehinger Güttingen von Konstanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welser*, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, 22. Bd. 1929. S. 375ff. により詳細な検証と補足がおこなわれており、ウルム出身の同性同名のもう1人の人物ウルリッヒの存在を明らかにしている。
- 42) Müller, J., a.a.O., S. 385. このコンスタンツのウルリッヒの没年は、1537年8月、スペインであった。このコンスタンツのウルリッヒについては、Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart. 1923, Bd. II. S. 159~160 参照。
- 43) Müller, J., Die Ehinger von Konstanz, S. 36.
- 44) Müller, J., a.a.O., S. 36.
- 45) Müller, J., a.a.O., S. 37.
- 46) ebenda.
- 47) Müller, J., a.a.O., S. 33.
- 48) Müller, J., a.a.O., S. 36.
- 49) Müller, J., a.a.O., S. 39.
- 50) Müller, J., a.a.O., S. 38.

3 エーインガー家商人の商業活動

前項で見たように、エーインガー家商人による商業活動は初代が史料上に登場してから17世紀前半にその系譜が絶えるまでの間のおよそ3世紀にわたる歴史を示しているが、その中でも商業史上、とくに2世代についてそれぞれ卓越した人物を認めることができる。その最初は、第4世代にあたるハインリッヒ

Ⅱ(1368～1438年)の活動であり、そしてもう1つは第8世代にあたる、ハインリッヒⅣ(1484～1537年)を年長とする4人兄弟の雄飛である。

1) ハインリッヒⅡの商業活動

エーインガーの商業活動が史料に明らかにされるのは、1368年に生まれ、1403年に父親、ゲプハートの地位をそのまま受け継いだこのハインリッヒ(Heinrich)Ⅱが最初である。すでに父親ゲプハート(Gebhart)はコンスタンツ(Konstanz)の都市高官としての地位を得ていたから、ハインリッヒⅡはそれをそのまま継承しただけでなく、1425年には市長にも選出されてエーインガー家の社会的地位を一層確かなものとしたのであった。

このハインリッヒⅡの活動を端的に示す史料は、前章にみた1418年と1422年に記録されているコンスタンツの納税帳簿である¹⁾。このうち、1418年の納税表からみると、このハインリッヒⅡの所有不動産額は6,700 プフント・ヘラー、動産額は5,500 プフント・ヘラーであり、合計の財産額1万2,200 プフント・ヘラーに対して24プフント・ヘラーの課税がなされていることが示されている。この課税額は当時のコンスタンツの高額納税者の順位からいって、上にみたように第7位にあるものであった。これが、1422年の表になると、不動産、7,600プフント・ヘラー、動産5,500 プフント・ヘラーの合計1万3,100プフント・ヘラーの財産額に対して、25プフント10シリングの課税が記録されている²⁾。

この2カ年の納税表に示されているハインリッヒⅡの数字だけから当時のエーインガー家商人の活動の状態をそのまま導き出すことはかなり危険であろうが、同時代に、コンスタンツばかりでなくこの南ドイツ麻織業経済圏一帯にわたって、最大の巨商と言われた、リュートフリートⅡ・ムントプラートと比較すれば、一応それなりの判断が可能になるのではないかと思われる。例えば、ムントプラートⅡは、1418年、総額4万5,000 プフント・ヘラー(不動産7,500, 動産3万7,500)に対して102プフント・ヘラーの納税をなしている。これをエーインガー家のハインリッヒⅡのものと比較すると、不動産に対して圧倒的に動産の額が多いことが明白である。しかもその割合は、1422年の史料でも同じ

である。ハインリッヒⅡの場合、上に見た通り、不動産については、ムントブラート (Muntprat) とさして差はない、にもかかわらず、動産においてはるかに後退している。このことはあきらかに大商人としてのムフトブラートとそれより一層土地領主的性格を帯びていたハインリッヒⅡとの相異を示している、と云わざるをえないであろう。

このハインリッヒⅡの時代の土地領主・地主的性格は E. マッシュケによって指摘されている史実によっても裏づけられる。例えば、ハインリッヒⅡはコンスタンツの司教 (Bischof) からグェッティンゲン (Güttingen) とモースブルク (Moosburg) の城を所領として授けられ (belehnt) ているが³⁾ これなども、ハインリッヒⅡの地主的性格を物語る一つの材料と言えるであろう。

もう一つ、ハインリッヒⅡの商業活動を見る上で、見逃しえない史実は、すでに上でも述べた15世紀の20年代にコンスタンツを中心にふきあれた「ツunft闘争」に際してとられた、ハインリッヒⅡの行動と、そこにおかれていたハインリッヒⅡの社会的地位である。すでに前項でみたように、第2世代目にあたるハインリッヒⅠが1307年にコンスタンツの門閥商人貴族 (Patrizier) として登録されているにもかかわらず、この第4世代目になるハインリッヒⅡが、このツunft闘争においてはツunft側の利益に組み込まれただけでなく、むしろ、その利益を代表する積極的な活動を示したこと⁴⁾、さらに都市の門閥商人貴族 (Patrizier) との対立を通して、第2子であるコンラートⅡとも対立を余儀なくされながらツunft側に立ったことなど、ハインリッヒⅡの営業内容が多分に大商人とは対立したものであったと考えられることである。しかしそのうち、1430年には、上級市長 (Oberbürgermeister) にも選出され、またこの代に皇帝から貴族の紋章の使用も許可されていることなどから考えても、必ずしも門閥貴族=大商人という定義でない、ツunft⁵⁾ 導層=都市貴族という弾力的な社会的階層の移動の可能性がこの闘争のさいにみられたともみることが出来るのである⁶⁾。そこでこのハインリッヒⅡの態度も1421年以来疑いもなくツunft側の指導層でありながら、しかし必ずしもそこにツunft生産的営業の事実は何も見出し出されてはいないのである。ただこのツunft側代表についた

ハインリッヒⅡの態度によって、このハインリッヒには他のコンスタンツの大商人層とは利害を異にするいくつかの理由が存在していたであろうということ予想することはできるのである。

このツフフト闘争の際に、ハインリッヒⅡの第2子コンラートⅡは都市商人貴族側であったため、コンスタンツを追放され、前にみたように、シャフハウゼン (Schaffhausen) に移住した。そして、父親のハインリッヒⅡと態度を同じにした長男のウルリッヒⅠはツフフト側についたのにもかかわらず、皇帝シグスムントの参事會に仕え、1431年には貴族の称号を授与されているのであるが⁶⁾、このこともこのツフフト闘争の複雑さを示すものとして注目されるものである。

ところで、このハインリッヒⅡの次の世代、つまりウルリッヒⅠとコンラートⅡの世代になってはじめて「エーインガー會社 (Ehinger Gesellschaft) をこのコンラートが引継いだ」という表現にぶつかる⁷⁾。したがっておそらくこのハインリッヒⅡも商會会社 (Handelsgesellschaft) を經營していたものと十分考えられるが、先に見たツフフト側指導者であったことを思えば、商業活動だけでなく多面的な活動をなしていたことが考えられるところである。しかも、この「Gesellschaft」を引き継いだコンラートⅡが1452年には、母親のエリザベート (Elisabeth) と兄のウルリッヒⅠと共同で、モースブルク (Moosburg) の城館とツルガウ (Thurgau) 地方の城館、ツム・ツルン (Zum Thurn) の城館とをコンスタンツの司教のハインリッヒに7,000 フローリン (fl.) で売却しているのであるが⁸⁾、これを見ても、商人、地主、ツフフト・メンバーと云った幾重もの社会的地位が1人の人物に錯綜していたことがわかるのである。エーインガー家の商人のこの性格は、このあとの世代にもさらに引き継がれていく。すでに見たように、例えば、コンラートⅡの孫にあたるハンスⅢの世代には、このハンスⅢが、精肉業マイスター (Metzger) と商人 (Krämmer) マイスターの両方になっており、その資格で、1489, 91, 95年にはそれぞれ参事會メンバーとなりながら、1497年から1505年までは、都市門閥商人貴族 (Geschlecht) を母体とした小参事會メンバーにも選出されているのである。

このことはユーインガー家の商人が必ずしも一種類だけの営業活動を行なっていたものではなかったことを示すのに十分であろう。

2) 第8世代, ハイน์リッヒⅣ, ウルリッヒⅢ, ハンスⅣ, ゲオルクなどの商業活動

ユーインガー家の商人の商業活動が、具体的な取引を例として明らかになっているのは、この第8世代、つまりハンスⅢを継いだ4人の兄弟の活躍からである。

年長のハイน์リッヒⅣは、アウクスブルグのウェルザー企業のもとで商業活動に従事した。その足跡は、ドイツ国内だけでなく、スペイン、さらには遠くスペイン領新大陸アメリカにも及ぶものとなっている。つまり当時新大陸に進出した数少ないドイツ商人の先駆者なのであった。上に見たように、ハイน์リッヒⅣは一度聖職についた後1519年に再び俗界にもどり、そのまま、ウェルザーのスペイン、サラゴッサ (Saragossa) の支店長として赴任し⁹⁾、そしてその年には早速ウェルザーからの献金として、カール1世に対する用立て用として合計14万3,000フローリンにのぼる2つの手形がこのハイน์リッヒによって振出されている¹⁰⁾。さらにこのハイน์リッヒが1521年にもスペインのこの地に滞在していたことが、ウェルザー企業の社員であったシモン・ザイツ (Simon Seitz) の記録の中で確認されている¹¹⁾。さらに1523年には、セビリア (Sevilla) にも滞在している。この都市でハイน์リッヒⅣはフェルナオ・デ・マガルハエス (Fernao de Magalhaes) が計画した世界貿易航海の準備の企画を請負ったからであった¹²⁾。このマガルハエスの目的はモルッカ諸島での香料の仕入であった。この航海は結局、3年後に帰港して少々ではあったが、利益も獲得されている。そして、このビクトリア号がもたらした香料を一番多く手に入れようとしたのがこのハイน์リッヒⅣであった¹³⁾。さらに第2回目のモルッカ諸島への貿易航海の準備のために皇帝カール5世が1523年に、ヤコブ・フッガー (Jakob Fugger) などに8隻の船と銅、船具とをハンザ都市からスペインに買い付けた時にも、フッガーよりもウェルザーは、この企画に消極的な姿勢を示

したのであったが、それでもこのハインリッヒⅣがウエルザーの代表として加わされていたのであった¹⁴⁾。

ハインリッヒⅣは以上のようにスペインでウエルザー企業の営業活動に従事していたが、1524年2月と、1527年4月にはコンスタンツに帰って一時滞在している。1524年は妹のマーガレータ (Margaretha) の、1527年は自分の結婚式のためであった。そして翌年1528年には再びセビリアに駐在している。そしてこの1528年のスペインでの滞在時にハインリッヒⅣは同僚のヒロニモウス・ザイラー (Hironymous Sailer) と共にスペイン政府と新大陸アメリカのヴェネズエラ (Venezuela) での営業活動についての契約を締結したのであった¹⁵⁾。しかも、これはウエルザー企業の仲介というよりもエーインガー企業が半独立的に実行した営業活動として高く評価されているものなのである¹⁶⁾。

ウエルザーはこの時代、海外、とくに西インド諸島への進出を積極的に画策しており、皇帝カール五世に接近してその進出を実現していた。例えば、1525年にウエルザーは、皇帝から海外通商の特権を獲得している¹⁷⁾。そしてその直後にセビリアに支店を設置し、1526年にはエスパニョーラ島 (Española) のサント・ドミンゴ (Santo Domingo) にもウエルザー独自の営業所 (Faktorei) を設立している¹⁸⁾。そしてこれらの営業所の設置にもなってエーインガー家の商人ハインリッヒⅣの弟のゲオルクが、これもカール5世の命をうけてその地に赴任したのであった¹⁹⁾。ウエルザーとエーインガーという2つの巨商の結びつきはこのように、ウエルザーの西インド諸島への進出の過程で強化されていたのである。

こうして、ウエルザー企業の西インド諸島への進出にもなって強化されたエーインガー家の商人の活動は、ハインリッヒⅣとウルリッヒⅢ、それにゲオルクと、もう一人の重要人物アムブロシウス (Ambrosius Ehinger) の4人によって展開された。ハインリッヒとゲオルク、ウルリッヒとは間違いなく上にみたコンスタンツのエーインガー家の出身者である。ハインリッヒとゲオルクはウエルザー企業のスペインでの代表商人としての地位からこの海外での営業活動に加わったものであり²⁰⁾、またウルリッヒについても海外での活動はおそら

く一度も経験しないでおわっていると思われるが、スペインでの広範囲な商業活動の一環として契約に名をつらねたものであった²¹⁾。そしてもう1人の人物、アムブロシウスが活躍した。上に触れたように、この人物がコンスタンツのエーインガー家の出身でないとする J. ミュラーの見解に対して、兄弟の1人であると結論づけている K.H. パンホーストの見解に²²⁾意見は分れるのであるが、いずれにしてもこの人物はウェルザーの海外商業活動に重要な役割を果たしている。例えば、上にみたウェルザー企業のサント・ドミンゴの営業所の長のとして活動しているし²³⁾、1528年の契約に加わっただけでなく1529年にはサント・ドミンゴからヴェネズエラに総督 (Gouverneur) として任命され、植民地統治権をまかされるにいたっているのである²⁴⁾。さらに後には西インド諸島各地の探険に加わった最大の人物なのであった²⁵⁾。

ところで、ヴェネズエラでのウェルザー企業の植民地開拓事業はエーインガー兄弟が加わって締結された1528年の契約による、50人のドイツ鉱山労働者の募集派遣と、4,000人の黒人奴隷の供給とによって一層具体化するところとなった²⁶⁾。この契約以前にもすでにエーインガー企業は1526年と1527年にも奴隷取引についての特権 (Lizenzen) をジェノア人とスペイン人からそれぞれ買い取っているが²⁷⁾、いずれにしても奴隷取引はエーインガー企業の主要な営業項目であったと考えられる。

つづいてゲオルク・エーインガーが兄のハインリッヒⅣの指示にしたがって100人以上の新しい開拓移住者を引きつれてヴェネズエラにむかい、1530年の1月15日には、この地の中心的居住地であったコロ (Coro) に到着している²⁸⁾。その後、ゲオルクは後段にのべるようにエーインガー企業とウェルザー企業との対立を背景に、サント・ドミンゴ (Santo Domingo) にもどり、さらにスペインに帰っている²⁹⁾。そしてその後再度ゲオルクは西インド諸島に出かけているが、1537年にその地でスペイン人に殺害されたとみられている³⁰⁾。

1520年代に緊密化したウェルザー企業とエーインガー家の商人との協力体制は、ハインリッヒⅣの弟のウルリッヒⅢのスペインでの商業活動にも多くを負っていた。このウルリッヒⅢはカール5世の宮廷 (Hof) に滞在し、少なくとも

も1525年から1529年まではそこで商業活動に従事していた³¹⁾。その間このウルリッヒⅢは1528年の12月にウルム(Ulm), アウクスブルク(Augsburg), ニュルンベルク(Nürnberg), ストラスブルク(Straßburg)などが新教同盟を試みて失敗に終わったとき, 皇帝カール5世との仲介を依頼されるという仕事もこなっているが³²⁾, 1529年には再びドイツに滞在しており, 翌1530年には皇帝の随員としてアウクスブルクからスペインへの旅に出, その後騎士(Ritter des Ordens von St. Jago)の称号を授与されるまでになっている³³⁾。

ハインリッヒⅣのもう1人の弟のハンスⅣによってもエーインガーとウェルザー企業との協力は促進された。ハンスⅣは上に見たようにメミンゲンではやくから商業活動に従事し, そこでウェルザー企業の支店(Faktor)を経営して各地に旅商に出ていた³⁴⁾。また1520年と21年にはウェルザーの支店経営者としての資格で皇帝カール5世に関係する商業活動をも担当するにいたっている³⁵⁾。

以上のように, 1520年代にハインリッヒⅣを中心とした4人の兄弟とそのほかもう1人のアムプロシウスを加えた5人のエーインガー家の商人によってウェルザー企業と提携した一連の商業活動は, 1530年代を前にして1つの頂点をむかえ, 新大陸アメリカ市場での開拓に新時代を開こうとしたのであったが, 早くも1530年の1月には, このエーインガー家の商人とウェルザー家の商人との間に何らかの意見の対立が生じ, その結果, ハインリッヒⅢとゲオルクの兄弟はウェルザー企業の営業活動から全て完全に撤退してしまうことになり, しかもこの対立は再び, 解消されることがなかったという結末をむかえてしまうのである³⁶⁾。

しかしこうした挫折にもかかわらず, エーインガー兄弟はウェルザー企業からの撤退後も独自で商業活動を継続している。ハインリッヒⅣは例えば, 1536年に4,000人以上の黒人奴隷を新大陸に供給する契約を結んでいる³⁷⁾。これなどは, ハインリッヒⅣのその後の商業活動の継続をそのまま物語るものである。それだけでなくそれ以後, 皇帝カール5世と結びついた商業活動にも参加した事実も指摘されている³⁸⁾。しかし, いずれにしても, 西インド諸島でのエーイ

ンガー家出身の商人による商業活動は、ハインリッヒⅣによるその後の数年をのこしてこのウェルザーとの不和対立をさかいにこの世代で坐折してしまうことになった。ハインリッヒⅣの死亡は、コンスタンツの納税帳簿にハインリッヒⅣの名でなく彼の未亡人の名で登録されていることによって確認されているだけであるが³⁹⁾、それは1537年であった。

以上のようにコンスタンツ出身のエーインガー家の商人による第8世代にわたる商業活動は、具体的な取引内容としてはほとんどその姿を示すことができないが、スペインとドイツとの取引だけでなく、ドイツがこの後の時代に、他の西ヨーロッパ各国に比較して大きく後退する主要な要因となった新大陸市場においてさえ、ウェルザー家の商人とによる協力関係を通して着実にその活動を発展させようとしていたことだけは認められるのである。

注

- 1) この納税表については、Schulte, Aloys, *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*, Bd. I, S. 609.
- 2) ebenda.
- 3) Maschke, E., *Verfassung und soziale Kräfte in der deutschen Städte des späteren Mittelalters, vornehmlich in Oberdeutschland*, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* Bd. 46-4, 1959, S. 305.
- 4) Maschke, E., a.a.O., S. 305.
- 5) 例えば、マシュケによれば、コンスタンツでは、1371年から1431年まで都市商人門閥貴族対ツンフト指導層の対立は、市長の選出の母体からみてほぼ五角であった。Maschke, E., a.a.O., S. 339. そのことは、ツンフト指導層と大商人との区別がかなりあいまいになってきていることを示している。
- 6) Müller, J., *Die Ehinger von Konstanz*, S. 25.
- 7) Maschke, E., a.a.O., S. 341. および Müller, J., a.a.O., S. 25.
- 8) Müller, J., a.a.O., S. 25.
- 9) Müller, J., a.a.O., S. 29.
- 10) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Bd. I, S. 159, および Müller, J., a.a.O. S. 29, および Häbler, Konrad, *Die überseeischen Unternehmungen der Welser und ihrer Gesellschafter*, Leipzig, 1903, S. 43.

- 11) Häbler, K., a.a.O., S. 43. および, Schulte, A., a.a.O., S. 159.
- 12) Häbler, K., a.a.O., S. 43.
- 13) Häbler, K., a.a.O., S. 44. この時に, ハインリッヒⅣは, 総額2万ドゥカーテン (Dukaten) 以上の価格で, 香料のチョージ (Gewürznelken) を買い取っている。
- 14) Häbler, K., a.a.O., S. 45.
- 15) Häbler, K., a.a.O., S. 48.
- 16) Häbler, K., a.a.O., S. 52. この1528年の契約について, ヘブラーの指摘では, スペイン側の史料には, ウェルザー企業の名は全然なく, ハインリッヒ・エーインガーとヒロニムス・ザイラーの名だけが記録され, またドイツ側の史料には, ベルトロモイズ・ウェルザーとウルリッヒ・エーインガーおよびその家族と記録されている。
- 17) Müller, J., a.a.O., S. 30.
- 18) ebenda.
- 19) このゲオルクはハインリッヒⅣと同じく, ウェルザー企業のスペインでの代理人 (Vertreter) であった。
- 20) Panhorst, K.H., a.a.O., S. 181.
- 21) Müller, J., Der Anteil der Familien Ehinger-Güttingen von Konstanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welser, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* 22. Bd., 1929, S. 181.
- 22) Panhorst, K.H., Der erste deutsche kolonisator in Amerika, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* XX. Bd., 1928. S. 419. ミュラーはこれに答える1929年の著作でも, それを否定している。Müller, J., Der Anteil der Familien Ehinger-Güttingen von Konstanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welser, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* 22. Bd., 1929, S. 384.
- 23) Häbler, K., a.a.O., S. 51.
- 24) Panhorst, K.H., a.a.O., S. 416-420.
- 25) ebenda.
- 26) Panhorst, K.H., Das Verhältnis der Ehinger zu den Welsern in den ersten deutschen Unternehmungen in Amerika, S. 175. および, Müller, J., Die Ehinger von Konstanz, S. 31.
- 27) Otte, Enrique, Die Welser in Sonto Domingo, in *Homenajae A, Johannes Vincke*, vol. II, 1962, S. 491.

- 28) Häbler, K., a.a.O., S. 170 および, Panhorst, K.H., Der erste deutsche Kolonialisator in Amerika, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* XX. Bd., 1928, S. 417.
- 29) Panhorst, K.H., a.a.O., S. 417.
- 30) Müller, J., a.a.O., S. 40.
- 31) Müller, J., a.a.O., S. 33-34. ただし, シュルテによって報告されている, 1507年および1514年に確認されているかの「大ラーフェンスブルク商事会社」の經理主任としての地位と, また1523年に確認されている, ウェルザー企業の支店長(Factory der Welsler-Gesellschaft)としての双方の地位を有しての活動であった。またさらには, 1528年のドイツ人鉱山労働者の募集にもなってザクセン地方から送られてきた鉱夫をアントワープにまで迎える任務を受けていたにもかかわらず, 病気のために果せず, しかもそのまま, 1529年にセビリヤで死亡してしまったウルリッヒなる人物は, ウルム(Ulm)出身のエーインガー家のウルリッヒのことである。このウルリッヒなる人物もまた, スペインの地でのエーインガー家の商人の商業活動の一部として見落せないものであろう。Schulte, A., a.a.O., S. 159-160. および, Müller, J., Der Anteil der Familien Ehinger-Güttingen von Konstanz und der Österreicher Ehinger von Ulm an den überseeischen Unternehmungen der Welsler, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, 22. Bd., 1929, S. 386.
- 32) Müller, J., Die Ehinger von Konstanz, S. 34.
- 33) ebenda.
- 34) Müller, J., a.a.O., S.36.
- 35) Schulte, A., a.a.O., S. 159. および, Müller, J., a.a.O., S. 36.
- 36) Panhorst, K.H., a.a.O., S. 177. および, Müller, J., a.a.O., S. 32.
- 37) Müller, J., a.a.O., S. 32.
- 38) Panhorst, K., H., a.a.O., S. 178.
- 39) Müller, J., a.a.O., S. 33.

4 エーインガー一家出身商人の行方

以上みてきたように, 史実に示されているエーインガー一家出身商人の商業活動が, ボーデン湖周辺地域を中心とするこの南ドイツ経済圏の発展とどのようなかわり合いをもって見ることができるか, といった問題に解答を試みるためには, 史料の量の点であまりにも弱小なものであったと言わざるをえない。しかしながら, それにもかかわらず, そこに示されている商業活動の内容によって幾分たりともこの期における南ドイツ商業資本の動向の一部を示すことが

できたのではないかと思われる。

上にみたように、史実に示されているエーインガー家の商人の取扱った商品は、ハインリッヒⅡがスペインで買上げた東洋からの香料だけである。そのほかは黒人奴隷の供給などにとどまっており、この点については同じコンスタンツの巨商、ムントプラートが麻織物を広範囲に取扱っていたのと比較してはるかにその営業活動上の性質を異にしていたと言えるであろう。しかもエーインガーの各世代に特徴的なことは、土地所領に関する記録が、かなり多くなっていることである。つまり、商業活動以上に土地所有に活動の比重がおかれていたように思われる。

エーインガー資本の活動の中で、麻織業の取引に関する事実は、少なくとも今までみてきた文献においては皆無であるといえる¹⁾。新大陸アメリカに進出したウェルザー企業の取扱い商品についてみても植民地からの物産や、砂糖栽培などが行なわれただけで²⁾、この後の時代の幕開けの重要商品となるペルー・メキシコでの、金、銀、鋳山の開発の可能性という事からは大きくとり残されていたのであった。

南ドイツ商業資本による西インド諸島地域への進出は、今迄みてきたエーインガー家出身の商人の活動を含めて、いわゆる国内製品の輸出、金、銀、鋳産物の輸入といった、近世ヨーロッパ経済史を大きく転換させる歴史の公式には到達していない。ヨーロッパからのスペイン領新大陸への輸出においては、明らかに麻織物製品の比重がかなり高かったことを思えば³⁾、麻織物取扱商人であったムントプラート、イムホルツ、さらには「大ラーフェンスブルク商會社」の活動が新大陸市場とは結びつかずに、逆に麻織物製品を取扱っていなかったウェルザー・エーインガー両家出身の商人によって新大陸地域への進出が開始されるという歴史の皮肉が、これ以後のドイツ経済の行方を暗示しているものと思われるのである。

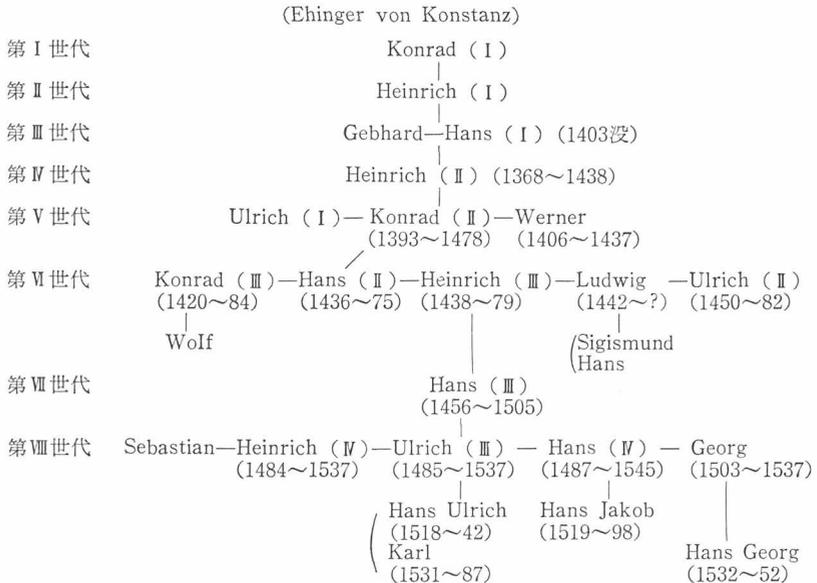
注

- 1) コンスタンツ麻織業についての代表的著作である上にあげた F. ヴィーラントの説明にも、エーインガーの名を見い出すことはできない。Wielandt, Friedrich, *Das*

Konstanzer Leinengewerbe II, 1950, 第II章 S. 15ff.

- 2) ウェルザーはヴェネズエラでは銅と金の採掘業を試みているが、けして期待されたものではなく、むしろ多くの障害によって結局失敗におわっているが、この失敗の原因についても一層の研究が必要である。Häbler, K., a.a.O., S. 64. および Werner, Theodor Gustav, *Europäisches Kapital in ibero-amerikanischen Montanunternehmungen des 16. Jahrhunderts*, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1981. 48. Bd. S. 35.
- 3) 例えば, Schäfer, Ernst, *Spaniens Koloniale Warenausfuhr nach einer Preisliste des 16. Jahrhunderts*, in *Ibero-Amerikanisches Archiv*. hrsg., v. Ibero-Amerikanisches Institut, Berlin. XII. Jg., 1938/39. S. 313ff. および, 拙稿「16世紀後半期における新大陸向スペイン輸出商品とヨーロッパ生産地」『桜美林エコノミック』第5号, 1977年4月所収, 81頁以下参照。

図 2-2 エーインガー家 (コンスタンツ市) 商人の系譜



注：名前に付いているローマ数字は便宜上のものである。この系図はミュラーの説明をもとに作成したものであるが、ウルム出身のエーインガーについてはミュラーの文献に作成されたものがある。

出典：Müller, Johannes, *Die Ehinger von Konstanz*, in *Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, 1905, 巻末。

第5節 コンスタンツ商業の衰退と周辺都市の商業発展

ムントプラート (Muntprat), イムホルツ (Imholz) などの商業活動が展開された南ドイツ麻織業経済圏でのコンスタンツ (Konstanz) の主導的地位は、15世紀のほぼ60年代より、隣接する中小都市、ラーフェンスブルク (Revensburg) やザンクト・ガレン (Sankt Gallen), さらに次は次の時代を形成するアウクスブルク (Augsburg) などに奪われ、中心地域がしだいにそちらに移行する¹⁾。上に見たイムホルツ家の商人の倒産の理由の1つに、ザンクト・ガレンとの競争の激化をあげている研究もみられるように²⁾, コンスタンツの中心的地位はその周辺都市の活動によってしだいに失なわれていくのである。その点は後章でみるように、「大ラーフェンスブルク商事会社」によるスペイン向麻布の産地別割合における、コンスタンツの地位のあきらかな後退と、15世末にはラーフェンスブルク、イスニー、ザンクト・ガレンの割合の一層の増加等、によって示される³⁾。

コンスタンツが全ドイツに誇った「ムントプラート商事会社」は上に見たように15世紀の中頃以後、ラーフェンスブルクに本拠を構える「大ラーフェンスブルク商事会社」の1支店に甘んじることになる。15世紀後半はこうしたコンスタンツ周辺の麻織都市が、なお多くの商事会社の発展を通して南ドイツ経済の発展を継続するのであるが、又、「大ラーフェンスブルク商事会社」の解散がみられる16世紀前半期になると、この南ドイツ経済圏の中心は、フッガー家の商人を中心とするアウクスブルクと、それに加えて、金属金物製造業を基盤とするニュルンベルクに再び移行することになるのであるが⁴⁾, その過程はこのコンスタンツ以後の麻織都市とその商業資本の尚一層の発展と衰退とによって示されることになる。次章以下において、それらコンスタンツ周辺都市における商業発展と衰退の歴史を商人及び商事会社による商業活動を通してみたいと思う。

注

- 1) Kramm, Heinrich, *Landschaftlicher Aufbau und Verschiebungen des deutschen Großhandels am Beginn der Neuzeit*, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, XXIX. Heft, 1936, S. 22.
- 2) Wielandt, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, Konstanz, 1950, Bd., II., S. 36. さらにコンスタンツに対するラーフェンスブルクの優位性は、例えば K. Häbler によって明らかにされたバルセロナにおける関税表 (1425-1440) によっても、ラーフェンスブルクの「フンピス商事会社」、「大ラーフェンスブルク商事会社」、スイスの「ワット商事会社」の3社が上位を占めていることにも示されている。(そのうちでもフンピス商事会社は合計3,680プフントの約半分の1,830プフント3シリングを占めている) Häbler, Konrad, *Das Zollbuch der Deutschen in Barcelona (1425-1440) und der deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhunderts*, in *Württembergische Vierteljahrschrift für Landesgeschichte*, Stuttgart, 1901, S. 131ff. および Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 327.
- 3) Wielandt, F., a.a.O., S. 37.
- 4) 例えば15世紀から16世紀前半期にかけてスイス・ジュネーヴでの大市に活躍する代表的な南ドイツの商事会社は、ニュルンベルクのトゥッヒャー (Tucher) やアウクスブルクのマンリッヒ (Mannlich) 商事会社に代っており、コンスタンツやその周辺都市のそれとの交替を示している。Ammann, Hektor, *Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf*, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, 1954, S. 160ff. しかもそれと同じ傾向はリヨンの大市でもみとめられる。Ver Hees, Karl, *Oberdeutscher Handel nach Lyon am Anfang des 16. Jahrhunderts*, in *Historisches Jahrbuch*, Verlag J.P. Bachem, Köln, 55. Bd., 1935, S. 77ff.

第3章 ザンクト・ガレンにおける麻織業の 発展と商人・商事会社及び輸出市場

第1節 はじめに

近世ドイツ経済史上、アウクスブルク (Augsburg) を拠点とするフッガー (Fugger), ウェルザー (Welser) などの巨大商業資本がなした活動についてはドイツ初期資本主義の問題としてその歴史的意義が大方から認められるところである。そして、いわゆる「フッガー家の時代」前史とも言える13世紀から南ドイツのボーデン湖周辺地域に麻織業を生産的基盤とする一大広域経済圏が確立されていたことも大方の認めるところである。

この13世紀から開始されていた麻織業経済圏の中心は、とくにその前半期には、第2章でみた通りボーデン湖畔に位置するコンスタンツ (Konstanz) にあった。しかしその後、15世紀には、この中心地はスイスのザンクト・ガレン (Sankt Gallen) に移行する。この移行がいかなる理由で展開されたかについては容易に論証できるものではない。史料にも多くは触れられていない。おそらくコンスタンツにとっては、周辺のラーフェンスブルク (Ravensburg) やウルム (Ulm) などとの競争が激化したことや、14～15世紀に繰り返ひろげられた、いわゆる「ツンフト闘争」などの影響が災いしたように思われる。いずれにしてもザンクト・ガレン (St. Gallen) は、西ヨーロッパ経済史全体から見れば中世のなかでもきわめて縮小・停滞した14～15世紀という時代のなかで、この麻織業地域の経済的中心都市として発展するのである。

当時人口わずか数千人にすぎなかった中小都市ザンクト・ガレン (St. Gal-

len) がどのようにしてこの麻織業経済圏の中心都市になりえたのか、さらに海外輸出市場への依存の度合が多分に強いと思われるこの経済圏の輸出産業的性格がどのようにこのザンクト・ガレン (St. Gallen) の発展のなかに示されているのか、等の課題は、フッガー家 (Fugger) 前史のドイツの経済構造を知る上で欠くことのできない問題であるはずである。

本章では、このザンクト・ガレン (St. Gallen) の中世都市としての発展とその麻織業、さらに輸出市場、またそれらの輸出活動の中心でありザンクト・ガレン (St. Gallen) を活動の拠点としていた商事会社の中でディースバッハ・ワット商事会社 (Diesbach-Watt-Handelsgesellschaft) の海外販売市場などでの活動をみていこうと思う。それらはいずれもこの中世後半から近世にかけてのドイツの経済史上の動向と密接にかかわっているからである。

第2節 ザンクト・ガレン麻織物商業に関する研究史

ザンクト・ガレン (St. Gallen) の麻織業とその貿易についての研究は、それまでの諸研究を総括した多くの新しい史料を集めて1960年に出版された、Hans Conrad Peyer による *Leinwandgewerbe und Eernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520*, Band I II に研究の集大成を見ることがができる。その後、1969年に Wolfgang Zorn によって論文 *Zur Geschichte der schwäbischen Wirtschaft* が発表され、この南ドイツ一円の中世麻織業経済圏について概略が説明されているが、残念ながらスイスのこのザンクト・ガレンについては触れられていない¹⁾。

H. C. バイアー (Peyer) による著作の中ですでに大半跡づけられているが、それ以前の研究史上一時代を画したのは、Hektor Ammann による研究である。まず1920年に、*Genfer Handelsbücher des 15. Jahrhunderts (Anzeiger für Schweizerische Geschichte, Nr. 1, 1920, 所収 S. 12ff.)* によってザンクト・ガレンの麻織業が紹介され、次いで、1928年には彼の研究が相次いで発表されている。論文、*Die Wirtschaftsstellung St. Gallens im Mittelalter, St.*

Gallen 1928年, *Sonderdruck aus der Gedächtnisschrift für Georg von Below* (Aus Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, W. Kohlhammer, Stuttgart, 所収) と著書, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, Fer'sche Buchhandlung St. Gallen, 1928年等である。さらに1943年には *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz* (*Zeitschrift für Schweizerische Geschichte*, 23. Jg., Zürich S. 329ff. 所収) が発表されている。また, 1953年には上の論文とほぼ同じテーマを扱いながら特に地中海周辺地域で発掘された史料をもとにこの麻織物経済圏の初期の貿易活動を一層鮮明に描きだした労作, *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes* (*Alemannisches Jahrbuch*, 1953年所収) を発表した。

もともと, このボーデン湖周辺の麻織業経済圏に関する研究は第1章においてすでにみた, 1853年発表の, Franz J. Mone, *Zur Handelsgeschichte der Städte am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert* (*Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, IV. Bd., 1853年所収) と *Der Süddeutsche Handel mit Venedig vom 13. ~15. Jahrhundert* (*Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins*, v. Bd., 1854年所収) の2つの論文から開始されたといつてよいと思う。ただこの2つの論文ではスイス地域, とくにザンクト・ガレンについては残念ながら触れられていない。しかし, ボーデン湖周辺に散在する中世麻織都市の群生とその貿易活動をおそらくはじめて一般に紹介したという偉大な功績は記録されなければならないであろう。次いで1869年には, Brno Hildebrand, *Vergangenheit und Gegenwart der Deutschen Leinenindustrie* (*Jahrbücher für National-ökonomie und Statistik*, 13. Bd., 1869年 S. 215ff. 所収) によってこの南ドイツの一部シュワーベン地方の麻織業が紹介された。また, 1892年には Wilhelm Heyd, *Schwaben auf den Messen von Genf und Lyon* (*Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, N.F., 1, 1892年所収) によって, この2つの大市取引でのシュワーベン産麻織物の流通の状態が明らかにされた。

20世紀に入ると, 第2章のコンスタンツの麻織業に関してみたように, この

麻織業経済圏の研究では第一人者ともいえるべき Aloys Schulte の諸著作が発表されはじめる。1900年には大著、*Geschichte des mittelalterlichen Handel und Verkehrs*, Verlag von Duncker und Humblot, Leipzig, が出、次いで1903年の論文、*Zur Handels-und Verkehrsgeschichte Süd-West-deutschlands im Mittelalter (Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 27. Jg., 所収)* が発表された。しかもその前年の1902年には、A. シュルテの中心課題であった Ravensburger Handelsgesellschaft の研究が論文として *Zur Geschichte der Ravensburger Gesellschaft, in Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte, XI. Jg.* に出、その集大成となった、彼の主著 *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart und Berlin が1923年に発表されたのである。ただこれらの研究のなかでは残念ながらテーマの関係上ザンクト・ガレンの活動については最小限度の頁数しかさかれていない。しかし同じ南ドイツ麻織業経済圏でのザンクト・ガレンの重要性はコンスタンツ (Konstanz) やラーフェンスブルク (Ravensburg) の活動とともに改めて確認されており、見過されているわけではけっしてない。

20世紀初頭にはさらにこの麻織業経済圏の研究にとって見過しがたい、きわめて重要な史料が発掘され、発表されている。1901/1902年に相次いで *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte* に発表された *Das Zollbuch der Deutschen in Barcelona 1425~1440 und der deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhunderts* (1901年, S. 111~160, 1902年, S. 1~35 および 352~417所収) がそれである。これによってスペイン側から見た南ドイツ麻織業の進出と輸出の状態とが、また同時にその貿易に従事した商人および商事会社の活動の状態が一層明らかにされることになったのである。Konrad Häbler による偉業といえるであろう。

以上のほかに、ザンクト・ガレン麻織業を直接のテーマとして研究されたものに、1932年に発表された、Johannes Häne, *Leinwandhandel und Leinwandindustrie im alten St. Gallen*, Fehr'sche Buchhandlung, St. Gallen と、

1936年発表の、Fritz Wielandt, *Leinwandgewerbe am Bodensee (Bodenseebuch, 1936年, S. 23f. 所収)* とがある。いずれもこの麻織業経済圏でのザンクト・ガレンの活動を中心課題としたものである。

以上のほかに、史料集としていずれの文献にも利用され、すでに1941年には松田智雄教授によって紹介されもしている²⁾、Alfred Schelling, *Urkundenbuch zur St. Gallischen Handels-und Industrie-Geschichte* が1922年に出版されている。これは、ザンクト・ガレンの商工業に関する816年から1433年までの間に関係している史料が集められているもので、その解説によって、麻織物取引一般などに関する史料に直接触れることが可能となったのである。史料についてとくに重要な文献は上述した Hektor Ammann の *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft* である。詳細については後段で触れるが、スペイン各地でのこの商事会社に関する関税帳簿などの史料の発掘は特筆に値するものである。

このほか、直接ザンクト・ガレンの麻織業に触れてはいなくても間接的には扱われているものとして、1884年発表の Wilhelm Heyd, *Der Verkehr süd-deutscher Städte mit Genua während des Mittelalters (Forschungen zur Deutschen Geschichte, 24. Bd., 所収 S. 215ff)* や1902年の Gustav. v. Below, *Zur Geschichte der Handelsbeziehungen zwischen Süddeutschland und Italien (Historische Zeitschrift. 53. Bd. 所収 S. 215ff)*, さらに1917年の Lotte Weber, *Die Anfänge des deutschen Leinengewerbes (Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins, 50. Bd., 所収 S. 77ff)*, 1936年の Heinrich Kramm の *Landschaftlicher Aufbau und Verschiebungen des deutschen Großhandels am Beginn der Neuzeit gemessen an den Familienverbindungen des Großbürgertums (Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, XXIX. Bd., 所収 S. 1ff)*, 1954年の Hektor Ammann, *Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf (Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte, XIII. Jg., 所収 S. 150ff)*, および, *Deutschland und die Tuchindustrie Nordwesteuropas im Mittelalter (Hansische Geschichtsblätter, 72. Jg., 所収 S. 1ff)*, さらに1959年の Johan-

nes Vincke の Zu den Anfänge der deutsch-spanischen Kultur und Wirtschaftsbeziehungen (*Gesammelte Aufsätze zur Kulturgeschichte Spaniens*, 14. Bd., Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung, Münster, 1959年, 所収 S. 111ff)などをあげることができる。また最近では, 1970年に Hermann Kellenbenz によって編集された著作, *Fremde Kaufleute auf der iberischen Halbinsel* (Böhlau Verlag, Köln, Wien, 1970)に取り上げられている2つの論文, Hektor Ammann, Deutsch-Spanische Wirtschaftsbeziehungen bis zum Ende des 15. Jahrhunderts (S. 132ff) と Wolfgang von Stromer, Oberdeutsche Unternehmen im Handel mit der iberischen Halbinsel, im 14. und 15. Jahrhundert (S. 156ff) とがこの問題に触れている。又, 時期的にはすでに十分フッガー (Fugger) 時代に入っているとはいえ, Hermann Kellenbenz の論文 Die Fremden Kaufleute auf der iberischen Halbinsel vom 15. Jahrhundert bis zum Ende des 16 Jahrhunderts (S. 265ff) がスペインを中心にそこからこの南ドイツ麻織業経済圏に注目している点で, またとくに近世への移行の視野からも, 重要な文献となっている。

注

- 1) *Sechs Jahrhunderte schwäbische Wirtschaft*, hrsg. v. Wolfgang Zorn, Leonhard Hillenbrand, Augsburg, 1969年, 所収 S. 1ff.
- 2) 松田智雄「フッガー時代 (15・16 C) における南独逸」『社会経済史学』第10巻第11・12号, 260頁参照。

第3節 ザンクト・ガレンの発達と麻織業の発展の状態

ザンクト・ガレンの都市としての発生の基盤は、一応、7世紀(614年)の修道院(Kloster)の設立に求めることができるであろう。その後、9～10世紀の修道院の繁栄が中世都市ザンクト・ガレンの成立のかなりの要因となったことは疑いない¹⁾。はやくも10世紀にはザンクト・ガレンは市場開催権を取得して商業取引を運営している²⁾。そればかりか954年には神聖ローマ帝国皇帝オットーI世よりボーデン湖畔のRorschachの市場開催権と貨幣製造権さえも獲得しているのである³⁾。

しかし、ザンクト・ガレンが中世都市としての様相をそなえてくるのは12世紀に入ってである。12世紀に従来の市場(Markt)を中心とした居住地域(Marktsiedlung)がしだいに都市の機能をそなえて発達する。例えば、1120年には貨幣製造所(Münzstätte)が存在していたことが後に確かめられているし⁴⁾、さらに1121年にはSt. Gallenが[civitas]として称され⁵⁾、さらに1170年にはSt. Gallenの居住民が、市場権をもち、手工業営業と自由な商業活動の権利を有する“市民(Bürger)”として史料に登場している⁶⁾。加えて、この期にはすでにこれらの市民のうちの一人が修道院から都市の関税徴収権を買い取るという現象もでてきている⁷⁾。いずれにしてもこのザンクト・ガレンは12世紀中に、市場開催、貨幣製造、手工業営業といった商工業の活動をほとんどそなえた中世都市として一応完成していたと見ることができるであろう⁸⁾。

つづいて13～14世紀の間にザンクト・ガレンは都市としての独立性を一層強固なものとしている。一般的に多くの中世都市はこの時期に封建領主権からの政治的独立に努めていたが、ザンクト・ガレンでもこの動向は示されている。13世紀にザンクト・ガレンはシュワーベン都市同盟に参加し、ついで14世紀初頭の1311年に自由都市としての独立を達成した。そしてつづく14、15世紀にザンクト・ガレンは幾つかの発達段階を経験した。ザンクト・ガレンのいわゆるOberstadtやAltstadt区域はこの14～15世紀に形成されたのである。当時ザ

ンクト・ガレンの市内面積は13ヘクタールであった⁹⁾。

中世都市に特徴的な都市の外壁 (Stadt-Mauer) の構築は、このザンクト・ガレンでは1422年になされている。この時にこの外壁で囲い込まれた都市面積はわずか7ヘクタールであったが、しかし都市としての支配・活動領域はその周辺を含んで25ヘクタールであったことが確認されている¹⁰⁾。

中世都市の構造上重要な要素であるツンフト制度の成立は、ザンクト・ガレンでは14世紀中期になされている¹¹⁾。ツンフト制度が導入されたこの14世紀中期は、ザンクト・ガレン麻織業が都市の経済的基盤として一応の体制を整えた時期であった。例えば、1349年には染色業 (Bleiche) が修道院による管理運営から都市当局による運営に委譲されているし、また、1354年には都市当局によって、麻織物製品を取扱ふ外来商人に対する関税徴収が実施されたりしているからである¹²⁾。さらに、麻織業営業規則の導入や麻織物検査規定の導入もやはりこの時期に完了しているのである¹³⁾。

こうしてみると、8世紀にはすでにおこなわれていた周辺農村地域から修道院への納税 (Abgabe) 用の麻織物生産をこの都市ザンクト・ガレン麻織業の初期とみると、それから14世紀中期にかけての6世紀の間にこの麻織業が中世都市ザンクト・ガレンの経済構造上、必要不可欠な生産的基盤にまで発達したことになる。そしてこうしたザンクト・ガレンの麻織業の発展は、この南ドイツ麻織業経済圏のなかでも決して遅いほうではなかったのである。外国貿易の面は除外しても、生産一般に関しては、先に述べたコンスタンツ (Konstanz) やイスニー (Isny) などと並んで、麻織業の存在そのものはすでに13世紀には十分史料でも確認されているところである¹⁴⁾。しかしこの経済圏の主導性は上述したように当初コンスタンツが握っていた。例えば上に見たザンクト・ガレンの麻織物検査制度の導入がコンスタンツをそのまま模倣したということなども、ザンクト・ガレンの後進性を示している¹⁵⁾。

ザンクト・ガレン麻織業の発展がこの地域経済圏のうちに存在する数多くの中小都市のなかで卓越した姿を示すようになるのは、ようやく15世紀をこえてからである。例えば、1429年にはそれまで修道院が権利を所有していた麻織物

計量の実施を都市当局が引継いでいるし¹⁶⁾、さらに結果的には失敗してしまうことになったが、ウルム (Ulm) から麻綿交織布 (Barchent・ファスチアン織布) の検査制度を導入する努力もみられている¹⁷⁾。さらに1450年には14世紀以来導入がなされていた麻織物営業規則 (Leinwandsatzungen) が再編纂されているし、1452年には再度、都市当局による正式な麻織物検査制度 (ordentliche Leinwandschau) が導入されているからである。

これらの諸制度の整備、再編成は、15世紀のザンクト・ガレンにとっての麻織業の重要性をそのまま物語るものであろう。しかもこれらにつづいて60年代、70年代にも都市当局による制度上の検討が再々繰り返されているのである¹⁸⁾。

ザンクト・ガレンの経済一般でみると、14世紀後半にはこの都市はかなりの繁栄期をむかえ、その結果1422年の外壁構築の実現にいたったのであったが、15世紀にはこの繁栄がさらに継続したようにおもわれる。例えばザンクト・ガレンの納税者数からみると、15世紀を通して900~1,200名の間を上下しているのであるが、その1,200名を記録した時代は15世紀の末期なのである¹⁹⁾。15世紀のザンクト・ガレンの人口数はほぼ4,000人であったから、都市の規模としてはこの周辺地域のなかでもチューリッヒ (Zürich) やベルン (Bern)、バーゼル (Basel) よりも小さく、ルツェルン (Luzern) やシャフハウゼン (Schaffhausen) と並ぶ程度のもので、特別有力な都市であったわけではない。

この15世紀にザンクト・ガレンはこの麻織業経済圏のなかでしだいに主導的地位を確保する。つまり13~15世紀にかけてのコンスタンツの地位を受け継ぐわけであるが、先には周辺の農村や中小都市が自己の生産物をそのコンスタンツに納入したように、15世紀末期にはKonstanzの商標に代ってザンクト・ガレンの商標が市場流通力をもつようになったのである。コンスタンツにとっての問題点はおそらく15世紀に入るとすぐの10年間に表面化したツunft闘争であった。これを一つの原因として、しだいに営業上の力を失い、15世紀におけるザンクト・ガレンによる地位の交代をゆるするのである²⁰⁾。

15世紀後半にたかまったザンクト・ガレン産麻織物の名声は、多くは布の質の良さによるものであった。とくに1452年の検査制度導入後は、それまでコン

スタンツがすぐれていた仕上げ工程での質の管理、統制をザンクト・ガレンがそのまま継承したため、さらに15世紀末にはザンクト・ガレンが一層この麻織物促進策 (Leinwandpolitik) に力を注いだ結果²¹⁾、名声と信頼とが一層高まったのである。例えばラーフェンスブルク (Ravensburg) の「大ラーフェンスブルク商事会社」がザンクト・ガレンの麻布 (Leinwand) を扱い、さらにザンクト・ガレンの仕上げ工程での漂白 (Bleiche) 過程をこの商事会社が利用していたことや、コンスタンツの代表商人リュートフリート・ムントプラート (Lütfried Muntprat) の1428年の手紙の中に、166反の Tuch (布) をザンクト・ガレンの染色 (Bleiche) に出していることなどが知られているが²²⁾、これなどもこのザンクト・ガレンの名声をそのまま物語るものであるといえる。

一般的にみて、ザンクト・ガレンでも他の周辺中小都市と同様に、麻織業は都市内部だけの営業ではなく、周辺農村との分業関係を土台に運営されていた²³⁾。したがってザンクト・ガレンは周辺に散在していた農村の麻布の集荷場となり、しかもそれらを自己の生産物として処理し、また輸出に出したのである²⁴⁾。例えば、農村地区の生産した麻織物で生産地固有の名前で売却されていたものは、わずかに Allgäuer Bergen 地域のシュタウフェン (Staufen) だけであった²⁵⁾。そして、農村では比較的安い豊富な労働力の供給をうけて安い布の生産がおこなわれ、都市内部ではより良質の、より精彩な布の生産に力が注がれていたのである。そして、それらは一般的にみて都市市民の需要をはるかにうまわっていた。つまり生産は大部分が外国向、輸出市場用なのであった²⁶⁾。

ところでザンクト・ガレンが生産した麻織物は麻布 (Leinwand) であった。当時の麻織業圏にはこのほかに上述したファスチアン織布 (Barchent) があった。これはこの地域の北東、つまりウルム (Ulm) アウクスブルク (Augsburg)、メミンゲン (Memmingen) などが中心であったが、このほかに Biberach, Kaufbeuren, Landsberg など中小都市でも、それぞれ周辺の農村地域を含んだ Barchent 織業が盛んであった。ザンクト・ガレンは結局この Barchent 織業の移植育成には成功しなかった。上述した1427年のウルム (Ulm) からの Barchent-Schau (ファスチアン織布検査) の導入の失敗もそのことを示して

いる。

ザンクト・ガレンはこのように、この経済圏の麻布生産とそれらの輸出に重要な機能をはたした。検査制度の適格な運営によって、規格に合格した製品のみがはじめて商品として貿易取引に供給されたから、布の良質さと種類の多様さとして、各地での名声を博したのである²⁷⁾。

15世紀末までにみられたこの地域でのザンクト・ガレンの主導的地位の確立は、周辺地域の中小都市に対する経済的支配という形態でも示されている。例えば、周辺の中小都市、Wil や Appenzell, Toggenburg, Lichtensteig や Thurgau 地方の北に位置する Arbon や Bischofszell, また農村では Amriswil や Altstätten, Rheineck などはずべてザンクト・ガレンが自己の取引の運営のもとに統轄していた²⁸⁾。15世紀末に Wil や Arbon, Bischofszell などでは、このザンクト・ガレンからの独立をめざして検査制度などを独自に設置するようになるが、しかし多くの製品がザンクト・ガレンに直接運びこまれるか、そうでなくてもザンクト・ガレンの商標 (Zeichen) を受けたうえで輸出されていたのである²⁹⁾。

以上のようにザンクト・ガレンの麻織業はコンスタンツとほぼ同じように、周辺農村および中小都市との分業形態を維持しつつ主導的地位を確立していたのであり、15世紀末の繁栄の後も17世紀の30年戦争の頃まではひきつづきその活動が維持されていくのである。

注

- 1) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, 1953, S. 293. 942年には市場の創設と貨幣鑄造に関する最初の史料が存在している。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens im Mittelalter, 1928, S. 134.
- 2) Peyer, H. Conrad, *Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520*. 1960, S. 4.
- 3) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 293 および, Schelling, A., *Urkundenbuch zur St. Gallischen Handel- und Industrie-Geschichte*, S. 3.

- 4) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz, S. 363. ただし Schelling の史料では St. Gallen の Markt は 1228年, Münzstätte は1240年として示されている。Schelling, A., a.a.O., S. 141.
- 5) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 4.
- 6) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 363 および Schelling A., a.a.O., S. 4, Urkunden Nr. 11. そして同時にこの期にはすでにこの都市に関税徴収制度も成立していた。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 134.
- 7) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und der Ostschweiz, S. 363 および Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 4.
- 8) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 293.
- 9) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 294.
- 10) ebenda.
- 11) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 6.
- 12) ebenda. これ以前には1303年から St. Gallen 修道院が支配した麻織物関税 (Leinwandzoll) があった。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens im Mittelalter, S. 142.
- 13) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 142. ただし Peyer によれば, 史料には1364年と明示はされているが実際に都市の官吏による検査は1407年からであったという方が信頼できるとしている。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 19.
- 14) 例えば史料をもとに比較された各都市の麻織業の存在は, Konstanz が1255年, Augsburg が1276年, Isny がほぼ1250年, に対して St. Gallen は縮充工程 (Walke) の存在が1244/72年, 漂白工程 (Bleiche) の存在が1274/81年であり, 決して遅いわけではない。Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 289.
- 15) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 6.
- 16) ただしこれの最終的な完了は1457年であった。Peyer, H., Conrad, a.a.O., S. 6.
- 17) ebenda.
- 18) ebenda. また1477年からは都市参事会に記録簿の設置が制度づけられているが, これなども都市の商工業の活動の重要性を物語る材料としてうけとることができる。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 143.
- 19) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 150. さらに St. Gallen の発展に関しては当時の納税額の水準の上昇などによっても知ることができる。例えば15世紀のはじめ1人当りの平均課税財産額は1422年の数字で50 グルデン (Gulden) であったが, 1520年には1人当り 120 Gulden に上昇している。この額は当時のオーバー・ドイツ地方

やスイスでもほとんど例のないものであった。Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, 1923, S. 8. また St. Gallen の漂白加工済布の生産量の増加もこの発展をうらずけている。例えば Peyer によれば 1400年には2,000反であったものが、1530年には10,000反に増加しているのである。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 7.

- 20) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 152. さらに例えば, Konstanz の凋落の具体的例示として Ammann は, 1482年~83年にかけてのヴェニス向けの貨幣送金にさいしてそれが St. Gallen を経由してなされ, Konstanz 経由でなかったことをあげている。つまり Konstanz には当時すでにヴェニスとの取引を行なっている商人が存在していなかったとみているのである。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 153.
- 21) 詳細については Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 10ff.
- 22) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 512.
- 23) 都市と農村の分業関係は農村がほとんど織布工程だけを, 都市がそれらの布の漂白 (Bleiche) や染色 (Färben) 工程をとくに専門的に扱っていたことに示されている。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 145.
- 24) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 139.
- 25) ebenda.
- 26) ebenda.
- 27) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 143. St. Gallen の名声は, 例えば1433年にこの都市が皇帝シギスムント (Sigismund) に麻布 (Leinwand) を贈っていることや, 1517年には, 都市 Krakau で購入された St. Gallen 産布がやはり宮廷に贈られていることなどにも示されている。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 153.
- 28) 例えば St. Gallen から Nürnberg への通商路途上にある Steinach では1459年から1490年まで関税徴収権が St. Gallen によって掌握されていた。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 32.
- 29) 例えば Wil 産の麻布 (Leinwand) は St. Gallen への供出品として1477年, 94年, 1511年, 1530年に記録されている。さらに Bischofszell 産麻布も St. Gallen に運ばれている事実が明らかである。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 148. さらに1482年には従来とは逆に Konstanz が今度は St. Gallen の商標の使用を求めるまでになっている。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 8.

第4節 ザンクト・ガレン麻織業の輸出市場

ザンクト・ガレン (St. Gallen) の貿易商人がヨーロッパ各地にこの都市産

の麻布をたずさえて頻繁に行商するようになるのは、ようやく14世紀中期以降である。例えば各地の史料に確認されている年代をあげれば、イタリアのベニス (Venedig) への登場が1362年、フランクフルト (Frankfurt am Main) の大市での取引が1371年、ミラノ (Mailand) の1375年、ニュルンベルク (Nürnberg) の1387年以前、パッサウ (Passau) の1401年などである¹⁾。この14世紀中期は麻織物生産面でも都市の営業運営体制が整ってきた時期であったから、ヨーロッパ各地への恒常的な輸出がそれを基礎にして促進されたのであったとみることもできる。しかし、ザンクト・ガレン商人の活動、あるいは麻織物輸出の例は、個別的にはもちろんそれよりもはるかに早く、また都市の全体的発展からみても、はるかに規模が大きくかつ盛んな輸出活動であったことを跡づけることができる。

もともとザンクト・ガレン商人自体の存在だけでみれば史料を1170年にまでさかのぼることができる²⁾。次いで、13世紀初頭には Ulrich Blarer と Radluf Spiser という名のザンクト・ガレンの商人がジェノア (Genua) で麻布と胡椒との交換取引を行なっている³⁾。

この13世紀には、コンスタンツをはじめとする麻織諸都市がヨーロッパ各地に、とりわけシャンパーニュの大市に多く進出していた。イタリアや地中海方面にもその延長として進出し、1204年にはドイツ産麻織物がジェノア (Genua) で、さらに1264年にはペルシア (Percia) にまで輸出され、それとは別にシリア (Syria) へも売却された事実がわかっている⁴⁾。いずれにしても13世紀にはとくに地中海地域ではかなり各地にこの南ドイツ・ザンクト・ガレン産の麻布が行きわたっていたことが認められるのである。

南ドイツ麻織圏にとって、とくに初期の市場で重要であったのはやはりシャンパーニュの大市取引であった。この大市に最初から登場しているのは第2章でみた通りコンスタンツであった。ザンクト・ガレンはそれよりもはるかに遅れて、ようやく14世紀にこの大市でイタリア商人などとの取引をおこなっている⁵⁾。全体的に見れば、シャンパーニュ大市からスペインへ向けての対南西地域取引の延長と同時に、イタリアに向けての延長がなされ、それと同時に従来

からの、イタリアに向かうアルプス越えの2.3のルートが通商をさらに一層促進したのである。

まず従来から存在し利用されていたアルプス越えのルートでは、ザンクト・ガレンは Bündner Passe を多く利用した。つまり Septimer 峠や Splügen 峠、Lukmanier 峠などを通過するルートである⁶⁾。Septimer 峠の利用については史料に明白な裏付けがのこっている。ただ、同じイタリアへの通商路であってもベニスへのコースは Arlberg やブレナー (Brenner) 峠が頻繁に用いられていた。1336年以後の Feldkirch や Arlberg での関税免除や、このザンクト・ガレン所属の後述するディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社がインスブルック (Innsbruck) を経由して取引を行っていたことなどがこのコースによる通商の事実を裏付けている⁷⁾。

対イタリア取引での中心都市はベニス (Venedig)、ミラノ (Mailand)、ジェノア (Genua) の3都市であった。なかでもベニス (Venedig) との取引はかなり頻繁におこなわれていた。例えば、1362年、1368年にザンクト・ガレンの Johann という商人がベニス (Venedig) から石鹼を輸入しているがその時の輸出品が麻布 (Leinwand や Zwilch) であった⁸⁾。そして15世紀にはザンクト・ガレンの代表的商事会社、ディースバッハ・ワット商事会社 (Diesbach-Watt-Gesellschaft) の一員である Watt 家や Zwick 家の商人がこのベニス (Venedig) で、例えば1430年に取引に従事している⁹⁾。さらに15世紀の後半にはザンクト・ガレンの商人 Zili のようにベニス (Venedig) との取引の専門家として知られるようになった商人も出てきた。例えば1487年 Johann Zili は有名なドイツ商館 (Fondaco dei Tedeschi) 内に専用の事務所を、さらに市内にはドイツ商人用の宿舎を所有するほどに成功したのである¹⁰⁾。

ミラノ (Mailand) との取引は史料に確認されているものは1375年の記述が最初である¹¹⁾。しかしミラノ (Mailand) との取引がかなり頻繁になってきたのはやはり15世紀に入ってからである。ザンクト・ガレンからの輸出品は麻布、馬、ワックスなど、輸入品は高級ビロード布、絹布やイタリアとの国境に近いコモ (Como) 産の布などであった¹²⁾。またザンクト・ガレンは1454年に関税

免除を含んだミラノ (Mailand) との都市協定の成立に努力している。そして1477年にはこの目的を達成したのである¹³⁾。ミラノ (Mailand) からさらに進んだフローレンス (Firenze) との取引ではメジチ家の商人との貨幣取引もなっていた。ザンクト・ガレンの商人はこれらフローレンス産の布や上述のコモ (Como) 産の布などを東ヨーロッパなどに売却したのである。

ミラノ (Mailand) を経由してジェノア (Genoa) に入る通商路はさらに重要なルートであった。ジェノア (Genoa) は一方では地中海を海上から船でスペイン市場へ向うための交易港であり、また遠くレヴァント地域への積出港でもあった。ザンクト・ガレン産麻織物は古くからこの地を經由してこの方面の各地へ輸出されていた。この地での取引に関する最も古い史料は、1239年と1277年にザンクト・ガレンの商人が麻布 (Leinwand) を売却し胡椒を購入したという記録である¹⁴⁾。さらに15世紀には、ディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社の出資者でもあったザンクト・ガレンの Konrad Hör がオーバー・ドイツ地方を代表して、関税の扱いについての交渉でこのジェノア (Genoa) に滞在したこともあった¹⁵⁾。

ジェノア (Genoa) からのルートの一つであったスペイン市場への進出は、羊毛やサフランなどの輸入と麻布輸出という交易のために比較的早くから実現されていた。とくにディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社や Mötteli, Othmar Schlöpfer などの商人の活動が顕著で、16世紀にいたるまでこの海上通商が継続されている。

ザンクト・ガレンから陸上通商路を通して南フランス、スペインへのルートも対イタリアルートにおとらず盛んであった。もともとこの方面への通商路は幾通りかのコースが利用されていたがいずれにとっても途中第一の販売市場はフランスのリヨン (Lyon) であった。そしてここからローヌ川を下ってアビニオン (Avignon) へ、そしてそのまま下って Bonc に出、そこからスペインのバルセロナ (Barcelona) に海上から向う道と、アビニオン (Avignon) から陸上を Montpellier, Perpignan を經由してバルセロナ (Barcelona) へ向う道とに分れていた。これらの通商路については、ラーフェンスブルク (Rave-

nsburg)の代表會社、「大ラーフェンズブルク商會社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」の活動と關係が深い¹⁶が、ザンクト・ガレンのこのリヨン (Lyon) での取引は残念ながらあまり伝えられていない。わずかに1481年にザンクト・ガレンの商人 Ludwig Vogelweider が¹⁷ Lyon から Solothurn に向う途中かなりの水害にあつて被害をうけたという記事だけが伝えられている¹⁸。

リヨン (Lyon) とならんでそれ以前から大市取引が発達していたジュネーヴ (Genf)¹⁹でも当然ザンクト・ガレンの商人の活躍が考えられる。前述したようにこの大市には14世紀末にウルム (Ulm) の商人が登場しコンスタンツ (Konstanz) 産麻布が1375年には輸入されてもいる²⁰が、ザンクト・ガレンに直接關する記録は残されていないように思われる。ただ、Genf や Lyon の大市での取引では、商品取引に付随して生じる貨幣支払いや支払い請求、フランス人との給料支払いや宿泊費などに関する送金業務などが重要な取引としておこなわれている²¹。この貨幣取引にザンクト・ガレンの商人 Vogelweider や Hochreütiner などが参加しておりリヨン (Lyon) には専用の事務所 (Kammer) さえ所有していた。そしてこのリヨン (Lyon) や Jougne からザンクト・ガレンの商人が Besançon やさらにフランスの内陸地域へも取引の領域を拡大していったのである²²。

さらに進んでスペイン (Spanien) との取引も一層頻繁におこなわれていた。スペインのバルセロナ (Barcelona)、バレンシア (Valencia)、サラゴッサ (Saragossa) などのいずれの都市にもザンクト・ガレン出身の商人や商會社のいずれかが經營する支店 (Niederlassungen) などがおかれていた²³、このことがこのスペイン市場の重要性を物語っている。もともとスペインとの直接取引の開始は、14世紀をこえると顯著になったシャンパーニュ大市取引の衰退に原因するものと言われているが、例えばザンクト・ガレンでは、ようやく15世紀前半期にディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 會社による麻布輸出に求められる。それは Barcelona と Perpignan の關稅帳簿に記録されていることから確認されたものである²⁴。この史料は後述するように1425年から14

45年迄のもので、K. ヘブラー (Häbler) によって発表されたもの²³⁾と、1429年から45年までのものが存在している²⁴⁾が、これによってこの商事会社によるザンクト・ガレン麻織物の輸出の状態が明らかになった。これらの記述のほかには、1430年に Diesbach-Watt 会社が計画したサフラン取引での途上、アビニヨン (Avignon) でその商品の差押えを受けたということなども伝えられている²⁵⁾。さらに、Saragossa と Tortosa との中間に位置する Azoo と Miravet という町の官吏によってザンクト・ガレンのモテリ (Mötteli) 会社の商用上にあつた Kaspar Zollikofer なる人物が1464年に身柄を拘束されたという史実もある²⁶⁾。さらにスペインでの取引では、モテリ (Mötteli) 会社の商人の例だけを見てもバレンシア (Valencia) を越えアルメリア (Almeria) からグラナダ (Granada) などにまで到っているのである²⁷⁾。

ザンクト・ガレンのスペイン・カタロニア (Katalonien) での取引は以上のように1428年の記録が最初で、それも専らディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 会社の営業活動に依存していた。しかし15世紀も後半に入つて1460年頃になるとこの Diesbach-Watt 会社に代つて上でも見たモテリ (Mötteli) とツォリコーファー (Zollikofer)、ホッホロイティナー (Hochreutiner) 家出身の商人による活動が顕著になってくる。例えば1481年には Barcelona の関税表にドイツ産麻布という表示のほかに Konstanz, Sankt Gallen の表示が確められているが²⁸⁾、これなどもこうした商人によって搬入されたものと思われる。

スペインへの輸出品もその第一は麻布であつた。そのほかにはザンクト・ガレンがニュルンベルクやポーランド (Polen) から輸入した毛皮、ワックス、金属製品などが主たるものであり、スペインからの輸入品はもっぱらサフラン、染料、種々の香料などであつた。

次にライン川を下るヨーロッパ西北地域との通商では、フランクフルト (Frankfurt am Main) の大市が重要な目的地となつていたことは疑いない。ザンクト・ガレンからこの地への通商路もおよそ3通り利用されていたが、ニュルンベルク、ヴェルツブルク (Würzburg) 経由の通商路では、例えば1472年にザンクト・ガレンの商人 Conrad Goldast がウィーン (Wien) との取引

の必要から Nürnberg 経由でフランクフルトに向っているものがある²⁹⁾。このニュルンベルクとフランクフルトとの独自の通商関係もかなり強かったようで、この都市間の通商路ではかなり厳重な取締りと通商上の安全とがはかられていた。このことはザンクト・ガレンの商人 Caspar Schappelor の証言の中にも伝えられている³⁰⁾。また、ザンクト・ガレンからフランクフルトへの途中にある Buchhorn の関税帳簿でもこの間の通商が裏付けられている³¹⁾。

ライン川を直接下る通商路、つまりツルザッハ (Zursach)、パーゼル (Basel)、ストラスブルク (Straßburg)、マイnitz (Mainz) などを経由しフランクフルトに入るルートも同様に利用されていた。この途中のシャフハウゼン (Schaffhausen) やまたとくにツルザッハ (Zursach) の大市でも麻布の取引が頻繁に行なわれている。パーゼル (Basel) もザンクト・ガレンの商人と競争しあるいは協力してこの麻布取引にあたっていた。さらにコルマー (Colmer) ではザンクト・ガレンは関税免除の特権をうけていた³²⁾。

このフランクフルトの大市ではザンクト・ガレンの商人は、麻布の販売と同時に低地地方産の毛織物の買い入れとを主たる業務としていた。そしてそれに加えて、ザンクト・ガレンがイタリアや、スペイン、後述するポーランドなど各地から仕入れた商品と、ケルン (Köln) やアムステルダム (Amsterdam)、ロンドン (London) などの商人が持ち込んでくる商品とを交換したのであった。この意味でフランクフルトの大市はヨーロッパ南北東西の経済的な中心であった。ザンクト・ガレンの商人はさらにこの大市取引を越えて低地地方などへも進出している。例えば1488年には Hans Schwainberg がアントワープ (Antwerpen) に、さらに1492/93年にはそれとは別の商人が Bergen op Zoom とアントワープ (Antwerpen) での取引に従事している³³⁾。またこのアントワープ (Antwerpen) では上述した「大ラーフェンスブルク商社会社」もザンクト・ガレン産麻布の販売を行なっている³⁴⁾。またこの地域からさらに北フランスの地域へも進出していた。

ザンクト・ガレンからヨーロッパ東地域への通商は上述のニュルンベルクを経由しておこなわれていた³⁵⁾。したがってこの間の通商路は上述のフランクフ

ルト大市への通商と重なっていわば幹線通商路であった。例のラーフェンスブルク (Ravensburg) はこの通商路の途中にあり、ここに本店 (Sitz) をかまえた「大ラーフェンスブルク商事会社」はザンクト・ガレン産麻布の輸出を主要な業務としていたため、Ravensburg とザンクト・ガレン間の取引も非常に盛んであった³⁶⁾。さらに、ウルム (Ulm) とは、ドナウ川流域への通商のために、つまり Regensburg, Passau, Wien 方面への起点としての性質から、また近郊のノルトリンゲン (Nördlingen) とはここに大市取引が開催されていた関係もあって、ザンクト・ガレンとの取引が盛んであった³⁷⁾。ザンクト・ガレンとこのニュルンベルク (Nürnberg) との取引は比較的早く、だいたい14世紀の後半には繁頻になってきている。例えば、ザンクト・ガレンが早いうちに獲得していた Nürnberg での関税免除権は1387年に相互の協定として確立しているし³⁸⁾、それ以後15世紀を通してニュルンベルクはザンクト・ガレンにとって重要な販売市場となったのである。

このニュルンベルクから北に向う通商路ではリューベック (Lübeck) が重要であった。例えば1442年にはザンクト・ガレン産麻布が販売されている³⁹⁾。この通商路には Bamberg, Koburg, Erfurt などの中小都市があった。ただ上述の1442年の取引でもザンクト・ガレン出身の商人自身によって販売されていたかどうかになると必ずしも明らかではない。ニュルンベルクにおいてはしばしばリューベック (Lübeck) の商人にも直接麻布が売却されているところから⁴⁰⁾、リューベックの商人によって持ち込まれた可能性も強い。また、この方面でのもう一つの重要な販売市場はライプツヒ (Leipzig) の大市であった。この大市にもザンクト・ガレンの商人が直接、取引に参加していた。このことは例えば、ザンクト・ガレンからこの大市への通商路上に位置している Erlangen や Kronach, Zeitz などザンクト・ガレン産商品が押収されていることや、Forchheim で、Götz von Berlichingen によるザンクト・ガレン商人に対する強盗事件などが生じていることによっても確かめられるものである⁴¹⁾。

それよりさらに東地域では、ウィッテンベルク (Wittenberg) やベルリン (Berlin) を経由してフランクフルト・アン・デア・オーデル (Frankfurt an

der Oder) 方面にも輸出されていた事実があり、また、1474年にザンクト・ガレンの商人 Vogelweider と Ulrich Krum とがベルリン (Berlin) からライプチヒ (Leipzig) への帰途ウィッテンベルク (Wittenberg) の近郊で強盗に襲われているし⁴²⁾、さらにこのフランクフルト (Frankfurt a.O.) を越えて Posen や Thorn, Warschau にまでもその足跡がおよんでいたことも伝えられている⁴³⁾。

ポーランド (Polen) の内陸では、上述の通商路のほかにも Nürnberg から Bayreuth, Zwickau, Dresden を経由してブレスラウ (Breslau) に至るルートが利用されていた。この方面では、例えば1406年にザンクト・ガレン産商品が Auerbach で押収された事実があり、また1413年にはザンクト・ガレンの商人が Eger と Weißenstadt との間の途上でこれも強盗に襲われたことも伝えられている⁴⁴⁾。この地域の中心都市であったブレスラウ (Breslau) では当初ザンクト・ガレンのディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社が活躍していたが、1460年以後は、別のザンクト・ガレンの商人の活動がそれに代っている。例えば、1444年にディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 会社は商品のワックスを、運送手段の都合からであるとされているが、Breslau から Zwickau-Nürnberg という通常の通商ルートによらないで、ライプチヒ (Leipzig) に運び込んでいる⁴⁵⁾。この Breslau からさらに進んだクラカウ (Krakau) にもザンクト・ガレンの足跡は印されている。さらに Posen から Thorn, Waschau さらにはダンチヒ (Danzig) にもザンクト・ガレンの製品が輸出されていた⁴⁶⁾。これらの輸出にどの程度までザンクト・ガレンの商人自身が直接従事していたかは明らかではない。しかし、Kiew か Lemberg からのワックスの買入れなどにはザンクト・ガレン商人の介入がはっきりと知られている⁴⁷⁾。

ニュルンベルクから東の地域ではこのほかにもボヘミア (Böhmen) での活動が知られている。例えばザンクト・ガレンの商人がアウクスブルク (Augsburg) の商人の使用人として1432年にレーゲンスブルク (Regensburg) からピルゼン (Pilsen) への通商路上、Taus の近郊で傷害事件にまきこまれてい

るし、さらに1439年には4人のザンクト・ガレンの商人が Sachsen から プラハ (Prag) への途上、Laun の近郊で身柄を拘束されるという事件に遇っている⁴⁸⁾。またプラハ (Prag) では、ディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt)、商事会社の使用人が書いた1451年の日付の遺言状も残されているし、ディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社の創設者であるニクラウス・ディースバッハ (Niclaus Diesbach) 自身も再三、この地に滞在し、取引に従事していた⁴⁹⁾。

ザンクト・ガレンからドナウ川を下った地域ではウィーン (Wien) が第一の販売市場であった。ウィーン (Wien) までに Ulm, Regensburg, Passau を経由しているが、上述したように1401/02年にはパッサウ (Passau) の関税帳簿にザンクト・ガレンの商人が麻布を持参して通過したことが印されている⁵⁰⁾。さらに1425年にはニュルンベルクの商人がザンクト・ガレン産製品をこのパッサウ (Passau) で差押えられるということもおこっている⁵¹⁾。とくに後者の場合、ザンクト・ガレン商人以外の商人がこの麻布販売に従事していたという手懸りになるものである。都市ウィーン (Wien) でははやくも1358年にザンクト・ガレン商人の集団居住区が存在してことが知られている⁵²⁾、さらに15世紀にはこの Wien—ザンクト・ガレン間の取引が一層頻繁になっているように思われる。例えば1465年には Claus Stoß とその会社がここで営業活動をしているし⁵³⁾、さらに Conrad Goldast は1472年に自己の販売用商品を携帯して Wien から Nürnberg 経由でフランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Maim) へと向っている⁵⁴⁾。またこの Wien の16世紀初頭の市場規則に関する取り決めの際しても、常にザンクト・ガレンの麻布のことがイスニー (Isny) やケンプテン (Kempten) などの周辺都市とならんで取り上げられているのである⁵⁵⁾。これらはそのままこのウィーン (Wien) 市場の販売市場としての重要性を物語るものであろう。

ウィーンのほかに、この地域でのザンクト・ガレン産麻布の流通は、例えば、チロル (Tirol) の領主 (Herzog) であった Johann の1336年の通行許可証 (Geleitsbrief) にザンクト・ガレン産麻布のことが記入されていることなど

によって証明されている⁵⁶⁾。

ウィーンを越えてハンガリーでの取引も伝えられている。ハンガリー (Ungarn) への道はこのウィーン経由のほかにクラカウ (Krakau) 経由もあった。16世紀初頭, Krakau で仕入れられたザンクト・ガレン産麻布が Zips の領主 (Großgrafen) に贈与されているし, 1480年にもザンクト・ガレンとハンガリー (Ungarn) との取引があり, また1484年には, ザンクト・ガレンの市長となっていた商人ルートヴィヒ・フォゲルヴァイダアー (Ludwig Vogelweider) がハンガリー (Ungarn) の国王に推薦紹介されるということなども行なわれていた⁵⁷⁾。

以上のようにザンクト・ガレン産麻布は, 時期的にはコンスタンツ産のものよりも遅かったにせよ, ヨーロッパ各地に輸出されていた。そしてそれらの輸出業務はラーフェンスブルクやコンスタンツにおいて特別に発達した商事会社が見られたように, このザンクト・ガレンでも輸出の多くがザンクト・ガレンを本拠にする商人や商事会社によって担当されていたのである。

注

- 1) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft, 1380 ~1530*. 1923, S. 40.
- 2) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 4.
- 3) ebenda.
- 4) このドイツ産麻布がはたしてこの南ドイツ麻織業圏のものであるかどうかは確められてはいないが, Ammann はほぼ間違いなしとしている。これらの史料とは別に, Ammann が1953年に発表した前掲の論文で, 新しく発掘した地中海地域からの史料によって, Konstanz 産麻布が1205年 Genua で, Augsburg 産麻布が1237年 Bozen で, さらに St. Gallen 産麻布が1262年に Genua で取引されていることを明らかにしており, 南ドイツ麻織物輸出商人の13世紀でのこの地域への進出が一層裏付けられている。Ammann, Hektor, *Die Wirtschaftsstellung St. Gallens*, S. 183 および ders., *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes*, S. 289.
- 5) このほか St. Gallen 修道院によるイタリア商人 (römische kaufleute) との貨幣取引もなされている。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 26.
- 6) これらの峠の利用は947年の Rorschach の市場開催権に関する史料にも暗示されている。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 26.

- 7) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 26.
- 8) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 28. および H. アマン (Ammann), Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 160.
- 9) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 26.
- 10) ebenda.
- 11) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 28.
- 12) ebenda. さらにこの Como のほかに, 1493年には同じくイタリアの都市 Arona am Langen See の市への訪問も伝えられている。Ammann, H, a.a.O., S. 161.
- 13) ebenda.
- 14) ebenda. これによって先の Ammann の指摘した1262年よりさらに何十年か早い活動が認められたことになる。
- 15) ebenda.
- 16) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 29.
- 17) もともとジュネーヴ (Genf) の大市の方が15世紀には盛んであったが, 15世紀の60年にはリヨン (Lyon) の大市が Genf をおい抜く発展をしめしている。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 162.
- 18) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes S. 269-270.
- 19) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 30.
- 20) ebenda.
- 21) Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 162.
- 22) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 29.
- 23) 第2節研究史の K. ヘブラー (Häbler) の文献を参照していただきたい。なお, Häbler の発掘したものは1425~40年までで, その後のものは Ammann が別の文献から発掘したものである。Ammann, Hektor, Die Diesbach-Watt-Gesellschaft, 1928, Urkunden No. 50.
- 24) Ammann, Hektor, a.a.O., Urkunden No. 52.
- 25) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 29.
- 26) ebenda.
- 27) このほか Ammann によればスペインの東海岸の Löwengolfe でも St. Gallen 商人の活動が確められている。Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 162.
- 28) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 29 および Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 276.
- 29) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 30.

- 30) ebenda.
- 31) ebenda.
- 32) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 31.
- 33) Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 162. および Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 31.
- 34) この時の取引では会社は St. Gallen の麻布をジュノア経由で海上をアントワープ (Antwerpen) までではこんでいる。Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 31.
- 35) もともと St. Gallen と Nürnberg との直接の取引も極めて重要であった。商品は St. Gallen からの麻布に対して Nürnberg 産の金属製品が中心であった。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 161.
- 36) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 32.
- 37) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 161-2.
- 38) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 32. および Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 261.
- 39) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 32.
- 40) ebenda.
- 41) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 33. 及び Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 163.
- 42) ebenda.
- 43) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 162-3.
- 44) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 33.
- 45) ebenda.
- 46) ebenda.
- 47) ebenda.
- 48) ebenda.
- 49) ebenda.
- 50) ebenda.
- 51) ebenda.
- 52) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 34.
- 53) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 163.
- 54) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 34.
- 55) ebenda.
- 56) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 21.
- 57) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 34.

第5節 ザンクト・ガレンにおける商事会社の貿易活動

1 ディースバッハ・ワット商事会社の設立と概要

上述したようにザンクト・ガレン (St. Gallen) 産麻布はヨーロッパの各地の主要な経済的中心地に販売市場をもっていた。これはザンクト・ガレンだけでなく南ドイツ麻織業経済圏のそのほかの中心都市コンスタンツ (Konstanz) ラーフェンスブルク (Ravensburg) の貿易活動でも見られることであった。

ところでこれら各都市の貿易活動は、個々の貿易商人による活動も大切であったがそれ以上に各都市をそれぞれ本拠とする商事会社 (Handelsgesellschaft) の活動に多くを依存していた。この麻織業圏だけでも例えば再三上述したラーフェンスブルクの die Große Ravensburger Handelsgesellschaft, コンスタンツの Hundpiß, Muntprat, Mötteli などの諸会社, メミンゲン (Memmingen) の Handelsgesellschaft der Vöhlin, Sättelin, Besserer などの会社, さらに Zangmeister 会社, ケンプテン (Kempten) の Vogt-Gesellschaft などがあり, さらにアウクスブルク (Augsburg) の会社では, Paumgartner や Meuting-Gesellschaft, Welser や Fugger. ニュルンベルク (Nürnberg) では Imhof や Tuchergesellschaft などがその代表であった。15~16世紀の南ドイツではこうした数多くの商事会社によって種々の経営活動が担当されていたのである。

ザンクト・ガレンでも貿易活動の多くがこうした商事会社によって経営されていた。例えば C.H. Peyer によれば, 1480年にはザンクト・ガレンには12の Handelsgesellschaft が存在し, それぞれ貿易に従事していたし¹⁾, 1486/87年の Buchhorn の関税帳簿からも当時ザンクト・ガレンには28の Firma が存在していたことが伝えられている²⁾。さらに1460年から1520年にかけては次の15の Gesellschaft が存在していた。つまり, die Haus von Watt-Amgraben-Krum, die Enggasser-Grübel, Die Flechsner, die Hochrütiner, die Mötteli, die Särri-Vogelweider, die Oppentzhofer, die Rugg, die Schittli, die Sitz,

die Studer, die Vogelweider, die Vonbul, die Zili, die Zollikofer の15の会社である³⁾。

これらの商事会社はいずれも15世紀にザンクト・ガレン麻織業の輸出業務に従事したものであったが、これらの商事会社の先駆的役割を負って15世紀初頭に創設されたものが、すでに上で部分的に触れた、ディースバッハ・ワット商事会社 (Diesbach-Watt-Gesellschaft) である。

この Diesbach-Watt 会社の活動期は15世紀前半であった。ザンクト・ガレンでとくに活動の顕著な商事会社はこのほかにモテリ (Mötteli) 会社、ツォリコーファー (Zollikofer), ホッホルーティナー (Hochrütiner) があるが、いずれもこの Diesbach-Watt 会社の活動を引き継ぐかたちで発展している⁴⁾。

Diesbach-Watt 会社とザンクト・ガレンとの結びつきは密接であったが、もともとの会社への出資者はザンクト・ガレンだけにとどまらずに、ベルン (Bern) やバーゼル (Basel), ニュルンベルク, 遠くは Breslau などからも参加していた。しかしその設立と指導にたずさわった中心人物は、スイスのベルン出身の Diesbach 家の商人とザンクト・ガレン出身の Watt 家の商人であった。会社の創立は、Diesbach 家の初代ともいふべきニクラウス・ディースバッハ (Niklaus Diesbach) が築きあげた商業活動と自分で経営する商事会社とをもとに、ザンクト・ガレンの商人 Watt 家の Peter von Watt と Hug von Watt との共同経営活動の開始という形態で実現された⁵⁾。Niklaus はしばしばフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市にも登場するベルンを代表する商人であった。会社の設立年代は、H. アマン (Ammann) によれば遅くとも1428年には求められるとしている。それはこの年にスペインでのこの会社による貿易活動が確認されているからである⁶⁾。

この会社の取扱う輸出商品の第一はザンクト・ガレン産麻布であった。この麻布輸出の比重が大きかったことは、もともとの会社の本部 (Sitz) がベルンであったにもかかわらずザンクト・ガレンがこの会社の扱う麻布を創立の当初からほとんど独占的に供給し、その結果会社にとってこのザンクト・ガレンが本拠地以上に重要な都市となったことにも示されている⁷⁾。

2 ディースバッハ・ワット商事会社の貿易活動—スペイン市場の例—

ディースバッハ・ワット商事会社の活動領域は、前章にみたザンクト・ガレンの活動領域のほとんどすべてに及んでいる。会社の支店経営はこのことの有力な手懸りになるのであろう。支店やそれに代る通商関係は、Nürnberg, Genf, Avignon, Barcelona, Valencia, Saragossa, Venedig, Genua, さらに Prag, Posen, Breslau, Krakau などに存在し、また結ばれている⁸⁾。これらを取引の拠点として貿易が行なわれたがそれ以外にも多くの地域との通商関係をもっていた。

会社の営業にとってとくに重要な都市は、ベルン (Bern), ザンクト・ガレンとニュルンベルク (Nürnberg) であった。前の2都市はいうまでもないが、ニュルンベルクはとくに東地域との拠点として重要であったばかりでなく、販売活動のほかにこの地のとくに金物製品の購入が会社にとって重要な仕事であったからである。ここに支店がおかれ、しかもその代表者には長い間ペーター・フォン・ワット (Peter von Watt) 自身が従事していた。このことによってその重要性がうかがえるであろう。ニュルンベルクがこの会社にとって重要な位置を占めていたのは、例えばこれから扱うスペイン市場などにおいても多くのニュルンベルク商人がディースバッハ・ワット商事会社の取引にかなり集团的に参加していることなどにも示されているが、以下この会社そのものをテーマとしたものとしては唯一の文献と思われる H. アマン (Ammann) の著作によって⁹⁾、ザンクト・ガレンからスペイン市場までの取引を追っていきたい。

もともとフランス南部からスペインにかけては、南ドイツ商人一般の活動でも、ロース川流域とフランス南部さらにピレネー山脈への地域に重点がおかれていた。ローマ教皇のアビニオン (Avignon) での捕囚時代であった14世紀前半期にはこの方面にかなりの輸出がなされていたがその延長としてスペインへの通商も盛んになった。会社の関係でこのルートを追ってみると、最初の取引地ともいえるスイスのフライブルク (Freiburg im Uechtland) で Niklaus von Diesbach 自身が取引を行なっているし、さらに会社の商人 Peter Schöpfer が 1442年にこのフライブルク (Freiburg) に旅し、1445年には自分の父

親宛に商品を送付している。次の取引地のジュネーヴ (Genf) ではこの会社は Niklaus von Diesbach の時代に常駐の支店を設置していた¹⁰⁾。Niklaus による営業は1428, 1430, 1431年にも確認されている。Peter Schopfer もしばしばこの地の大手で取引を行なっている。また1445年には Peter Schopfer と Wernli という名の商人の2人でこのジュネーヴ (Genf) の大手を訪ずれている。さらに同時期に会社の使用人コンラート・フォン・キルヒェン (Konrad von Kilchen) とトーマス・フィッシャー (Thomas Fischer) とがジュネーヴ (Genf) を通過し、前者が西へ、後者は東へ向ったことも伝えられている。ジュネーヴ (Genf) と並んで有名であったリヨン (Lyon) やフランス南部とはニクラウス・フォン・ディースバッハ (Niklaus von Diesbach) がおよそ30年間にわたって取引に従事している。また、この Lyon から Burgund, Paris, Rouen などにも取引が拡大されている。

スペインへの通商路に沿っては、Romans an der Isère という場所に Peter Schopfer が2度その名前を残している。ローヌ川を下ったアビニオン (Avignon) にも会社は支店を設置していた。この Avignon 支店での取引については、1443年にこの支店が26バレン (Ballen) の麻布を在庫として保管していたという記述が残っている。さらにローヌ川左岸の Bouc では、この地がスペインへの海上取引の積出港としての関係から、会社の関係者がしばしばこの地を訪問している。例えば1443年にはこの Bouc からベニスのガレー船が南ドイツ産麻布を積出している。会社の商人 Peter Schopfer もこの地を訪れている。また、アビニオン (Avignon) から バルセロナ (Barcelona) に向けて直接ローヌ川を下るルートでは、1444年に一度利用され、スペインに商品が運送された。

Montpellier, Perpignan を経由して陸上からスペインに至る陸上通商路も、バルセロナ (Barcelona) を第一の目的地として会社がしばしば利用した。この途中の Montpellier については例えば Peter Schopfer の手紙などに何回も記録されている。さらに1442年には Peter がバルセロナ (Barcelona) に向けてこの地を通過しているし、1445年には同じく Peter Schopfer が会社の使用

人であった Wilhelm Geltinger なる人物の死亡のことを連絡してきている。

スペインでのディースバッハ・ワット商事会社の活動は想像以上に大規模なものである。Katalonien と Argonien, Valencia などが主な活動場所であった。もともとスペインでの南ドイツ商人一般の活動は14世紀から始まっており、15世紀後半期にはバルセロナを中心とする各地の都市との取引が最盛となった。上述したようにすでに1380年にはこの地での取引が開始されていたが、とくに1425年以後からの関税帳簿に¹¹⁾ドイツ商人およびディースバッハ・ワット商事会社の取引がかなり詳細に記録されているのである。

これらの関税帳簿に、1428年から1445年にかけて商事会社の代表として、Gaspar de Vat の名が登場している。これがディースバッハ・ワット商事会社であったかどうかは不明なのであるが H. アマン (Ammann) は、すでに当時 Niklaus がバルセロナに支店をかまえていたこと、しかも Niklaus の死 (1436年) の直前にその支店の長が Kaspar Ruchenacke なる人物であったこと、しかもこの地に会社が独自の社屋を所有するまでになっていたことなどから、この Gaspar de Vat をザンクト・ガレンの Kaspar Ruchenacker と同一人物であるとみなしている。したがって会社の活動の足跡をこれに求めるのである¹²⁾。

これらの関税帳簿を総括した H. アマン (Ammann) の研究によると、ディースバッハ・ワット商事会社のバルセロナ (Barcelona) での、またバルセロナを経由した商品流通は表 3-1 の通りとなる¹³⁾。この表に示されている通り、1428～45年の間にかかなりの増減はみられるものの、1443年のピーク時のおよそ 1万8,000バルセロナ・プフント (Barcelona Pfund) まで、かなりの上昇趨勢を示していると言える。スペイン (Spanien) への輸出品に対してスペインからの輸出品の額が全般的に高いことは、当時のスペイン—南ドイツ間貿易が常にドイツにとって入超であったことを示している。スペインへの輸出品の大部分が麻織物 (Leinwand・Barchent) であったとしても、スペインからのサフラン等を主とする輸出品の額がはるかに上まわっていたことは、この会社の仲介商業的性格をもそのまま示すものとみることができる。

表 3-1 ディースバッハ・ワット商事会社によるスペイン市場での取引 (1428-1445年)

(単位：バルセロナ・プフント)

年	バルセロナ			アラゴニア及びカタロニア			バルセロナ (特別取引)			全 体		
	輸 入	輸 出	合 計	輸 入	輸 出	合 計	輸 入	輸 出	合 計	輸 入	輸 出	合 計
1428	827.—	568.—	1,395.—							827.—	568.—	1,395.—
1429	214.—	1,636.05	1,850.05		782.—	782.—				214.—	2,418.05	2,632.05
1430		1,113.10	1,113.10	990.10	3,256.—	4,246.10				990.10	4,369.10	5,360.—
1431	1,104.—	1,344.—	2,448.—		1,809.—	1,809.—				1,104.—	3,153.—	4,257.—
1432	1,794.—	949.10	2,743.10		2,690.—					1,794.—	3,639.10	5,433.10
1433	164.—	4,016.10	4,180.10		3,764.—	3,764.—				164.—	7,780.10	7,944.10
1434	1,193.—	3,277.—	4,470.—		2,093.05	2,093.05				1,193.—	5,370.05	6,563.05
1435		1,316.15	1,316.15		960.—	960.—					2,276.15	2,276.15
1436	817.—	2,617.10	3,434.10		1,044.—	1,044.—				817.—	3,651.10	4,468.10
1437		151.10	151.10		2,622.—	2,622.—	2,144.—		2,144.—	2,144.—	2,773.10	4,917.10
1438	374.15	734.—	1,108.15		2,714.10	2,714.10	3,980.10		3,980.10	4,355.05	3,448.10	7,803.15
1439	510.—	2,743.10	3,253.10		3,367.10	3,367.10	3,010.—	50.—	3,060.—	3,520.—	6,161.—	9,681.—
1440	2,480.—	342.—	2,822.—		12,963.10	12,963.10	1,062.—		1,062.—	3,542.—	13,305.—	16,847.10
1441	1,101.—	1,836.—	2,937.—		3,916.—	3,916.—	504.—	1,390.—	1,864.—	1,605.—	7,142.—	8,747.—
1442	1,188.—	5,682.—	6,870.—		4,153.15	4,153.15				1,188.—	9,835.15	11,023.15
1443	2,979.—	8,917.15	11,896.15		5,757.—	5,757.—				2,979.—	14,674.15	17,653.15
1444	3,403.—	4,349.10	7,752.10		2,503.10	2,503.10				3,403.—	6,853.—	10,256.—
1445					4,870.05	4,870.05					4,870.05	4,870.05
	18,148.15	41,595.05	59,744.—	990.10	59,266.05	60,256.15	10,700.10	1,440.—	12,140.10	29,839.15	102,291.10	132,131.05

出典：Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, S. 71.

このディースバッハ・ワット商事会社の貿易活動が南ドイツ麻織業圏全体の活動のなかでどのくらいの比重を占めていたかについては残念ながら明らかにすることはできないのであるが、K. ヘブラー (Häbler) が発掘した関税表の解説によれば、このバルセロナの関税表 (1425~40年) に示されているドイツ商人のうちで一番取引額の多いのはラーフェンスブルク (Ravensburg) のフンピス (Humpisgesellschaft) 会社で、およそ総額の半分を占めている。次には同じくラーフェンスブルク (Ravensburg) の上述した「大ラーフェンスブルク商事会社」(die Große Ravensburger Handelsgesellschaft) がつづき、このディースバッハ・ワット商事会社は第3位にランクされている¹⁴⁾。したがって、この会社がこの経済圏を代表する商事会社であったことはもちろん、ザンクト・ガレンの麻織物輸出では群を抜いた高い業績をなしていたことが当然考えられるのである¹⁵⁾。しかも、これらの数字はディースバッハ・ワット商事会社の取引のすべてを網羅するものではない。とくにバルセロナからの輸出品の場合、実際の輸出の量の4分の3以上はここに記入されていないとも考えられているから¹⁶⁾、その点を考えれば、この貿易のドイツにとっての入超の割合が一層大きくなるのではあるが、しかしそれだけ取引量は多かったと考えられるのである。

関税表の輸入欄は南ドイツなどからの輸出品を意味するものであるが、そのうちどのくらいの割合で麻布が取引されていたのかの詳細な数字は明らかでない。ただほとんど大部分が麻織物で占められていたことは想像にかたくない。麻布商品輸出の例として1度だけであったが1年に120バレン (Ballen)、額にして5,000ライン・グルデン (rheinischen Gulden) もの麻織物が陸上運送されてこの地に輸入されている事実がある。このときの最大の供給者がザンクト・ガレンなのであった¹⁷⁾。さらにバルセロナより手前の Perpignan でも1439/40年に120バレン (Ballen) 以上の麻織物 (Leinwand と Barchent) を Gaspar de Vat の取引として通過させた記述も存在している¹⁸⁾。さらに1443年には92バレン (Ballen)、約4,000ライン・グルデンのザンクト・ガレン産麻布がスペインに向けて輸送され、会社の Peter Schopfer が Bouc 経由で陸上と海上か

らの輸送を指揮している¹⁹⁾。

麻織物以外では上述したようにニュルンベルク産金属製品があったが、その比率は麻布に比較すればそれほど大きくはなかったとおもわれる²⁰⁾。

スペイン (Spanien) からドイツへの輸出商品としてディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 会社が取扱ったものはサフラン (Safran) が第一であった。この取引で重要な地域は Safran の産地であったアラゴニア (Aragonien) であった。1430年にはこの地での最初の輸出の事実が記録されている。この地域の中心都市サラゴッサ (Saragossa) に会社の支店がおかれていたという確証はないが、しかし H. アマン (Ammann) はこの地に Niklaus の息子が滞在していたことなどから、この地での支店の存在を推測している²¹⁾。会社が取扱ったスペインからの輸出商品のうちでこのサフランの比重は10分の9という高い割合であったと推測されているが²²⁾、会社のスペインからの輸出品の額が異常に高いことなどからいっても、またさらにその他の輸出品が藍 (Indigo) や木綿 (Baumwolle)、香料 (Gewürze) 等²³⁾ にすぎなかったことから考えて、それは十分考えられるところであろう。また会社はバレンシア (Valencia) ではサフランの代りに乾燥した果実などを輸入品の中心としていた²⁴⁾。

すでに上に見たようにディースバッハ・ワット商事会社のスペインでの貿易活動は南ドイツ麻織業圏を代表する地位を占めていた。例えばバルセロナに支店をもち、しかも2人の社員を常駐させて取引に従事させておいた会社はこのほかには多くはなかった。バルセロナでの取引で、商品売上高においてこの会社以上の業績を示しているのは、この麻織物経済圏最大の「大ラーフェンスブルク商事会社」以外にはなかった²⁵⁾。ディースバッハ・ワット商事会社にとってはスペイン市場だけが活動の場ではなかったが、しかしスペイン市場が会社にとって営業の基幹的構成部分であったことによっても²⁶⁾、この会社による販売活動はザンクト・ガレン麻織業にとって不可欠の生存条件ではなかったかと思われるのである。

注

1) Peyer, H. Conrad, *Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von*

- Anfänge bis 1520*, S. 32.
- 2) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 57.
 - 3) ebenda.
 - 4) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft, 1380 ~1530* S. 512. 又, この Diesbach-Watt 会社の解体は1450年代とみられているが, 取引上の史料の最後のものは1451年のものである。解体後 Watt が自立して貿易取引を行なった形跡もある。Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, S. 74. および Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 7.
 - 5) このきっかけは Peter と Hug とが Niklaus の Diesbach 会社に雇用されたことによってはじまった。当時は2人ともさしたる財産の所有者ではなかったが, 父親 Konrad の死などによって Hug von Watt は St. Gallen でも 1, 2 を争う高額富裕市民となった。Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, 1928. S. 23-24. および Peyer, H. Conrad, a.a.O., 卷末納税表参照。
 - 6) ただ Ammann は1418年の Breslau での取引で, Peter von Watt が代表している会社がおそらくこの Diesbach-Watt 会社ではなかったかと推測している。これをとれば設立は1410年代にまでさかのぼることになる。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 30-31.
 - 7) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 30.
 - 8) Ammann, Hektor, *Die Wirtschaftsstellung St. Gallens*, S. 165.
 - 9) Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, S. 62ff.
 - 10) Niklaus は Genf で取引をおこなったさい, 一度は 3, 500 Schilt の損失をこうむるなどしている。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 65.
 - 11) Barcelona の関税帳簿は前述したようにドイツ商人による輸出入の記録で1425-45年までである。その後のものは, 1467-80年の記録でその間も完全に収録されているわけではない。もう一つの関税帳簿はドイツ商人の Katalonien と Aragonien での取引の一部が記載されているもので1425-45年である。さらにはもう一つ1437-41年のドイツの商事会社の特別会計簿 (Sonderrechnung) も存在している。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 68-69.
 - 12) さらに Niklaus の3人の息子の末子の Hans が1430年をこえた頃に Barcelona で商業の徒弟教育を修了しているが, このことも裏付けとなる。この当時 Barcelona は多くの南ドイツ商人の子弟の職業教育の場でもあり, 多くの商人見習い生 (Lehr-linge) が滞在していた。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 69. および 73.
 - 13) Ammann, Hektor, *Die Diesbach-Watt-Gesellschaft*, S. 71.
 - 14) Häbler, Konrad, *Das Zollbuch der Deutschen in Barcelona (1425-1440) und der Deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhunderts*,

in *Württembergische Vierteljahrshefte*, X. Bd., 1901, S. 130-131. また、ここに紹介されている Humpis 会社の取引内容が Diesbach-Watt のそれと異なって、輸入商品の量（つまりドイツからの輸出量）がかなり多い輸出黒字貿易であることは注目に値することである。Häbler, Konrad, a.a.O., S. 141.

- 15) 例えば Barcelona には常に2人の常駐社員が滞在していたことなどもこれを裏付けている。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 72.
- 16) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 70.
- 17) ebenda.
- 18) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 74.
- 19) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 73.
- 20) 麻織物以外にはこのほかフェルト帽 (Filzhute) がかなりの比率を占めていた。S. Ammann, Hektor, a.a.O., S. 70-71. 又、商品だけでなく Nürnberg の商人と Diesbach-Watt 会社との共同活動も行なわれた。1443年と1447年には Diesbach-Watt 会社のスペインでの取引に20人もの Nürnberg 出身の商人が加わっている。Wolfgang von Stromer, *Oberdeutsche Untermehmer im Handel mit der iberischen Halbinsel im 14. und 15. Jahrhundert*, in *Fremde Kaufleute auf der iberischen Halbinsel*, hrsg. v. Hermann Kellenbenz, 1970, S. 157.
- 21) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 75-76.
- 22) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 72.
- 23) Häbler, Konrad, a.a.O., S. 332, 339, 341, 342.
- 24) Valencia ではこの外に砂糖、米なども輸入していた。また大ラーフェンスブルク商事会社はここに支店を所有していたばかりでなく砂糖精製所 (Zuckersiederei) まで経営していた。Ammann, Hektor, a.a.O., S. 76.
- 25) Ammann, Hektor, a.a.O., 74.
- 26) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 77.

第6節 ザンクト・ガレン商業の衰退と周辺都市の商業発展

ザンクト・ガレン (St. Gallen) で当時、麻織物輸出に従事していた商事会社はこのディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社だけではない。例えばかつては「大ラーフェンスブルク商事会社」の共同出資者でありながら1450年代にザンクト・ガレンに移住したモテリ (Mötteli) 会社なども、スベ

んの Granada や Almeria まで取引の足をのばしている¹⁾。さらにルートヴィッヒ・フォーゲルヴァイダー (Ludwig Vogelweider) 商事会社もスペインからイタリア、ライプツヒ、ハンガリーなど各地での活動が裏付けられている²⁾。そのほかホッホルティナー (Hochrütiner) 会社やツオリコーファー (Zollikofer) 会社もディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 会社同様、ドイツ、フランス各地の大市を起点として、スペイン、イタリアなどで活躍していた³⁾。

ところでこれらの会社の多くは15世紀後半に、つまりディースバッハ・ワット商事会社の活動がおとろえるに従って台頭したものであった。上述のモテリ (Mötteli) 会社はラーフェンスブルク (Ravensburg) から移住したものであったし、Zollikofer はコンスタンツ (Konstanz) から、Hochrütiner, Schittli は Appenzellerland からこのザンクト・ガレンに移住してきたものであった⁴⁾。したがって15世紀後半のザンクト・ガレンの発展はディースバッハ・ワット商事会社の築きあげた貿易領域をその解体後に受け継いだこれらの諸商事会社によって維持されていたといえることができる。

ディースバッハ・ワット商事会社の貿易活動は、スペイン市場の例で見たようにザンクト・ガレン一般の貿易範囲をほとんど網羅するものであった。このことはそのほかのヨーロッパ地域でもいうことができる⁵⁾。ところで、15世紀を通して発展したザンクト・ガレン麻織業も16世紀に入ると、とくに貿易面での衰退が顕著となる。代表的商事会社である大ラーフェンスブルク会社の例に見られるように、麻織物取引に従事する商事会社は活力を失ってくる。代ってアウクスブルクやニュルンベルク出身の商人や商事会社が台頭する⁶⁾。ジュネーヴにおいてもこの傾向がはっきりみられる。例えば16世紀初頭にこの都市の大市を訪問した会社の中では、ニュルンベルクのトゥッハー (Tucher) やアウクスブルクのマンリッヒ (Manlich)、メミンゲン (Memming) のツァングマイスター (Zangmeister) やフォーリン (Vöhlín), などの台頭が顕著となっている⁷⁾。16世紀末期になればこの趨勢は一層顕著となる。例えば1579年9月16日にはじまる Lyon の市場帳簿 (Handels-register) に登録されている73のオ

ーバー・ドイツ地方からの会社 (Firma) 名によって、当時どの都市との交易が頻繁であったかを知ることができるのであるが、その内訳ではニュルンベルク所属の会社 (Firma) が24、アウクスブルク所属の会社 (Handelsgesellschaft) が35で、この両者だけでその8割以上を占めるにいたっている。このほかでは、ウルム (Ulm) の 6、ストラスブルク (Straßburg) の 6、コンスタンツ (Konstanz)、ケルン (Köln) はそれぞれ1を占めているにすぎない⁸⁾。

このように、コンスタンツ、ザンクト・ガレンを中心とした南ドイツ麻織業経済圏は、16世紀に入ると顕著に構造上の転換を示す。貨幣取引を中心とする南ドイツの初期資本主義の構造がこの期にいたると一層はっきりと前面に出てくることになるのである。次にこの南ドイツ麻織業経済圏最大の商社会社を輩出した都市ラーフェンスブルクと、同じく商社会社を数多く輩出した都市メミゲンにおける麻織物商業史をみたいと思う。

注

- 1) Ammann, Hektor, Die Wirtschaftsstellung St. Gallens, S. 165.
- 2) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 166.
- 3) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 167.
- 4) Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 7-8.
- 5) Diesbach-Watt 会社のそのほかのヨーロッパ地域での貿易活動については、Peyer, H. Conrad, a.a.O., S. 28. 以下を参照いただきたい。
- 6) 例えば1516年3月14日の日付でフランス国王フランツ I世による Lyon 市を訪ずれているドイツ商人に対する特権の賦与にさいしても、Nürnberg, Augsburg の商人や Ulm, Konstanz の商人の名は見い出せるが、もはや St. Gallen の名は見い出せない。Pfeiffer, Gerhard, Die Privilegien der Französischen Könige für die Oberdeutschen Kaufleute in Lyon, in *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, 53. Bd. 1965, S. 155.
- 7) Ammann, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, 1954, S. 71ff.
- 8) Hees, Karl Ver, Die oberdeutschen Kaufleute in Lyon im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts, in *Vierteljahrschrift für Sozial-und-Wirtschaftsgeschichte*, XXVII., 1934, S. 237.

第4章 ラーフェンスブルクにおける麻織業の 発展と商人・商事会社及び輸出市場

第1節 はじめに

第2章のコンスタンツ (Konstanz) や第3章のザンクト・ガレン (Sankt Gallen) を中心としたボーデン湖周辺の中世南ドイツ麻織業は、多くの中小都市と周辺農村の生産活動とによって発展したものであったが、それらの中小都市の1つにこの章で扱うラーフェンスブルク (Ravensburg) も加わっていた。この都市は、上の2つの都市ほど重要ではなかったが、しかし、大規模な商事会社の活動の拠点という意味では、上の2都市にけっして劣らない重要性を持っていた。いわゆるこの都市における「大ラーフェンスブルク商事会社」の存在である。

この商事会社は、当時としてはまれにみる長期間の活動 (1380年～1530年) を示した。その経営形態も、株式会社企業の発達史の上で極めて重要な形態として、今迄に多くの研究の対象とされてきたものである。貿易活動の規模もおそらく当時の企業としてはヨーロッパ1, 2に数えられるほどの大きさを持っていた。そして、そうした活動の有力な基盤にこの南ドイツ地域の麻織業が在ったことも、すでに数多くの研究が認めるところである。

本章では、すでに多くの研究によって明らかにされているこの会社企業の企業形態の面についてよりも、麻織物取引を中心とする会社の貿易取引に視点をあてて、この地域経済圏の盛衰との関連性を求めようとしたものである。16世紀を転機としてしだいに停滞するイタリアを中心とする地中海経済圏の性質を、

この南ドイツの麻織業経済圏も共有していたと考えられるからである。

第2節 ラーフェンスブルク麻織物商業に関する研究史

「大ラーフェンスブルク商事会社」の研究の第一人者はすでに上でもみたように A. シュルテ (Aloys Schulte) である。彼の大著 *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530* I. II. III (1923年) によってこの会社に関する研究は集大成されたといえると思う。もともと、この商事会社を対象とした研究はけっして多いものではなかった。おそらく1890年に W. ハイド (Wilhelm Heyd) によって発表された、*Die große Ravensburger Gesellschaft* (J.G. Cottáschen Buchhandlung, Stuttgart) が最初であったろうと思われる。この著作で、W. ハイドは、会社の名称や起源、指導者としてのフンピス (Humpiss) 家の商人やその他の商人の活動を明らかにすると同時に、会社の活動を追究した。対象とした地域は、ミラノ (Mailand)、ジェノア (Genua)、中部イタリア、南部イタリア、スペイン、ベルギー、オランダ、ドイツなどに及んでいる。さらに、取引された主要商品や会社の結末などについても詳しい説明をしている。

この W. ハイド (Heyd) の研究の後、1902年に A. シュルテのこの会社に関する最初の論文が発表された。Zur Geschichte der Ravensburger Gesellschaft (in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, XI. Jg., 1902, S. 96ff.) である。この論文は、W. ハイドが追究したベルギー・オランダ地域への会社の貿易活動に関する新しい史料を紹介したもので、ケルン (Köln)、アントワープ (Antwerpen) との取引や、ブラバント地方の年市への会社の参加の事実などを示している。また、ブリュージュ (Brügge) での2つの史料も紹介し、スペインから海路を用いたフランダース (Flandern) との取引の事実も示している。

こうしたケルンやブリュージュで発掘された史料をもとに、A. シュルテはラーフェンスブルク商事会社の研究を開始した。そしてその集大成は上述した

1923年の3冊の大著、論説だけでもⅠ、Ⅱ巻、800頁におよぶ著作となって完成された。最初の研究がおそらく1902年の論文であると思われるので、その間20年を越える研究であった。ただ1902年の「会社」に関する最初の論文が出る以前に、A. シュルテによる膨大な研究の蓄積があったことは言うまでもない。1900年に発表されている725頁におよぶ著作 *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluß von Venedig*, Verlag von Duncker & Humblot, 1900, の第7編において、中世後期のイタリア・ドイツ間の商品取引の状態を明らかにしている。「大ラーフェンスブルク商事会社」についても、その第54章において言及し、その後の研究の土台をすでにその時に築いていたのである。

A. シュルテが対象としたラーフェンスブルク商事会社に関する史料は、シュルテ自身がケルンその他の都市で発掘したもののほかにも、かなり多くの部分、長い歴史の運命をのりこえてそれぞれの都市で保存されていたものが含まれている。後述するコンスタンツ (Konstanz) の年代誌著述家の説明によると、会社の主要な史料が次のような運命をたどってシュルテの手に渡されている。つまり、1530年頃に会社は解散したが、その時に過去の想い出のためにと会社の経理長 (Rechnungsführer) であった Alexius Hillesohn なる人物が会社の種々の書類を自分の家に持ちかえり保存しておいた。そして、この人物の孫がサーレム (Salem) の修道院 (Cisterzienserkloster) の修道僧となったこともあって、結局、これらの書類は修道院の古文書室に持ちこまれ、長い間そこに保管されたままになっていた。その後、1803年に諸教会の国有化 (Säkularisation) が実施されたときにこの修道院も廃止され、それにともなって豊富な史料がバーデン・ヴュルテンベルク (Badenwürttemberg) 州のカールスルーエ (Karlsruhe) の州古文書館 (General-Landesarchiv) に移管された。しかしその際にもまだかなりの史料がこのサーレム (Salem) に残されたままであった。ラーフェンスブルク (Ravensburg) 会社の史料はいわばこの取り残された史料のなかにそのままに放置されていたのである。1911年にカールスルーエ (Karlsruhe) の州古文書館長であったカール・オブサー (Karl Opser)

博士がこれらの史料を発見したときには、開かれたままで野鳥の巣となっていた戸棚の中に、放置されたままであった、と伝えられている。A. シュルテがこれらの史料を手にしたのがこの1911年であるから結局それ以後12年にわたる研究のすえ、1923年の大著の発表となったのである。翌年の24年に A. シュルテは同名の論文を『シュモラー年報』に発表し (Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, in *Schmollers Jahrbuch*, Jg., 48., 1924, S. 213ff.), 史料の源泉、都市ラーフェンスブルク (Ravensburg) の発展の概要、会社の貿易圏、会社形態、会社の解散などについての概略を前年の著作の紹介にそえて説明している。

A. シュルテの大著はⅠ巻、Ⅱ巻が論説、第Ⅲ巻が史料集である。第Ⅰ巻には第1編から第6編までが収められており、それぞれ「会社」の成立、「会社」の法的・経済的組織、営業上の組織と技術、「会社」の人事、「会社」の社会的地位と文化的役割、取引市場、の説明にあてられている。第Ⅱ巻には第7編「会社」の経営危機、解散、競争会社、第8編 通商路、輸送、保険、第9編 商品、第10編、11編には「会社」の結末、第12編に貨幣・度量衡、の説明がなされている。これらの内容のうち、とくにここで問題とする地中海経済圏等の取引市場は、第Ⅰ巻第6編である。この第6編は第Ⅰ部イタリア、第Ⅱ部スペイン、第Ⅲ部ローヌ川流域、第Ⅳ部オランダ・ベルギー、イギリス、ケルン、第Ⅴ部フランクフルト、ニュルンベルク及び北東地域、ノルトリンゲン及びウィーン、第Ⅵ部オーバー・シュワーベン及びスイスとなっており、それぞれ詳細な説明がなされている。

A. シュルテのこの大著の出版後、1928年 J. マイヤー (Josef Mayer) によって、この「大ラーフェンスブルク商事会社」の概要と A. シュルテの研究の経過などが、コンスタンツの (Konstanz) 年代誌 (*Bodensee Chronik*, 1928, 17. Jg., No. 21-22, S. 82, 86-87) に紹介された。

わが国でもすでに早くからこの「大ラーフェンスブルク商事会社」の研究がなされている。大塚久雄教授による研究である¹⁾。大塚久雄教授は、この会社企業を主として企業形態史の対象として取り扱われた。その後、北村次一教授、

川久保公夫教授らによって、それぞれ西南ドイツの麻織業に関する諸研究が次々と発表され、この「商事会社」に関連する経済構造についても詳しい紹介と説明がなされてきている²⁾。

注

- 1) 大塚久雄教授論文「フッガー時代の南ドイツにおける会社企業」『経済学論集』2-4, 1932年所収, 及び『著作集』第10巻, 岩波書店, 昭和44年所収。同著「株式会社発生史論」第Ⅱ部, 中央公論社, 昭和22年, 31頁以下, 及び『著作集』第Ⅰ巻, 岩波書店, 昭和44年, 238頁以下参照。
- 2) 北村次一教授論文「西南ドイツ都市の手工業規制」『社会経済史大系』Ⅲ, 中世後期, 弘文堂, 昭和35年所収。川久保公夫教授論文「ドイツ『初期資本主義』と麻・綿織業の経済構造的特質」『経済学雑誌』第39巻第5号, 1958年所収, 同教授論文「近世前期のドイツ繊維産業」『社会経済史大系』Ⅳ, 近世前期, 弘文堂, 昭和35年所収, 及び同教授著『ドイツ初期資本主義の経済構造』, 法律文化社, 1961年など参照。

第3節 ラーフェンスブルクの発達と麻織業の発展

中世の最盛期にはほぼ5,000人の市民を擁したラーフェンスブルク (Ravensburg) は、その起源を、12世紀にまでさかのぼることができる。そして、その起源はかなり政治的な都合に満ちたものであった。8世紀以来ドイツの王族であったヴェルフェ (Welfe) 家が、ラーフェンスブルクの近郊に在ったアルトオルフ (Altorf) の居城をこの地に移し、移り住んだことをきっかけとして、この地が中世都市として発達したのである。1126年のことである。そしてすでにこの12世紀のうちにヴェルフェ (Welfe) 家居城の商人定住区として発展する。つまり1152年には、「市 (Markt)」が存在し、1180年頃にはこの都市の鑄造貨幣 (Münze) も存在していた。さらに、この都市の発展を推測させる材料は、1214年にこの都市の商人がジェノア (Genua) に絹の購入のために滞在していたこと¹⁾、これによってその頃までにこの町の経済的発展がかなり進んでいたことを知るることができる。また、市壁の建設の年代は、J. ミュラー

(Müller) や H. アマン (Ammann) の説明では1200～1220年の間に実現されたとみられているので²⁾、ラーフェンスブルクではすでに13世紀初期には、中世都市としての形態を一応完成していたといえることができる。また経済的な諸活動の面からいえば、この都市ははるかそれ以前の12世紀中期から都市としての活動を開始していたことになる。したがって、この南ドイツ地方ではこのラーフェンスブルクの発達は、近郊のメミンゲン (Memmingen) とほぼ同時期であったとみることができる³⁾。

この都市は1191年にはホーエンシュタウフェン (Hohenstaufen) 家の所領となった。そのために、フリードリッヒ (Friedrich) II 世や彼の息子がこの都市の居城を訪れ、また、フィリップ (Philipp) はここで宮廷会議 (Hoftag) をも開催したことがあった。その後、ドイツ皇帝空位期間の後、国王から任命されたオーバー・シュワーベン (Oberschwaben) 郡長 (Landvogt) が近郊のヴァイツブルク (Weizburg) に居住するようになった。そのため、ラーフェンスブルクの政治的重要性は一層強まることになったのである。

もともと、ラーフェンスブルクは、地理的な条件から考えれば、コンスタンツやウルムなどの麻織業と貿易の中心都市に比べてはるかに不利であった。コンスタンツがボーデン (Bodensee) 湖畔の交通の要所に位置し、ウルムがドナウ川の上流にあり、しかもアルプスを越える通商路上に位置していたのに対して、ラーフェンスブルクは、ただ、オーバー・シュワーベン地方のほぼ中心に位置していただけにとどまっていた。あえて商業通商路からみれば、ラーフェンスブルクがスイスからアルプスを越えてイタリア (Italien) にぬける途上にあったことであるが、しかしボーデン湖やライン (Rhein) 川、ドナウ (Donau) 川など、当時の主要な交通手段の恩恵には何ら浴してはいなかったのである。

13世紀の後半 (1270年頃) からラーフェンスブルクでは、新しい居住区が都市の古い市壁を越えて都市周辺に拡大された。このことはこの都市の人口が増加したこと、つまり市の人口扶養の基盤となっていた政治的諸要素に加えて、手工業及び商業の発達などが顕著であったことを推測させる。この都市の外域への拡大によって、面積は25ヘクタールに達したが⁴⁾、新しくはみ出した部分、

つまり Neue Stadt はそのまましばらくは市壁の外におかれたままになっていた。この新しい居住区が市壁で囲い込まれたのはようやく14世紀後半に入ってからである。1350年頃にその新しい構築作業が開始されている。1353年には都市内の家屋数は600を数え、さらにその増加は1400年のピーク時まで続くのである⁵⁾。

こうした都市の拡大を背景として都市そのものの機能もしだいに整備され、発展した。ラーフェンスブルクの都市法は14世紀の前半期(1325/35年)にその存在がすでに確認されている⁶⁾。また、都市の経済的発展を示すものとして、1353年にこの都市の商人がフランクフルト(Frankfurt am Main)の大取引に登場したという事実が残されている。

ラーフェンスブルクの発達には、また教会の発展によっても促進された。この都市の教区はもともと近郊のアルトオルフ(Altorf)の教区に属していた。ラーフェンスブルクがその教区から独立して単独の教区を形成したのは1299年であった。そしてその後、1335年にはフランシスコ会修道院が設置され、1349年にはカルメル会修道院がこの都市に入った。これらをきっかけとして各地の修道僧がこの都市を巡歴するようになり、このことがこの都市の商工業にかなりの影響を与えたとみられている⁷⁾。加えて、近郊のワインガルテン(Weingarten)にはベネディクト派の修道院が、ヴァイセナウ(Weißenau)には Prämonstratenser 修道院が、バインド(Baindt)にはシトー派修道尼院が設置され、ラーフェンスブルクの巨商、貴族の子弟との結びつきが一層促進されたのであった。

社会福祉に関する面でも、都市の発展がうかがわれる。市民の1人であるホルバイン(Frick Holbein)なる人物が高齢者や貧窮者のための施設を都市に寄付しているし、またハインリッヒ(Heirich)という名の市民が1408年に学校を寄付している例もある⁸⁾。

ラーフェンスブルクは政治的にも発達した。オーバー・シュワーベン(Oberschwaben)の他の都市と同様に、この都市の行政と裁判権は、ごく初期の時代を除いて、つまり郡の裁判所が行政をにぎっていた時代を除いて、都市領主

(Stadtherr) の手におかれていた。したがって、具体的な権力の行使者は、都市領主に直属の上級官吏 (Ammann) や官吏 (Beamten) であった。そして、都市の一般市民の力が台頭する以前には、都市領主と直結していた行政府の長 (Amtführer) には、しばしば「大ラーフェンズブルク商事会社」(die Große Ravensburger Handelsgesellschaft) の代表的人物を輩出するフンピス (Humpis) 家出身の商人などが多く任命されていたのである⁹⁾。

この都市領主支配の状態は14世紀末まで続いている。つまりそれまでは、都市が所属する土地領主 (=封建領主) の支配をそのまま受けていたことを意味する。ただその場合にも、都市領主は都市の上層のいわゆる貴族、大商人と結びついていた。そして、この支配関係は、14世紀の商業・製造業などの発達を背景としてしだいに変動しはじめていた。例えば、1383年には都市の裁判所 (Rat-Gericht) の権限が強化され、また市民による選挙も導入された¹⁰⁾。また、1383年から、それまでは都市領主や国王などによって任命されていた行政府 (Amt) の官吏が年々交代するようになった。都市裁判所の権限の強化によって都市の一般市民支配の伸張もうかがわれるが、しかし、財産や相続などに関する裁判権は、まだ従来通り、都市領主の指揮する官吏の権限に属したまま継続されていた¹¹⁾。

都市領主と直結していた行政府の上級官吏も、しだいに一般市民勢力の台頭によって後退しはじめる。すでに1220年頃には成立していた都市参事会 (Rat) が1347/48年には市長 (Bürgermeister) を選出するなどかなり早くから市民勢力が台頭したようにおもえるが、しかし一般市民の勢力がそのままこの都市参事会に代表されていたわけではなかった。むしろ、上級官吏として君臨していた上層市民がそのまま都市参事会を構成し、一般市民のごく一部の意見がこの参事会に加わっただけにすぎなかった。このことは、市長選出の上で最も強い権限を持っていたのが「門閥商人ツンフト」(Geschlechterzunft) であったことにも示されている。都市市民の力が都市領主に對抗するようになるとはいつてもその支配は実質的にはほとんど都市領主の支配とは変わらない一部上層市民の手ににぎられていたのである。しかし、ようやく、14世紀末頃から、上級官

吏に代って、都市の指導的地位には、市長直属の市庁局(Bürgermeisteramte)が登場する。都市内部の種々のツunft (Zunft) も行政単位として組織化された。当時、すべての都市市民は、当時存在していた8つのツunft (Zunft) のいずれかに加入しなければならなかった¹²⁾。都市市民を全体的に組織し、統制していたこの8つのツunft (Zunft) のなかで、政治的にも経済的にも有力であったものは、上にみた門閥商人ツunft (Geschlechterzunft) であった。このツunft (Zunft) の長 (Meister) はそのまま自動的に市長となった。そのほかのツunft (Zunft) は、それぞれ長 (Meister) を都市参事会 (Rat) に代表として派遣していたが、政治力はほとんどなかったといわれている¹³⁾。ただそれらのうちでも、織布匠ツunft (Weberzunft) は他に比してかなり有力であった¹⁴⁾。小売商ツunft (Detailhändlerzunft) は、門閥商人ツunft への商業職人層 (Geselle) などをしめ出して独自のグループを形成していたものであったが、このツunft (Zunft) は指導者が直接市長の指揮のもとにおかれており、マイスター (Meister) を持たなかったといわれている。

ラーフェンスブルクでは、他の都市、例えばコンスタンツなどにみられたような激しいツunft 闘争はみられなかった。門閥貴族、門閥商人対手工業者の対立は少くとも表面的にはみられなかった。門閥貴族・門閥商人による都市支配が平穏に継続されていたのである。手工業者はこの門閥支配のもとで、都市運営に協力していたとみられている。この政治的に平和で平穏な自治体という特色が、このラーフェンスブルクの発展に大きく貢献したことは疑いない。他の都市には追随を許さない大商事会社が設立され、その活動の拠点となった最大の条件はこの政治的安定であったとみられている。

経済的な発展とともに、この都市は領主や国王から種々の権利を獲得した。繊維製品に対する度量衡検査の権限や度量衡検査局の設立などは市長の権限となった。都市の関税権も1370年に都市当局が手中に収めている。さらに1400年頃には貨幣鑄造権も都市の権利となった¹⁵⁾。商業活動も活発となり、1400年には歳市が従来より延長されて2週間開催されるようになったという。また当時は、このラーフェンスブルクにも大市取引 (Messe) が開催されていたともみ

られている¹⁶⁾。

ラーフェンスブルクの経済的発展の土台となった産業は、このオーバー・シュワーベン (Oberschwaben) 地方の他の都市と同様に、麻を素材とする繊維業であった。麻布織布業 (Leinwandweberei) や粗麻布織布業 (Hanfweberei)、麻綿交織布又はファスチアン織布業 (Barchentweberei) などがある中心であった。これらの麻織業については、H. アマン (Hektor Ammann) の研究に詳しく紹介されているが¹⁷⁾、1325年から35年の間に成立したとみられている都市法にはすでにその活動が確認されており、また1330年以前に、ラーフェンスブルク市民以外の織匠による麻織物の販売に関する規則や麻糸 (Garn) 市場に関する規則等が存在していたことが確かめられている¹⁸⁾。また、1356年当時用いられたラーフェンスブルク産麻布の印章 (Zeichnung) も発見されている。さらに14世紀の後半にはこの都市にかなりのファスチアン (Barchent) 織布業が盛んとなり、それが都市の法律の記録の中にも見い出されている¹⁹⁾。

これらの麻織業以外には、製紙業 (Papierfabrikation) もかなり発達していた。“すかし” 模様で、牛の頭のデザインが入ったラーフェンスブルク産の紙は、この都市を流れるロースバッハ (Roßbach) 川の水力を利用し、また亜麻布製造のさいに産出される“繊維くず”が使用された。製造技術そのものは、ラーフェンスブルクの貿易商人などによってイタリアやスペインから導入されたものであったという。製造に従事していたのは専門の職人 (Geselle) で、家内工業として営まれていた。それらの職人の名が史料にも記録されており、1410年のヴォルフアーツホフナー (Wollfartshofer mit Heinz) や1421年のクンツ (Cuntz W.), 1427年のゲルトリッヒ (Heinrich Geldrich) などの名が伝えられている²⁰⁾。

ラーフェンスブルクの麻織業も周辺の農村との分業によって成立していた。ドナウ川の上流からアルプスにつらなる広い丘陵地に散在する農村から供給される原材料と、農村においてもなされた織布業が都市ラーフェンスブルク麻織業の前提をなしていた。そしてそれら農村の麻織業と都市の麻織業との結合は、主として商人やツンフト (Zunft) が中心となって担当していた。麻布の織布

に対する資金の前貸の方法も発達し、ツunft (Zunft) が賃銀織布工と前貸問屋商人との間をとりもち、毎年、秋のマーチン祭のときに織匠ツunft (Zunft) による共同の決済を行うというシステムもなされていた²¹⁾。その場合、借入の対象とされていた未納の布の納入期限は新しい年の2月2日の聖母マリアの祝日 (Lichtmeß) とされていた。このほか、都市内部の営業はツunft 規制によって織布作業に種々の制限が加えられていたし、また商人による注文を、一人一人の織匠に代ってツunft (Zunft) が一括して引受け、それを各ツunft メンバーに割り当りてるといったことも行われていた²²⁾。こうした種々の規則や営業の方法などはラーフェンスブルクだけでなくオーバー・シュワーベンの他の中小都市とほぼ同一の歩調をとっていたと思われる。例えば1476年にラーフェンスブルクの織匠は、リンダウ (Lindau) や、メミンゲン (Memmingen)、ケンブテン (Kempten)、ロイトキルヒ (Leutkirch)、イスニー (Isny)、ヴァンゲン (Wangen)、ヴァルトゼー (Waldsee) などの近郊都市と共同の諸規則を結んでいるからである²³⁾。いずれにしても、麻織業は都市の重要な経済活動であり、またそれが都市の有力な財源となっていたから²⁴⁾、都市当局による種々の統制政策の主要な対象とされていたのである²⁵⁾。

中世都市の統制政策は麻織業以外にもさまざまな分野にみられるが、このラーフェンスブルクでもこのほかに、穀物輸出やパンの供給に関するもの、食肉やワインの供給、近郊河川の漁業権に関するものなど、種々なものが行われていた²⁶⁾。

ラーフェンスブルクは、以上のように、オーバー・シュワーベンの地理的な特色を背景として、有数の麻織都市として発展した。そしてその発展は、この都市を本拠とする当時世界1,2の大商事会社の活動によって一層詳細に裏付けられるのである。次にそれをみてみたいと思う。

注

- 1) Amman, Hektor, Die Anfänge der Leinindustrie des Bodenseegebietes, in *Alemannisches Jahrbuch* 1953, Verlag von Moritz Schauenburg, S. 297.
- 2) Ammann, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes und

- der Ostschweiz, in *Zeitschrift für Schweizerische Geschichte*, 1943, 23. Jg., Zürich, S. 364.
- 3) Ammann, Hektor, *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes*, 1953, S. 300.
 - 4) Ammann, Hektor, a.a.O., S. 297.
 - 5) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380 ~1530*, S. 12.
 - 6) ebenda.
 - 7) Schulte, A., a.a.O., S. 12-13.
 - 8) ebenda.
 - 9) ebenda.
 - 10) それ以前に、例えば1293年にウルム都市法に市民による選挙が行われていたことが伝えられているが、それも実際にはほとんど形式的だけであったという。Schulte, A., a.a.O., S. 13.
 - 11) ebenda.
 - 12) この8つのツンフトの成立は1346/47年のオーバー・シュワープンのツンフト闘争のときにまでさかのぼる。これらのツンフトとは別に商人ギルド (Kaufleute-gesellschaft) も存在していた。Schulte, A., a.a.O., S. 13, 及び Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 - 13) 例えば1520年までの市長や上級官吏のリストによって、いかなる大商人でもこの門閥ツンフトに加入できなかった人物はそれらの要職には選出されなかったことが確められている。Schulte, A., a.a.O., S. 13-14.
 - 14) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 - 15) Schulte, A., a.a.O., S. 14.
 - 16) ebenda.
 - 17) Ammann, H., a.a.O., S. 251ff.
 - 18) Ammann, H., a.a.O., S. 265.
 - 19) ebenda.
 - 20) Schulte, A., a.a.O., S. 15, Mayer, J., *Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, in *Bodensee Chronik*, 1928, S. 86.
 - 21) Klaiber, Ludwig, *Beiträge zur Wirtschaftspolitik oberschwäbischer Reichsstädte im ausgehenden Mittelalter*, Verlag von W. Kohlhammer, 1927, Stuttgart, S. 31.
 - 22) Klaiber, Ludwig, a.a.O., S. 35.
 - 23) Schulte, A., *Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs*, 1900,

S. 623.

24) Klaiber, Ludwig, a.a.O., S. 24.

25) 例えばこれらのほかにも麻布の漂白強制は年2回、6月15日の聖ヴァイト祭と9月8日のマリア誕生祭の両日だけしかおこなわれなかった。それらはすべて多額の漂白料を徴収する必要からであった。Klaiber, L., a.a.O., S. 24. また、麻布の裁断や染色についても都市の強制的検査によって統制されていた。農村から運びこまれる麻布の検査なども同様であった。さらに、都市の財源としての必要性は、例えば1347年に新設された市庁局 (Bürgermeisteramt) の財源の保証のために麻織物収入が見込まれていた、ことなどにも示されている。Ammann, H., a.a.O., S. 265.

26) これらの詳細については、Klaiber, L., a.a.O., II. Teil, S. 41ff. 参照。

第4節 ラーフェンスブルクにおける商事会社の 貿易活動

1 大ラーフェンスブルク商事会社の設立

「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Revensburger Handelsgesellschaft)」の活動期間は、A. シュルテの著作の題名でも明らかなように、1380年から1530年までとなっている。しかしこの設立年代も解散の年代も確かな史実によって確かめられているものではない。設立はほぼ1380年頃であるし、あるいはより正確にいえば少くとも1380年頃まではさかのぼれるという意味にすぎない¹⁾。また、会社の解散時についてもほぼそれと同じ解釈である²⁾。ただ、設立時代である14世紀後半は、上にみたようにラーフェンスブルク (Ravensburg) では都市の産業がかなり発展していたことは間違いなく、したがってその経済的繁栄を背景としてこの商事会社が設立されたことは十分考えられるところである。

設立時から解散までの歴史がA. シュルテによってなされた種々の史料の検討と研究の結果であるとはいえ、不詳の点は多い。もともとこの「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」という名称自体が正式なものであるかどうか、通常取引にそのまま用いられてい

たかどうかさえ疑わしいのである。ただ会社の設立に関してラーフェンズブルク (Ravensburg) のモテリ (Mötteli) 家出身の商人が中心となっていたことは疑いないであろう。1337年に近郊のブッフホルン (Buchhorn) から市民権を獲得してラーフェンズブルクに移住してきたウルリッヒ・モテリ (Ulrich Mötteli) が初代であったが、この家から出たフリック (Frick) が彼の息子のルドルフ (Rudolf) によってこの会社が設立されたという³⁾。そしてこの会社に最初に加わったのはフンピス (Humpis) 家出身の商人であった。フンピス (Humpis) 家はウェルザー (Welser) 家の血をひく家柄でシュタウフェン (Staufen) 家に仕えていたが、その主人の計らいで14世期初期からラーフェンズブルクの上級官吏に任命されていた。ハンス (Hans)・フンピスである。このフンピス家の商人のうちで最も活躍したのがヘンギス (Henggis) で、1385年には市長となり、1388年にはそのまま上級官吏の地位についていた。これらのフンピス (Humpis) 家の商人たちの会社に対する貢献は大きく、それはスペインその他の地において活動している会社の名称がほとんど“Humpisgesellschaft”として表示されていたことにも示されている。会社の中枢になっていたことはまず疑いない。ただ残念ながら、これらのフンピス (Humpis) 家の商人がどのようなきっかけでもともとモテリ (Mötteli) 家の商人が設立したこの会社に加わったのかその理由は明らかでない。

次に会社のメンバーに加わったのは、前第2章で扱ったコンスタンツの巨商、ムントプラート (Muntprat) 家の商人であった。リュートフリート (Lütfried) II は1408年にコンスタンツで営んでいた「ムントプラート会社」(Muntpratgesellschaft) をこの「大ラーフェンズブルク商事会社」と合併させたのである。ただその後も彼はコンスタンツでは自己の取引を存続させることだけはさせていた。リュートフリート (Lütfred) II が自分の会社をすべてこの「大ラーフェンズブルク商事会社」に合併させたのはそのおよそ40年後の1447年、彼の死の直前であった。

「大ラーフェンズブルク商事会社 (die Große Revensburger Handelsgesellschaft)」の歴史は、こうした三大巨商によって共同経営された貿易企業のつな

ぎ合わせである。会社の企業形態などについては後の節にゆずらなければならぬが、最初から終りまで今日みられるような同一の資本規模や、同一の指導体制で経営されていた企業組織であったわけではなかった。

ただ、これらの、当時のオーバー・シュワーベン (Oberschwaben) を代表する三大巨商は、相互の婚姻を通して血縁的にも結びついていた。例えばその一例をみると、1422年にコンスタンツで死んだハンス・ムントプラート (Hans Muntprat) の妻はフンピス (Humpis) 家の娘であったし、ルドルフ・モテリ (Rudolf Mötteli) はムントプラート (Muntprat) 家の娘ヴァルブルク (Walpurg) を妻としていた。さらに、ムントプラート (Muntprat) 家最大の商人といわれたリュートフリート (Lüffried) II が1408年に会社に参加したあと1411年にラーフェンスブルク (Ravensburg) の市民権を獲得したが、その時に市民権獲得の身柄保証人をひきうけていたのがルドルフ・モテリ (Rudolf Mötteli) であった。

以上のように、この「大ラーフェンスブルク商事会社」はオーバー・シュワーベンの当時最も有力な三大巨商の合同企業として営業を行っていた。当時それぞれ個人企業的経営が一般的であったなかで、こうした結合が行なわれた必要性を見究めめることは容易ではないが、ラーフェンスブルクという都市の規模や個人企業の営業規模に比して、この会社の貿易規模、販売市場の大きかったことが結局、こうした当時稀にみる大規模な共同経営にまで発展させたのであったと思われる。そして、その貿易市場の中心は、当時オーバー・シュワーベンの経済が結びついていたヨーロッパ各地の市場のなかでもとくにイタリア (Italien) ・スペイン (Spanien) という、地中海経済圏であった。以下、A. シュルテの研究にもとづいて、この地中海経済圏との結びつきをみていきたいと思う。

注

- 1) シュルテが設立年代を1380年代としたのは次のような史料にもとづいている。1477年の10月に会社は経営危機にみまわれ、多くの使用人が会社をやめて競争会社を設立させようとした時に、会社の指導者の一人のザトラー (Sattler) が使用人を前

にして会社の再建のために激励した。その言葉の中に、“100年来つちかわれてきた会社の信頼と存在”という表現があり、それによって1380年頃としたのである。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft*, S. 17.

- 2) 1530年頃を会社の解散時としたことについて、シュルテはハイド (Heyd, Wilhelm) の推測を継承したのであったが、種々の史料によってそれを確かめている。1525年度の決算用の書類が最後のものであるが、すでにその時に解散が考えられていた。しかし、その後1527年の2月より6月まで、フランクフルトやニュルンベルクに送られた商品発送の報告があり、なお活動の継続を裏付けている。当時、ニュルンベルクやアントワープ、ミラノ、ジェノア、ウィーンなどの支店は堅持されていた。ただ同年1月28日付の手紙ではヒンダーオーフェン (Hinderofen, Hans) 一人が取引の従事者 (Träger) として記されていた。そのほかには彼の2人の息子が参加していただけであった。しかし、その後1530年にもミラノでの活動が認められている。Schulte., A., a.a.O., S. 224-225.
- 3) Mayer, J., a.a.O., S. 86.

2 大ラーフェンスブルク商事会社の貿易活動

① イタリア地域

A. シュルテの著作では、ヨーロッパ各地の貿易市場についての説明は第6編全部 (第I巻236~518頁) があてられている。地域別では、上にみたようにイタリア地域、スペイン地域、ローヌ川流域地域、低地地方とイギリス地域、ニュルンベルクとヨーロッパ北東地域、スイス及び南ドイツ地域、オーストリア・ハンガリー地域に区別され、それぞれ会社の詳細な貿易活動が説明されている。

会社の本店はラーフェンスブルクに設置されていたが、そのほか近郊のザンクト・ガレン、コンスタンツ、メミンゲンの3都市は会社にとって特別に重要な役割を果たしていた。したがってそれらの都市には特別に有能な社員が配置されていたという。貿易地域は上に見たようにヨーロッパ各方面にわたっていたが、それぞれの主要都市には会社の支店 (Gelieger) がおかれていた。イタリアではベニス (Venedig)、ミラノ (Mailand)、ジェノア (Genua) におかれ、コモ (Como) には代理人 (Posten) が任命されていた。スイスにはジュネーヴ (Genf) に支店があり、ベルン (Bern) には代理店 (Agenten) がおかれて

いた。フランスではリヨン (Lyon) とアビニオン (Avignon) に支店がおかれ Bourgein-Bresse とマルセイユ近郊の Bouc には使用人 (Gesellen) を駐在させていた。スペインではアラゴン地方に3つの支店が置かれていた。バルセロナ (Barcelona) とサラゴッサ (Saragossa) とヴァレンシア (Valencia) である。それらの主要都市のほかにトルトサヤマリカンテ、ビルバオなどに代理人がおかれていた。さらに低地地方ではブリュージュ (Brügge) に支店があり、会社の末期にはアントワープ (Antwerpen) にも支店が出された。ケルン (Köln) には代理店がおかれていた。このほか、ドイツ国内ではニュルンベルク (Nürnberg) に支店があり、またウィーン (Wien) にも支店があった。これらの支店には支店の長である支配人 (Obmann) がおかれ、その下に経理長 (Rechnungsführer) がいた。ただ、上に述べた13の支店もまたそれに伴う人事も、必ずしも会社の設立時から解散時まで常設、常駐していたわけではなかった。支配人はもとより経理長の任期も一定ではなかった。A. シュルテによって紹介されている1494年から1517年までの人事表 (各地の支店・代理店の経理長名簿) でも、それぞれの任期は、3年、1年、32カ月、20カ月、5カ月、4カ月など様々であった¹⁾。また、同じ人物が各地の支店を転任したことも稀ではなかった。

以上のようにみると、これらの支店の配置だけから考えても、この商事会社が広くヨーロッパ各地の代表的都市と貿易を行っていたにもかかわらず、とくにイタリア・スペインなど、いわゆる地中海経済圏との結びつきを重視し、その関係を非常に強くしていたことがうかがわれるのである。

④ ベニス

イタリア市場での貿易は、ラーフェンスブルクからみれば、地理的にも、ベニスよりもはるかにミラノやジェノアの方が有利であった。事実、ベニスとの交易は、都市の規模や当時の貿易活動に占めるこの都市の比重から判断してはほとんど理解しがたいほどに、少ないものであった。一応支店が置かれることは置かれてはいたが、ほとんどそれだけの重要性があったとは考えられないく

らしいのもであった。

ベニスとドイツ商人一般との取引でみても、14世紀後半にフランクフルト (Frankfurt am Main) の商人がヴェストファーレン産の麻布を売却している例があるが、このラーフェンスブルクの会社が南ドイツ産麻布を他の市場に対してと同じように積極的に輸出することはなかった。もともと、ベニスには陸路からと、またジェノアを経由して海上からとの2通りの通商が考えられていたが、ベニス当局による、ラーフェンスブルクの商人に対してのガルー船を用いてジェノアやバルセロナ、ヴァレンシア、ブリュージュなどと取引をすることが禁止されていたため²⁾、ベニスとの取引にはかなりの抵抗があったように考えられる。1度だけ例外的にベニスからブリュージュへラーフェンスブルクの商人が商品取引を行なっているが、それ以外にはほとんどなかった³⁾。

オーバー・ドイツ地方の商人でベニスとの取引を行なったのはムントプラート (Muntprat) であった。それも15世紀の初頭である。また、この時代にしばしば各地で商業取引に活躍していた仲買商のウルリッヒ・イムホルツ (Ulrich Imholz) が、このムントプラート会社から麻布を仕入れ、ベニスで売却した事実もある。1426年にはイムホルツは6,117フローリン (florin) の麻布と藍 (Indigo) を仕入れている。また、1426年から1429年、さらに1432年にわたって彼が仕入れた麻布は1万8,000フローリン (florin) にのぼっている⁴⁾。しかしこれはイムホルツ個人の取引であって「大ラーフェンスブルク商事会社」の取引ではなかった。会社によるこのような取引の具体的な姿は残念ながら見い出されていない。

「大ラーフェンスブルク商事会社」のベニスとの取引では、一応、1448年頃が支店の活動としてのピーク時であったとの説明があるが、そのときの貿易の状態やそれに至る、あるいはその後の状態について、具体的な説明を見出すことはできない。ベニスにおけるドイツ商人一般の取引のなかでもこの会社の比重がかなり低いものであったことは容易に推察できる。事実、1475年に会社は、ベニスにおかれていた有名なドイツ商館に事務所を設置してはいたものの、そこには常駐の代理人一人さえも持っていなかったからである⁵⁾。

ベニスとの取引が非常に停滞していたことの理由として、地理的な要因のほかに、政治的要因があげられるが、ラーフェンスブルクの商人にとっては、経済的な理由も大きな要因であった。つまり当時のベニスに代る市場が後述するミラノやジェノア、さらにスペインの各都市で見い出され、十分な仕入れ調達が可能であったからであった。香辛料一般はジェノアでかなり満たされていたし、時として商品によってはむしろベニスの方が品薄であったことさえも報告されている⁶⁾。また、1480年頃には絹や木綿がかなりベニスの市場では不足していたことや、スペイン市場が重要な役割をはたしたサフラン (Safran) 取引でも、ベニスはかなり後退していた。これらが、ラーフェンスブルクの商人を遠ざけた理由であった⁷⁾。

⑧ ミラノ

ベニスよりもミラノの方が会社の貿易活動にとってははるかに重要であった。地理的な利点と同時に南ドイツ商人に対して特権が与えられるなど、貿易活動のための政治的配慮が多くなされていたためであった。ミラノの支店の存在と貿易活動については、1412年と1447年、1459年などのものが確認されている⁸⁾。また、ラーフェンスブルク商人のミラノでの貿易活動は1402年の取引が見い出されている。

ただ、ミラノとの取引でかなり重要な地位を占めていたと思われるこのシェワールベン産麻布の販売は、会社の営業のうちでもほんのごく一部を占めるにすぎないものであった。1480年と1481年に9パレン (Ballen)、18パレン (Ballen) の麻布がそれぞれこのミラノに送られている。が、それもそのままそっくり再輸出されている。1510年にも7パレン (Ballen) がミラノを通過してスペインのヴァレンシアに運びこまれている。また1505年にはおそらく6パレン (Ballen) がジェノアに持ちこまれたとみられている⁹⁾。これらの事実にもかかわらず、ミラノでの直接の販売は見い出されていない。そればかりか、ミラノはオーバー・シェワールベンのものではなく、オランダ産や Chambéry 産の麻布を「会社」に注文した例もある¹⁰⁾。

麻布とならんで重要な商品であったファスチアン織布 (Barchent) も南ドイツのオーバー・シュワーベン産のものだけがミラノに運びこまれていたわけではなかった。逆に会社は、ミラノの地で製造されたミラノ産ファスチアン織布をヨーロッパの各地域に、しかもかなりの量を輸出していた。詳しい数字は紹介されていないが、ヨーロッパの北部にむけてかなりの量が輸出されているし、また会社にとって有力な市場であったスペインに向けてもこれを輸出している。例えば1471年にはサラゴッサ向けに、また1474年にはバルセロナの支店にむけて3バレン (Ballen)、1478年にはリヨン向けに仕入れている¹¹⁾。ヴァレンシアへ向けては、毎回6~8バレン (Ballen) がここから輸出されていた。つまり会社は、オーバー・シュワーベン産のものに対してと同様に、このミラノの麻織業を供給源として仲介貿易をも営んでいたのであった。ミラノ産のファスチアン織布は黒色のものが有名で、ほかに白と灰色、さらに縞柄のものが扱われていた。1479年に、ジェノア支店の支配人がこのミラノ産の黒色のファスチアン織布を売却した事例も存在している¹²⁾。

毛織物は1454年以来、ミラノの手工業者保護政策によって高級品の輸入が禁止されていたこともあって、もともと大きな取引は行なわれていなかった。しかしここでも、ファスチアン織布と同じようにミラノ産の布の取引が行われており、羊毛を原料とする Stamette 織布 (麻の糸と羊毛の糸との交織布) がさまざまに染色されて売り出され、ラーフェンスブルクにも輸出された。特に、この布を用いた「赤のズボン」は有名で、ラーフェンスブルクでも珍重されていたという。この布がスペインのヴァレンシアに輸出された事例も A. シュルテによって明らかにされている。

ミラノの絹織業もこの会社の貿易活動と結びついていた。もともとミラノの絹織業は1442年にフローレンス (Firenze) 人によってこの地に導入され移植されていた。それが、1460年には絹製品の輸入を禁止するまでに成功している¹³⁾。会社はこれらの製品の輸出に従事したが、それを示す詳細な史料は残念ながら見い出されていない。

このほか、ミラノ産のダマスト (Damast) 織布やザムト (Samt) 織布 (ピ

ロード)などを会社が各地に販売したことが史料に確認されている。また、ミラノ産の錦織布 (Goldbrokate) がケルンにも売却されているし、15世紀末には金モール (Goldborten) などとも取扱われていた。

大ラーフェンスブルク商事会社は、このように、かなりにわたってミラノ産繊維製品の販売に当たっていたが、原材料の供給にも従事していた。例えば、上の絹織業と結びつく養蚕業はもともとイスラム諸国の独占の産業であったが、ミラノはそれを1470年以前に導入している¹⁴⁾。会社はヴァレンシア産の絹糸やアルメリア (Almeria) 産の絹糸を買い入れ、さらに上質のものをメッシナ (Messina) やカラブリエン (Kalabrien) から仕入れている。また原料羊毛はスペイン産のものをとくにトルトサ (Tortosa) などから、さらにイギリス産の原料羊毛も仕入れた。また、スペインからは羊や小羊の皮革も輸入した。これは羊皮紙 (Pergamern) の材料としても多く用いられたものであった¹⁵⁾。

以上のように会社はミラノの産業とかなり結びついた活動をしていたが、さらにその性質を強めているのが、ミラノにおける鉄・金属業との結びつきである。会社は、武器の仲介などにも加わったとみられているが、多くは小型の鉄・金属製品の輸出であった。例えば鉄製桶 (Bodega) をスペインのヴァレンシア (Valencia) やサラゴッサ (Saragossa)、イタリアのジェノアなどに輸出した例がある。扱われた製品には針金 (Eisendraht)、針 (Nadeln)、釘 (Nägel)、鉄鉢 (Schellen)、鋏 (Scheren)、鎖 (Ketten) などが多かった。これらの鉄・金属業に供給する原材料も多くが会社の手によって供給されたものであった。ドイツ各地から多量の錫 (Zinn) や銅 (Kupfer) が持ちこまれるし、真ちゅう (Messing) や金剛砂 (Schmirgel) も供給された。後者は金属のつや出しに用いられていたものである。各地からの供給だけでなくミラノからの輸出にも会社は従事していた。鉄や真ちゅうなどの販売で、ジェノアへの例が紹介されている。

以上のほかに食料品も扱われた。スペイン産の砂糖がヴァレンシアからミラノに輸入されている。また米の栽培が15世紀後半にロンバルディア (Lombardei) 地方に移植されたが、それ以前はスペインから米 (Reis) が輸入されてい

た。イタリア風の米飯である Risotto はスペインから移入されたものであるという。また、ドイツへの米の栽培の移植はスイスのバーゼル (Basel) の市民イルミ (Balthaser Irmi) によってなされたといわれているが、会社はこの試みには積極的に参加しなかった¹⁶⁾。また、アーモンドなどの果実類もとくにスペインなどから輸入された。またミラノへの塩の供給にも会社は参加した。このほか一般用品では、ワックスをジェノア経由でスペインのヴァレンシアからミラノに輸入しているし、紙や本などをミラノからドイツへ、羊皮紙をミラノからジェノアへ輸出している。また珍しい品ではロザリオ (Paternoster) や黒テンの皮 (Zobelfelle) などがミラノに輸入されている。

以上のようにミラノでの取引で、「大ラーフェンスブルク商事会社」はこの地の主要な製造業であった鉄・金属業や繊維業とに深いかかわりを持っていた。これらの産業の経営にこの会社がどの程度積極的に参加したか、残念ながら知ることはできない。しかし、これらの製造物を扱いヨーロッパ各地に販売していたことは、会社の仲介商人的性質をそのまま示している。「大ラーフェンスブルク商事会社」の営業は、少なくともこのミラノにおいてみる限り、オーバー・シュワーベン地方の麻織物製品の販売会社というだけではなかったのである。

この商事会社の貿易活動全般においてミラノがどれだけの重要な役割を果たしていたかを知る 1 つの手懸りに各地の支店とミラノの支店との資本の比較がある。1497年の数字であるがこれによると、ミラノの支店は第3位、つまり2万5,021フローリン (fl. rh) = 8万2,570プフント (Pfund) を有していた¹⁷⁾。これが1507年には3万5,277フローリン (fl. rh) = 13万7,000プフント (Pfund) に増加している。また1498年から1500年にかけての31カ月間の決算は34万7,490プフント = 10万5,300フローリン (fl. rh) を示し、年の平均にして4万762フローリン (fl. rh) に達していたと計算されている¹⁸⁾。

ドイツ商人一般にとってもミラノがかなり重要な地位を占めていたことは容易に推察できる。そのことを示すものに、ミラノでのドイツ商館 (Fondaco dei Tedeschi) 設置の計画があった。この計画はベニスと同じようにミラノに

ドイツ商館を建設しようというもので、再三、ミラノの国王による認可が下されていた。これらの推進者の代表に「会社」も加わっていたのであったが、結局実現はしなかったとみられている¹⁹⁾。しかしこれもミラノの重要性を物語ることの1つの材料とすることができるであろう。

◎ ジェノア

ジェノア (Genua) はミラノ (Mailand) と同様、オーバー・シュワーベン (Oberschwaben) の商業にとって古くから重要な都市であった。H. アマン (Hektor Ammann) の研究では、ドイツ産麻布がジェノアの記録に載るのは、1214年までさかのる²⁰⁾。このことは南ドイツの麻織都市が都市としての活動を開始しはじめたごく初期から地中海地域との取引に従事していたことを物語る。1204年の記録とはジェノアの仲買人の契約書 (Tarif) の記録である。それ以後ジェノアと南ドイツ商人との貿易活動はますます発展している。そしてそのなかにあつて、「大ラーフェンスブルク商事会社」が指導的立場に立っていたとみられるのである。

ジェノアでの「会社」の地位は特別に高いものであった。例えば、1424年/25年にかけて、ジェノアの都市当局の依頼で会社の支店がベニスと同じドイツ商館 (Fondaco dei Tedecchi) の設置をこのジェノアに実現しようとしたことがあつた。この実現のために会社の支店の商人はミラノとドイツにでかけたが、その費用はジェノア当局の負担でなされていたし、また、ドイツ商館に使用するためにジェノアが多くの家屋を物色しそれを貸与する決定さえも行なっていたのである。結局、このドイツ商館が実現したかどうかの確証は得られていないが、その企画と実現に会社の支店が指導的役割を果していたこと、又、ジェノア都市当局がかなりの援助を提供していたことは疑いないのである。

ミラノと同じようにジェノアでも、この会社はオーバー・ドイツ麻織物の販売活動だけに従事したわけではなかつた。ジェノアの製造業との結びつきをみると、13世紀にルッカ (Lucca) より移植され15世紀にジェノアで盛んになつ

た絹織業とのかかわりがある。ジェノアでは1432年に絹織業ツンフトが創設され、商人による前貸が行なわれ、経営は家内工業的に行なわれていたという。この絹織業に会社は、とくに1477年のジェノア支店が再開したことをきっかけにして進出し、多くの製品を各地に再販売している。ビロードやダマスク織布 (Damasten) を仕入れ、これを各地に輸出したのである。とくにビロードの取引ではその額はミラノよりも大きかったとみられている。このほかに、錦織布やタフタ織布 (Taffet) も取扱われたが、最も大きな取引は絹布 (Seidengewand) であった。絹と木絹の交織布も輸出された。このほか会社は、ラクダ毛の取引に乗り出そうとしたがこれは失敗したと伝えられている²¹⁾。

ジェノアに対して会社はまた、ヨーロッパ各地からの種々の商品を供給した。麻布はオランダ産の上質なものが入り、フランダース (Flandern) からも種々の繊維製品、シーツ類などが、またイギリス産の布も輸入された。南ドイツ地域からはザンクト・ガレン (Sankt Gallen) 産の太あや織麻布 (Zwillich)、ウルム (Ulm) からファスチアン (Barchent) 織布、また上述したミラノからもファスチアン織布などが輸入された。スペインからも盛んで、サラゴッサ (Saragossa) やヴァレンシア (Valencia) からシーツ類や上質布が輸入されている²²⁾。

繊維原材料ではジェノアには原綿 (Baumwolle) の輸入はほとんどなされていないが、スペインからの原料羊毛がとくにヴァレンシアやトルトサから海路を利用して輸入された。イギリス産の原料羊毛の輸入も一度だけ確認されている。ヴァレンシア産の絹も輸入されたが、アルメリアやメッシナ産の絹に対抗できるほどのものではなかったといわれている。

ジェノアは会社にとって、とくに香料取引で重要であった。会社はこのジェノアを香料取引の拠点としたと思われる。ベニス (Venedig) に代る地位をこのジェノアに求めたのである。ただこの香料取引も15世紀から16世紀にかけてのいわゆる地理上の発見の影響を強くうけた。影響を受ける以前には、例えば1500年にジェノアからフランクフルト (Frankfurt am Main) の秋の大市に積み出された香料の量は、総額3,400フローリン (fl.) にのぼっていた。1,802

フローリン (fl.) の胡椒, 798フローリン (fl.) のショーガ (Ingwer), 540フローリン (fl.) のチョージ (Gewürznelken), 200フローリン (fl.) のセメンシナの実 (Zittwer), 92フローリン (fl.) のニクスク (Muskat) などがその内訳である²³⁾。しかしこれが1503年になると急激に減少する。1503年の謝肉祭の大市 (Fastenmesse) ではただチョージ (Gewürznelken) が送られただけであった。そしてその時にかかなりの量がフランクフルトに送られずそのままジェノアに残されたままであったという²⁴⁾。これは明らかに、すでに大西洋岸からライン川 (Rhein) を上ってリスボン (Lissabon) からの香料がフランクフルトに到達していたことを想わせる。アントワープ (Antwerpen) の発展と対照的にジェノアは香料取引からの後退を時代とともに余儀なくされるのである。

バスコ・ダ・ガマ (Vasco-da-Gama) による第1回のインド航海の帰港は1500年の9月であった。そして有名なフッガー (Fugger), ウェルザー (Welser) を中心とするドイツ商人によるインドへの直接航海の企画がすでに1501年の春には立てられている。この企画に「大ラーフェンスブルク商事会社」が加わったかどうかは明らかではない。A. シュルテ (Aloys Schulte) はそのことに関して史料に何の説明もないと述べている²⁵⁾。

バスコ・ダ・ガマの第2回目の航海の帰港は1503年の秋で、一部の船が9月1日に到着している。この時には、第1回目のごく少量の物産を持ちこんだだけであったのに対して、大量の物産が運びこまれた。1,500~1,600カンタル (Quantal) の香料と4,000ドゥカーテン (Dukaten) のそのほかのアジアの物産が輸入された²⁶⁾。この9月1日の帰港は船2艘の到着であったが、そのあと10月11日にはバスコ・ダ・ガマ本人が帰着した。総額1,000,000クルザドス金に当る3万2,000~3万5,000カンタル (Quantal) の香料が (うち2万6,000カンタルが胡椒) このときに運びこまれた。これによって胡椒の市場価格は半落したという。そしてその翌春には上の輸入品のうち1,400袋の胡椒と60袋の劣質のショーガ, 20袋のチョージ, 40袋の染色用木, 50ツェントナー (Zentner) の肉桂がジェノアに送られた。同じ頃にシチリア島からも100袋の胡椒がジェノアに到着している²⁷⁾。つまり、リスボン (Lissabon) からジェノアへの輸出

がはやくもこうして開始されているのである。

以上のような貿易の変動のなかで、「大ラーフェンスブルク商事会社」は、フッガーの取引をうまわまる活動を示したといわれている。しかし、この後、ジェノアの香料取引が急速に後退するにおよんで「会社」の活動もほとんど聞かれなくなる。このあと「会社」に関するジェノアの史料は1505年の10月のものが確認され、少量の取引、例えばうらし類 (Lack) などの購入があるだけである。

「大ラーフェンスブルク商事会社」がこの商業上の変動に全然対応しなかったわけではない。1507年に会社はアントワープで胡椒の買付けを行なっているし、それをフランクフルトの大手で売却することもしている²⁸⁾。1505年に成功裡のうちに終わったドイツの有力商人によるインドへの直接航海以後、リスボンの重要性を認めて、会社はアウクスブルクの商人ゴッセンブロット (Gossenbrot) との取引を緊密にしている。さらにアントワープにはハンス・エルンリン (Hans Ernlin) なる人物を常駐させて香料取引に従事させもしていた。しかしそれ以上に積極的な活動はなかったと思われる。

香料取引のほぼ見返りにジェノアへはドイツ産の鉄・金属製品などが輸出された。多くはニュルンベルク産あるいは経由のものであったが、鋼・真ちゅう・錫・銀などやその製造品であった。とくに銅の取引では会社は独占的な地位を築いていたという。ミラノからの鉄もジェノアに輸入された。ニュルンベルクからの製品の多くは、例えば鉄鉢・鉄の器・真ちゅう針金などであったが、ウルムからは金 (Gold) も輸入されたことがあった²⁹⁾。

このほかの商品ではジェノアからの輸出品にサンゴ (Korallen) があった。会社がかんりの量を取扱ったと報告されている。また真珠 (Perlen) やそのほかの宝石類 (Edelsteine)、ダチョーの羽根 (Straußenfedern) なども取扱われ、象牙の櫛が1度輸出されている。このほか地中海周辺の特産物の仕入れ・輸入にも会社は従事し、スペイン・ヴァレンシア産の砂糖を供給しているし、アーモンド (Mandeln) などを再輸出用としてこのジェノアに持ちこんできている。さらに油 (Öl) やワックス (Wachs) なども輸入した。スペイン産の毛

皮類も輸入されたが、バルセロナからのうさぎ皮 (Kaninchen) が多く、さらにスペインからの羊皮紙、明礬 (Alaun)、金剛砂 (Schmirgel) などが倉庫の在庫品のリストのなかに確認されている³⁰⁾。

以上のように、大ラーフェンスブルク商事会社はジェノアとの取引を主としてスペイン市場との仲継地として重要視していた。ミラノと同様、ジェノアの物産を仲介すると同時に、スペインの物産をイタリア・ドイツに輸出し、あるいはドイツの物産をスペインに輸出するその仲継所の役割をこのジェノアに求めていたのである。

② スペイン地域

スペインではイタリアにおけるよりもはるかに詳細な活動が明らかである。ただし、会社のスペインでの取引は、そのほとんどが地中海側地域に限定されている。ヴァレンシア (Valencia) とサラゴッサ (Saragossa) とバルセロナ (Barcelona) の3都市がその中心であった。このことが、特に地中海通商路を利用した場合、ジェノアとの結びつきを強めることになったのである。陸上通商路を利用した場合にはまた、その通商途上にあるロース (Roune) 川流域都市、南フランスやスペイン国境の各都市との取引を盛んにすることになった。

④ ヴァレンシア

ラーフェンスブルク (Ravensburg) の商人はこのヴァレンシアとの取引をミラノやジェノア以上に深く推進させていたといわれている。それは、もともとこの地が南ドイツ商人の子弟や使用人の商人業の職業教育の場とされていたことや、また近郊のイスニー (Isny) の市民が、ドイツに開始されたばかりの印刷技術をこの都市に移植した、などという例にも示されている。一般的にみて、南ドイツ商人にとってスペイン (Spanien) はフランス・シャンパーニュ市場の延長としての歴史をもつ重要地域であった。しかしこのヴァレンシアには、ドイツ商人はベニス (Venedig) に存在したようなドイツ商館を所有してはいなかった。ただそれに代わるものとして、1314年以後、ドイツ人用商館

(Verkaufshalle) を所有していた。史料に認められる具体的なドイツ商人の滞在は、1445年のフンピス (Jos Humpis) とワット (Kaspars von Watt), ケルンからのヨハン (Johann von Köln) である³¹⁾。フンピスは「大ラーフェンスブルク商事会社」を代表する人物であるし、ワットはザンクト・ガレン (Sankt Gallen) の代表的商事会社であるディースバッハ・ワット (Diesbach-Watt) 商事会社の代表である³²⁾。つまり、当時の南ドイツの2つの代表的商事会社の代表がこの都市に滞在し活動していたのである。

「大ラーフェンスブルク商事会社」のヴァレンシアでの活動は、ミラノと同様にかなり政治的な優遇等をうけて行なわれていた。「会社」の数多くの支店のうちでこのヴァレンシアの支店が最も安定した、つまり政治的に平穏な状態におかれていたのである³³⁾。

ヴァレンシアでの会社の取引については、年間を通しての史料は見い出されていないが、しかし個々の、部分的な取引などについてはかなり詳しい内容が明らかになっている。例えばまず南ドイツ産麻織物の販売についてであるが、ここでは会社が南ドイツの麻織物の販売会社であるという性質を明確に示している。1472年にブックリン (Diepolt Bucklin) という人物がヴァレンシア支店用に、シュワーベン (Schwaben) 産ファスチアン織布14バレン (Ballen), ザンクト・ガレン産麻布を60バレン, ラーフェンスブルク産を40バレン, このほかの地域からのものを28バレン合計142バレンを注文し, なお, 倉庫にはまだ48バレンの麻布が保管されていたという。このほか彼は280バレンの布 (Canemasserie, Burdat) も注文したが, 倉庫にはまだ134バレンを所有していた³⁴⁾。つまり, ミラノやジェノアではほとんどみられなかった南ドイツ産麻布がここではかなり前面に出されているのである。このことは1479年と1480年の史料においても疑いなく見ることができる。A. シュルテが示したまを表にすると次の通りである。読みとれない表現もあるが原文のままを引用させていただきたい(表4-1, 4-2 参照³⁵⁾)。

これらの表からみることができるよう、ヴァレンシアに輸入されたものは南ドイツ地方のザンクト・ガレン, ラーフェンスブルクやウルムの麻織物, ミ

表 4-1 ヴァレンシアへの1479年、1480年の輸入商品
(Einfuhr nach Valencia)

ヴァレンシアへ輸入された商品	1479年	1480年
Barchent (von Mailand)	Ballen 15—14	4—6
Barchent (St. Gallen)	ク 24	—
Bonnette (Mailand)	Kisten 1	—
Nadeln (Mailand).....	Ballen 12	
Einsendraht (Mailand).....	ク 28	
Nägel (Mailand)	ク 8	Unbestimmt
Nadeln und Scheren (Mailand)	ク 1	
Fil, Merceria und Bonnett (Genua)	ク 1	
Holl. Leinwand (Brügge)	ク 18	4 (anderes unterwegs) ¹
Hochstraß Leinwand (Brügge).....	ク 2	2
Fil d'Onardo	Kisten 8	3 (u. 534 Maß)
Fil de Balesta	Fäßlein 18	24
Spella, gluffa (Brügge)	Kisten 6	2
Rodia (Brügge).....	Ballen 38	30
Arras (Brügge)	Unbestimmt	—
Bonnetten (Brügge).....	ク	Unbestimmt
Ratinger Scheren (Brugge)	Unbestimmt	—
Messer von Brüssel (Brügge).....	ク	—
Leuchter, Messer (Nünberg).....	Lägel 4	200 Stück
Kupferplatten (Nürnberg).....	Quintal 28	30—35 Quintal
Messing (Nürnberg).....	Ballen 5	—
Barchent von Cambrai	ク 9	—
Barchent von Ulm	ク 5	10—12
Canemasserie (Lyon).....	ク 157	400
Burdat (Lyon)	ク 6	48
Leinwand (Ravensburg)	ク 5	nach d. Willen d. Herren,
Zinn	—	Unbetimmt
	Camps 399—401	559—568

出典：Schulte, A. *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft, 1380—1530 S.* 293. (ただし、注1の説明は省略)

ラノからの麻織物と鉄製品、ニュルンベルクの鉄・金属製品、リヨンからの織維などがかなりの比重を占めているが、それ以上にブリュージュ (Brügge) 産の諸製品が多いことを見落せないであろう。オランダ産ファスチアン (Barch-

表 4-2 ヴァレンシアからの1479年、1480年の輸出商品
(Valencianer Ausfuhr)

ヴァレンシアから輸出された商品	1479年	1480年
Reis in Ballen (nach Flandern, Genua)	290	47 ⁵
Saffor in Ballen (Flandern).....	6	100—150 rubb.
Kommin (Flandern)	34—44	30
Melasse (Flandern) Fäßlein	42	—
Mandeln in Ballen (Flandern)	200	80
Batafaluga in Ballen (Flandern)	6—10	8—10
Anis (Flandern)	—	7 ⁶
Datteln (Flandern)	—	100 Quintal
Weinbeeren (Flandern)	2—300 Quint.	—
Wolle (Genua)	—	—
Seide von Almeria (Genua)	—	—
Seidengarn von Almeria (Lyon)	3 Färdlein	—
Seide von Valencia (Gen., Fland.)	3 Fardel	—
Grana (Genua)	2 Ballen	2
Wachs, (Avign., Genua, Mailand)	42 costal	6 costal
Zucker (Lyon, Genua)	55 Zentner	54 ⁷
Leder (Genua)	—	12 Ballen
	883—997 Camps	410—462

出典：Schulte, a.a.O., S. 292. (ただし，注5,6,7の説明は省略)

ent) 織布や鉄製品も代表的商品であった。つまりこの資料からみただけでも、少なくとも会社は、大西洋岸諸都市と、イタリア・スペインとの通商圏を両極としながらその中間のドイツ諸都市やロース川流域都市との取引を行っていたといえる。輸入に関してはこれ以外に1503年と1506年のものも紹介されているが、そこでの主要輸入品もやはり麻布と布 (Canemasserie) などの繊維製品と鉄・金属製品であった。

次にヴァレンシアから会社が各地に輸出したものを表4-2に従ってみると、ここでもフランダースが重要な貿易市場を形成していたことがわかる。会社は、スペインとフランダースとの相互の取引を主要なものとし、その間に位置する各都市はあくまでも通商途上の付随的役割しか果たしていなかったようにさ

えみることができる。ヴァレンシアからの輸出品はそのほとんどが農産物、砂糖などの食料品、絹、羊毛など繊維原料や一部の製品に代表される。製品の輸出はごく限られたもので、絹などもアルメリア (Almeria) などからの輸入品が入っていた。

ヴァレンシア (Valencia) の製造業との結びつきの面で会社の諸活動をみると、イタリアやドイツへの輸出産業となっていた精糖業 (Rohrzucker) をあげることができる。ここでは年々およそ6,000カルゴ (Cargo) (=10,000ニュルンベルク・ツェントナー) が製造されていた。このサトウキビ栽培に会社は乗り出し、一時、会社自身の精糖工場 (Zuckerraffinerie) も所有していたのである。その経営はおよそ数10年間続いていたという³⁶⁾。

その精糖工場に雇用されていた労働者は大部分がムーア人であった。ここで生産された砂糖はもちろん会社の手で、フランダースやリヨン、ジュネーヴ、イタリアの各都市、南ドイツ、ニュルンベルク、フランクフルトなどに輸出されていた。しかし、この精糖経営から会社は1477年に手をひいている。原因は明らかではないが、ポルトガルによるマデリラ島 (Maderira) のサトウキビ栽培によって会社がフランダース市場から追放された、ということがその要因としてあげられている³⁷⁾。その後会社はこの製品については貿易だけに従事し、完成品砂糖を仕入れては売却した。

ヴァレンシア (Valencia) の絹織業も盛んであった。絹製品の輸出も前表に示されているが、各地におよんでいる。ただドイツでの主要取引先であったニュルンベルクとフランクフルトの2カ所への輸出が史料ではまだ見い出されていないと A. シュルテは述べている。このヴァレンシア産の絹だけでなくアルメリアの絹もかなり取引されている。前表にはリヨンへの輸出の例が示されている。このアルメリアにはモテリ (Mötteli) 家では取引のために使用人をおいていたという。

前表にもみられるが、ヴァレンシアからは米も輸出された。会社は都市周辺でなされていた米作栽培にも介入し、アビニヨンやリヨン、フランダース、ニュルンベルク、ベニスなどに輸出した。また南国特産の果実も取扱った。ワイ

ン (Wein) の取引には参加しなかったが乾ブドウの実は取扱い、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどに販売した。そのほか染色材料としてアリカンテ (Alicante) の町から Safflor が仕入れられ、またサフランはアラゴン地方から仕入れられたものがここから各地に船で積出された。また、ワックスもアリカンテで仕入れられ、原料羊毛もベニスやジェノアに輸出されている。このほか羊皮や子羊皮、一般皮革、なども輸出された。木綿布も量は少ないながら取引されていた。ほとんど包装用に用いられていたという³⁸⁾。

以上のように、ヴァレンシアは、南ドイツの麻織業にとって重要な販売市場を提供しただけでなく、従事する商人や商事会社に相当な仲介貿易市場を提供していた。今迄みてきたヨーロッパ各地のほとんどの生産地からそれぞれの製品を輸入し、このヴァレンシアの地からまた各地の市場に商品を積出した。ヴァレンシアからみた貿易収支は、A. シュルテの計算では、輸入の方が輸出の額をはるかにうわまわっていたから、それだけ会社にとっては製品輸出市場としての性格を持っていたことになる。ヴァレンシアからの輸出品がほとんど農産物であったこともこの性格を一層強くさせたともいえる。

上にもみたように会社はヴァレンシアの近郊のアリカンテ (Alicante) の町との取引を行っていた。上にみたように染色材料などが仕入れられているが、そのほか一般的日用品がかなり取引されていた。時にはヴァレンシアを量的に追い越すまでもなったとの記述もみられる。南ドイツの麻布も売却されている。そして、このアリカンテが「大ラーフェンスブルク商事会社」の取引網では最南端の市場であった。ただモテリ (Mötteli) 家は上にみたアルメリアにも使用人をおき、さらに南のグラナダ (Granada) にも代理商 (Vertreter) と支店をも持っていたし³⁹⁾、さらにマロルカ島 (Mallorca) には1434年に会社自身が代理人 (Prokurator) をおいていたということが知られている。

⑧ サラゴッサ

ヴァレンシアやアリカンテ、アルメリアが地中海に面していたのに対して、サラゴッサ (Saragossa) はエブロ (Ebro) 川をかなり内陸にさかのぼった場

所に位置している。この都市はとくにサフラン (Safran) の取引と羊毛を代表的交易商品としていた。この都市に関しては1466年にこの地を旅行したニュルンベルク (Nürnberg) のテツェル (Tetzel) という名の人物の手紙などが史料に残されているが、当時商取引がかなり盛んであったことが伝えられている⁴⁰⁾。

サラゴッサと南ドイツ商人との取引の内容は1430年のものが残されている。

表 4-3 1430年のドイツ人及びサヴォイ人のサラゴッサでの取引額
(Tabelle über deutschen und savoyischen Handel im Jahre 1430)

	輸入額	輸出 (サフラン)	輸出額	輸入・輸出総額
	(Wert Einfuhr) ℥ β ʒ	(Ausfuhr Safran) ℥ unc. quart	(Wert Ausfuhr) ℥ β ʒ	(Wert Ein- u. Ausfuhr) ℥ β ʒ
D Humpis und Johann Franch	1820. 16. —	8441. 3. 2.	7205. 10. —	9026. 6. — ¹
Humpis und Boxallo	—	2747. 2. 3.	2289. 3. 4.	2289. 3. 4.
D Kaspar von Watt	900. 16. —	4719. 8. —	4029. 6. 11.	5028. 2. 11 ²
D Johann von Köln	1186. 14. —	2481. — —	2224. 18. —	3411. 12. — ³
D Spadelli	692. 8. —	2479. 2. —	2042. 9. 4.	2734. 17. 4.
D Johann Riff	—	1947. — —	1894. 5. —	1894. 5. —
D Leonard Grech	—	1653. — —	1730. — —	1730. — —
D Johann Blanch	—	1450. — —	1250. 18. 8.	1250. 18. 8.
S Jacobo Boxello	—	1160. — —	995. — —	995. — —
S Joh. und Hugo de Gorch...	740. — —	—	—	740. — —
D Leonard Grip	—	560. — —	454. 6. —	454. 6. —
S Franz Basi	—	360. — —	397. — —	397. — —
D Un Alamany	317. — —	—	—	317. — —
D Jacob de Bala	—	327. — —	278. — —	278. — —
D Mirich	—	116. — —	116. — —	116. — —
D Th. Hallberger	69. — —	—	—	69. — —
D Anrich Clerck	8. — —	52. — —	52. — —	60. — —
Conrad Campo	—	60. — —	50. — —	50. — —
D Gaucer	12. — —	—	—	12. — —
D=Deutscher, S=Savoyarde.	5836. 14. —	28552. 15. 5.	25008. 17. 3.	30845. 11. 3.
Korallen		36. — —	89. 2. —	89. 2. —
dazu:		28588. 15. 5.	25097. 19. 3.	30934. 13. 3.

出典：Schulte, A., a.a.O., S. 305. (ただし、注1, 2, 3の説明は省略。貨幣単位℥はグロント、βはリング、ʒはヘラー)

原表のままを引用すると次の通りである（表4-3参照）。

この表にも示されているように、サラゴッサからの輸出品のうちサフランは別格であった。これらの取引のうちでフンピス（Humpis）家の商人つまり会社の占める割合は高く、およそ輸出入総額の3分の1に当たっている。第2位にはザンクト・ガレン（Sankt Gallen）の商事会社ディースバッハ・ワット（Diesbach-Watt）商事会社であり、つづいてケルン（Köln）のヨハン（Johann）であった。

次にこれらの輸入にどのような商品が取扱われていたか、「大ラーフェンスブルク商事会社」の内訳をA. シュルテは次のように示している。輸入額1,820プフント16シリングのうち1,628プフントを44バレン（Ballen）のコンスタンツ産麻布が占め、4バレン=96反（Stück）のファスチアン織布の172プフント16シリングがそれにつづき、さらに4ダースのフェルト帽などが輸入された⁴¹⁾。またこの年に692プフント8シリングを輸入したシュパデリ（Spadelli）の内訳をみても⁴²⁾、一番の商品はコンスタンツからの麻布で、14バレン=518プフント、ファスチアン織布86プフント8シリング、フェルト帽子63プフントなどとなっており、やはり南ドイツ産麻織製品が圧倒的な比重を占めている。ディースバッハ・ワット商事会社も同じで、輸入額のうちコンスタンツ産麻布259プフント、ファスチアン織布654プフント16シリング、フェルト帽子127プフントとなっている⁴³⁾。

これらのほかに、名前が不詳のドイツ人によって鏡（Spiegelglass）27箱（132プフント）やコンスタンツ産布185プフント、ニュルンベルク産金属製品なども輸入された。A. シュルテによって詳細な商品の列挙も試みられているが、主たる輸入品はやはり繊維製品（布、帽子、シャツ類など）と金属製品（ナイフ、金器、釘、針、針金、鋏など）であったことが明白である。

15世紀から16世紀にかけての史料でもこの内容は変わっていない。1478年には42バレンの麻織物が輸入され、1506年には201反（Stück）を売却した事実が確認されている。このオーバー・シュワーベン（Oberschwaben）産のものに加えてオランダ産の麻布もこのサラゴッサの市場に送られていた。1430年頃から頻

繁になったといわれているが、例えば1478年には4バレン及び53反 (Stück), 1479年には3~4バレン, 1480年には7バレン, 1504年には102反 (Stück) と4283³/₄エレがアントワープ (Antwerpen) から送られている⁴⁴⁾。ただオランダ産の布は他のものに比較して劣質のものが多かったという。

このほか、会社は布 (Canemasserie) と帽子 (Mützen) などの輸入にも力を尽し、前者は1478年には少なくとも16バレンが倉庫に保管されていたし、後者は、会社の支店がフランダース (Flandern) で189ダースを注文、さらにミラノ (Mailand) でも71ダースを注文した⁴⁵⁾。

A. シュルテによって紹介されている1506年の会社の売却ノートは10カ月と

表 4-4 1506年のサラゴッサにおける「会社」の商品売上メモ

商 品	金 額		
	ℳ (フ ント)	シ リ ング	ヘ ラ ー
Geschlagen Kupfer, 218 Quintal erlöst	1267	11.	17.
Holländische Leinwand, 112 Stück+3 unverkauften	1167.	19.	6.
Leinwand von Isny, Staufen, Kempten, Wangen, 164 Stück	532.	8.	9.
Leinwand von St. Gallen, 29 Stück	320.	18.	—
Arras, 26 Stück	270.	5.	—
Tischlaken, 20 Stück	216.	6.	8.
Unzgold, 180 Unzen	197.	9.	10.
Stahl, 10 Ballen	101.	1.	7.
Leinwand Ravensburg, breit 37 Stück	102.	7.	1.
Seidenstoff, 2 Stück	97.	12.	—
Tapisserie von Flandern, 37 Stück	97.	7.	—
Barchent von Mailand, 12 1/2 Stück	76.	5.	—
Weißgarn, 244 ℳ.....	60.	7.	—
Baumwolle, 390 ℳ.....	30.	1.	3.
Leinwand, schmale weiße, 15 Stück	28.	5.	3.
Papier, 15 Ries	7.	10.	—
Rodetz, 20 ℳ.....	7.	—	—
Barchent vergat, 1 Stück	3.	4.	—
	4583.	19.	6.

出典：Schulte, A., a.a.O., S. 312.

5日間の販売メモであるが、それによれば次のような商品がこの都市で扱われていた(表4-4参照)。これに明らかなように、重要商品はやはり南ドイツ産麻織物で、産地の明らかなものだけでも総額の5分の1近くを占めている。また、オランダ産の麻布も上にみた趨勢が一層増加して、南ドイツ産以上の額を示している。この表を分析してA. シュルテは、表の総額に占めるドイツ産商品の割合はハンガリー(Ungarn)産の銅も含めてほぼ50%、つまり2,252プフント、次いでフランダースからの39%(1,812プフント)、イタリアの48,3プフントであるとしている。商品例では麻布が非常に高く53%、その他の繊維製品が12%、鉄・金属製品が32%であった⁴⁶⁾。

サラゴッサのその後の取引については、1523年の帳簿が残されているが、それにはごく少量のサフランが計上されているだけであった。A. シュルテはそれによって会社のサラゴッサ支店の解体を推測している。1520年代はいずれにしても会社の取引は急激に衰退したとみることができる。

◎ バルセロナ

バルセロナ(Barcelona)はカタロニア(Katolonian)地方の主要都布として活発な貿易を行っていた。とくにレバント(Lebant)貿易が盛んで、また周辺の山岳地域から出る木材を利用して造船業も発達していたといわれている。この地方のドイツ商人に関する最も古い史料は1383年のものでニュルンベルクの商人ヘルマン(Hermann)とコンスタンツの商人1人、さらにイーバーリンゲン(Überlingen)のヤコブ(Jakob)という人物が貿易取引を行っていた。「大ラーフェンスブルク商事会社」に関する史料は1408年のものである。この年にリュートフリート・ムントプラート(Lütfried Muntprat)が無色の麻布を2大バレン、ファスタアン織布(Barchent)2バレン(Ballen)を船で運んだところがジェノア人にだ捕され、しかも商品は没収されてしまうという事件が生じた。コンスタンツ市当局がこの問題の解決にすぐに乗り出したが、この事件によって、当時、会社が海上交通を利用してバルセロナとの取引に従事していたことが知られるところとなったのである。

バルセロナにおけるドイツ商人の商取引に関してはかなり多くの史料が発掘されている。コンラート・ヘーブラー (Konrad Häbler) によって発掘された史料⁴⁷⁾、1425年—40年、及び1472、73年のものなど、さらに A. シュルテが自ら発掘したものも加えて、ドイツ商人による取引は1425年から80年までの56年間に記録されたおよそ30の帳簿が史料として確認されるまでになっている。そしてそのうち26の帳簿がほぼ判読可能であると A. シュルテは述べている。

まず〔表4-5 A B〕によって明らかな通り、この両期間、つまり15世紀前半と後半との間にはかなりの貿易量の減少が生じている。平均値でみると後者は

表 4-5 1425年—1440年及び1443年、1467年—80年のドイツ人及びサヴォイ人のバルセロナにおける取引額

[A] (Table über den Gesamthandel deutscher und savoyischer Kaufleute in Barcelona nach dem Warenwerte 1425—1440)

年	Jahr		総額 (Gesamt)		輸入 (Einfuhr)		輸出 (Ausfuhr)	
	母	β	(プフント)	(シリング)	母	β	母	β
1425	6,038.	5.	5,747.	10.	290.	15.		
1426	28,139.	5.	16828.	5.	11,311.	—		
1427	18,020.	—	9,149.	15.	8,870.	5.		
1428	22,755.	15.	9,257.	—	13,498.	15.		
1429	15,065.	10	7,235.	15.	7,829.	15.		
1430	9,421.	5.	739.	—	8,682.	5.		
1431	15,940.	5.	8,766.	—	7,174.	5.		
1432	21,855.	15.	9,106.	5.	12,749.	10.		
1433	14,288.	—	1,864.	—	12,424.	—		
1434	21,714.	5.	7,705.	—	14,009.	5.		
1435	17,501.	10.	6,525.	15.	10,975.	15.		
1436	22,869.	15.	7,737.	5.	15,132.	10.		
1437	5,849.	—	4,279.	—	1,570.	—		
1438	8,192.	5.	5,583.	15.	2,608.	10.		
1439	10,676.	10.	5,813.	—	4,868.	10.		
1440	11,768.	15.	6,395.	5.	5,373.	10.		
1425—40	250,096.	—	112,732.	10.	137,336.	10.		
平均 (Durchschnitt)	15,631.		7,045.	15.	8,585.	5.		

出典：Schulte, Aloys, a.a.O., S. 325.

1443年、1467年—1480年の総取引額

〔B〕 (Gesamtverkehr. 1443, 1467—1480)

年 (Jahr)	関税額 (Zollsumme)			商品取引額 (Errechneter Warenwert)		
	α (プフント)	β (シリング)	γ (ヘラー)	α (プフント)	β (シリング)	γ (ヘラー)
1443	698	11.	5.	46, 140.	—	—
1467	46.	10.	3.	2, 790.	15.	—
1468	42.	19.	3.	2, 577.	15.	—
1469	91.	8.	5.	5, 484.	5.	—
1470	62.	8.	—	3, 744.	—	—
1471	35.	19.	9.	2, 159.	5.	—
1472	13.	9.	10.	809.	—	—
1473	80.	7.	5.	4, 822.	5.	—
1474	記入ナシ (fehlt)			記入ナシ (fehlt)		
1475	66.	14.	6	4, 003.	10.	—
1476	27.	—	5.	1, 622.	5.	—
1477	31.	3.	—	1, 869.	—	—
1478	50.	7.	3.	3, 021.	15.	—
1479	53.	9.	5.	3, 237.	5.	—
1480	52.	9.	5.	3, 148.	5.	—
1467—80	654.	16.	7.	39, 289.	5.	—
平均 (Durchschnitt)				3, 022.	5.	—
1425—1480 (in den 30 Jahren)				335, 525.	5.	—

出典：Schult, A., a.a.O., S. 325. (ただし、注1の説明は省略)

前者のおよそ5分の1に減少している。後者の平均値は前者の最低額よりもさらに下まわっている。両期間を通して最も取引量の多かったのは1443年、最低時は1472年である。輸入と輸出を比較すると、ほとんど平均、少々輸出が多いが、1425年から27年までは輸入の方が多く、28年から36年まではほとんど輸出の方が多くなっている。1437年から40年まではまた輸入量が輸出量をうわまわっている。

上の表は全体的な取引を示しているが、これらのうち「大ラーフェンスブルク商事会社」はどのような地位を占めていたか、A. シュルテの作成した表によれば次の表4-6の通りである。この表と前表とを比較すると、会社の全体の

表 4-6 バルセロナにおける1426年—1480年の「会社」の取引額

(Anteil der Humpis am Handel in Barcelona 1426—1480)

年	総額 (Gesamtverkehr)			輸入 (Einfuhr)			輸入 (Ausfuhr)		
	ウ (プフ ント)	β (シリ ング)	γ (ヘラ ー)	ウ (プフ ント)	β (シリ ング)	γ (ヘラ ー)	ウ (プフ ント)	β (シリ ング)	γ (ヘラ ー)
1426	13,396.	6.	—	10,781.	1.	—	2,615.	5.	—
1427	8,824.	—	4.	5,342.	—	—	3,483.	—	4.
1428	9,003.	12.	6.	4,553.	—	—	4,450.	12.	6.
1429	9,738.	—	—	5,537.	—	—	4,201.	—	—
1430	5,566.	12.	—	328.	—	—	5,238.	12.	—
1431	9,202.	10.	—	6,582.	—	—	2,620.	10.	—
1432	11,340.	—	—	4,620.	10.	—	6,719.	10.	—
1433	6,303.	1.	—	563.	—	—	5,740.	1.	—
1434	10,931.	12.	—	4,838.	—	—	6,093.	12.	—
1435	12,200.	4.	8.	6,323.	5.	—	5,876.	19.	—
1436	12,206.	2.	—	5,573.	5.	—	6,632.	17.	—
1437	4,781.	18.	—	3,971.	10.	—	810.	8.	—
1438	4,046.	16.	3.	2,534.	6.	1.	1,512.	10.	2.
1439	6,128.	13.	—	4,926.	—	—	1,202.	13.	—
1440	6,323.	19.	—	3,422.	10.	—	2,801.	9.	—
1426—1440 平均 (Durchschnitt)	129,894.	6.	9.	69,895.	7.	1.	59,998.	19.	8.
	8,659.	12.	5.	4,659.	13.	10.	3,999.	18.	7.
1443	31,984.	13.	9.	14,195.	14.	—	17,788.	19.	9.
1467	1,251.	9.	8.	362.	13.	—	888.	16.	8.
1468	1,242.	17.	8.	—	—	—	1,242.	17.	8.
1471	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1472	18.	8.	2.	—	—	—	18.	8.	2.
1473	1,823.	7.	10.	898.	4.	6.	925.	3.	4.
1477	1,773.	4.	—	991.	1.	—	774.	3.	—
1478	2,974.	—	—	901.	17.	—	2,072.	3.	—
1479	1,765.	1.	5.	1,261.	14.	6.	503.	6.	11.
1480	2,146.	15.	4.	1,415.	7.	6.	731.	7.	10.
1467—1480 平均 (Durchschnitt)	12,995.	4.	1.	5,838.	17.	6.	7,156.	6.	7.
	1,443.	18.	2.	684.	15.	3.	795.	2.	11.
25年間の総額 (Gesamtsumme für 25 Jahre)									
	184,874.	4.	7.	89,929.	18.	7.	94,944.	6.	—

出典：Schulte, A., a.a.O., S. 327.

表 4-7 バルセロナへの「大ラーフェンスブルク商事会社」による麻布の輸入量
(1426年—1480年) (Einfuhr der Gesellschaft in Barcelona)

年	Gesellschaft (会社)		Vertreter (代理商)		Zusammen (合計)	
	バル レン (Ballen)	反 (Stück)	バル レン (Ballen)	反 (Stück)	バル レン (Ballen)	反 (Stück)
1426	139	3	75	—	214	3
1427	1	—	—	—	1	—
1428	85	—	—	—	85	—
1429	150	—	—	—	150	—
1430	—	—	—	—	—	—
1431	169	2	6	3½	175	5½
1432	91	5	9	—	100	5
1433	5	—	—	—	5	—
1434	101	4	14	—	115	4
1435	190	2	—	—	190	2
1436	170	1	—	—	170	1
1437	68	1	—	—	68	1
1438	78	5½	—	—	78	5½
1439	140	1	—	—	140	1
1440	71	½	—	—	71	½
	平均 (Durchschnitt)				1564	8½
					104, 3	—
1443	385 Ballen					
1467	1 Ballen					
1468	} 0					
1471						
1472						
1473	22 Ballen					
1477	11 Ballen 4 Stück					
1478	9 Ballen					
1479	28 Ballen 4 Stück					
1480	9 Ballen					
合計 (Zusammen)					465バル レン (Ballen)	8反 (Stück)

出典：Schulte, A., a.a.O., Band II, S. 84.

取引に占める割合は全期間を通しておよそ半分，A.シュルテの数字では52.12%である。そのうち1425年から1440年までは51.99%，1443年の69.3%，1467

年と1480年には33.1%を占めている。さらに輸出入別にみると、15世紀前半では輸入に占める割合が53.8%で輸出の割合の46.2%をうまわわっていたが、1443年には輸出は69.3%となり輸入における割合を大幅にうまわわっている⁴⁸⁾。

次に会社が取扱った輸出入品でみると、このバルセロナでもまず、南ドイツ産麻布の販売という会社の営業内容が非常に強く示されている。まず、バルセロナに対して会社が最盛期の1443年に輸入した南ドイツ産麻布は、385バレン(Ballen)と2反(Stück)、つまり全体額3,852反、価格にして1万1,000バルセロナ・プントに達している。加えて37バレン(Ballen)のファステアン織布、2バレンの布(Canemasserie)、5バレンの帽子(Hüte)などが続いている。低地地方からも紡績糸(Garn)や布が持ちこまれた。鉄・金属製品では、83バレンの銅、28バレンの真ちゅう、9バレンの真ちゅう針金、68バレンの鉄針金などがあり、ほかに小さなものとしては、十字架くさり用真珠1樽(1 Faß)、硫黄が4袋5バレン輸入されている⁴⁹⁾。

以上が史料に残されている最盛期のバルセロナへの会社による輸入品の内容であるが、これに対してバルセロナから会社が各地に輸出したもののうちの最大商品は、まずやはりサフラン(Safran)であった。7,712プントが計上されており最も額が多いものであった。ついで344プントのサンゴ、1万5,230(単位不詳)の兎皮、12ケース(Körbe)の乾ブドウの実、2ダース半のイチジクパンなどが続いている⁵⁰⁾。

次に会社が取引額としては最低を記録している1472年頃の内容をみると⁵¹⁾、1467年から1480年の8年間に輸入したものは、オランダ産麻布と南ドイツ産麻布がほぼ同額で上位を占め、次に種々の布、ドイツ産とミラノ産のファステアン織布、帽子、紡績糸、鉄・金属製品などが続いている。輸出品ではやはり、サフランが輸出されたが、サンゴもかなり大量に、つまり1467年から1480年の8年間に2,550プント、(つまりバルセロナでは6,451プント)のほかに934バルセロナ・プント分が輸出された⁵²⁾。次いで青地の木綿、シート類、包装用木綿などであった。これに対して輸入はオランダ産麻布と南ドイツ産麻布がほぼ同量、さらにドイツとミラノからのファステアン織布、帽子、その他各

種の布、紡績糸、染料、金属製品、銅などが代表的輸入商品となっている。これらの商品の生産地の分析でも、注目すべきはフランドース地方からの取引の大ききで、A. シュルテはほぼ50%以上が占められているとしている⁵³⁾。南ドイツがそれにつづき、さらにイタリアが加わっていた。

以上のように、バルセロナでの会社の活動は、スペインにおけるの他都市の支店とはほぼ同様に南ドイツ産麻布の販売・輸出であった。その量は前述したように最盛期1443年には385バレン (Ballen) に達していた。表 4-7 は、1426年から1480年までの会社による麻布だけの輸出量であるが、この取引が会社の主要な柱となっていたことは疑いない。これに加えてヨーロッパ各地からの製品再販売も重要で、とくに低地地方とニュルンベルク産の諸製品の販売活動が目立った活動であった。

バルセロナからの輸出ではサラゴッサと同じくサフラン (Safran) を各地に供給した。その他サンゴヤスペインの特産品も数えられるがそのほとんどは農産物に終始している。

バルセロナでの会社の取引もしばしば政治的対立の影響をうけて盛衰をくりかえした。15世紀後半の停滞もこれを原因としていた。前述したニュルンベルクの医師、ミュンツァーの (Münzer) の報告でもその詳細が知られているが、1494年には「会社」の使用人はバルセロナには1人も滞在していなかったという。支店が閉鎖された年は不明であるが、1481年には閉鎖されたと考えられるほど状態は停滞していたという。ただ、1495年に船1艘がバルセロナにフンピス (Noffre Humpis) の名で商品を持ち込んでいるし、ヒンダーオーフェンス (Hans Hinderofens) という名の商人も滞在していたが⁵⁴⁾、会社の支店はいずれにしてもこの頃に閉鎖されたとみられている。

注

- 1) Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 98.
- 2) Schulte, A., a.a.O., S. 237.
- 3) ebenda.
- 4) ebenda.

- 5) Schulte, A., a.a.O., S. 238.
- 6) ebenda.
- 7) ebenda.
- 8) ミラノと会社の取引の内容に関して最も古い史料として紹介されているものは1459年のミラノ支店の支配人 Medizäer の帳簿である。Schulte, A., a.a.O., S. 249.
- 9) ebenda.
- 10) ebenda.
- 11) Schulte, A., a.a.O., S. 249-250.
- 12) ebenda.
- 13) ebenda.
- 14) Schulte, A., a.a.O., S. 251.
- 15) Schulte, A., a.a.O., S. 252.
- 16) ebenda.
- 17) Schulte, A., a.a.O., S. 254.
- 18) ebenda.
- 19) Schulte, A., a.a.O., S. 241.
- 20) Ammann, H., Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 289.
- 21) Schulte, A., a.a.O., S. 276.
- 22) ebenda.
- 23) Schulte, A., a.a.O., S. 277.
- 24) ebenda.
- 25) Schulte, A., a.a.O., S. 278.
- 26) ebenda.
- 27) Schulte, A., a.a.O., S. 279.
- 28) ebenda.
- 29) Schulte, A., a.a.O., S. 282.
- 30) ebenda.
- 31) Schulte, A., a.a.O., S. 289.
- 32) 拙稿, 「中世都市ザンクト・ガレンの麻織業と商事会社の役割」, 『桜美林エコノミックス』第10号69頁以下参照。
- 33) Schulte, A., a.a.O., S. 289.
- 34) Schulte, A., a.a.O., S. 292.
- 35) この表はヒンダーオーフェンス (Hans Hinderofens) の報告から作成されたもので, その報告の日付は1479年6月25日から7月1日, 1480年の8月29日のものである。Schulte, A., a.a.O., S. 292.

- 36) ヴァレンシアの当時の史料の1つとしてシュルテが紹介しているものに当時この地を旅行していたニュルンベルクの医師ミュンツァー (Münzer) の手紙がある。産業の状態の説明もそれを根拠にしている。Schulte, A., a.a.O., S. 297.
- 37) ebenda.
- 38) Schulte, A., a.a.O., S. 299.
- 39) Schulte, A., a.a.O., S. 302-303.
- 40) Schulte, A., a.a.O., S. 304.
- 41) Schulte, A., a.a.O., S. 307.
- 42) 表では692プフント 8シリングとなっているがこれは表の間違いで、訂正されている。Schulte, A., a.a.O., S. 307.
- 43) 合計は1,040プフント 16シリングとなりここでも訂正されている。Schulte, A., a.a.O., S. 307.
- 44) Schulte, A., a.a.O., S. 309.
- 45) Schulte, A., a.a.O., S. 310.
- 46) Schulte, A., a.a.O., S. 312.
- 47) Häbler, Konrad, Das Zollbuch der Deutschen in Barcelona (1425~1440) und der deutsche Handel mit Katalonien bis zum Ausgang des 16. Jahrhunderts., in *Württembergische Vierteljahrschrift für Landesgeschichte*, Stuttgart, 1901, S. 111-160, S. 331-363, 1902, S. 1-35, S. 352-417.
- 48) Schulte, A., a.a. O., S. 328.
- 49) ebenda.
- 50) ebenda.
- 51) ただ、この期間ドイツ商人全体の動きも停滞しており、会社として取扱額は最低であったが、会社が占める割合は1472年、73年にかけて全体の74.4%であった。Schulte, A., a.a.O., S. 329.
- 52) シュルテは、ドイツ 1 プフント = 2.53バルセロナ・プフントを平均的割合として計算している。Schulte, A., a.a.O., S. 330.
- 53) Schulte, A., a.a.O., S. 331.
- 54) Schulte, A., a.a.O., S. 337.

③ ローヌ川流域地域

ローヌ (Roune) 川流域における通商都市として中世ヨーロッパで重要な役割を果たしていたのはジュネーヴ (Genf) とリヨン (Lyon) であった。とくに12~13世紀のヨーロッパ貿易の中心的取引市場であったシャンパーニュ

(Champagne) 地方での大市取引が14世紀に入って次第に周辺各地の主要都市に拡散するに至って、その主要な後継者としての地位をこの両都市が狙っていたからである。

もともとこのローヌ川流域はスペインと西南ドイツとを結ぶ通商ルート上に位置していた。南ドイツ・ボーデン湖周辺地域からジュネーヴへ、さらにリヨンを経て南フランスの陸上ルートを通してスペインのバルセロナ等への道と、リヨンからローヌ川をそのまま下って地中海へという重要ルートの拠点に当たっていたのである³⁾。そしてローヌ川上流地域に位置したシャンパーニュの大市取引に参加していた南ドイツ麻織商人は、そこでの取引の衰退とは対照的にこのジュネーヴとリヨンへの依存を高めることになる。この2つの後継都市のうちでまず発展したのはジュネーヴであり、リヨンはさらにその後継として、しかもさらに一層大きな発展を示すのである。

④ ジュネーヴの大市取引とその内容

ジュネーヴ (Genf) での大市取引の開催の事実が知られている最初の年は、1262年である²⁾。これは大市が最初に開催されたという史料ではなく開催されていたという記述であることから少なくともこの年には開催されていたわけで、その歴史はさらに古いものとなる可能性を残すものである。そしてここでの大市取引に関する史料として「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」の支店取引が登場するのは1454年である³⁾。それ以前に「会社」が何らの活動もなさなかったとは考えられないが、いづれにしてもこの会社がこのジュネーヴの大市での取引を活発化させたのは15世紀も中頃に入ってからであろうとおもわれる⁴⁾。

もともとジュネーヴの大市そのものの発展も盛期を迎えるのは15世紀中頃になってからであった。それは15世紀中頃のジュネーヴの政治的安定と商取引に対する自由政策によるものであった。このジュネーヴのイタリア・フランス・南ドイツ商業圏に占める地位は北ヨーロッパ・地中海商業圏に占めるブリュージュ (Brügge) に匹敵するほどの重要性をもつものとして登場したのである⁵⁾。

このようなジュネーヴの大市取引にたいして南ドイツからの商人の活躍はどうであったろうか。上にみた H. アマン (Amman) の論文によればジュネーヴにおいて活躍した南ドイツ商人は、16世紀にニュルンベルク (Nürnberg) の大商人トゥッヒャー (Tucher), マンリッヒ (Manlich), ツァングマイスター (Zangmeister), シェウファリン (Schaufferin) 等々の活躍がみられるが、いわばそれはこの「大ラーフェンスブルク商事会社」が15世紀中頃の史料に登場するその後史を形成するものとなる。

16世紀に入ってからニュルンベルクやアウクスブルクの商人の進出以前は、麻織業経済圏からの商人は第2章でみたコンスタンツとこのラーフェンスブルクがもっとも高い頻度であり、ザンクト・ガレンの商人がそれに続いていたとの報告がある⁹⁾。またコンスタンツの麻織物が1375年のジュネーヴの大市の関税史料 (Zolltarif) にまず示されており⁷⁾、別の史料にも100人以上もの大市への訪問者がこの南ドイツからの商人として認められている事から考えて⁸⁾、当時、その後の時代のニュルンベルクやアウクスブルク出身の商人に負けない活動をこれらの麻織物都市の商人が担っていたことがうかがわれる。W. ハイド (Heyd) の説明でも、百年戦争の結果、後に見るリヨン (Lyon) の大市が登場するのであるが、それ以前に重要であったものがこのジュネーヴの大市でありその全盛期は15世紀前半であったこと、さらにその大市の中で、1441年の夏のプフィングステンの大市 (Pflingsmarkt) への南ドイツ商人の訪問の様子が説明されている⁹⁾。

以上のほかに、南ドイツ商人の記録は、上のコンスタンツの商人の登場のあと、リュートフリート・ムントプラート (Lütfried Muntprat) が1388年1月25日のジュネーヴの大市 (Zwölfermesse) に参加しており、この大ラーフェンスブルク商事会社に関連する商人のひとつの記録となっている¹⁰⁾。

このジュネーヴに、上に述べたように「会社」の支店 (Gelieger) の存在が証明されているのは1454年であるが、その数年後の1458年には Niklaus Stoss von Ravensburg なる人物が「会社」(Jos und Ital Humpis) の支配人 (Faktor) として活動していたことがジュネーヴ市の市参事会の彼への請求の事実

によって明らかになっているし、さらに1474年当時の会社の支配人の名前も史料に見いだされている¹¹⁾。

このほか会社の活動を示すものとして、1478年当時ジュネーヴ市内に少なくとも一箇所の事務所 (Stube) を借用しており、その家賃を2年3カ月間も滞納したのち、後にようやく支払いをすませたという史実も残されている¹²⁾。

またそれより数年前の1474年の秋の大市 (Herbstmesse) に会社の中心の1つであったモテリ (Mötteli) 家の商人がミュンヘン (München) の商人とともに参加しており、さらに1478年の春の大市 (Osternmesse) にも参加していた¹³⁾。さらにこの1478年の4月には会社の支配人であったラムパーター (Hans Lamparter) がこのジュネーヴ市の St. Gervais の礼拝堂 (Dreifaltigkeitkapelle) の設立祭に際しても同席していたことがわかっている¹⁴⁾。

ジュネーヴの大市でのこの会社の活動を裏付けるものは以上のごく2、3の史料の断片にすぎないのであるが、それではこの大市での南ドイツの諸商人や会社の実際の商品取引はどのようなものであったであろうか。南ドイツ一帯からの輸出商品としては、この大市に参加していたニュルンベルク (Nürnberg)、アウクスブルク (Augsburg)、コンスタンツ (Konstanz) 等々の商人取引商品によって知ることができる¹⁵⁾。15世紀中頃ののものとしては、それらの筆頭にあたるものはボデー湖 (Bodensee) 周辺地域の麻織物があげられるが、その後、アルザス (Alsas) 地方からの布製品、オーバー・シュワーベン (Oberschwaben) のファスチアン織布 (Barchent)、ニュルンベルクの金属加工製品、チロル (Tirol) や東部山岳地域からの銅やその他の貴金属商品、等々がジュネーヴの大市に南ドイツ商人が持ちこんだ商品であった。これらは、南ドイツ産あるいは南ドイツ産の諸商品をもって各地で仕入れた商品であったが、この他には、この会社の前項スペイン及びイタリア・地中海市場でもみた通り、スペイン産のサフラン (Safran) やサンゴ、イタリア産あるいはイタリア経由の果実類や香辛料、染色料、絹製品、ビロード布 (Samt)、等がこの都市の大市に南ドイツ商人の手で持ち込まれていたのである¹⁶⁾。つまり、当時の南ドイツ商人が扱っていた商品の殆どをこのジュネーヴの大市取引でも利

用していたことになるのである。

それではこのような南ドイツ商人の中核的存在であった大ラーフェンスブルク商事会社のこのジュネーヴでの大市取引の内容はどうであったのであろうか。

A. シュルテの著作第 I 巻, 第 6 部以下の説明によれば¹⁷⁾以下の通りである。

まず会社がこの大市において売却した商品は、ヴァレンシア (Valencia) 産の砂糖, スペイン (Spanien) のいずれかの地域からの兎の毛皮, ドイツ産のラード (Schmalz), 精製銀 (Brandsilber) などであった。これらはスペイン各地での会社の活動を示すものでもあるが, それらの比重はおそらくごく一部分にすぎないで, 大部分は麻織物 (Leinwand) とファスチアン織布 (Barchent) がこの会社の売却商品の大部分を占めているはずなのであるが, このジュネーヴの大市での取引については残念ながらそれ以上詳しい説明を見出すことはできない¹⁸⁾。

一方, この会社がこの都市の大市で買入れている商品は, おそらく再販売用の, 南ドイツのウルム (Ulm) 産のファスチアン織布や, 産地は不明のワイン, 無花果やアーモンドの乾果実類, 乾葡萄の実, 油, 燻製にしん, 等々であった¹⁹⁾。

以上のように, この都市の大市での取引には会社の取引商品のごく一部の商品しか扱われていなかったことになる。後節のリヨン (Lyon) の大市での取引とはかなり対照的である。このことは, 会社がリヨンに比較してこのジュネーヴでの取引にそれほど大きな力を入れていなかった事をうかがわせる。たとえば H. アマン (Amman) によれば, 「大ラーフェンスブルク商事会社」のジュネーヴでの支店は, リヨンの支店の単なる附属機関にすぎなかったとする指摘もあるからである²⁰⁾。それはまた, リヨンの大市取引の 1 カ月後にジュネーヴの大市が開催されたという, リヨン・ジュネーヴ間の吸引力の差とその時期の問題であったとも考えられる²¹⁾。

しかし, このような会社の取引上にみえるジュネーヴの大市の地位の低さの一方で, 国際商業上のジュネーヴの大市の比重はこれ以後一層増大した南ドイツ金融資本の進出にもなって急激に変動する。16世紀初頭におけるニュルン

ベルク、アウクスブルク出身の商人の進出である。前者を代表するマンリッヒ (Manlich), 後者のフッガー (Fugger) やウェルザー (Welser) 等であり²²⁾, その趨勢は次のリヨンの大市にも示されるいわゆる麻織物取引から金融取引への南ドイツ経済の重心移行の影響である。

このようにみると、ジュネーヴの大市取引では、この地域での中心的商業取引市場であったリヨンの大市ほどの重要性は持なかったとはいえ、大市の取引内容として、初夏の大市 (Pfungstmarkt), 1月の大市 (Zwölfermesse), 秋の大市 (Herbstmesse) 春のイースターの大市 (Ostermesse) 等が開催され、ヨーロッパの重要な取引市場を形成していたことは間違いない。それらの大市の開催日数等の詳細については残念ながら不明であるが、リヨンの大市の内容に決して大きく劣っていなかったことだけは理解しえよう。それにもかかわらずこのジュネーヴでの大市がリヨンの繁栄の影にかすんで見えてしまうのは、その開催が上に述べたようにリヨンより1カ月ほど遅かったこと、さらに政治・社会経済的諸要因によってリヨンにはるかに及ばなかった点が存在すると理解できるであろう²³⁾。

注

- 1) この通商路はスイスの麻織都市と地中海及び南ヨーロッパへの通商路としてきわめて重要であった。Amman, Hektor, *Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes*, in *Alemannisches Jahrbuch* 1953, S. 255 及び Peyer, Hans Conrad, *Leinwandgewerbe und Fernhandel der Stadt St. Gallen von den Anfängen bis 1520* Bd. II, 1960, St. Gallen, S. 27ff.
- 2) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, I., Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart und Berlin, 1923, S. 361.
- 3) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 362, 及び S. 367.
- 4) ドイツ商人のジュネーヴの大市への参加は、14世紀後半にスペインのバルセロナへの途上での大市への参加という形で見いだされている。14世紀の70年代である。15世紀中頃にはおよそ100人以上のドイツ商人の参加が証明されている。大ラーフェンスブルク商事会社の商人の活動もほほこの時代に呼応している。Amman, Hektor, *Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf*, *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, 1954, S. 160-161.
- 5) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 361-362. その事はまた、南ドイツの一方の重要商業

都市ニュルンベルクの商人のジュネーヴへの大市参加にも示される。ジュネーヴはまず第一にフランス・ドイツ・イタリアの通商上の結合点として重要であったのである。Veit, Ludwig, *Handel und Wandel mit aller Welt*, Prestel Verlag, München, 1960, S. 12, 及び Müller, Johannes, Der Umfang und die Haupttrouten des Nürnberger Handelsgebietes im Mittelalter, in *Vierteljahrsschrift der Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1908, S. 3.

- 6) Amman, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte* XIII. 1954, S. 161.
- 7) Amman, Hektor, Die Anfänge der Leinenindustrie des Bodenseegebietes, S. 270.
- 8) Amman, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, S. 161.
- 9) Heyd, Wilhelm, Schwaben auf den Messen von Genf und Lyon, in *Württembergische Vierteljahrshefte für Landesgeschichte*, N.F. 1. 1892, S. 374-375.
- 10) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 367.
- 11) ebenda.
- 12) ebenda.
- 13) ebenda.
- 14) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 368.
- 15) Amman, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, S. 161.
- 16) Amman, Hektor, a.a.O., S. 161.
- 17) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Bd. I., S. 236ff.
- 18) Amman, Hektor, a.a.O., S. 168.
- 19) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 368.
- 20) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 366.
- 21) ebenda.
- 22) Amman, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, S. 162.
- 23) 例えばカール7世になった Dauphin などは, 1444年にリヨンの大市の開催の回数を増やしたり, その開催期間も延長した。また, 1445年にはリヨンの大市において取引を行なわなかった商人はジュネーヴの大市に参加することを禁止したりする政策を行なったのである。Schulte, Aloys, a.a.O., S.366.

⑧ リヨンの大市取引とその内容

リヨン (Lyon) の大市とそこでの会社の活動については、上のジュネーヴ (Genf) の大市におけるよりもはるかに多くの、詳細な活動の記録が残されている。まず、会社が活発に活動していた15世紀中頃におけるリヨンの大市取引の開催状況は次の通りである。

大市取引は1年間に4回行われていた。春の大市取引はイースターの大市 (Ostermesse) で、その年のイースター後の2週間、つまりほぼ毎年3月3日頃より5月3日頃までの間に開催された。次に開催されたのは8月の大市 (Augustmesse) で、8月4日より始まり19日に終了した。次は秋の大市 (Herbst—または Allerheiligemesse) で、11月3日から18日まで行なわれた。そして第4回目の大市は新しい年の1月に開催されたもので、1月6日の Dreikönige の聖日の後の月曜日から2週間にわたって開催され Epephaniamesse 又は Zwölfermess あるいは Bartzionermesse とよばれていた¹⁾。

このようなリヨンでの大市取引において、「大ラーフェンスブルク商事会社 (die Große Ravensburger Handelsgesellschaft)」はどのような取引を行っていたのであろうか。上に述べた大市の幾つかでの取引の内容と、会社の収支については記録が残されている。それによるとまず会社が行っていた5回の大市取引での取引内容は表 4-8 の通りである。表に示されているように、ここで扱われているものは、1477年のイースターの大市と8月の大市、翌1478年1月の大市、さらに1479年、80年の秋の大市の3年間5回にわたる取引の記録である。

この5回の大市取引における会社の販売商品のなかで圧倒的な量を占めているものは砂糖 (Zucker) である。量はもとより取引金額でみても次に続く絹 (Seide) の大きさをはるかに引き離していることがわかるであろう。この砂糖の販売量の圧倒的な大きさに加えて、南ドイツの都市ウルム (Ulm) からのファスチアン (Barchent) 織布販売がかすかに南ドイツ麻織物の販売活動を示すものとなっている。この砂糖の仕入れ元は、スペインのヴァレンシア (Valencia) 地方であった。前項でみた通り当時会社はスペインに会社独自の砂糖精

表 4-8 「大ラーフェンスブルク商事会社」によるリヨンの大市での商品売上表 (1477年—1480年)

商品 (Waren)	1477年 (Ostermesse) 春の大市		1477年 (Augustmesse) 8月の大市		1478年 (Epiphania) 冬の大市		1479年 (Allerheiligen) 秋の大市		1480年 (Allerheiligen) 秋の大市	
	Quantum	Eraös	Quantum	Erlös	Quantum	Erlös	Quantum	Erlös	Quantum	Erlös
		fl. β. blanc		fl. β. blanc		fl. β. blanc		fl. β. blanc		fl. β. blanc
Zucker fein...	1382枚	595. 1. 6.	552枚	276.— —	1380枚	747. 6.—	2760枚	1454. 9.—	18 Kisten	1179.— —
" mastus...	1518枚	632. 6.—	1656枚	760.11.—	1656枚	897.— —	966枚	483.— —	15 Kisten	940. 1. 6.
" candid...	276	176. 4. 6.	81枚	54.— —	—	—	—	—	rund 168枚	100. 9. 8.
Seide v. Almeria	158	1269.11. 3.	—	—	—	—	168枚2onz.	1127. 4. 1.	—	—
Ulmer Barchent...	5 Ballen	522. 3. 6.	—	—	—	—	—	—	—	—
Wachs...	173枚	43. 3.—	310枚	104. 4.10.	—	—	141枚	48. 5. 7.	—	—
Blaue Baumwolle...	4 Säcke	80.10. 6.	3 Säcke	59. 8. 6.	—	—	2 Säcke	39. 8.11.	23枚10onz.	15. 9. 4.
Packbaumwolle...	—	27. 6.—	—	15.10.—	—	—	—	27.— —	—	—
Safran...	—	—	—	—	—	—	136枚10onz.	896.10.10.	—	—
Orana...	—	—	—	—	—	—	174枚	163. 1. 6.	—	—
Silber...	—	—	—	—	—	—	2 Stück	1321.10. 6.	—	—
	—	3346.10. 3.	—	1270.10. 4.	—	1644. 6.—	—	4761. 4. 5.	—	2235. 8. 6.
Auf Kredit										
Zucker fein...	552枚	257. 9. 6.	—	—	—	—	—	—	—	—
" mastus...	276枚	115.— —	—	—	—	—	—	—	—	—
" candid...	138枚	92.— —	—	—	—	—	—	—	—	—
Wachs...	348枚	98. 4. 2.	175枚	43. 9.—	—	—	—	—	—	—
Ulmer Barchent...	—	—	—	—	—	—	3 Pardell	243. 3. 4.	—	—
	—	563. 3. 8.	—	43. 9.—	—	—	—	243. 3. 4.	—	—

出典：Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, Bd. I., S. 373.

製工場を所有しており²⁾、この砂糖取引は会社にとっても重要な営業分野として扱われていたものである。この外に同じヴァレンシアからはワックス (Wachs) が、さらに木綿 (Baumwolle) もスペインからのものがこの大市で売却されている。その他スペイン産の重要な輸出商品であるサフラン (Safran) もこのリストに計上されており (1479年の秋の大市)、それはアラゴニア (Alagonia) 地方のものであったと説明されている³⁾。また、スペインのアルメリア (Almeria) 地方からの絹 (1477年の春の大市と1479年の秋の大市) も会社のスペインでの活動を物語っている。A. シュルテの説明ではこの絹はリヨンの大市でパリ (Paris) に売却され、さらにイタリアのミラノ (Mailand) からの顧客にも売却された例があると述べられている⁴⁾。

南ドイツ地方からの商品は、上のウルム (Ulm) からのファスチアン織のほかにはニュルンベルク (Nürnberg) からの銀 (Silber) が提供されており⁵⁾、それらは上の絹と同様にパリに売却されていた⁶⁾。

以上は前表に示されているものであるが、このような販売活動と同時になされた会社の商品の仕入れ、買い入れはどのようになされていたのであろうか。リストにされたものは残されていないが、A. シュルテによって説明されている内容は次の通りである。まず1477年の春の大市 (Ostermesse) において買入れられた商品は2バレン (Ballen) 48反 (Stück) のウルム産ファスチアン織布245フローリン3シリング (245fl. 3β.) と3バレン (Ballen) の Chambéry 産のファスチアン織布220フローリン (220fl.) であった。そしてその年の8月の大市 (Augustmesse) では3バレン (Ballen) の布 (Canemasserie) を195フローリン (195fl.) で買入れしている。翌年1478年の冬市 (Epiphaniamesse) でも上と同じ Canemasserie 布に564フローリン3シリング (564fl. 3β.) の代価を支払って購入しているし、その外にもウルム産のファスチアン織布を438フローリン (438fl.) 分、さらに2600丁のナイフを112プフント (Pfund) 5シリング (β.) で仕入れてもいる⁷⁾。

また1479年の秋の大市 (Allerheiligenmesse) ではリヨン産サフランを3バレン (Ballen) 955プフント (Pfund) 13 オンツ (onz) の量を6,233プフント

(Pfund) 6 シリング (β.) で買い入れる一方、翌年の同じ大市では 1 バレン (Ballen) の Chambery 産のファスチアン織布を 77 フローリン (fl.) 4 シリング (β.) 5 ブランク (bl.) の値段で購入している。

さらに同じ時に Verdun 産の Canemassserie 布 1 バレン (Ballen) を 59 フローリン (fl.) 11 シリング (β.) 3 ブランク (bl.) で買い入れている⁸⁾。

以上のような会社の販売と買い入れ活動によって明らかなのは、一般的に言われている南ドイツ経済圏とリヨンの大市との結びつきで、南ドイツからの輸出品、つまり金属製品、繊維製品、馬、ワックス、タール、灰 (Asche)、硫黄 (Schwefel)、硝石 (Salpeter)、毛皮製品、等々に対する南ドイツへの輸出品、つまりレヴァント (Leband) 貿易からの東方の物産、イタリア及び南フランスからの諸生産物の交易、という構図は⁹⁾、一部分それらの条件を満たさないものであっても、ほぼこの会社の活動の中にもそれを認めることができるのである。ただこの大市取引にみられた会社の仕入活動のなかにかなり南ドイツからの商品、つまりウルム産のファスチアン織布やニュルンベルク産の金属製品等が入っていることから、この「大ラーフェンスブルク商事会社」がいわば地元の麻織物製品の販売活動にだけ専ら専念していたわけではないこと、つまり地元の麻織都市から仕入れたものをそのままヨーロッパ各地の大市に持ち込んで売却していただいただけではなかったということもわかるのである。またこの大市取引に記録されているよりはるかに多くの南ドイツ産の麻布を広く販売していた事は当然予想されたところであるが、それらを確実に裏付ける史料は今のところ見いだされていない。会社はこうしてみるとかなり各地の特産品を交互に交換して歩く仲介商人的性格を強くしていたと言えよう。つまり麻織物の販売活動とさらには当時ヨーロッパの一大毛織物生産地であったフランダース等の毛織物販売を専らその営業としていたこの南ドイツ商業圏の初期の商人からはかなり変質してきているといえるのである。

それでは次に、会社はこのリヨンの大市での取引においてどのような営業成績をあげていたのであろうか。概にみて、会社はこの当時のリヨンでの取引においてかなりの収入をあげていたとみることができる (表 4-9 参照)。

表 4-9 リヨンの大市取引における「会社」の収支表 (1477年—1480年)

収入の部 (Einnahmen)

内 訳	1477春の大市 (Ostermesse)			8月の大市 (Augustmesse)			1478冬の大市 (Epiphania)			1479秋の大市 (Allerheiligen)			1480秋の大市 (Allerheiligen)			合 計 (Zusammen)		
	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.
Barerlös von Waren	3346.	10.	3.	1270.	10.	4.	1644.	6.	—	4761.	4.	5.	2235.	8.	6.	13259.	3.	6.
Eingegangene Schulden	342.	2.	5.	1320.	8.	10½.	—	—	—	100.	3.	8.	38.	9.	4.	1792.	—	3½.
Eigene Gelder	—	—	—	931.	9.	—	—	—	—	3373.	2.	6.	—	—	—	4304.	11.	6.
Entlehene Gelder	4812.	6.	—	130.	—	—	—	—	—	400.	—	—	3141.	4.	6.	8483.	10.	6.
Aus Kommissionsgeschäft ...	—	—	—	—	—	—	—	—	—	243.	3.	4.	—	—	—	243.	3.	4.
	8501.	6.	8.	3643.	4.	2½.	1614.	6.	—	8878.	1.	11.	5415.	10.	4.	28083.	5.	1½.

支出の部 (Ausgaben)

内 訳	1477春の大市 (Ostermesse)			8月の大市 (Augustmesse)			1478冬の大市 (Epiphania)			1479秋の大市 (Allerheiligen)			1480秋の大市 (Allerheiligen)			合 計 (Zusammen)		
	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.	fl.	β.	bl.
Wareneinkauf	465.	3.	—	195.	—	—	1114.	8.	—	6233.	6.	—	137.	3.	8.	8145.	8.	8.
Abgezahlte Schulden	7327.	6.	—	100.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7427.	6.	—
Fuhrlohn, Zehrung	126.	8.	—	165.	—	—	150.	10.	6.	259.	9.	—	72.	5.	8.	810.	9.	2.
Gesellen, Kommissionäre, Wirte	99.	—	—	582.	9.	2.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	681.	9.	2.
Darlehen	80.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	91.	8.	—	171.	8.	—
	8098.	5.	—	1042.	9.	2.	1265.	6.	6.	6529.	3.	—	301.	5.	4.	17237.	5.	—
収入 (Einnahme)	8501.	6.	8.	3643.	4.	2½.	1644.	6.	—	8878.	1.	11.	5415.	10.	4.	28083.	5.	1½.
残高 (Einnahmeüberschuß)	403.	1.	8.	2590.	7.	½.	378.	11.	6.	2348.	10.	11.	5114.	5.	0.	10836.	0.	1½.

出典: Schulte, Aloys, a.a.O., S. 375.

収入の部において明らかなことは、商品の売却による現金収入 (Barerlös von Waren) が収入部分の大部分を占めていることは当然のこととはいえ (合計 1 万 3, 259 フローリン (fl.), 3 シリング (s.) 6 ブランク (bl.)), それに比較して為替手形の振出し (Ausstellung) による受け取り (例えば 1477 年の春の大市 (Ostermesse) に 4, 812 フローリン (fl.), 6 シリング (s.) をヴァレンシア (Valencia) で 7 月 1 日支払い予定の手形により受取り, 8 月の大市においても 130 フローリン (fl.) をニュルンベルクで 8 月 8 日に支払い予定の手形で受け取るなど) がかなりの額にのぼっていることである。(総額 8, 483 フローリン (fl.) 10 シリング (s.) 6 ブランク (bl.))¹⁰⁾。

このほか、会社独自の所持現金は、1477 年の 8 月の大市 (Augustmesse) に 931 フローリン (fl.) 9 シリング (s.) が表に示されているが、これはフランスから会社の Klaus Frauenfeld なる人物が持ち込んだものであった。さら 1479 年の秋の大市 (Allerheiligen) の際の会社の所持金 3, 373 フローリン (fl.) 2 シリング (s.) 6 ブランク (bl.) は、8 月の大市の現金残高 1, 463 フローリン (fl.) 9 シリング (s.) 9 ブランク (bl.) に会社の一人がコンスタンツから持ち込んだ 38 フローリン (fl.) 4 シリング (s.), 及びジュネーヴからもちこんだ 1, 871 フローリン (fl.) 9 シリング (s.) の合計によるものであった¹¹⁾。

さらに会社の収入源となっているものに従来からの負債の取立て収入を見ることが出来る。1477 年のイースター大市 (Ostermesse) では 7 名の負債者から 324 フローリン (fl.) 2 シリング (s.) 5 ブランク (bl.) が取立てられて収入となり、8 月の大市では 9 名の負債者から 1, 310 フローリン (fl.) 8 シリング (s.) 10½ ブランク (bl.) を、1478 年の 1 月の大市 (Epiphania) では 1 銭の収入も入っていないが 1479 年の秋の大市では 5 人から 100 フローリン (fl.) 3 シリング (s.) 8 ブランク (bl.), 1480 年の秋の大市では 1 人の負債者から 38 フローリン (fl.) 9 シリング (s.) 4 ブランク (bl.) が入金され、表にあるように合計 1, 792 フローリン (fl.) あまりが取められたのである¹²⁾。

この外、コミッション (Kommissiongeschäft) 収入として、1479 年に (秋の大市) 243 フローリン (fl.) 3 シリング (s.) 4 ブランク (bl.) が表に計上さ

れているが、これはラーフェンスブルク (Ravensburg) において依頼人にかわって支払われたものがここで収入として受け取られたものである¹³⁹。

以上のような収入に対して会社の支出は表に示されている通り、第一に商品の買い入れによって占められているが、1477年の春の大手にみられるように、負債の支払いの為に7,327フローリン (fl.) 6シリング (s.) といふかなりの額が支払われている。これは4つの項目にわたっての支払いであり、同じ年の8月の大手にも100フローリン (fl.) が支払われている。その外運送料 (Fuhrlohn) の項目にそれぞれの大市の際に126フローリン (fl.) 8シリング (s.), 165フローリン (fl.), 150フローリン (fl.) 10シリング (s.) 6ブランク (bl.), 295フローリン (fl.) 9シリング (s.), 72フローリン (fl.) 5シリング (s.) 8ブランク (bl.), 合計810フローリン (fl.) 9シリング (s.) 2ブランク (bl.) が計上されている。商品の購入代金の支出に比べるとほぼ10%に相当する。さらに専門職商人 (Geselle) や仲買商人 (Kommissionäre) や家主 (Wirte) などに対する支出も99フローリン (fl.) と582フローリン (fl.) 9シリング (s.) 2ブランク (bl.) が1477年の春と8月の大手取引に際して計上されている。A. シュルテによればこれらの支出は、会社が用いた宿泊や運賃、関税、等であった¹⁴⁰。

以上の支出に加えて、資金の貸出しも行なっていた。1477年の春の大手のさいの80フローリン (fl.) と1480年の秋の大手の際の91フローリン (fl.) 8シリング (s.) で、それらは友人に対しての貸付であったと説明されている¹⁴¹。

以上のように会社によるリヨンの大手取引での売上表や支出と収入表を対照して明らかなことは、売上げ総額(現金取引)で1万3,259フローリン (fl.) 3シリング (s.) 6ブランク (bl.) であり、買い入れ総額8,145はフローリン (fl.) 8シリング (s.) 8ブランク (bl.) であったことから明らかな通り、リヨン (Lyon) は会社にとって、商品の売却の為に格好の販売市場であったといふことができる。さらに収入と支出表の比較でもわかるように、リヨンの大手取引においては会社にとってかなりの収入源(総額残高での差額1万836フローリン (fl.) 1½ブランク (bl.))となっていたのである。

リヨンの支店の活動はさらに、会社の史料として残されている人表面での記

録によっても裏付けられている。最初に支店長として活動したのはラムパーター (Lamparter) という人物で、次にスイスのザンクト・ガレン (St. Gallen) 出身の P. フェヒター (Philipp Fechter) が経営にあっていた (1474年)。その外1478年の春の大市までは K. ブッツェル (Klaus Butzel) なる人物がこの支店の会計経理事務を担当していたことがわかっており¹⁶⁾、ついで上の Lamparter の息子 (junge Hans Lamparter) も父のもとで取引に従事、一時期父子でこのリヨン支店の経営にあっていた。その後1479年6月には K. フ라우エンフェルト (Klaus Frauenfeld) なる人物が担当し、1480年には再び上の Lamparter の父の方が着任し、その後1515年頃まで Philipp Fechter が長い間経営にあっていた。この Philipp はリヨン市で活躍したドイツ商人のなかでも最も年老いるまで活躍した人物の一人として説明されていることからみても¹⁷⁾、リヨン在住のドイツ商人の代表的人物であったことは間違いないとおもわれる。

以上、リヨンの大市取引について残されている史料を通しての「大ラーフェンスブルク商事会社」の活動の概略である。少なくとも上にみたジュネーヴの大市取引を上回る重要性を占めていた事だけは間違いない。ただ、会社はドイツ商人としてはその初期の段階での中心的な役割を果たしたとみれるが、しかし16世紀への時代の変遷とともに、後発都市のニュルンベルクやアウクスブルク (Augsburg) の商人の活動の前にしだいにその活力を失うことになる¹⁸⁾。それを物語るものは前章にも述べた Karl Ver Hees の1579年9月16日付の史料 (Handelsregister)、つまり当時のリヨン市で活躍する73の南ドイツ地方からの商事会社のうち、ニュルンベルクに属するもの23、アウクスブルクに属するもの35、ウルムに属するもの6、等の中でコンスタンツに属するものわずか1社、ラーフェンスブルクからは何らの形跡もみうけられない、という説明であつた¹⁹⁾。A. シュルテの著作の中には残念ながらその麻織都市の下降趨勢を物語るものは何ら取り扱われていないが、この南ドイツ経済都市の交代はリヨンにおける商取引においても、明白に示されているといえる。ローヌ河流域にはそのほか会社の支店も置かれていたアビニョン (Avignon) での取引も重要

であるが、商品取引についてはリヨンの取引とほぼ同じであり、もともと売買活動はさほど多くはなかったという A. シュルテの指摘を示すだけにとどめておきたい²⁰⁾。

注

- 1) クリスマスの後12日経ってはじめての月曜日から開催される大市という意味でこのような呼び方になったという。Schulte, Aloys, a.a.O., S. 372.
- 2) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 374.
- 3) ebenda.
- 4) ebenda.
- 5) ジュネーヴにおいてもニュルンベルクからの貴金属製品は当時のニュルンベルクの主要輸出製品であった。Amman, Hektor, Oberdeutsche Kaufleute und die Anfänge der Reformation in Genf, in *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, XIII. Jg., 1954, S. 168.
- 6) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 374.
- 7) ebenda.
- 8) ebenda.
- 9) Hees, Ver Karl, Die oberdeutsche Kaufleute in Lyon im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts, in *Vierterjahrscrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, XXVII. Jg., 1934, S. 235.
- 10) このほか、表に示されている1479年の秋の大市での400fl. はニュルンベルクで1480年1月に支払い予定のものであるし、1480年の秋の大市での3141fl. 6β 6 bl. は、1481年ニュルンベルクで Hans Tucher なる人物によって支払われる予定の1,218fl. 9β と、ブリュージュで1481年1月15日に支払い予定の907fl., さらに1481年1月にニュルンベルクで支払い予定の1,015fl. 7β 6 bl. の合計であったと内訳が示されている。Schulte, Aloys, a.a.O., S. 374-375.
- 11) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 374.
- 12) ebenda.
- 13) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 376.
- 14) ebenda.
- 15) ebenda.
- 16) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 382.
- 17) ebenda.
- 18) その理由の多くは、会社が金融活動を行わなかった事に求められている。Schulte, Aloys, a.a.O., S. 382.

- 19) Hees, Ver Karl, Die Oberdeutsche Kaufleute in Lyon im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts., in *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, XXVII. Jg., 1934, S. 237. さらにたとえば1522年/23年のリヨンの関税表 (Zollbuch) には Welser などの名前が残っている一方、この大ラーフェンズブルク商事会社の名前は見いだせない。Hees, Ver Karl, Oberdeutsche Handel nach Lyon am Anfänge des 16. Jahrhunderts, in *Historisches Jahrbuch*, Verlag J.P. Bachem, Köln, 55. Bd., 1935, S. 78.
- 20) Schulte, Aloys., a.a.O., S. 386.

④ 低地地方地域

ローヌ (Roune) 川流域にジュネーヴ (Genf) の大市とリヨン (Lyon) の大市とが存在していたように、ライン (Rhein) 川流域にも「会社」にとって多くの重要な大市取引市場が存在していた。南ドイツの麻織経済圏からこのライン川流域に向かった取引圏内には、ノルトリンゲン (Nördlingen) の大市やフランクフルト (Frankfurt am Main) の大市さらにケルン (Köln) やブリュージュ (Brügge), アントワープ (Antwerpen) 等々の市場が15世紀の会社の活動の重要な拠点となっていた。その中でもライン川下流地域と遠くスペインやイギリスに海上ルートで結びついてもいた低地地方の2大拠点が、ブリュージュでありアントワープでの大市取引であった。そしてこの2つの大市取引の動向も、時代の転換の中で、中世の比較的早い時代の国際取引の中心であったブリュージュから¹⁾、16世紀の発展に向かうアントワープへの交代がみられるものであった²⁾。その動きは、いわゆる地理上の発見の時代の開始である1490年代よりもはるかに早い時代にそれを認めることができる。以下ブリュージュとアントワープにおけるこの会社の活動を追っていきたい。

④ ブリュージュの大市取引とその内容

ブリュージュは、この南ドイツ麻織圏の商人の訪問場所としては比較的早い時期から知られた取引場所であった。前章でみた通りすでに1853年に発表されている F.J. モネ (Mone) のこのテーマについての論文の中にも、南ドイツ・コンスタンツの商人がブリュージュとアントワープを訪問していたことが述べ

られている³⁾。当然ながらライン川流域ルート⁴⁾の延長線上に発展したものであった。この論文にはまた、ケルンの商人がこのコンスタンツでイタリアとギリシャから持ち込んだワインの取引に従事していることも記されており、ライン川流域の商人とこの南ドイツ地域との商取引を裏付けるものとなっている⁵⁾。

このほか南ドイツに位置するウルム (Ulm) の商人が特産品のファスチアン (Barchent) 織布をもってヨーロッパの各地に出向いていたが、13世紀にすでに低地地方やイギリスにも達している事と⁶⁾、さらに1236年にはドイツのブランデンブルク (Brandenburg) 市場からエルベ (Elbe) 川を經由して麻布 (Leinwand) をフランダース (Flanders) 地方に、さらに1239年-50年の間にはイギリスにも売却したことが明らかにされ、ブリュージュとの交易の可能性を示すものとなっている⁶⁾。

ブリュージュを基点としたヨーロッパ各地との取引の可能性でみると、ドイツ国内とは、ライン川を遡ってフランクフルトの大市やニュルンベルクとの取引、さらにウィーン (Wien) との取引の可能性が大きく、北方面ではライプツヒ (Leipzig) やブレスラウ (Breslau) との取引が、さらに上にみた地中海商業圏との海上取引、そして北欧ドイツ・ハンザ (Hanse) との取引も極めて重要であった。A. シュルテによれば、ブリュージュの発展はドイツ・ハンザとの取引なしには考えられない、とあるが⁷⁾、ブリュージュを訪れた商人の中では、イタリア、スペインやフランスの商人とならんで、南ドイツの商人にこのハンザの商人を加えたドイツとの取引がかなりの比重を占めていたことは容易に考えられるところである。

ブリュージュでの取引は、大市取引として知られていたものは春のイースターの大市 (Ostermesse) である。毎年イースターの祭日の15日後から開始された大市は12日間、つまり大市の閉市日はイースターの27日後になっていた。そしてこの大市の終了に引き続いて次節でみるアントワープ (Antwerpen) のプフィングステン (聖霊降臨祭、イースターの50日後) の大市 (Pfungstmesse) 取引 (プフィングステンの祭日の14日前から開始された) が行なわれ、したがって両者は10日間の間をあげただけで行なわれ、さらに同じアントワープの、

その当初は夏期の大手から始まっていたバマスマルクト (Bamasmarkt) の大手やさらに近隣の都市 Bergen ob Zoom の大手取引へと取引の場が引き継いでいったわけである⁹⁾。したがって、ブリュージュでの大手取引はこの周辺地域の商業取引の一大システムの一環として機能していたことになる。ブリュージュ市内でのイースターの大市のあとは後述するようにプフィングステンの大手、バマス大手等、後に述べるアントワープの大手にみえるものとほぼ同じ大きな取引を行っていたものと思われる。

それではブリュージュの大手が扱っていた当時の商品取引はどのように展開されていたのであろうか。もともとブリュージュは外国商人に対してかなり自由な活動を認めていた。たとえば、商品を売却した結果手にはいった貨幣を貨幣のまま持ち出すことを禁止して、その代りに商品を買入れることを強制していたイギリスやスペイン、ベニス (Venedig) などとは別に、ブリュージュは商品の買入れ強制なしに自由に貨幣の持ち出しを認めていた事などであるが⁹⁾、しかし外国商人に対しての規制が皆無であったわけではない。例えば、取引は小売取引が一切禁止され、外国商人に許可されていたのは卸売取引のみであったし¹⁰⁾、一度ブリュージュにおいて所有者が交代した商品を、つまり一度売却された商品を外国商人は再び売却してはならないという規制もあった。このほか外国商人には取引上の課税免除権が与えられていたが、その取引は上に述べたように自己の商品のための売買活動だけに限られていたのである¹¹⁾。

このようにいわば外国貿易を促進しようとする都市当局の政策のもとで、各地との商品取引が行われたわけであるが、上に述べたハンザ商人との取引、イタリア商人との取引等々のなかに南ドイツからの商人も加わっていたのである。こころみに、南ドイツ出身商人はこのブリュージュでは何らの組織も結成した形跡はなく、例えばコンスタンツ (Konstanz) の商人などはかなり早いうちから規則的にこの都市と交易していたにもかかわらず、そこには支店がおかれた形跡すら残っていないのである¹²⁾。

それでは「大ラフエンズブルク商事会社」がこのブリュージュにおいてどのような取引を行っていたのであろうか。もともと南ドイツ・シュワーベン

(Schwaben) 地方の商人によるこのブリューージュでの活動の記録は、1394年にまで遡りだけであるが¹³⁾、活動が頻繁に行われるようになったのは15世紀もかなり過ぎてからである。早い時期の活動はコンスタンツ出身の商人の記録(1402年、1403年など)などが中心であるが¹⁴⁾、1400年当時そのコンスタンツとならんで近隣都市ヴァンゲン(Wangen)やラーフェンスブルク(Ravensburg)出身の商人も少しずつ史料に登場しはじめ、「会社」の活動の記録もこの1400年頃に確認されている¹⁵⁾。その最初の記録、つまりこの会社のブリューージュでの活動を示す記録は、バルセロナ(Barcelona)での関税支払いの記録であるが、それはフランダース産製品をこのブリューージュで買っていた、というものである¹⁶⁾。

上の記録にその一端が示されているが、ブリューージュでの「大ラーフェンスブルク商事会社」の営業活動の大部分は、スペイン産の商品とブリューージュ産商品との相互の交換、つまり会社にとっては純粋な仲介商人的商業としての性格を非常に濃くしていたといえる。そのことは例えば、1427年のフランダース産商品がやはりバルセロナで関税を徴収されていることや1437年にもおなじバルセロナで銅11樽などとならんで6反(Stück)のオランダ産の麻布が荷揚げされている事実と¹⁷⁾、一方のスペイン(Spanien)からでは例えば、1466年に会社がスペイン所属の船に3バレン(Ballen)のアーモンド(Mandeln)とやはり3バレン(Balle)の“姫ういきょう”の実(Kümmel)を積み出している事実¹⁸⁾、などによっても示されているが、会社の取引が頻繁化した15世紀後半になるとその傾向は一層顕著に示されてくるのである。

ブリューージュにおける会社のそれらの取引の内容は、1478年のプフィングステンの大市(Pfingstmesse)とバマスの大市(Bamasmarkt)の2回にわたる大市取引に関するアンドレアス・ザトラー(Andreas Sattler)なる会社の使用人(Gaselle)の報告によって、かなり詳細に示されている¹⁹⁾。この人物は1478年のプフィングステンの大市のためにブリューージュに派遣されたのであったが、その取引の詳細が記録として残されていたのである。

まずブリューージュに輸入した商品についてみるとそのほとんどがスペインあ

るいはスペインのヴァレンシア (Valencia) 産のものであったことがわかる。アーモンド (Mandeln) を100バレン (Ballen), ライスを100~150バレン (Ballen) 注文しているが実際にはその一部しか受け取っていない。さらに上にもみた姫ういきょうの実 (Kümmel) を仕入れている。これらは会社がスペインで買入れたものであり、姫ういきょうの実はアントワープとこのブリュージュで合計42バレン (Ballen) を売却している。このほか会社はベニバナ (Safflor) をこのフランダース (Flandern) 地域で売却するために仕入れているし、ヴァレンシア (Valencia) 産の絹も買入れている²⁰⁾。

1479年にもこの A. ザトラー (Andreas Sattler) は150~200バレン (Ballen) のライスと100~150バレン (Ballen) のアーモンド, 40バレン (Ballen) のベニバナ, ワックス 4 ケース, 20~30単位 (Karatel) のシロップ, 50バレン (Ballen) の姫ういきょうの実を注文している²¹⁾, その外バルセロナでは, 2バレン (Ballen) のサンゴ (Korallen) を買い付け, この地に送っている。さらにサフラン (Safran) はバルセロナやサラゴッサ (Saragossa) からまた上のミラノ (Mailand) の支店もこの地に送りつけている。これらのサフランについて, プフィングステンの大市ではアラゴン地方からの1バレン (Ballen) が売却され, 残りがアントワープ (Antwerpen) に輸送されていたことも明らかにされている²²⁾。

以上のほかにミラノ (Mailand) から仕入れられた商品 (Zimma) も持ち込まれている。これはフランクフルト (Frankfurt am Main) から引き合いがきているものでもあったが, 2袋がうれ残っていた²³⁾。

ところで南ドイツの麻織物がどの程度このブリュージュに持ち込まれていたか, 詳しい数字は明らかではないが, A. ザトラー (Andreas Sattler) の記録から明らかになっていることは, スイスのザンクト・ガレン (Sankt Gallen) 産のツヴィリッヒ織布 (Zwilich) が売り出され, 2~3バレン (Ballen) が売却されたとあるだけである²⁴⁾。ここでは麻布とファスチアン織布については全く記されていないわけで, それだけ麻布の販売活動が活発ではなかったとみる事が出来る。そればかりでなく, 後段にみるように会社はこのブリュージュ

の大都市においてこの低地地域産の麻布をかなり多く仕入れているのであり、それをスペイン各地に販売するという再販売活動を活発に行っていたのである。

以上のように、A. ザトラー (Andreas Sattler) の残した記録によってこのブリューージュの大都市に持ち込まれていた商品の多くはスペインをはじめとした主として南ヨーロッパ地域からのものであったが、なかでも営業上大きな役割を果たしていたものが上に見た商品の中でもサフラン (Safran) であった。ただ、A. シュルテ (Aloys Schulte) の説明にもあるように、ブリューージュ市場でのこのサフランの買取手はイギリスの商人であり、したがってイギリス商人が会社の営業にとって非常に重要な顧客であったわけであるが、英・仏の百年戦争の終結によってジェノアとフランスの商人が直接自分で仕入れたサフランをイギリス市場に持ち込むようになり、その結果15世紀後半期のこの時代にはこのブリューージュでのサフラン市場そのものと同時に会社の営業にも多大の影響がみられることになったのである²⁵⁾。これも又、ブリューージュからアントワープへの商業発展上の転換の重要な要因に数えられるものである。

それでは「会社」の営業を行った A. ザトラー (Andreas Sattler) はこのブリューージュの大都市でどのような商品を買入れしていたのであろうか。まず多くを占めていたのがこの地域周辺産の布であった。表4-10はブリューージュのパマス大都市市場での買入れについての A. ザトラーの報告であるが、これに明らかなように特別多量に仕入れられていたのは、この地域オランダ産の麻布であった。すでに15世紀末のこの時代からオランダ産の麻布がこれだけ多量に買入れられていた事実注目したいのであるが、これらの麻布の他に今日のベルギー (Belgien) の各地方、例えばブリューージュ、Herentals, Mecheln, Menin, Lortryk などからのものが扱われていた²⁶⁾。

表4-10にも大きく計上されている帽子 (Mützen) も輸出用に仕入れられ、かなり長い伝統をもっていた。この表の200プフントの外に、例えばフロレンス (Firenze) のガレー船で3箱 (Kisten) の帽子がスペイン (Spanien) に送られ、同時に300ダースが発注されたままで納品を待つ状態にあり、さらにサラゴッサ (Saragossa) からは112ダース、パルセロナには40ダースの注文が

表 4-10 商品仕入れのための支出額（ブリュージュ・バマスの大市，1478年）
 (Ausgaben für Ankauf) (単位 プフント)

仕入れ商品	in プフント (枚)
Holländische Leinwand.....	600—700
Hennegauische Leinwand.....	46— 50
Garn von Audenarde.....	90—100
Gefärbtes Garn.....	28— 32
Scheren.....	10— 12
Feine Tuche.....	150
Mützen.....	200
Brüggische Tuche (10—12)	70
Lamkin (6—8)	[30]
	<hr/> 1224—1324
Schulden jetzt u. in der Messe.....	450
	<hr/> 1670—1774
Für Zinn.....	—
Ausstände.....	850
	<hr/> 850

出典：Schulte, Aloys, a.a.O., S. 407.

寄せられる，といった状態であった²⁷⁾。会社はこうした注文を受けて後それを製造者に発注し，その納品をうけて発注者に送品していた。そしてその輸送先はほとんどスペイン（Spanien）であった。

その外，会社の扱っていた商品に原料糸（Garn）があった。表 4-10 にも示されている通り，Audenarde からの Garn が90～100プフントのほかに，染色された原料糸（gefärbtes Garn）にも28～32プフントが支出されている。さらにこの Audenarde からのもののほかに Tournay からの原料糸もあったと報告されている²⁸⁾。これらの原料糸もやはりスペイン市場むけに仕入れられていたものであった。例えば Audenarde において4バレンを染色させそれをサラゴッサのバマス（Bamas）の大市市場に納入させているし，その外2,000プフントの染色された原料糸をサラゴッサ（Saragossa）の支店に供給している。しかもそれでも決して市場の需要にたいして十分な量ではなかったとの報告がなされている²⁹⁾。

そのほか、布 (Arras) の取引も行われ、仕入れた商品をフランクフルト (Frankfurt am Main) 出身の商人に売却した例が残されている。また、ずず (Zinn) や小羊皮 (Lamkin) やハサミ等も仕入れられている。さらに、板金 (Blech) も扱われ、6樽 (Fässer) がやはりスペインのヴァレンシア (Valencia) に送られている³⁰⁾。

以上のように「大ラーフェンスブルク商事会社」のブリュージュ支店はスペイン市場向けに多量の商品を仕入れていた事がわかる。A. ザトラー (Sattler) は上の表に示されている支出を出来るだけ埋め合わせるために、仕入れたサフラン (Safran) の売却をできれば現金取引で行なおうとする意向をもっていたことも伝えられている。つまりスペインで仕入れたサフランとブリュージュで仕入れた麻布等との相互の売買取引の構造がここに明らかにされているのである。スペインの支店とブリュージュの支店による商品取引はほとんど海上通商路をもって行なわれていたが、バルセロナからのサンゴ (Korallen) とサフランは陸路を利用して送られていた。

このようにみると、「大ラーフェンスブルク商事会社」のブリュージュでの取引を通して、ブリュージュ-スペイン間の取引のなかにオランダ商人の介入は見受けられたとしても、ドイツ・ハンザ商人との取引は少なくとも上の取引でみるかぎりほとんどなされていなかった事がわかる。ブリュージュを通して、スペインからのサフランや砂糖、コメ等々を北ヨーロッパに再販売することはあっても、南ドイツ産麻布などがここからハンザ商人の手を経て、北ヨーロッパに運ばれた形跡はほとんどなかったと言うことができる³¹⁾。

以上のような取引の内容は、この期を通してほとんど変わってはいない。スペインからの商品とスペインへの商品は基本的に上に述べた商品が扱われていた。したがってそれらの取引のなかで注目したい点は、スペインからの羊毛がこの会社の貿易取引では一つの例も見いだせないことと³²⁾、しかもイギリス (England) からの羊毛がほとんどこのブリュージュにはもたらされなかったこと、ただ一度だけ、フランクフルト (Frankfurt am Main) / ニュルンベルク (Nürnberg) 間の1479/80年の取引のなかにイギリスからの羊毛が示されてい

るだけである³³⁾。

ブリュージュでの取引では16世紀をこえるとしだいに近隣の都市アントワープ (Antwerpen) やベルゲン・オプ・ツォーム (Bergen op Zoom) における大市取引に移行することになる。その理由は種々の方面から追求されているところであるが、地理的あるいは政治的な要因のほかに、やはり16世紀にその影響を激化してくるヨーロッパ域外の新しい市場との交易の構造の影響の方により大きな原因が求められるであろう。

注

- 1) 商業都市ブリュージュの最盛期は、15世紀に求められる。1127年にはすでにイタリアのロンバルディア商人がフランダース地方の大市取引を開始しており、以後ブリュージュが地中海商業圏と北欧商業圏との接点となっていたことは周知のところである。その発展については地理的要因とフランダース地方の生産活動と商業発展があげられ、衰退の理由については、15世紀末の海底の変化、港の浚渫の必要性 (Versandung) であったことがあげられている。Strieder, Jakob, *Aus Antwerpener Notariatsarchiven*, Deutsche Verlagsanstalt, Stuttgart, 1930, S. 18.
- 2) このブリュージュからアントワープへの南ドイツ商人の取引の移行については、例えば、宮田美智也氏論文「『フッガー家』の時代の南ドイツ商人資本について」『経営研究』大阪市立大学, 119, 1972年, 35ページに詳しい。
- 3) Mone, Franz, Josef, *Zur Handelsgeschichte der Stadt am Bodensee vom 13. bis 15. Jahrhundert*, in *Zeitschrift der Geschichte des Oberrheins*. Heft 4., 1853, S. 7.
- 4) それだけでなくこの論文の巻末にはブリュージュとベニス間のコンスタンツ商人による為替取引の実施を示す史料 (1404年7月13日付) も紹介されている。Mone, F.J., a.a.O., 巻末。
- 5) ウルム産 “Barchent” 布のヨーロッパ各地への普及にもかかわらず、ウルムにはさしたる商事会社が発達せず、この「大ラーフェンスブルク商事会社」などがウルムとの取引を行っていたのであったが、それはウルム都市当局が、市民に対して会社組織への参加を禁止していたためでもあった。Der Stadtkreis Ulm, *Amtliche Kreisbeschreibung*, hrsg. v. Landesarchivdirektion Baden—Württemberg, Süd-deutsche Verlagsgesellschaft Ulm., 1977, S. 61-62.
- 6) Hildebrand, Brno, *Vergangenheit und Gegenwart der Deutschen Leinenindustrie*, in *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 13. Bd., 1869, S. 223.
- 7) Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~*

1530, S. 395.

- 8) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 413.
- 9) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 398.
- 10) つまり外国商人による小売取引は禁止されていた。Schulte, A., a.a.O., S. 398.
- 11) ebenda.
- 12) Schulte, A., a.a.O., S. 400. コンスタンツの商人がプリュージュとアントワープの両方の大市に麻布を供給しているのは14世紀後半である。Wielandt, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe*, Verlag der Verlagsanstalt Merke Co. Konstanz, 1950, S. 28.
- 13) それも商業使用人の人質の事実の記録から明らかとなったものである。Schulte, A., a.a.O., S. 400.
- 14) ebenda.
- 15) ebenda.
- 16) ebenda.
- 17) Schulte, A., a.a.O., S. 401.
- 18) ebenda.
- 19) Schulte, A., a.a.O., S. 404.
- 20) ebenda.
- 21) Schulte, A., a.a.O., S. 405.
- 22) ebenda.
- 23) ebenda.
- 24) Schulte, A., a.a.O., S. 404.
- 25) Schulte, A., a.a.O., S. 405.
- 26) Schulte, A., a.a.O., S. 406.
- 27) ebenda.
- 28) ebenda.
- 29) ebenda.
- 30) Schulte, A., a.a.O., S. 407.
- 31) Schulte, A., a.a.O., S. 408.
- 32) Schulte, A., a.a.O., S. 409.
- 33) ebenda.

㊦ アントワープの大市取引とその内容

アントワープの大市取引は、夏のプフィングステン (Pfungsten・聖霊降臨

祭)の前の2週間に開催されたプフィングステンの大市(Pfingstmesse)と8月15日の聖マリア祭(Maria Himmelfahrt)の後の日曜日から開始されたバマスの大市(Bamasmarkt)、さらにクリスマス後のマティニの大市(Kalte 又は Martinimesse)、イースター(復活祭)前のパエッシュュの大市(Paesch-Ostermesse)の4つの大市取引を中心としていた。

プフィングステン(Pfingsten)の大市は、上にみたブリュージュ(Brügge)のイースターの大市(Ostermesse)の後に続く大市取引であったが²¹⁾、しかしそれも時代によってはかなりのずれがあった。例えば1507年のこの大市は本来5月23日が開市日にあたっていたが6月8日になっても未だ開かれていなかったという報告や、それ以前の1503年の記録ではプフィングステン(Pfingsten)は、5月下旬であったにもかかわらず、ラーフェンスブルク(Ravensburg)の商人のこの大市での売上げ記録は7月18日になされている、といった例があるからである²²⁾。

また8月15日のマリア聖日の後の日曜日から開始されることになっていたバマスの大市(Bamasmarkt)も、次第に開市の日が遅くなり、9月1日のSt. Ägidientagに開市された年や、1478年のように10月2日に閉市されていた例などもあって、かなり不規則な開催であったことがわかる。もともとこのバマス(Bamas)という名称は、10月1日のSt. Bavonstageに由来するといわれ、1504年には10月の中旬に行われていたことなどから、ほぼ9月末から10月中旬にかけて行われた大市であったとみることができる²³⁾。

これら4つの大市がいつ頃から開設され、いつ頃からそれまでの時代の中心であったブリュージュの大市に対抗出来るだけの力を蓄えてきたかについては明らかではないが、少なくとも上に述べた15世紀末期にかけてのブリュージュの動向とこのアントワープ(Antwerpen)の発展が一つの構造で結ばれていたことだけは間違いないはずである。

ブリュージュが中世以来その周辺や背後の地域からの毛織物業に多くを依存していたことは明らかであるが、アントワープでは、そのブリュージュでは少なくとも「大ラーフェンスブルク商事会社(die Große Ravensburger Hand-

elsgesellschaft)」の取引にはあまり見受けることのなかったイギリス産の羊毛あるいは製品 (Stoffe) の仕上げに力を発揮していた事が明らかである⁴⁾。それだけでなく、アントワープ発展の基礎になったものに、1518年に開設された金融取引所 (Börsegebäude) を見ることができる。それ以前には市内のマーチンスキルヒーフ (Martinskirchhof) と呼ばれる建物で行われていた金融取引がこの年に新しい建物を構築したのであった。その結果、ブリュージュの取引よりもはるかに大規模な取引市場となったのである。この金融市場に参加していたドイツ商人の名前も記録に残されている。例えば1486年にはアムブロシウス・ヘッヒステター (Ambrosius Höchstätter) がこの地に名をはせた投機家として登場し、1494年にはフッガー (Fugger) 家の代表としてコンラート・モイティング (Konrad Meuting) なる人物が、さらにザンクト・ガレン (Sankt Gallen) の商人 Onofrius Varnbüler が1480年以来このアントワープ (Antwerpen) の市場で活躍していた⁵⁾。

いずれにしても、すでに13世紀末からしだいに外国商人の往来によってブリュージュとともに発展してきたアントワープは、16世紀前後には、南ドイツのヘッヒステター (Höchstätter) やウェルザー (Welser)、フッガー (Fugger) 家などの大商人だけでなく、イタリアからの銀行家、フローレンスやジェノア、更に上に述べたスイスの都市等々からも、さらにはハンザ商人をも交えた国際的中心地として新しい時代への準備を整えていたことになる。それは、この都市においてはツunft (Zunft) と大商人層 (Geschlecht) との対立も見られず、政治的支配者によって都市に自由な政策が保証されていたためでもあった⁶⁾。

このアントワープにそれ以前から発展していた産業としては、イギリスとの結びつきを強めた繊維業の他に、書物印刷業 (Buchdruckerei) やガラス製造業、ダイヤモンド加工業、高級織物業等があり、それぞれ対外的な競争力を強化していた。もともとアントワープがブリュージュを追い抜くための基盤はイギリス産毛織物との結びつきや大市取引の拡大発展に求められることは明らかであるが、ブリュージュよりもかなり航海上利点が多くなったアントワープの

有する地理的条件が、次第に大型化する海上船舶にとって有利に作用したことは歪めない。ブリュージュの航路が度重なる高波によって大きな被害を受けていたことも事実である⁷⁾。

アントワープ (Antwerpen) の発展はさらに新航路の開拓後に一層助長される。周知の通りそれ以前のいわゆる「東邦の物産」はベニス (Venedig) とジェノア (Genua) 経由で西ヨーロッパに流通していったのに対して、ポルトガルによる直接取引がこの北大西洋岸の商業都市に画期的な刺激と活動の場を与えたのであった。A. シュルテによればそれはまさに投機的な商業発展であり、ヨーロッパの胡椒取引に革命的な変革をとげさせたものであった⁸⁾。それらの投機的取引の対象となった商品は、カリ (Alaun)、サフラン (Safran)、銅、胡椒等であり、なかでもその中心が、リスボン—アントワープ間の取引の中心となった胡椒であった。

以上のようなアントワープの歴史的背景のなかで、それでは大ラーフェンズブルク商事会社の取引はどのように行われていたのであろうか。まず、アントワープの発展とともにその比重が高くなった貨幣・金融取引あるいは保険取引への介入には、ほとんど立ち入らなかった点がこの「会社」のあらゆる地域にほぼ共通した方針であったが、このアントワープでもそれは例外ではなかった⁹⁾。

この会社がアントワープ (Antwerpen) やその他の地域から買い入れた商品の多くは、ブリュージュと同様に繊維を中心に、果実、金属、金属製品等に及んでいる。繊維ではイタリアのミラノ (Mailand) やジェノア (Genua) から的高级絹織物や高級毛織物が多かったが、ここでもブリュージュと同じく南ドイツ産の麻織物は少なく、むしろこの地域に近い Welsche 産の麻布などが輸入されていた。スイス (ザンクト・ガレン) 産の麻布 (Zwillich織) も輸入されてはいるが直接産地で買入れられたのではなく、フランクフルト (Frankfurt am Main) の大市やニュルンベルク (Nürnberg) 経由で運ばれたものであった¹⁰⁾。そのほかラーフェンズブルク (Ravensburg) に近いイスニー (Isny) 産の布も扱われていた¹¹⁾。

布以外のものでは、ジェノアからのサンゴの買い入れや、銅がアントワープを経由してポルトガルやスペインへ、さらに金 (Unzgold), 銀 (Unzsilber) の取引がここで行なわれ、イギリス (England) に売却されている。

以上のような「大ラーフェンスブルク商事会社」の商品取引を具体的に示すものに、1504年のアントワープのパマスの大市 (Bamasmarkt) の記録がある (表4-11 参照)。これによれば、アントワープのパマスの大市で仕入れた商品の多くが麻布であり、それもかなり上にみたようにこの周辺地域からの供給に依存していたことがわかるであろう。オランダ産麻布は (726 プフント 17 シリング 7 ヘラー) は 597 反 (Stück) と計上されており、ブリュージュ、カムブライ (Cambrai) からの麻布はそれぞれ 18 反分、3 反分と説明されている。それらのうち、370 反はスペインのヴァレンシア (Valencia) へ、125 反分も同じくスペインのサラゴッサ (Saragossa) へ、残りが、とくにカムブライとブリュージュのものはすべて南ドイツのラーフェンスブルクに送りつけられている¹²⁾。この事実は、麻布の産地であるラーフェンスブルクに直接送られたものではなく、おそらくその途中のケルン (Köln) やフランクフルトの大市に向けたものであろうが、それでもこの会社の仲介商人的性格を示す好例であるといえる。

表 4-11 アントワープ・パマスの大市における「会社」の取引 (1504年)

	仕入のための支出額 (Ausgabe für Ankauf)			販売による収入額 (Einnahme durch Verkauf)		
	プフ ント (ℳ)	シリ ング (β)	ヘラ ー (-s)	プフ ント (ℳ)	シリ ング (β)	ヘラ ー (-s)
Holländische Leinwand.....	726.	17.	7.	Samt.....	326.	19. 6.
Arras.....	372.	10.	—	Schamlot.....	20	3. —
Garn von Audenarde.....	96.	—	—	Zwillich.....	39.	15. —
Zwillich.....	88.	2.	—	Macis.....	40.	5. 2.
Leinwand Brügge, Cambr....	49.	13.	3.	Gewürznelken.....	15.	10. 3.
Tapiserie.....	49.	8.	2.	Füln.....	325.	9. 7.
Tuche.....	18.	18.	—	Korallen.....	90.	14. 8.
	1382.	9.	—	Unzgold.....	71.	5. 4.
					980.7(2).	6.

出典：Schulte, Aloys, a.a.O., S. 419.

麻布の買い付けはその外にも、Hoogstraen や Hennegau 地方、Mecheln, Nivelles 産のものなども扱われていた。表にある高級刺繡布 (Tapisserie) の買い付けはやはりスペインのサラゴッサ (Saragossa) に送られている¹³⁾。

バマスの大市 (Bamasmarkt) での商品売却についてみると、表にみえる布 (Samt) は、イタリアのジェノアやミラノ (Mailand) からの高級品であり、かなり定期的に輸入されていたものの売却の例である。このバマスの大市用に100反 (Stück) を予約した年もあった。同じく高級布 (Schamlot) もイタリアのジェノアから仕入れられたものである。これも多いときには1回の大市期間に200反 (Stück) 位の予約を行なっている¹⁴⁾。さらに交織布 (Zwillich 織) もかなり流通性の高い商品で、頻繁に取引されているが、表にみえるものはザンクト・ガレン (Sankt Gallen) からの直接のものではなく、フランクフルトやニュルンベルクの大市において仕入れられたものであろうと推測されている。サンゴの売却は、ジェノアから仕入れたもので、ジェノアとの2回の取引の事実が伝わっている。また、表にある金 (Unzgold) と銀 (Unzsilber) の買い手の多くは上に述べたようにイギリス人であった¹⁵⁾。このほか表に示されている fûln なる商品については額の大きさからみてもきわめて重要な内容であることは間違いないはずであるが、残念ながら何らの説明もなされていない¹⁶⁾。

以上、表の内容からみて、アントワープ支店の営業内容は、上にみたブリュージュでの取引とほぼ同じに、イタリアーイギリス間の通商ルートの橋渡しと同時に、「大ラーフェンスブルク商事会社」のスペインでの仕入れと販売取引とに密接に結びついた活動を行なっていたと言えるであろう。つまりアントワープで仕入れてスペイン市場へ、スペイン市場で仕入れたものをアントワープで売却する、といった構図である。したがってこのアントワープの大市取引においても、ブリュージュと同様に、「大ラーフェンスブルク商事会社」の営業方針として各地でみられた取引、とくに南地域、地中海地域にみられる南ドイツ産麻織物の販売活動という麻織物生産者と直接結びつく商業活動はほとんど見られず、多分に商人的仲継取引に没頭していたと言えるのである。

注

- 1) イースターとプフィングステンとの間隔は50日、ブリュージュのイースターの大都市の閉市日がイースター後27日目であり、アントワープのプフィングステンの大都市の開市日がプフィングステンの14日前であるので、わずか1週間ほどの間隔で2つの大市が開催されていたことになる。Schulte, Aloys, *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530*, S. 413.
- 2) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 414.
- 3) ebenda.
- 4) ebenda
- 5) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 415.
- 6) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 414.
- 7) ebenda. このほか、アントワープがこの次の時代の中心となるアムステルダムに距離的に近いことも発展要因の1つであった。すでにアムステルダムはこの時代に穀物取引と鯨取引についてはアントワープよりもはるかに大きな活動を行っていたからである。しかもブリュージュよりもアントワープの方がライン川本流に近接していたこともブリュージュを超える大きな要因であった。Schulte, A., a.a.O., S. 416.
- 8) Schulte, A., a.a.O., S. 415.
- 9) Schulte, A., a.a.O., S. 416.
- 10) Schulte, A., a.a.O., S. 417.
- 11) Schulte, A., a.a.O., S. 417-418.
- 12) Schulte, A., a.a.O., S. 418.
- 13) ebenda.
- 14) Schulte, A., a.a.O., S. 419.
- 15) ebenda.
- 16) この史料を収集した A. Schulte 本人の言葉でも何の手がかりも見いだせなかったとしている。Schulte, A., a.a.O., S. 419

3 大ラーフェンスブルク商事会社の貿易活動にみられる地域格差

南ドイツ地方の麻織業の初期の有力な市場が、コンスタンツ (Konstanz) 産麻織物の輸出の分析などによって、ロース川上流のシャンパーニュ地方に開催された大市であったことはすでに明らかになっている¹⁾。その後14世紀にはこの大市に代ってしだいに上に扱った地中海諸地域、とくにスペイン各都市の重

要性が増大してきた。

イタリアはさておいてもスペイン市場に会社が求めたものは、おおまかにいって麻布の販売とサフラン (Safran) の購入であった。これらの商品のほかにニュルンベルク (Nürnberg) などからの鉄・金属製品が加わっていたが、やはり中心は上の2商品であったといえる。

A. シュルテの研究は量も質も膨大かつ深いもので、上に掲げた内容はそのすべてを示すものではありえないが、それでも、ヨーロッパ各地の販売市場のなかでこの地中海地域、とくにスペイン地域の比重が高かったことは容易に推測できる。たしかにライン川を下る地域との交易や、ニュルンベルクを起点とする東ヨーロッパ地域との交易が見逃されうるものであるとは思えない。A. シュルテの研究もこれら各地域についてかなりのスペースがあてられている。しかし、それらはイタリアやスペイン市場に比較して量、質ともにはるかに後退した状態であったことは疑いない。この点に関しては、大ラーフェンスブルク商事会社の活動内容でイタリア諸都市にみられた仲介商人的性質とも関係があるであろう。ミラノ (Mailand) やジェノア (Genua) にみられた商品仕入の可能性がはたして北部ヨーロッパやそのほかの地域にみられたかどうかである。ハンザ (Hanse) 商業の取扱った商品の性質とイタリア (Italien) 商業の取扱った商品の相違がこの点にも影響を与えているはずである。

16世紀以後、貿易の表面に出る大西洋岸の諸地域の扱う商品のもつ日用品的性質とイタリア商業の高級品的性格からみて、大ラーフェンスブルク商事会社の営業は当然後者に属しているものと考えることができる。南ドイツ経済圏の麻織業から貨幣・鉱山業への移行、あるいはそれ以後の経済の全般的後退の要素は、以上のような商事会社の市場の性質のうちにもみることができると思われるのである。

それでは次に、ブリュージュ (Brügge)・アントワープ (Antwerpen) での取引と上のジュネーヴ (Genf)・リヨン (Lyon) での取引においてはどのような比較と時代背景とをみることができようか。まず最初にみたジュネーブ・リヨンの取引においては、販売商品の中心はまだなお南ドイツ産麻織物に

あったといえることができる。この性質はすでに前章でみた地中海地域、とくにイタリア・スペイン（とくにバルセロナ）での取引に同じようにみられたところであった²⁾。つまり大ラーフェンスブルク商事会社の営業主体は、当時の南ドイツ麻織経済圏内に散在した諸都市の多くの商事会社と同様に、地元麻織物生産物の販売活動に求めることができる。ところが、ライン（Rhein）川をはるかに下ったブリュージュとアントワープでの取引の大半は、そこでの大市取引に集散するそれぞれの特産品の仲継取引の比重が非常に多くなり、とくにスペインとの取引においてはスペインでの特産品とブリュージュ・アントワープでの特産品の相互の交換取引によって、本拠地である南ドイツの麻織経済に何ら触れることなく、営業活動を行っていたところに特色が求められる。つまり、純然たる仲継・再販売商人としての性質が認められるわけである。

次に時代的背景として大きな影響が認められるいわゆる新航路の発見によって、たしかにブリュージュ・アントワープでの取引の活発化は認められるものの、それがそのままジェネーブ・リヨンでの取引のマイナスの影響になって示されているとは認め難いところである³⁾。

アントワープの1500年以後の発展は A. シュルテがよく説明しているところである。大ラーフェンスブルク商事会社の活動によってもブリュージュの繁栄をこえたアントワープの大市取引でのにぎわいを感じることができる。そればかりでなく、アントワープへの進出の動きが、いわゆる新航路発見のはるか以前からみられていたことにも注目する必要があるであろう。ところで、「会社」のアントワープ（Antwerpen）支店は少なくとも1527年までその存在が確認されている⁴⁾。しかしその活動は、アントワープの都市自身のその後の数十年間の輝かしい発展とはきわめて対照的に、何ら注目すべき活動の記録は残していないと言える。「大ラーフェンスブルク商事会社」のあくまでも現物の商品取引への固執と金融取引に対する回避の姿勢、麻織物に代わるイギリス・スペイン・オランダを中心とする毛織物取引の隆盛等々の要因によって、さらにアウクスブルク（Augsburg）を中心としたフッガー（Fugger）・ウェルザー（Welsler）等巨大商業資本の発展におされて、この中世を通して画期的な活動と歴

史を残した商事会社は次第にヨーロッパ各地の市場から後退していったのである⁵⁾。

注

- 1) 例えば, Wielandt, Friedrich, *Das Konstanzer Leinengewerbe I*, Verlag der Verlagsanstalt Merk & Co. Kom.-Ges., Konstanz, 1950, S. 15ff.
- 2) 拙稿「中世ラーフェンスブルクの商事会社と貿易活動」『桜美林エコノミックス』第11号, 1982年7月, 107ページ以下も参照いただきたい。
- 3) たしかに東洋とリスボンとの直接取引の開始によってイタリアーフランクフルト間の商取引が減少したことは明らかである。例えばすでに前章でみたように, 1500年にジェノアからフランクフルトの大市に向けて積み出されていた香辛料の総額は3,400フローリンであったが, 1503年にはこれが極めてわずかの香辛料(丁子)にすぎなくなっていたことが報告されている。Schulte, A., *Geschichte der Großen Ravensburger Handelsgesellschaft 1380~1530* S. 227.
- 4) Schulte, Aloys, a.a.O., S. 420.
- 5) そのような中で, 会社の営業活動上不正を働くような悪徳使用人が現れたことも見逃せない事実である。例えば1512年 Hans Errlin なる人物は会社の金を自分の取引に流用し, 帳簿を不正に改ざんしてその不正を隠そうとした人物であったことが報告されている。Schulte, A., a.a.O., S. 420.